
ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

アメツチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

【Nコード】

N7449X

【作者名】

アメツチ

【あらすじ】

《ここにあるのは『懐かしさ』——古き良き王道ファンタジー、開幕!》 愛する者を救うため——父、子、そして孫の三代に渡って受け継がれる強き意志の物語。天空に導かれた者たちの冒険が今、始まる。※同名タイトルの名作RPGをたどる二次創作です。他サイトで公開中の作品を転載。オリジナル要素控えめ、原作に沿ったストーリー展開にしています。

1. 誕生

——松明が静かに燃えている。

——豪奢で毛先の深い絨毯を踏みしめる感覚がいつもと違う。

「さあ陛下。こちらでございます」

「うむ。本当に苦勞をかけたな。礼を言うぞ」

実直で、かつ強靱な意志を感じさせる瞳を柔らかに細めながら、深紅のマントに身を包んだ男は給仕の女を労った。上品な微笑みを浮かべた初老の女は、そのまましとやかに腰を折り、男を先導して歩き出す。

——本当は駆け出したかった。一分一秒でも早く愛する者の元へと向かいたい。

だが男は逸る気持ちをぐっと抑えた。大柄な自分が走ればそれだけ音と振動をまき散らす。それが『彼女』には良くないのだと口酸っぱく言われていたからだ。

給仕の女に付きゆつくりと歩く。その姿は王者の威厳すら漂う。

否。男は真正正銘の王だった。名をパパスという。

深き森、険しき山に囲まれた天然の要塞、堅牢にして優美さをも兼ね備えた古城グランバニア——その頂点に立つ男である。

はるか遠国にまでその勇名が響き渡るほどの猛者が、これほどまでに気もそぞろになる理由。それは——

「こちらです。中ではお静かに。マーサ様もご子息様もようやく落ち着いたところでございますゆえ」

「う、うむ……」

そう。パパスとその妻マーサに、待望の男子が誕生したのだ。

一国の王から一人の父親へ。魔物相手にも決してひるまないパパスだったが、今日ばかりはいつもどおりとはいかなかった。『自分

に子ができた』という初めての経験の前には、持ち前の冷静さなど
蠟燭の火のように吹き飛んでしまっていた。

精緻な意匠の施された扉をゆっくりと開ける。かすかな熱と、そ
して溢れんばかりの聖なる気をパパスは感じた。

中央の寝台に横たわる妻が、気配を感じて振り返る。

「あなた……」

「マーサ……！　よく、よくやってくれた」

つい小走りに駆け寄る。厳格な顔にわずかな赤みを浮かべたパパスを見て、マーサが柔らかく微笑んだ。疲れの余りか若干やつれて
いたが、その表情は常日頃目にする以上に美しく、神々しさすらあ
った。

パパスの視線が、彼女の隣で毛布にくるまれた赤子へと行く。

「ほら。私たちの子よ。今は眠っているけど、とても元気な声を上
げていたわ……」

「おお、おお！　下の階にも聞こえてきたぞ。そうか、男か！　元
気そうだ！　うむ、目元はお前にそっくりだ！」

自分でも訳の分からないことを喋る。その様子に乳母がくすりと
笑った。

マーサが声をかける。

「ねえあなた……。この子に名前を付けてあげないと」

「うん？　おお、そうだな。何がいいか」

パパスはしばらく寝台の回りを歩いた。顎に手をあて、これまで
にいくつも考えた候補の中から選んでいく。この感動を表現し、自
分と愛する妻の宝となるに相応しい名を。

しばらくの沈思黙考の後、パパスはマーサに向き直った。彼には
珍しい、満面の笑みを浮かべて言う。

「よし。トンヌラというのはどうだろうか」

「まあ、素敵な名前……賢そうで、優しそうで」

「だろう？」

「ええ。……ねえ、あなた。私もこの子の名前を考えてみたの」

遠慮がちな妻の申し出に、パパスは無言で先を促した。

「アラン……というのは、どうかしら？」

「アラン、か。いまいちぱつとしないが……お前が考えたのなら、そうしよう」

妻に笑いかける。ばさり、と深紅のマントを翻し、パパスは赤子とそっと抱え上げた。

「アラン。今日からお前はアランだ！」

「まあ、あなただったら……ごほっ、ごほっ！」

「マーサ？ どうした、しっかりしろ。マーサ！」

——声は次第に遠くなる。

——潮騒の音が、どこからか聞こえてきた。ざざん、ざざん……と。

2. 船上の勇気

ぎし……ぎし……

規則正しく響くその音に、アランは目を覚ました。

固い寝台に横になっていると、身体がゆっくりと上下に動いているのを感じる。揺りかごのように心地よいその揺れからアランは身体を起こした。

利発で優しそうな瞳が印象的な少年である。滑らかな肌は健康的に日焼けし、儚さよりはたくましが目を引く。

アランは枕元に置いた帽子を手にとった。ざんばらで伸び放題の黒髪を、青い布を巻いて作った簡素な帽子で包み込んだ。

寝台の縁に腰掛けたとき、部屋の中で読み物をしていた男が振り返った。

「おお、起きたか。アラン」

「お父さん」

口元に蓄えた髭も凜々しいこの男はパパスといった。アラン自慢の父親である。

「う……ん」と伸びをしてから、アラン少年は父の元へと駆け寄った。

まだたったの六歳ではあるが、父に連れられいくつかの旅を経験したアランは、寝坊という言葉とは無縁の生活を送っていた。これも長旅で鍛えられた結果である。

机の縁に顎を乗せ、しばらく父の横顔を眺めていたアランは、ふいに声をかけた。

「ねえお父さん」

「ん？」

「僕、ゆめを見たんだ。りっぱなお部屋で、お父さんがすごく格好いいマントをしているの。おうさまなんだって」

「王様？ はっはっは。アラン、どうやらまだ寝ぼけているようだ

な」

嘘じゃないのにな、とアランは思ったが、それ以上何も言わなかった。ただ不満そうに頬を膨らませるだけである。

その様子を見たパパスは苦笑を浮かべながら、読んでいた分厚い書物を閉じた。アランは以前、興味本意でその中身を見てみたが、長い文章どころか文字も読めないアラン少年はすぐに頁をめくるのを諦めた。それ以降、父の本にはあまり触らないようにしている。

「もうすぐ港に到着する。それまで外で遊んでなさい。潮風に当たれば眠気も覚めるだろう」

「うん」

「だがあまり走り回るんじゃないぞ。甲板にいる人々の迷惑にならないようにな」

「はい」

アランは駆け出し、すぐに何かを思い出して引き返す。部屋の隅に設えられたタンスから、薄紙に包んだ薬草を取り出す。

「これがあれば怪我をしてもだいじょうぶだね?」

微笑むパパスに、アランは薬草を片手に元気よく言った。

「それじゃ、行ってきます!」

階段を上がり、扉をくぐる。

途端に頬を撫でる冷たい風に、アランは思わず眼を細めた。

澄み渡る蒼い空。

天高くどこまでも盛り上がる雲。

風を受けゆったりと飛ぶ鳥たち。

そして空よりもさらに深く濃い青に染まった大海原。

アランは巨大な船の上にいた。

数日前、アランたちはパパスの顔なじみの船長と偶然再会し、どこかのお金持ちが所有するこの船に便乗させてもらったのだ。目指すはサンタローズという村である。かつてパパスとアランが住んでいた長閑で平和な村だ。

そこはアランの記憶に残っている最初の故郷である。

サンタローズに帰れると思うと、自然と気持ちが高揚した。

陽光のまぶしさに目を細めながら、アランは口笛をくちずさむ。波に揺れる甲板上も何のその、軽やかな足取りで目当ての場所へと歩いて行く。やがて甲板の幅はぐっと狭くなり、揺れも大きくなった。船首の部分だ。

帽子と同じ青色の、粗末な布の服を海風にはためかせながら、アランは鋭く突き出た舳先部分へと進む。下を見れば目もくらむような高さだが、アランは取り立てて恐怖を感じた様子もなく、「うわあ！」と感嘆の声を上げた。

海。空。水平線だ。

世界はどこまでも広い。

いつか自分が大きくなったら、父とともに世界中を旅して回りたい。それが幼いアランの大きな夢であった。

「おおいっ！ 坊主、危ないぞ！ 戻ってこい！」

ふと背後から船員の呼ぶ声がした。気がつくやうと舳先のかなり先の方まで進んでいたようだ。慌てて戻り、船員の前に立つ。全身真っ黒に日焼けした船員の男は大げさなため息をついた。

「ああびっくりした。まったく、坊主の身に何かあったら俺が船長にどやされるんだぜ？」

「ごめんなさい」

アランは素直に頭を下げた。船員は怒ったような、困ったような表情を浮かべていたが、やおら豪快に笑い始めた。

「ま、危ない危なくないは抜きにしてだ。坊主、お前よくあそこまで行けたな？ 怖くなかったのか？」

「ううん。とっても楽しかったよ。海って、すごく広いんだね」

「そうかそうか。さすがパパスの旦那の息子さんだ。勇気がある」
ばんばんばん、と頭を叩かれる。おそらく本人は撫でているつもりなのだろうが、アランとしてはたまったものではない。小さく「おじさん……いたい」とつぶやく。

だが船員の男は気にした風もなく、嬉しそうに語り始めた。

「いいか坊主。坊主が立ってた舳先の部分はな、俺たちの船乗りの中じゃ『勇気を試す場』になっているのさ。新米のヒヨッコどもは、まず大抵あそこに立つと怖じ気づく」

「え？ ふなのりさんなのにな？」

「そうさ。坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になったらどえらいことをやってのけるぞ、坊主！」

「どえらいことって？」

「どえらいことは、その……どえらいことだよ。ま、まあそのうちわかるって」

ばんばんばん、と相変わらず容赦なく叩かれる。それが親愛の表れだと子どもながらに察したアランは、目の端に小さく涙を浮かべながらも笑顔でうなずいていた。

3. 小さな出逢い

その後、アランは船の中を探検した。乗船してから数日、すでに何度も船内は見回っていたが、何度見ても面白い。

例えば風に揺れる帆の様子とか。

床一杯に敷き詰められた荷物の山とか。

何故か風呂場で自分を驚かそうとしてくる変なおじさんとか。

逢う人逢う人、みな笑顔で迎えてくれる。そして誰もが、アランの父パパスはすごい人だと言ってくれるのだ。アランにはそれが何より楽しく、そして誇らしかった。

だが、その楽しい旅もそろそろ終わりの時を迎えようとしている。水平線ばかりだった海に、うつすらと陸地の影が見え始めたのだ。

「港が見えたぞー！」

マストの先に作られた見張り台で、船員が大声を上げる。にわかに慌ただしくなる船上の直中に立ちながら、アランは興奮と寂しさを同時に感じていた。

「そろそろお別れだな、坊や」

声をかけられ振り返る。真っ白な服を着た初老の男性が微笑んでいた。航海中、よくパパスと話をしていた船長だ。アランもずいぶんと可愛がってもらった。まるで実の息子のように。

わずかにうなだれるアランの頭を撫でながら、船長は言う。

「さ……お父さんと呼んできてくれないか。もうすぐ港に着く」

「うん」

小さくうなずいたアランは駆け出した。客室にいる父を呼びに行く。

アランから港到着の報を受けたパパスは感慨深そうにうなずいた。「サンタローズを出てもう二年になるか。早いものだな。まだお前が四つのときだから、覚えていないかも知れないが」

「ううん。僕の故郷だよね、お父さん。覚えてるよ」

「そうか。では、行くとしよう。忘れ物がないようにな」

そう言うのとパパスは部屋を出て行く。父に連れ立って扉をくぐったアランは、ふと背後を振り返った。誰もいなくなった部屋に向かって深くおじぎをする。

「お世話になりました。行ってきます」

辿り着いたのは、巨大な船体には少々似つかわしくない小さな港だった。

操舵手の妙技でぴったりと横付けされ、棧橋の代わりに大きな板が船との間にかけられる。アランは父と並んで、その作業を感心しながら眺めていた。

そのとき、港に人影があることに気付いた。三人。

「ルドマンさん！ お待たせしました！」

「ご苦労、船長さん！ 相変わらず時間で感心ですな！」

船長と気安げに会話する港の人物。遠目でも恰幅が良さがわかった。傍らには小さな女の子がふたり、寄り添っていた。

ルドマンと呼ばれた男が棧橋代わりの板に足をかける。——と同時に、右側にいた女の子がルドマンを追い抜いて船に駆け込んできた。黒髪が海と空の蒼に映える。あっという間にパパスの前まで辿り着く。

きよとんとするパパスに向かって、黒髪の女の子は気の強そうな瞳を向けた。

「おっさん。邪魔よ」

「お、おっさ……？」

思わぬ台詞にパパスが目を白黒させる。次いで女の子はアランにも目を向けた。ほとんど睨むような表情ながら、そこに潜む可憐な容貌にアランはどきりとした。

「こらデボラ！ 待ちなさい」

「ふんっだ」

ルドマンの声にも振り返らず、デボラと呼ばれた少女はさらに奥へと駆けていった。彼女が向かったのはアランが唯一、立ち入ることが許されなかった専用の客室がある場所だった。

ルドマンがようやく板を渡りきる。傍らにはもう一人の女の子がいた。

アランはまたも、どきりとする。

大きなリボンと空のような蒼い髪が印象的だった。デボラとは反対に、清楚な華を思わせる可愛らしい女の子である。

彼女はアランの視線に気付くと、わずかに身体をルドマンに寄せた後、はにかみながら頭を下げてきた。

ルドマンが恐縮の体でパパスに詫げる。

「申し訳ない、お客人。私の娘がとんだ粗相をしてしまいましたな……」

「いえ。お気になさらず。元気があるのは大変良いことです。……その子もあなたの？」

「ええ。フローラと言います。私はこの子らの父、ルドマンと申します。さ、ご挨拶なさい。フローラ」

「はい、お父様。……初めまして。フローラと言います。さきほどはねえさ……姉が失礼をしました」

「これは驚いた。ずいぶんしっかりしたお嬢さんだ。……っと、失礼。挨拶が遅れましたな。私はサンタローズのパパス。こちらは私の子、アランです」

「は、はじめまして……」

突然名前を呼ばれ、アランはどきどきしながら礼をした。何だか格好悪いなと思うながら、ゆっくりと顔を上げる。

ルドマンは「利発そうなご子息ですな」と朗らかに笑い、フローラは先ほどよりも打ち解けた笑顔を見せてくれた。アランは再び顔を赤くしてうつむいた。

それからパパスとアランは船長に感謝の礼を言い、併せてルドマンたちの船旅の安全を祈った。彼らもまた、パパスたちの行く末に

幸多きことをと祈ってくれた。

船はゆつくりと出航していく。その後ろ姿を見つめながら、アランはふと、偶然出逢った二人の少女の顔を思い出すのであった。

4. リスの恩返し

船が出てすぐ、パパスとアランの元に駆け寄ってくる人影があった。

「おおっ、パパス！ パパスじゃないか」

「あらあら、まあまあ。ずいぶん久しぶりだねえ！ 二年ぶりじゃないかい？」

彼らは港の管理をしている夫婦だった。パパスとは旧知の仲である。

しばらく旧友と雑談をしていたパパスは、所在なげに立っていた息子に向かって言った。

「父さんはこの人たちと話があるから、しばらく散歩でもしていないかい」

「うん。わかった」

「よし。だがアラン、港の外には出るんじゃないぞ。危ないからな」
「はい」

アランは歩き出した。

港は陸から建物だけ突き出たような形になっていて、海面がすぐ側にある。海からの風も気持ちよく、アランは終始上機嫌だった。

ふと、どこからか声が聞こえた。

きい、きい……という動物の声だ。アランの表情が変わる。その声はどこか、助けを求めているように思えたからだ。

声の主はすぐに見つかった。港の端、木組みの足場がやや崩れているところで、大きなリスが一匹足を取られていた。口には小枝を噛んでいる。どこかにその枝を運ぼうとして誤って嵌ってしまったのかもしれない。

アランが近づくと、リスはさらに甲高い声を上げて暴れた。

じっとリスを見つめながら、アランはゆっくりと言う。

「だいじょうぶ。もう心配いらないよ。キミを助けてあげる」

リスがぴたりと大人しくなる。リスの大きな黒い瞳がアランを見つめていた。

慎重にその身体に手をかけ、アランはリスを解放した。ほっと息をつく。どうやら怪我もないようだ。

「ほら。お行き」

促すとリスは勢いよく駆け出した。微笑みながらそれを見送るアラン。

ところがリスは、港と陸地とを繋ぐ栈橋のところで立ち止まった。アランを振り返り、尻尾とヒゲをぴくぴくと動かす。

「……付いてこいつてことなのかな？」

アランが歩き出すとリスも走り出す。アランと一定の距離を保つように、たびたびリスは振り返ってきた。どうやら本当にどこかへと案内してくれているようだった。

栈橋を越えてすぐ脇に林がある。リスはその中へ入っていく。しばらく行くと、何やらこんもりと枝が盛られた場所へと辿り着いた。そこから数匹の小さなリスが顔を覗かせている。

「ここがキミの家なんだ。立派だね。でもいいの？　僕をここに連れてきても」

するとリスは巢の回りに落ちているものを鼻先で示した。財布やら人形やら、おそらく旅人が落としたであろう品々が土にまみれて転がっているのがわかった。中にはわずかながらお金ゴールドもある。

どうやら助けてくれた御礼に持っていけということらしい。

一度は断ろうとしたが、リスが服の裾を引っ張ってまで引き留めようとするので、アランは仕方なく落とし物のひとつを手を取った。細長い木製の武器——『ひのきの棒』である。おそらくただの枝と間違えて持ってきてしまったのだろう。巢の脇にどことなく邪魔そうに置いてあるのが印象に残っていたのだ。

落とし物の割にはしっかりした加工である。幾重にも布が巻かれた握りの部分に手を添える。見よう見まねで構えてみると、何だか

憧れの父に近づけたような気がして嬉しくなった。

リスがきい、きいと鳴く。「気に入ってくれてよかった」と言っているようだった。

「ありがとう。じゃあ、元気でね」

アランはリスたちに別れを言った。元来た道を引き返していく。パパスとの旅で鍛えられたせいとか、方向感覚には少し自信がある。迷うことよりも、父の言いつけを破った形になってしまったことの方が心配だった。

「早く戻らなきゃ」

少し焦りながら、アランは林を抜ける。

その直後だった。

「えっ……？」

目の前にモンスターが現れたのは。

5. はじめての戦い

「ピキィーッ」

草むらから現れた三体のモンスター。青く小さな身体を震わせながら、アランに対して威嚇の声を上げてくる。

「ス、スライム！？」

「ピュキィッ！」

「うわあっ！」

いきなり襲いかかられ、アランは尻餅をついた。彼の頭があった場所を、一匹のスライムが通過していく。体当たりされたのだ。以外と俊敏なスライムの動きに、アランは背中に汗をかく。

別の一匹が正面から迫ってきた。アランは唇を噛み、右手の『ひのきの棒』を握り直した。

父の姿を思い出しながら、正眼に構える。

「……来いっ」

「キュィィッ！」

アランの声に応じて、スライムが飛び込んできた。アランは目を逸らさず、大きく武器を振り上げた。震える足を叱咤して、一歩前へ踏み出す。

「はあああっ！」

そして思いつき振り下ろした。

ひのきの棒のちょうど中心のところで、スライムの身体をとらえる。握りの部分に痺れるような衝撃が伝わってきた。

力が緩み、手放しそうになるのを堪え、最後まで振り抜く。

スライムの身体が吹っ飛んだ。

「……イ……」

草むらに落ちたスライムは小さく声を上げ、やがて姿が消えた。アランは荒い息をつきながら、自らの手を見る。

そこにはまだ、先ほどの感覚が痺れとして残っていた。

「やった……！」

会心の一撃――

アランは初めて、自分の力だけでモンスターを撃退したのだ。だが――勝って兜の緒を締めるには、まだアランは幼すぎた。

「キィイツ」

「あっ!？」

残った一匹がアランの左腕にかみついたのだ。鋭い痛みとともに、左腕がかあつ、と熱くなる。無我夢中でスライムを引きはがした拍子に、赤い血が空に舞った。

数歩下がって、アランは小さく呻く。先ほどまで感じていた高揚感が急にしぼんでいくようだった。

仲間と合流したスライムが二匹、真正面から迫ってくる。

「これが」

戦い。

父の雄姿を間近で見るときは「何て格好いいんだろう」と思っていた。いつか自分も、と思っていた。

でも、今の自分は――

「キィ、ピキュキィイツ！」

「……お父さんっ！」

ぎゅっ、とアランは目をつぶる。

そのときだ。

「おおおおおっ！」

勇ましい、けれど懐かしい雄叫びとともに、風がアランの横を通りすぎた。

目を開ける。ああ、とアランは歓喜の声を上げた。

「お父さん！」

「下がっている、アラン！」

言うが早いのか、パパスは愛剣を手にスライムの一匹に斬りかかった。

その動き、まさに疾風迅雷。

スライムは避けることもできずに真っ二つに両断される。

残った一匹がパパスの方を向く。その時にはもう、パパスは次の踏み込み動作に入っていた。

「むんっ！」

返す刃で雑草ごとスライムの身体を薙ぎ払う。悲鳴も上がらずスライムは全滅した。

恐るべき二回攻撃。

アランは感動に打ち震えるとともに、自らが握っていた『ひのきの棒』を少ししよげた表情で見つめた。

「大丈夫か、アラン」

パパスが近づいてくる。アランは笑顔でうなずこうとして、左腕を押さえた。

「……痛っ」

「待ってろ。すぐに治す。………、ホイミ！」

かざしたパパスの手から、白く温かな光が漏れる。アランの腕の傷がだんだんと塞がっていった。

そうだ、とアランは思い出す。パパスは剣技だけではない、回復呪文も使えるのだ。アランはまだ、呪文のひとつも使えない。覚えるならまず真っ先にこの呪文にしよう、とアランは思った。

腕の痛みも傷口もすっかり消えてなくなったのを見届けると、早速パパスはアランを叱った。

「アランよ。外に出ててはいけないと父さんは言っただけだ。言いつけはきちんと守らなければいけないぞ」

「……ごめんなさい」

「ふむ」

すると何を思ったか、パパスは草むらを見た。

「しかし、たった一人でスライムを倒すとは、正直父さんも驚いた」
「……え？」

「だが今後はひとりで危ないことはしないように。いいな？」

「うん」

「よし。では行くでしょう」

差し出された父の大きな手を握り、アランは笑顔で歩き出した。

6. サンタローズの村

広々とした草原となだらかな丘をひたすら歩くと、鬱蒼と茂る森と小高い山が見えてきた。そこがアランたちの目的地である。

木々に半ば隠れるように、ひっそりと村があった。

「ようやく着いたか。サンタローズ」

パパスが感慨深げにつぶやく。普段は勇猛で冷静沈着な父だが、どこことなくほっとして嬉しそうだのアランは思った。

村の入り口にあたる木組みの門の前には、簡素な鎧を着込んだ男が門番として立っていた。彼は村にやってくる人影に一瞬目を細めたものの、すぐに破顔一笑、満面の笑みで迎えてくれた。

「やあ！ パパスさんじゃありませんか！ お久しぶりです！」

「ああ。しばらくぶりだった。皆に変わりはないか？」

「ええ、もちろん。おっと、こうしちやいられない。皆に報せないと！」

言うが早いのか、男は門の番を放り出して村へと走っていった。アランはつぶやく。

「お仕事、いいのかなあ」

「はっはっは」

むつかしい顔をするアランに、パパスは声に出して笑った。

父に連れられ門をくぐる。その先の石段を登ると、さっそく出迎えがあった。

「パパスさん、お帰りなさい。二年ぶりですね」

「うむ」

「またうちによってくださいね。良い酒を用意してお待ちしていますから。旅の話を聞かせてくださいよ」

「ああ、楽しみにしていよう」

笑顔で話しかけてくれたのは村で唯一の宿屋と酒場の店主だった。丸々と太った身体にはどこことなく、アランも見覚えがあった。

砂利道沿いに歩く。小川をまたぐ小さな橋を越えた辺りで、今度は大声に迎えられた。

「ようパパス！ 二年もどこほつつき歩いていたんだ！」

見るからにガタイの良いその男に、パパスは苦笑を浮かべた。

「はは。相変わらず威勢が良いな」

「つたりめーよ。アンタとはまだ飲み比べの勝負がついてねえんだ。付き合ってもらうぜ。ついでに旅先でのあれこれも聞いてやつからよ！」

「うむ。受けて立とう」

がつ、と拳を合わせる二人。口は悪いが、男もまたとても嬉しうだった。「お、この子があのときの坊主か。大きくなったなあ」と頭をぐりぐりされ、アランは恥ずかしいやら嬉しいやら複雑な気持ちになる。

すっかりずれてしまった帽子を直しながら再び父の後ろについていく。空は雲一つ無い快晴だ。暦の上ではもうすっかり春である。しかし。

「……くしゅん！」

「おお、風邪か。アラン」

「ううん。でも、何だかすこしさむいね」

「……うむ。確かにな。季節はとくに春だというのに、風が冷たい」

パパスが神妙にうなづく。道ばたでは季節外れのたき火をしている人がいた。そういえば来る途中の道沿いにあった畑は、発育が遅れているのか少々寂しい見た目だったことをアランは思い出す。

不思議なこともあるんだなあ、とアランは思った。

「パパス殿」

もうすぐ目的の場所というところで、シスターに出迎えられた。物静かな感じの初老の女性が、往来の真ん中でまっすぐにパパスを見つめている。

「よくぞ戻られました。ご壮健そうで何より」

「はい。皆には心配をかけました」

「これも神のお導きなのでしょう……とまあ、堅苦しい挨拶は抜きにして」

突然、シスターがにっこりと笑った。

「わーい、わーい。パパスさんが帰ってきた！ 嬉しいー！」

「シ、シスター……」

「うふふ。嬉しいことを我慢するのは良くないことですよ。さあ、お疲れでしょう。サンチョさんがご自宅でお待ちですよ」

パパスはシスターに深々と礼をした。去り際、シスターがにっこりと笑ってアランに手を振ってきた。何だか嬉しくなって、アランもまた満面の笑みで手を振り返した。

教会へと続く道の脇に、アランたちが目指す家がある。

質素だが立派な造りの家の前で一人の男が立っていた。その姿を見て、パパスとアランの表情が自然と緩んだ。

7. お姉さんな少女

「旦那様！ お坊ちゃん！ お帰りなさい！」

「サンチヨ！ 今戻ったぞ！」

パパスが破顔一笑する。アランも満面の笑みで手を振った。

丸々と太った身体を揺らしながら走ってきたのは、パパスの召使い、サンチヨである。口ひげに小さな丸い目が印象的な、とても人当たりの良い男だ。孤高の人というイメージがあるパパスが唯一、彼だけは従者として認めている。サンタローズの家を留守にしている間は、彼が自宅の一切をきりもりしていた。

外見からは想像できないようになってききとした動きでサンチヨはパパスらから荷物を受け取った。久しぶりに逢えた嬉しさからか、目にはわずかに涙まで浮かんでいる。

「サンチヨ、泣いてるの？」

アランが尋ねる。すると途端にサンチヨの顔がぐしゃつと崩れた。「おお、おお、アラン坊ちゃんも！ 大きく、遅しくなられて。このサンチヨ感激ですぞ」

「僕は元気だよ。サンチヨはあいかわらず、すぐに泣いちゃうんだね」

「こら、アラン」

パパスが小声で叱り、アランが首をすくめる。涙を拭ったサンチヨはパパスたちを自宅へと招き入れた。

簡素だが手入れと掃除の行き届いた居間。そこには先客がいた。

「あら、パパスさんじゃないかい」

「ダンカンとこのおかみさんじゃないか。お久しぶりです」

意外な来客にパパスが驚く。サンチヨに負けないほど恰幅の良いおかみはからからと笑った。

するとその影からひとりの女の子が顔を出す。

「こんにちは。おじさま」

「……？」

パパスは首をかしげる。見覚えがない女の子だったからだ。

「この子は」

「ああ、そうか。パパスさんは初めてだったっけ。あたしの娘だよ。ビアンカってんだ」

おかみが紹介する。ビアンカと呼ばれた女の子は再び頭を下げた。柔らかなような金髪を三つ編みにした彼女がにっこりと笑う様はとても明るく愛らしかった。どこことなくお転婆そうでもある。

パパスとサンチョ、それからおかみが話を始めた。父の隣で所在なげに立っていたアランは、ふと裾を引かれて振り返る。ビアンカがすぐそばに立っていた。

「ね。おとなたちのお話が長そうだから、向こうに行かない？」

「う、うん」

「行きましょ！」

言うが早いか、ビアンカはアランの手を引いて二階へと上がっていく。元気の良い子だなあ、と思うと同時に、どこか懐かしい感じをアランは抱いた。

二階はパパスの書斎もかねた部屋だった。壁際にぎっしりと本が詰まった棚が置かれている。アランとビアンカは、少し高い椅子によじ登った。

「じゃあ、あらためて自己紹介ね。わたし、ビアンカ。あなたはアランでしょ？」

「え？ 僕のこと知っているの？」

「うん。でも、おぼえてないのもしかたないよね。前に会ったときは、アランとっても小さかったもの。知ってる？ わたしはあなたよりも二さいもおねえさんのよ！」

自慢げに胸を張られた。アランが今六歳だから、ビアンカは八歳ということになる。だから懐かしく感じたんだとアランは思った。

「そうだ！ ご本読んであげる。ちょっと待っててね」

ぽん、と手を打って、ビアンカは椅子から降りた。本棚から一番薄い本を取ってきて、机の上に広げる。が。

「えーと。……………？ ……………？」

読めない。かろうじてふりがなの部分だけは拾い拾いして読んでいたが、それ以外はさっぱりのもようだった。首を傾げ、むつかしうに眉根を寄せて、何分もしないうちにビアンカはさじを投げてしまった。

「だめだわ。このご本、むずかしすぎるもの」

「そうだね。でもすごいや。僕はまだ、文字がぜんぜん読めないもの」

「だってわたしはおねえさんだもの。えっへん」

胸を張る。それからふたりして声に出して笑った。

「ビアンカー、そろそろ宿に戻るよ！」

階下から呼ぶ声にビアンカが「はい」と答える。丁寧に本をしまつてから、ビアンカはアランを振り返った。にぱ、と笑う。

「しばらくはサンタローズにいるから、またお話しようね！ アラン！」

「うん。またね、ビアンカ」

手を振り合う。とんとんとん、と軽やかな音を立ててビアンカは一階へと下りていった。

8. ともだちのために

翌日。

久しぶりに温かい食事と温かいベッドに包まれたアランは珍しく寝坊をしてしまった。目が覚めたときにはすでに太陽は高く昇っていて、眠い目をこすりながら一階に下りる。

居間にはパパスとサンチョが揃っていた。

「坊ちゃん、おはようございます」

「うん。おはよう、サンチョ」

「久しぶりの我が家だ。ぐっすり眠れたか、アラン」

父の言葉に「うん」とうなずく。ふと、パパスが剣を携えていることに気がつき、首を傾げる。

「お父さん。どこかへ出かけるの？」

「ああ。村の外に出るわけではないから、夕方までには戻るつもりだ。……ではサンチョ。行ってくる。アランを頼むぞ」

「はい。行ってらっしゃいませ、旦那様」

出かける父の後ろ姿を見ながら、アランはテーブルについた。すぐに温かなスープが出されたが、しばらくそれには手を付けず、アランはどことなく寂しそうにつぶやいた。

「……お父さん、村についても忙しそうだね」

「お父上には大切なお仕事があるのですよ」

「せっかくあそんでもらえると思ったのに」

テーブルの端っこに顎を乗せて頬を膨らませる。その様子にサンチョは苦笑していた。

「さあさ、坊ちゃん。せっかくのスープが冷めてしまいますよ」

「はぁーい」

ぶーたれていたアランだが、久しぶりのサンチョの食事にすぐに

機嫌を取り戻す。旅をしている間は粗食を余儀なくされたときもあったから、育ち盛りのアランにとってお腹いっぱいご飯が食べられることはとても幸せなことだった。

「ごちそうさま！　ねえサンチョ、外であそんできてもいい？」

「ええ。外は良い天気です。ただ少し肌寒いので、お召し物には注意してくださいね。あ、それから、くれぐれも危ないところへは行かないよう」

「わかってるよ。サンチョはしんぱいしようだなあ」

そう言っアランは椅子から降りる。少し考え、アランは着ている服の上からさらに一枚薄地のマントを羽織り、あの親切なりすがくれた『ひのきの棒』を腰に下げる。

ちよつとした冒険者気分になったアランは、「いってきます！」と元気よくサンチョに言っアランは、家を出た。

途端に吹きつける冷たい風。そういえば昨日の晩ごはんのとき、パパスとサンチョが農作物がどうの言っいたことを思い出す。

「はやくあたたかくならないかな。みんな困っているのに」

雲一つない空を見上げながらつぶやく。

村の中心を通る砂利道まで出たところで、ふとパパスの姿を見かけた。ちょうど教会から出てきたところだ。パパスは足早に歩き始める。

お仕事のじゃまをしちゃだめだ、という思いが一瞬アランの頭をかすめる。だが結局、父がどんな仕事をしているのかという好奇心の方が勝った。こっそり後を追う。

するとパパスは川沿いにある民家のひとつへと向かって行った。玄関では老人がひとり待ち構えている。老人と二言、三言話したパパスは、そのまま民家の中へ入っいった。あそこが父の仕事場なのだろうか、とアランは思う。

何をしているのだろう、お父さん。

さすがに他人の家の中まで追っわけにはいかないと思っアラン

は、民家が見渡せる教会横の高台に向かった。崖から落ちないように、慎重に民家を見下ろす。

しばらくして、パパスが民家の裏口から出てきた。薪割りでもお手伝いするのかな、とアランは思った。しかし手に斧は持っていない。それらしい雰囲気はなかった。

「……あれ？」

首を傾げる。

パパスは、一緒に出てきた老人に見送られ、川に浮かべてあった小舟に乗って上流へとこぎ出していったのだ。その先は大きな洞窟がある。すぐに、父の姿は洞窟の奥へと消えていった。

「お父さんのお仕事って……どうくつのたんけん？」

一瞬、後を追ってみようかなと思う。だが舟なんかないし、第一危ないところへは行くなとサンチョに言われている。

「むう……」

けれど、気になる。

もやもやした気持ちを抱えたまま、アランはその場を後にした。



「そういえば、ビアンカはまだサンタローズにいるんだっけ」

宿屋の前を通ったとき、ふとアランは思い出した。まだ胸のもやもやを抱えていたアランは、せっかくだからこっちから遊びに行こうと思った。

扉をくぐる。

「いらっしやい……おや。パパスさんとこの坊主じゃないか」

「こんにちは」

ぺこりと頭を下げてから辺りを見回す。小さいながら小綺麗に掃除がされた室内の奥には、いくつかの部屋が続いている。だが当然のことながら、どこの部屋にビアンカがいるのか見ただけではわからない。

すると宿屋の主人が気を利かせてくれた。

「もしかして、ダンカンさんとこのお嬢さんに会いにきたのかい？」

「うん。こっちにまだいるって聞いて。一緒にあそぼうと思ったんだ」

「なるほどね。ま、坊主にとっちゃ久しぶりに同じ年頃の子と会えたってことなんだろうなあ。いいよ、案内してあげる」

人の良い笑みを浮かべ、宿屋の主人が二階へとアランを連れて行く。

西側奥の、いちばん日当たりのいい部屋にビアンカたちは居るという。

「この寒さで、なかなか旅人がやってこないからなあ。ウチとしては商売あがったりだ。だけど、そんな中でもはるばるアルカパからやってきたあのふたりは相当の大物……というか強者だよ」

廊下で主人が言う。そしてふいに声を潜めて、

「……でも今の話は、ふたりにはナイショだよ」

「うん」

「良い子だ。……っと、この部屋だよ坊主。すみません、おかみさん。いらっしやいますか」

主人が呼びかけると、しばらくして扉が開いた。怪訝そうに首を傾げていたおかみさんは、アランの姿を見つけるなり表情を崩す。

「おや、アランじゃないか。もしかしてビアンカに？」

「うん。一緒にあそぼうと思って」

アランが言うと、おかみは何故か複雑そうな顔をした。

「うーん。いつもなら思いっきり遊んでおいでと言うところなんだけどねえ」

「？」

「あ！ アランだ。どうしたの？」

部屋の奥から声がする。ビアンカが小走りに近づいてきた。アランはどこかほっとしながら笑った。

「こんにちは、ビアンカ。あそびにきたよ」

「え、ホント!？」

「駄目だよビアンカ。いつ薬が届くかわからないんだから」
表情を輝かせるビアンカにおかみさんが言う。

「薬が手に入り次第、アルカパに戻るんだからね。父さんが待ってるんだよ」

「……うん。ごめんなさい」

「ねえ。なにがあったの?」

ビアンカが哀しそうな顔をするので、アランもまた哀しい気持ちになりながらたずねる。落ち込んではいられないと思ったのか、ビアンカはむりやり笑顔になった。

「あのね。アルカパにいるわたしのお父さんが病気になっちゃったの。それで、よくきくお薬がサンタローズのどうぐやさんにあるって聞いて、お母さんと一緒にとりに来てたの。でも、そのどうぐやさんがなかなか帰ってこなくて、少しこまってるのよ」

「かえってこない?」

「お弟子さんの話じゃ、どうやら洞窟に材料を取りに出かけて帰ってきてないみたいなんだよ。まあ、こういう時がないわけじゃないらしいし、大事ではないとは思うんだけどね。ただあんまり日が経ちすぎるとウチの人が心配だから、できるだけ早く薬を持って帰りたいんだよ。それでビアンカにもあんまり外には出るなって言っているのさ。すぐに出発できるようにってね」

そう言っておかみさんはため息をついた。

「誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……」

「お父さん」

ビアンカもどこなくしゅんとしている。

とても遊びに行けるような雰囲気ではなかった。アランはすぐすごごと部屋を後にする。

しばらくうつむき加減で廊下を歩いていたアランは、ふと立ち止まった。腰にさげている『ひのきの棒』を見る。

『誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……』

「……よし！」

アランは決意の表情で柄を握りしめた。

9. サンタローズの洞窟

川から流れてくる湿気が肌に冷たい。

緊張を解すため、大きく息をする。胸の中に入ってくる空気は、外のものとは明らかに違っていた。

アランは今、洞窟の中にいる。

ビアンカたちの話を聞いて意志を固めたアランは、その足でここへ訪れたのだ。途中、入り口のところで門番代わりの男に呼び止められはしたが、特に追い返されることはなかった。

「中は人が通れるようになってるが、モンスターもいる。それでもいいならおじさんは止めないよ」

そう言ってすんなり通してくれたのだ。

なるほど、彼の言うとおり、洞窟の中は点々と松明が灯され、足元も人が通りやすいようにならされている。この洞窟で作業をする人のために整備されたのだろう。

だが、それでもアランにとっては初めてのひとりでの冒険である。『ひのきの棒』を両手に握りしめ、アランは緊張の面持ちで奥へと進んで行った。

アランの胸にあるのは、困っているビアンカたちを助けたいという思いと、勇敢なパパスの息子であるという誇り。奥にいるであろうパパスのことを思うと、若干だが勇気が湧いてきた。

サンタローズに来る前、船員に言われたことを思い出す。

『坊主は勇気がある。新米ヒョッコの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になったらどれくらいことをやってのけるぞ』

「……こわくない。だいじょうぶ。僕がやるんだ」

かつん、かつんと洞窟の中に靴音がこだまする。どこか遠くで「キィ、キィ」という声を聞いたような気がした。間違いない。いく

ら整備されているとはいえ、ここにはいるのだ。モンスターが。
そのとき。

「ピキーンッ」

「っ！」

左手、岩陰からスライムが飛び出してきた。一匹。威嚇するように甲高い声を上げている。

だがアランは取り乱さなかった。息を吸い、吐き、また吸い、吐く。

『ひのきの棒』を構える。要領はわかっていた。

「僕は……負けないっ。行くよっ！」

「ギュピイッ！」

荒い息をつく。

岩の一つに背を預け、アランは休息を取っていた。額に浮かぶ汗、しかし洞窟内が涼しいせいとか、すぐに冷たく乾いてしまう。風邪を引いてしまうかもしれないとアランは思った。

だがその表情は明るい。

最初のモンスター、スライムを撃破してからしばらく経った。

その間、幾度も戦闘を繰り返し、その都度退けてきた。『自分は戦える』ということに密かな自信を深めていったのだ。

何より。

「――、ホイミ」

短く、丁寧に呪文を唱える。

途端、掌に温かい光が集まり、戦闘で受けた傷を癒していく。

呪文とは世界から与えられた力だという。天賦の才を持ち、経験を重ね、その資格を得た者だけがそれにふさわしい呪文を行使することができる。

アランは最初に覚えることができた呪文が回復呪文ホイミであることに、胸がいっぱいになるほどの喜びを感じていた。パパスが自分を心配してかけてくれる呪文、今度はそれをアランの方からパ

スへとかけることもできるのだ。それはアランにとって、とても誇らしいことだった。

だが、嬉しいことばかりではない。

重なる戦闘で、リスからもらった『ひのきの棒』にひび割れが起きたのだ。

攻撃を空振りし、思いっきり岩を叩いてしまったことが響いたのかもしれない。これではいつ使い物にならなくなってしまうかわからなかった。

少しだけ悩んだ。

「きつとまだ、だいじょうぶ」

気が大きくなっていたアランはそのまま勢いよく立ち上がり、再び歩き始める。

右手にもった武器が、ぱきり、と微かな異音を立てた。アランは気付かなかった。

10. 痛恨の一撃

がこん、という妙な音が響いたのはそのときだ。

アランが振り返ると同時に、細かく砕けた石が高速で頬をかすめる。

「……っ」

緊張で身体が硬くなった。それはアランにとって、初めて出会うモンスターだった。

身の丈はアランより低く、しかしその小さな手に持つのは巨大な木の鎚。どこか愛くるしい容姿とは裏腹に、闘争本能をみなぎらせた目をしている。足元には、鎚で抉られた痕がくつきりと残っている。

『おおきづち』だ。

その小さな迫力に思わず唾を飲み込むアラン。たじろいだ一瞬の隙を突き、おおきづちはいきなり襲いかかってきた。

力任せに、大上段から木鎚を振り下ろす。

再び、がこん、という異音が響く。地面を叩いた音だ。

横っ飛びで攻撃をかわしたアランは、その威力に冷たい汗をかく。だがこれまで戦ったスライムや、こうもりの姿をした『ドラキー』などと比べれば、攻撃が美味な分かわしやすかった。

地面にめり込んだ木鎚を引き抜くの到手間取っている間に、アランは横合いから『ひのきの棒』を振り抜いた。

「いやああっ！」

手首から肘、肩、そして身体全体に伝わる確かな手応え。アランの攻撃を受け、おおきづちは吹っ飛んだ。

よし、やった——そうアランが思ったとき、おもむろにおおきづちが起き上がった。そして何事もなかったかのように再び木鎚を振

り上げる。その動きにはまるで変化がない。

効いてないのか。アランはたじろぎながらも、再び攻撃をかわした隙を狙って武器を叩き付ける。

だがおおきづちは、まだ倒れない。

「……いたっ！」

手首に違和感。無理矢理叩き付けたせいで少しひねったようだ。思わず、手首を押さえる。

おおきづちから視線を外した、その刹那。

「あっ」

気がついたときには目の前に木鎚が迫っていた。とっさに『ひのきの棒』を構え、攻撃を受け止める。

武器が、おおきづちの攻撃を受け止める衝撃。

直後、『ひのきの棒』は真ん中から粉碎された。

木鎚の勢いは止まらない。そのまま振り抜かれた——腹に直撃。

「……かふっ」

ふわ、と身体が浮いた。

ぐるん、と世界が反転して。

息も吸えないまま地面に叩き付けられた。

——痛恨の一撃。

「げほっ、げほっ。ごほっ！」

まともに息ができない。苦しさから手に力が入る。折れて使い物にならなくなった『ひのきの棒』が手の中にあった。

「げほげほっ、……っ！」

——その攻撃を前転でかわせたのは、ほとんど偶然に近い。

アランは苦しさから逃れようと無理矢理息をするが、うまくいかない。涙がにじんだ。

おおきづちの動きには、やはり変化がない。

手にした木鎚をぎゅっと握りしめたのがわかった。

アランの頭はその瞬間、真っ白になった。

「う、うわああああああっ！」

逃走。全力で走った。

ずきん、ずきんと腹が痛む。実際はアランが思うほど足は動いていなかったのだが、必死のアランはそのことにも気付かない。

とにかく、立ち止まったらやられてしまうと思った。

——どれくらい走っただろう。

ついに身体の方が音を上げて、アランは座り込んだ。そこがちょうど湧き水の湧いているところだったから、アランは無我夢中で水を口にする。爽やかで、微かに甘みのある水に混じり、何とも言えない苦みが口の中に広がる。それが血の味だとアランは初めて知った。

岩に背を預ける。

そして思い出したかのように、自らが走ってきた通路を見た。

おおきづちは、追ってこなかった。やぶれかぶれの逃走は、何とか成功したようだった。

「ふうう……」

腹の底からため息をつく。そして攻撃を受けたお腹をさすった。

わずかに痛みが残るが、思ったよりひどくない。さっき水を飲んだおかげか、気持ちの方はかなり楽になっていた。

ホイミをかける。だが呪文を唱えたのも束の間、傷が癒えきる前に癒しの光は消えてしまった。どうやら精神力の方が切れかけているらしい。

おそろおそろ、手を見る。そこにはまだしっかりと、折れた『ひのきの棒』が握られていた。

武器もない。

呪文もしばらく使えない。

いや、それより。戦闘から逃げた自分を、パパスはどう思うだろうか。そのことの方が心配だった。

憧れの父なら、こんなときどうするだろう。

アランはじっと、天井を見つめていた。

そのときだ。アランの身体が再び固まる。聞こえたのだ、あの甲

高い声が。

「キュイツ!？」

間違いない。スライムだ!

アランは唾を飲み込んだ。血の味は、まだ消えていなかった。

11. スライム君

「キュイツ！ まって、いじめないで！ ボクはわるいスライムじゃないよ」

「……え？」

折れた『ひのきの棒』を構えたアランは、突然ひとの言葉を喋り始めたスライムに呆然とした。

ぽよん、ぽよん、と地面を跳ねる姿はまさしくスライム。けれどよく見ると、その大きな目に宿る光がどことなく優しそうだった。スライムはアランの姿に驚いたのかしばらく離れたところにいたが、やがて親しげに近づいてきた。

「うん。キミはわるいひとじゃないんだね。なんとなくわかるよ」

「えっと。スライム、くん？ 君はどうして言葉がわかるの？」

「ボク、ときどきここにくるしよくにんさんたちとなかがいいんだ。ごはんをもらったり。ことばはしぜんにおぼえちゃった」

「そっか。じゃあ君はわるいスライムじゃなくて、しよくにんさんたちの友達なんだ」

「そう！ ともだち！ ともだちだよ！」

スライムは嬉しそうに一回転した。その可愛らしい仕草に、アランも疲れを忘れて微笑む。するとスライムは少し声を落として聞いてきた。

「ところで、キミ、おおきづちにいじめられていたみたいだけど、だいじょうぶ？ あのひとたち、ぜんぜんてかげんしてくれないから」

「うん。ひどいケガはしてないんだけど……見てたの？」

「ごめんね。ボク、とってもよわっちいから、たすけにいけないかったんだ。それに、ボクはひととなかよくしているから、おなじスラ

イムからはきらわれているんだ」

「そんな！　こんなにいい子なのに。ひどいよ」

「でも、ここにいればしょくにんさんがきてくれるから、さみしくはないよ。さすがにひとのすんでいるところまでは、いけないけれど……」

「そっか……」

アランはうつむく。モンスターと仲良くできることはアランにとつてとても嬉しい発見だったが、そのせいでモンスターの仲間と離ればなれなのは寂しいと思ったのだ。

「ねえスライム君。僕と友達にならない？　僕はアラン」

「アラン！　いいなまえだね！　でもこまったな。ボクはきまったなまえがないんだ。しょくにんさんはいろんなよびかたをしてくれるし……スラリンとか、スラぼうとか……でもスライムくんってよびかたはいいな！　それにしてね」

「う、うん。わかったよ、スライム君」

苦笑いしながらアランは思う。もし自分がこのスライムのような友達を他に持てたとしたら、その子ともずっと仲良くしていこう。

「そういえば、しょくにんさん、だいじょうぶかなあ」

「どうしたの？」

「うん。ちよつとまえにね、しょくにんさんがこのどうくつにはいつてきたんだけど、まだかえってきてないんだ。いつもならとっくにかえりのあいさつによってくれるのに」

「それって、お薬を作っているしょくにんさん？」

「そう！　ひげもじゃだけど、とってもやさしいひとなんだ。しってるの？」

「会ったことはないんだけど……帰りを待っているひとがいるんだ」

「それはいけないね。たしかあっちのおくのほうにいったとおもうよ。ちよつとまえにらくばんがあって、おおきなあながあいているからあぶないよって、おしえてくれたんだ」

「そっか。わかった、ありがとう。スライム君」

アランは立ち上がる。意気揚々と歩き出そうとして、ふと、手元に残った武器に気がついた。

「あ……でも、僕にはもう戦うための武器がないんだった。どうしよう。一度戻った方がいいのかな？」

「ぶき？　ぶきならあるよ」

「え？　ほんと？」

「こっち」

そう言っ、スライムはアランを奥へと導く。岩の陰に隠れるように、それは置いてあった。

「これだよ。しょくにんさんがつかってたんだけど、もういらないからってボクにくれたんだ。でもボクにはつかえなくて、こまってたんだ」

「これって、『かしの杖』……かな」

アランの身長よりも大きな杖だ。触ってみるとずっしりと重く、温かな木の感触に比べてとても硬い。これならば、ちょっとやそつとで折れることはなさそうだった。

「ちよつと重いけど、なんとかなりそう。ありがとう、スライム君！」

「どういたしまして。きをつけてね。あいつら、きつとまたおそつてくるだろうから。しょくにんさんよろしくね」

ぴよんぴよん跳ねながらスライムが別れの挨拶をする。洞窟に入ってから以来の満面の笑顔で手を振りながら、アランはその場を後にした。

12. 負けないよ!

地面を荒く削ってできた階段を下りる。「こほん」とアランは軽く咳をした。

何やら砂埃が舞っている。壁に備え付けられた松明の光に照らされ、細かな粒がきらきらと舞っていた。

奥で声がする。呻き声のようだ。

『かしの杖』を抱えながらアランは走った。折れ曲がった道の先は広場になっていた。天井は高く、時折細かな砂が落ちる。漂っていた砂埃の正体はこれだったのだ。

その真下、ちょうど広場の中央に、大きな岩が転がっていた。呻き声はその下から聞こえてくる。

「おーい、おーい」

「だ、だいじょうぶ?」

「おおっ。助けに来てくれたのか!」

アランが駆けつけると、岩の下で横たわっていた男が歓声を上げた。初めアランは、男の下半身が丸々下敷きになっていると思い顔を青くしたが、男はあっけらかんとした表情で言った。

「帰ろうとしたら上から岩が降ってきてなあ。ご覧の通りの有様で動けなくなっていたんだ。ああいや、心配するな。わしがはまったのはちょうど窪みになったところ。運良くぺしゃんこにならずに済んでるよ。ただ抜け出そうとして腹がつかえてしまっただけなあ」

「えっと。お薬を作っているしょくにんさん?」

「いかにも。まさかお前さんのような小さな子が来てくれるとは思わなかった。勇気のある子じゃ」

下敷きになったひげもじやの男に言われ、アランは苦笑しながら頬をかいた。

男は逞しい腕を伸ばし、下から岩を押し上げる仕草をした。

「お前さん、ちょっと手伝ってくれんか？　もう少しでどかせそうなんだ」

見ると、少しだけ岩が浮いている。地面の凹凸を利用すれば、確かに転がしてどかせることができそうだ。アランは言われたとおりに岩に手をかけた。

「いいか？　いちにのさん、で行くぞ。それ、いち、にの」
「さんっ！」

渾身の力を込める。ぐら、と岩が傾いたかと思うと、次の瞬間には大きな音を立てて岩は転がった。「ふいー、助かったわい」と言いながら男が立ち上がる。

「ありがとう、礼を言うよ。ずいぶん力持ちなんだなあ」

「ううん。そんなことないよ。おじさんが力持ちなんだ」

「はっはっは。……おっと、こうしちゃいられない。急いで帰らなければ。ではな、坊主！　お前も早く戻るんだぞ！」

「あっ、おじさん！」

言うが早いのか、男はあっという間に走り去っていった。小太りな体型に似合わない俊敏な動きだった。あれでどうして岩の下敷きになったのか、もしかしたら結構どじな人なのかもしれない。

くすり、とアランが笑ったときである。

「うわああっ」という男の悲鳴が洞窟内に響き渡った。アランは『かしの杖』を握り、慌てて駆け出した。

階段のふもとで男が立ち止まっている。彼の前に立ち塞がっていたのは――

「おおきづち……」

顔を強ばらせるアラン。

武器である大きな木鎚を振り回しているのは、まさしくおおきづちだった。

がつんっ、と威嚇するように地面を叩く。相変わらずの力だった。しかも一匹ではない。三匹。上へ登る階段を塞ぐように立っている

る。

「こりゃあ……まいったな。さすがに今のわしでは三匹同時は……」

「さがって、おじさん」

決意の表情でアランが前に出る。男は驚きの声を上げた。

「まさか、戦うつもりか？」

「うん。この子の仲間とは一度、戦っているんだ。……まけちゃったけど」

「それなのに戦うつもりなのかい、坊主!？」

「うん。だって、にげてばかりじゃ、お父さんをがっかりさせちゃうから。それにおじさんも守らないとね」

アランは身長よりも大きな『かしの杖』をおおきづちに向けた。

「……今度こそ、まけないよ!」

おおきづちがいきり立ったように襲いかかってきた。

13. 父の言葉

飛び上がった一匹を追いかけるように、残りの二匹のおおきづちもまっすぐアランに突進してくる。

統制が取れた——というより、我慢できずに各々が勝手に飛びかかってきたという感じだ。アランは横っ飛びにかわした。勢い余ったおおきづちたちはたたらを踏む。

アランは力強く踏み込んだ。全身を使って、手にした『かしの杖』を振り回す。

ぴりっ、と脇腹が痛んだ。

「くうっ！」

それでも武器を手放さず、アランは振り抜いた。

空気を押しのけ、硬い杖の先端がおおきづちの身体を打ち据える。鈍い音が響き、おおきづちが吹き飛んだ。他の一匹を巻き添えにして、壁に叩き付けられる。

「坊主、危ないっ」

職人の男が声を上げる。無事な一匹が横合いから木鎚を振りかぶっていた。

『かしの杖』はアランの身体よりも大きく、重い。一度大振りしてしまふと構え直すのに時間がかかる。その隙を突かれた。

嫌な記憶がアランの頭をよぎる。あれを頭に受けたら——と考え、身体が一瞬固くなる。

アランは叫んだ。自らを鼓舞し、無我夢中で『かしの杖』をそのまま振り回し続けた。先端で円を描き、踏み込むと同時に真上から打ち下ろす。

木鎚と真正面からぶつかり——そのままはじき飛ばす。

『かしの杖』はおおきづちの頭頂部を直撃した。鈍い感触が両手

に広がる。

おおきづちは倒れたまま動かない。もしかしたら隙を見て立ち上がってくるのでは、とアランは思ったが、すぐにおおきづちの身体は粒子となって消えていった。

全身の力が抜ける。直後、思い出した。

「そうだ、あといっぴき！」

慌てて武器を構え直そうとするが、気が緩んでしまったのか全身に力が入らなかった。

早く、早く――自らを急かしながら、何とか杖を持ち上げる。顔を上げた。

おおきづちの姿はどこにもなかった。

「……あれ？」

「逃げたよ。ついさっきな」

安心したような、呆れたような声を出し、職人の男がアランに声をかけてきた。

「それにしても見事だったぞ、坊主！ まさかその年で、おおきづち三匹を退けるとはお！」

「……うん。僕もちよつと信じられないかも。あ、そうだ！ おじさん、ケガはない？」

「おお。お前さんのおかげでびんぴんしとるわ。世話をかけたの」

「よかった……」

息をつく。すると今度こそ脱力で立っていられなくなった。尻餅をつき、『かしの杖』を落とす。

男が手を差し伸べてくれた。

「よく頑張ったな。ここから先はわしに任せろ」

「え？」

「子どもひとりにはいい格好ばかりさせられん。出口まで送っていくよ。それに……ほれ。なかなか言えんじやろ。岩の下敷きになって子どもに助けられ、道中もその子に送ってもらいました、なんて」

「……ぷっ」

思わずアランは吹き出す。男はひげもじやの顔に苦笑を浮かべた。
「よし、そーれ」

男はかけ声とともにアランを背負う。アランはびっくりしながらも、かつてパパスに肩車してもらったときのことを思い出して嬉しくなった。

「モンスターから逃げ出したこと、これでお父さん許してくれるかな」

「はて。お前さんの父親は」

「パパスって言うんだ。とてもつよいんだよ」

「パパス……おおっ！？ 坊主、あのパパス殿の息子さんかい！？ いや、どうりで強いわけだ！」

「えへへ」

アランは頬をかいいた。しみじみと男は言う。

「えして立派な親を持った子はどこか難しいところを心に抱え込んでいるものじゃが、お前さんは違うようじゃな。心配せんでもええ。パパス殿ならきつと許してくれる。胸を張って、強く生きる事だ」

「うん」

「よし。いい子だ」

男は笑った。

——こうしてアランは初めてのひとり冒険を無事、乗り切ることができたのであった。



「聞いたぞ、アラン」

職人の男とともに無事、洞窟を抜けたその夜。

少し切れていた口の痛みを我慢しながら、夕食のスープを飲んでいたアランに、パパスが声をかけた。思わずびくり、とアランは身体を震わせる。

何となく、怒られると思ったのだ。

落ち着いて考えればちよつと無茶なことをしたかなと自分でも思う。それに、アランは一度モンスターの前から逃げ出してしまっていた。パパスにはそのことを伝えていない。何となく、後ろめたかったのだ。

恐る恐る顔を上げる。父の顔は怒ってはいなかった。いつもの精悍な顔に、どことなく呆れたような表情を浮かべていた。

「親父さんから聞いたぞ。ひとりで洞窟の奥まで入っていったそうじゃないか」

「ご、ごめんなさいっ」

思わず頭を下げる。するとパパスは「ふっ」と笑った。

「まあ、無事に帰ってきたのだ。よくやったな」

「え？」

呆然とするアラン。サンチョが困惑の声を上げた。

「しかし旦那様、私は気が気じゃありませんでしたよ……。お昼になっても坊ちゃんとは帰ってきませんし、帰ってきたら帰ってきたで怪我をされていたじゃありませんか。もう私は心配で」

「はっはっは。相変わらずお前は心配性だな。あの洞窟はモンスターこそ出るが、村人も入る整備された場所だ。確かにひとりきりで入ったのは感心せんが……。何事も経験だ」

「はあ……。さようでございますか」

「そうとも」

「あ、あの。お父さん」

アランの呼びかけにパパスが振り返る。しばらくうつむいてもじもじと手を合わせていたアランは、意を決して告げた。

「僕……モンスターからにげちゃった。こわくなって、痛くて……。お父さんなら絶対ににげないはずなのに。僕、お父さんのこどもなのに」

「それは本当か、アラン？」

「……うん」

「そうか」

深くうなづくパパス。今度こそ、アランは叱責を覚悟した。

「それはますます、お前のことを見直さなければならぬ。アラン」

「……？」

「人間、誰しも怖くなるときがある。強大なモンスターの前には敗れ去ることもあるだろう。そんなとき大切なのは、命を粗末にしないことだ」

「それって」

「逃げたことを気にしているのなら、それは筋違いということだ、アラン。時には逃げて、自分の身を守る必要もある。生きていれば再戦の機会もあるだろう。それがさらなる成長へと繋がることもある。だが死んでしまつては、元も子もないのだ」

「お父さん……」

「大切なのは生き残ること、生き残る意志を持つことだ。……しかし」

そこでふと、パパスは遠い目をした。

「時には、たとえ命を捨てることになろうとも戦わなければならないときがある」

「旦那様……」

何かに思い至ったのか、サンチョの声が沈んだ。

パパスがスプーンを置いた。真っ直ぐにアランを見つめる。

「アランよ」

「はい」

「逃げるなどと言わない。だが自分が何のために戦っているのか、何のために生きようとしているのか、それは忘れてはならぬ」

「……」

アランは目を伏せた。父には申し訳ないが、アランには難しすぎる内容だった。ただ、自分のしたことが間違っていなかったということだけは、何となく理解することができた。神妙にうなづく。

パパスが破顔一笑した。

「そろそろ、お前にも剣の稽古をつけなければならないな。まだ小さいと思っていたのに、月日が経つのは早いものだ。まあ、しばらくは子ども用のナイフからだが」

「お、お父さんっ」

「はっはっは」

頬を膨らませるアランの前で、パパスは気持ちよさそうに笑っていた。

14. 親たちの願い

翌朝。

アランはパパスと呼ばれ宿屋の前に来ていた。「出かける用意をするように」の言葉通り、いつもの外套と帽子を被っている。いつもと違うのは、その背に大きな『かしの杖』を背負っていることだ。けど、何で宿屋なんだろうーアランは首を傾げながら父が出てくるのを待っていた。

しばらくして、パパスが宿屋から出てきた。後ろに誰かを連れている。

「あ、アラン！　じゃあアランもいっしょに行ってくれるの？」

「ビアンカ？　いっしょに？」

アランは目をしばたたかせた。彼女の後ろには母親であるおかみさんもいる。

パパスは言った。

「親父さんが帰ってきたことでおかみさんも無事、薬を手にすることができた。これからアルカパへ帰るそうなのだが、やはり女二人では心許ない。そこで私が送っていくことにしたのだ」

「すまないねえ、パパスさん。いつもいつも」

「なに、気にしないでください。……そういうわけでアラン。お前も一緒に連れて行くと思うのだ。いいな？」

「うん。わかった」

「やった。アランといっしょだ」

無邪気に喜ぶビアンカ。アランも嬉しくなってつい笑った。

では早速行くでしょう、というパパスの声かけとともに、アランたちはサントローズを出発した。

「ねえねえ」

村を出てすぐ、ビアンカが声をかけてきた。その顔には何やら嬉しそうな、それでいてどことなく意地の悪そうな笑みが浮かんでいる。

「どうくつの奥で、おじさんを助けたってほんと？」

「うん。ほんとだよ」

特に嘘をつく理由も見あたらなかったのも、アランは素直に認めた。昨晚のパパスの話もあってか、そこに威張るような仕草はなかった。ビアンカがきよんとする。

「ほんとにほんと？ わたしてつきり、おじさんがアランを助けたのかと思ってた。それでアランがえっへんって胸をはってるんじゃないかって」

「ひどいよビアンカ」

「えへ。ごめん。でも本当みたいだね、さっきの話。うん、すごいよアラン！」

今度は手放しで誉めてくれた。満面の笑みを見ると、今更ながらに恥ずかしくなる。

それからしばらく、アランとビアンカは洞窟での話や、そこでアランが手に入れた『かしの杖』の話で盛り上がった。子どもたち二人が仲良くおしゃべりしている様子を見て、二人の親は頬を緩めた。ふと、アランやビアンカには聞こえない声でおかみさんがつぶやく。

「これは将来が楽しみだねえ、ふたりとも」

「ん？ 楽しみ、とは？」

「大きくなったら立派で格好いい子に育つよ、アランは。親の私が言うのも何だが、うちのビアンカもあれで結構な器量よしだ。大きくなって、ふたりがずっと一緒になってくれたら私も安心なんだがねえ」

「はは。まだまだ先の話ですぞ」

「おや。子どもの成長なんか、親が考えるよりずっと早いものだよ。今から将来のことを考えたって、バチなんか当たりゃしないさね」

「むう……」

想像したのだろう。パパスの表情が複雑なものになった。

「確かに伴侶を持つことはとても大切なことだ。だが私はひとところに腰を落ち着けぬ身。おそらくアランも同様だろう。いかに仲がよいとは言え、それは相手にとってつらい思いをさせることにはならないだろうか」

「何を言ってるんだい。そういうのは余計なお世話っていうんだよ。パパスさん」

「むむう」

「そんなに難しく考えなくたって、なるようになるもんさ。もしかしたら相手だって喜んで付いていくかも知れないじゃないか。大切なのはお互いの気持ちさ。ま、ビアンカはあれで結構なお転婆娘だから、トラブルや冒険にはむしろ目の色輝かせるかもしれないがねえ」

「おかみさん……」

「というわけでパパスさん。そのときはうちのビアンカをよろしく頼むよ」

ばん、と派手に背中を叩かれ、パパスは呻いた。

その様子を二人の子どもは不思議そうに眺めていた。

15. アルカパ、猫の瞳

「アルカパだーっ。お母さん、早く早く！」

「ビアンカ。あんまり急ぐと転ぶよ」

「お父さんに早くお薬持っていってあげなきゃ！」

草原の先、サンタローズと同じように森に囲まれた場所にアルカパはあった。先を行くビアンカたちの後ろ姿を見ながら、パパスがつぶやく。

「ビアンカは心優しい子なのだな」

「うん。ビアンカはやさしいよ」

アランがうなずくと、なぜかパパスは苦笑を浮かべた。首を傾げるアランに、パパスは「何でもない」と答えた。

街に入ると、綺麗に整備されたレンガ造りの道がまっすぐに延びていた。道沿いの建物はみな立派な造りで、サンタローズと比べるととても大きな街だということがわかった。アランは素直に驚く。

「すごいね、アルカパって」

「うむ。この辺りでは一番大きな街だろう」

「ここよりもっと大きなまちがあるの？」

「あるさ。少し遠いが、ラインハットはここよりもさらに大きい。

世界にはまだまだたくさんさんの街があるのだ」

「うわあ……。僕もいつかいきたいなあ……」

物珍しさからアランはきょろきょろと辺りを見回す。晴れ渡った空から降りてくる風は心地よく、歩くたびにこつこつと鳴る石畳が楽しくて、アランは笑いながらスキップをしていた。

しばらく歩くと、突き当たりに大きな建物が見えてきた。周囲の建物が二、三軒入ってしまいそうな程の大きさだ。アランは思わず立ち止まり、口をあんぐりと開けた。

「あれがビアンカのご両親が開いている宿屋だ」

「えっ!?! あれがビアンカのおうち!?!」

「待たせては申し訳ない。急ぐぞ、アラン」

パパスに連れられ、扉をくぐる。初めて聞くような重厚な音がした。

建物の中に一步踏み入れた途端、外とは違う空気がアランの肌に触れた。どこか暖かみがある、不思議な感覚だった。

受付カウンターを横切り、奥にある部屋へと向かう。そこがビアンカたち家族の居室だった。入ってすぐ、ビアンカがパパスたちを奥へと案内する。

「いま、お母さんがお薬をあげています。おはなしもできますよって、お父さんが」

「うむ。ありがとう」

ビアンカの案内で寝室に入る。おかみさんに介抱され、宿屋の主人が横になっていた。

「ごほ……おお! パパスじゃないか……ごほごほ」

「ほらあんた。まだ薬を飲んだばかりなんだから、安静にしてな」
「ダンカン。具合はどうだ?」

「なに、ただのカゼさ。心配かけてすまなかったな……ごほごほ」
「ウチのひと、気は大きいのに身体が弱くてねえ。まったく情けない」

「はは。しかし大事ではなくて安心した。サンタローズの薬はよく効く。おかみさんの言うとおり、安静にしているのがいいだろう」

「ごほ。それよりパパス、今度の旅の話聞かせてくれないか――」
旧知の仲なのか、話が盛り上がるパパスたち。邪魔をしては悪いとアランはそっと寝室を出た。同じように部屋の外で大人しく待っていたビアンカと顔を合わせる。彼女は肩をすくめた。

「やっぱり、大人たちのお話ってながいのよね」

「うん。でもしかたないよ。ひさしぶりに会ったんだから」

「お父さん、寝込んでからはあんまり笑わなかったけど、いまはとってもうれしそう。だからそっとしてあげましょ。……あ、そうだ。」

アラン」

ビアンカが手を合わせる。

「もしお外に行くなら、いっしょに行きましょう。アルカパの街を案内してあげる」

「え？　ほんと？」

「うん。お葉のお礼もしなきゃ」

満面の笑顔を見せるビアンカに、アランは喜んでうなずいた。



金髪のお下げが歩く度にぴよこぴよこ揺れる。

ビアンカの後ろを歩くのは楽しい。色んなものが新しく見える――

「？　どうしたのアラン」

「ううん。何でもないよ」

振り返ったビアンカにアランは手を振って見せた。まさかビアンカの後ろ頭を見ながら楽しんでいたとは言えない。

もちろん、それ以外にもアランにとってアルカパの街は十分に上に新鮮だった。

まず、街を歩く人の数が違う。サンタローズも季節によって村人の服装は変化するが、アルカパの人々は色とりどりの服を身に付けていた。だが、毒々しいほどの派手さはない。品がある、とでも言うか。旅人も訪れるのだろう。時折、鎧兜に身を包んだ大男も通る。

建物の大きさはすでに目抜き通りで体験済みだが、よくよく見ると建物の大きさもさまざまだ。平屋建て、窓も少ししかないこじんまりした家もあれば、大きな煙突からぽっぽっと煙を出し続ける家もある。もちろん、ビアンカの家である宿屋が街の中で一番大きい。そして何よりアランが驚くのが、道ばたに植えられた綺麗な花々の数だ。特に街の中心部にある教会の周囲には、教会をぐるりと囲むように色とりどりの花が植えられている。春の陽気に似つかわし

くない寒さに襲われているのはアルカパでも同じはずだが、少なくとも見た目においては寒々しさとは無縁だった。

都会都会しているわけではなく、さりとて寒風吹きすさぶ田舎でもない。不思議な調和を保った街だった。

道具屋、武器屋などを冷やかし、教会のおじいさんの長い話に苦笑いを浮かべ、酒屋のお姉さんに「逢い引きだ」とよくわからない単語を言われながら、アランはすっかりこの街に魅せられていた。

だが――街の南にある小さな広場にさしかかったとき、初めてうきうきした気持ちにかげりが差した。

猫が唸り声を上げている。明らかに警戒し、威嚇する声だった。

アランと同じか、それより少し年上の少年が二人、猫を取り囲んでいた。彼らは手に持った棒で猫を突っついていて、猫はさかんに威嚇の唸りを上げているが、いかんせん身体が小さい上、弱っているのか声自体に力がない。首に巻かれたひもが広場に突き立てられた棒に繋がれ、身動きが取れないようだった。

彼らの姿を見た途端、ビアンカが声を張り上げた。

「こらあっ！ 何やってんの！」

「げ、ビアンカ!？」

少年の一人がびくりと肩を震わせる。それに構わずビアンカはるかずかと彼らの側まで近づいた。びしり！ と眼前に指を突きつける。

「そんな可愛い猫さんいじめて、何が楽しいの！」

「いや、だってなあ」

「こいつ、面白い声で鳴くんだけ」

言うが早いか、少年が棒で猫をつつく。すると「ふがなあおう……」という鳴き声が漏れる。

やめなさい、とビアンカが言うより早く、アランは少年から棒をひったくった。むっとする少年を真正面から睨む。少し相手がひるんだ。その様子をビアンカが驚いた表情で見つめる。

アランは猫に目を向けた。どこかで迷ったのか、身体は泥だらけ、

毛並みは乱れ放題、身体もどこかげっそりしている。

だがアランは眉をしかめることもせず、ただじっと猫を見つめた。猫もまたまっすぐにアランを見返す。

綺麗な目だな、とアランは思った。心の中で語りかける。

君は、誰？

どこから来たの？

僕と友達になれるかな？

「……アラン？」

ビアンカに声をかけられ、我に返る。猫との間に少年たちが割り込んだ。

「と、とにかくこいつは俺たちが見つけたんだ。俺たちのだ」

「何言っているのよ。いまスグはなしなさい！」

「えー……」

「うーん。じゃあ、こうしようぜ！」

いかにも名案、という風に少年が手を叩く。

「お化け退治さ！」

「え？」

「アルカパの北にお城があるのは知ってるだろ？ そこに出るんだってさ。夜な夜なお化けがさ。そいつらを追いはらったら、この猫はあげるよ！」

「それはいいな！ お化け退治だ、お化け退治！」

「い、いいわよ。そのかわり、お化けを退治できたらちゃんと猫ちゃんをはなしてあげるのよ！」

「うん。わかった」

売り言葉に買い言葉か、ビアンカが怒り心頭に宣言した、その脇で。

アランはじっと、猫の瞳を見つめていた。猫もまた唸り声を上げるのをやめ、じっとアランを見つめていた。

ほら、行くよ——とビアンカに襟首をつかまれ、引っ張られる。

去り際、猫が「なおん……」と小さく鳴く声が聞こえた。

16. 夜の大草原へ

襟を引っ張られるままだったアランは、ふとビアンカが宿とは反対方向に歩き出したことに気付いて声を出した。

「ビアンカ、もしかして今からいくつもり？」

「決まっているじゃない！ 猫ちゃんを助けなきゃ！」

「それは、そうだけど……」

アランは言葉を濁した。怖じ気づいたわけではない。ただサンタローズでの洞窟探検の経験が、そのまま何の備えもなくお化けがいるという場所へ向かうことにためらいを感じさせたのだ。

ただ、アランも正直なところはビアンカと同じ気持ちだ。あの子を助けたいと思う。それも、とても強く。

「おや、おふたりさん。どこへ行こうというんだい？」

街の出入り口まで来たところで、門番の兵が声をかけてきた。さりげなくアランたちの行く手を塞いでいる。ビアンカは両手を腰に当てて声を荒げた。

「猫ちゃんを助けるの！ ここを通して、門番のおじさん！」

「何を言っているのかよくわからないが、外は危険だ。子どもふたりだけで外へ出すわけにはいかないな。さあ、お家に帰りなさい」

やんわりとした口調ながら、断固として通そうとしない。サンタローズのおじさんとは全然違うなとアランは思った。

ううー、と隣でビアンカが唸る。すると突然、彼女は駆け出した。あろうことか、門番の股の下をくぐって抜け出そうとする。……が。

「こらこら。レディがそんなことをするのは感心しないな」

ひよい、と首根っこを押さえられ、そのままアランのもとまで連れてこられる。やたらと慣れた手つきだった。

「まったく。相変わらずお転婆だなビアンカちゃん。そんなこと

だと大きくなってお嫁にいけないぞ？」

「ほ、ほうっておいて！」

頬を膨らませてビアンカが言う。顔を赤らめているところを見ると、本人は結構気にしているのかも知れない。

押し問答も効果はなく、ふたりは渋々その場から引き下がった。

「どうしよう……これじゃあ外に出られないわ」

「うーん。大人の人にたのんだらどうだろう？ お父さんと一緒なら、あのおじさんも通してくれるかも」

「ダメよ！ 大人と一緒ににお化け退治したら、あいっらゼツタイ猫ちゃんをはなしてくれないわ！ どうせお前らがやつつけたんじゃないだろう、って！」

ビアンカの言うことももっともだったので、アランは黙り込んだ。ふたりして頭を悩ませている内にビアンカの家に辿り着く。彼女はため息をついた。

「こうなったら仕方ないわね。アラン」

「なに？」

「今日は何が何でもうちに泊まってもらおうよう、お父さんたちに言ってみる。当然、アランも泊まるでしょ？」

「そうなると思うけど……あ」

あることに思い至ったアランは口元を押さえた。

「まさかビアンカ、夜にこっそりぬけ出すつもりじゃ」

「うん、正解。よくよく考えたら、お化けって夜出るものじゃない？ だったら退治も夜しかできないかなって」

「……そう、だね」

アランはうなづく。二人は真剣な表情で頷き合った。

ちょうどそのとき、奥の扉が開きパパスたちが出てきた。アランとビアンカの姿を認めると微笑む。

「おお、帰っていたか。すまぬなビアンカ、アランに街を案内してくれていたのだろう？」

「気にしないでください、おじさま。私こそ、とても楽しかったで

す」

「はは。このお礼はまたいずれしなければな。……ではアラン、そろそろサンタローズに帰るとしよう」

パパスの言葉に、アランもビアンカも固まる。何と言おうか二人が悩んでいると、思わぬところから助け船が来た。ビアンカの母親だ。

「そんな！ もう帰っちまうのかい、パパスさん！ 一泊ぐらいしていつてくさいな」

「うーむ……」

パパスがちらりとアランを見る。ビアンカに肘でせっつかれたアランは、急いでこくこくとうなずいた。パパスが再び笑う。

「……では、ご厄介になろうか」

「はい！ さあさ、こちらへどうぞ。ちょうど良い部屋が空いているんですよ！」

嬉しそうにパパスとアランを案内するおばさん。パパスに手を引かれ歩き出そうとしたとき、アランの耳元でビアンカがそつつぶやいた。

『それじゃ、夜にね』

『うん。わかった』



——外の喧噪が細くなり、やがて消え、夜が来る。

パパスとアランが案内された部屋は、親子二人が寝るには少々広いくらいだった。良い部屋が空いているというおかみさんの言葉は、なるほどその通りだった。

だからこそアランはなかなか落ち着けず、寝台の中でしきりに寝返りを打っていた。

何度目だろうか。パパスに背を向けるように寝返りを打ったとき、入り口の扉がゆっくりと開いた。

「……アラン」

ビアンカがゆっくりと寝台に近づき、声をかけてきた。アランもまた音を立てないように注意しながら床に降り立つ。

アランの手をビアンカが握る。

「さあ、行きましょう。お化け退治に北のお城——レヌール城へ。猫ちゃんを助けなきゃ」

「うん」

連れだって部屋を出る寸前、アランは父の寝台を振り返った。パスは目を覚ます気配がない。ごめんなさい、と心の中で謝る。すると不意に、父の口からか細い寝言が漏れてきた。

「……マーサ……私たちの……アランは……元気に……」

きゅっ、とアランはビアンカの手を強く握った。

部屋を出て、慎重に扉を閉める。他の宿泊客やビアンカの両親を起こさないよう、息を潜めて歩く。重い正面扉を開けると、肌を刺すような冷気が吹き付けてくる。

「ううっ……やっぱり夜は少し寒いね」

「……うん」

「……」

無言。やがてビアンカが意を決したように口を開く。

「ねえアラン。さっきのおじさまの寝言……だよな？ マーサって」

「僕のお母さん……だと思う」

「思う？」

「お母さんは僕は小さいときにいなくなっちゃったんだ。僕はぜんぜんおぼえてなくて、でもお父さんはお母さんをさがして旅をしているって。ずっと」

「……ごめん！ アラン。私、いけないこと聞いた……」

「ううん」

アランは首を振る。

気まずい空気が流れた。

アランは夜空を見上げた。冷たく、けれど澄み切った空気の向こ

うには、藍色の空を埋め尽くすほどの星が瞬いていた。

確かに、アランにははっきりとした記憶はない。けれど身体が、心が、薄ぼんやりと母の姿を思い起こさせるのだ。温かい、優しい、そして清らかな母の気配——いのち。

この世界のどこかで母は同じ空を眺めているのだろうか。

いつか、パパスとともに再会することができだろうか。

いや——きっとできる。

パパスが探し求め、そして母が自分の思うとおりの人ならば、いつか必ず——

「ありがとう、ビアンカ。でも僕はだいじょうぶだよ。……それより、僕が昼間言ったことおぼえてる？」

「え？」

「お化け退治するならきちんと装備をととのえてから行こうって話」
気分を入れ替え、アランは懷から財布を取り出した。そこにはサ
ンタローズの洞窟で得たお金が詰まっていた。^{ゴールド}ビアンカが「わあ」と声を出す。

「これで買い物しようよ。お店が開いているか、わからないけど……」

「街の人は働き者だから、まだ大丈夫だと思うよ」

それから二人は武器屋、防具屋、道具屋を見て回った。アランの手持ちは少なかったからろくな買い物はできなかったし、何よりこんな時間に子ども二人で出歩く姿にお店の人は驚いていたが、ビアンカが持ち前の大胆さで無理矢理納得させてしまった。

「何だか本当の旅に出るみたいだね」

ビアンカが言う。浮かれているのか、声が弾んでいる。
アランはうなずき、それから自らの腰に手をやった。

そこには真新しい『銅の剣』が鞘に収められていた。スライムにもらった『かしの杖』を手放すのは気が引けたが、これから向かう先のことを考えて思い切って購入した。

ついに自分も父と同じ『剣』を持つ——そう考えると首の後ろが

ふつつと沸き立つような錯覚を抱く。

ちなみに隣のビアンカは『くだものナイフ』を持っている。「本当は『いばらのムチ』が欲しかった」と彼女はぼやくが、お金が無い以上高望みはできない。

夜のアルカパの目抜き通りに人の姿はほとんどなかった。時折、酒場の方へ向かう男たちとすれ違ってくる。その先、街の出入り口にさしかかると、そこには昼間と同じ門番の男がいた。

ただし――木の幹にもたれて居眠りをしている。

「この寒いなか、よく居眠りができるね。まじめなのか、ふまじめなのか、よくわからないわ」

ビアンカが呆れた声を出す。二人はそっと、門番の男の脇を通った。

街を出る。森と、草原と、遙か先には高い山々と、それらすべてを覆い尽くす広大な夜空が広がっていた。

ビアンカが拳を握る。

「待っててね、猫ちゃん。私たちが必ず助けてあげるから……いざ、レヌール城へ！」

17. 油断の毒

夜空の下、意気盛んに出発したアランとビアンカ。

しかし、道中はそう簡単にはいかなかった。

暗い夜道を子ども二人で旅をすること自体がまず難事だ。満天の星である程度の明かりは確保できるとは言え、一步森の中に入るとそこは一寸先も見通せぬ闇が広がる。自然、見晴らしの良い、拓けた草原を歩くことになるが、何もないただっ広い空間を二人だけで進むのは、それはそれで勇気が必要だった。

そして何より危険なのが、道すがら遭遇するモンスターたちだ。草原で一度に出会うモンスターの数は少ない。だが夜ということもあってか、彼らは普段より好戦的だった。

勝ち気だが、モンスターとの戦闘自体にはまったく不慣れなビアンカをかばいつつ、アランは銅の剣を何度もふるった。初めは扱いに苦労した剣も、何度も戦闘を重ねる内次第に手に馴染んできた。初めて銅の剣を握ったときの高揚感とはまた違った感覚が、アランの中で芽生えつつあった。

そして、何度目かの戦闘のときである。

「アラン！ どいてっ！」

突然、ビアンカが声を上げた。ちょうどモンスターの一体を斬り伏せたアランは振り返る。

ビアンカの指先に、松明の炎のような赤い光が集まっていた。

「――、いくよっ。メラ！」

攻撃呪文。

小さな火の玉がビアンカの指先から光の尾を引いて飛翔する。慌てて飛び退けたアランの脇を通り、今まさに飛びかかろうとしていた『おおねずみ』に直撃した。

炸裂音が夜の空気を切り裂く。

そのまま吹き飛んだ『おおねずみ』は、黒煙を上げて消えていった。

瞠目しながらアランがビアンカを見ると、彼女は照れたように頬をかいていた。

「えへへ。はじめての呪文、上手くできたかな？」

「うん……うん！　すごいよ、ビアンカ！」

アランは素直に驚き、そして喜んだ。アランは使えるのは回復系の呪文だけで、いまだ攻撃呪文のひとつも使えない。だがビアンカは、アランより戦闘の経験が少ないのに、もう立派な攻撃呪文を使えるようになっていいる。羨ましいというよりも、「すごい！」という気持ちの方が勝った。

アランの言葉を受けて、ビアンカははにかんだ。

「ありがとう。でもアランこそすごいよ。怪我しても、すぐにホイミで治してくれるもん」

そう言って、満面の笑みを浮かべるビアンカ。

そう。

このとき二人は、完全に油断してしまっていた。

風船から空気が抜けるような音が、耳に届く。ビアンカが何事かと振り返る。

アランは慌てて叫んだ。

「ビアンカ、危ない！」

直後、ビアンカに向かって緑色の『何か』が体当たりした。

じゅあっ、という音が響く。

「きゃあああっ！」

「ビアンカ！」

アランは剣を構えて走った。

ビアンカに攻撃をしかけた『何か』——緑色の崩れた身体を持ったモンスター、『バブルスライム』だ。

『バブルスライム』はビアンカからするすると離れると、今度は

アランに向かって体当たりをしてくる。アランは走る勢いのまま、その不定形の身体に銅の剣を叩き付けた。

体当たりをそのまま迎撃された『バブルスライム』は水風船のよう^{カウンター}に弾け、霧となって消えていった。

ビアンカが膝から崩れ落ちる。

アランは無我夢中でビアンカを抱き留めた。

「ビアンカ、ビアンカ！　しっかりして！」

「……」

返事がない。気絶しているようだった。

しかも顔色がひどく悪い。頬の辺りが真っ青になっている。首筋には汗が浮かび、身体を支えるアランの手を湿らせた。

「……まさか、毒！？」

パパスから聞いたことがある。『バブルスライム』など一部のモンスターは、その攻撃で相手に毒を与えることができる。

のんびりはしていられない。アランは息を整え、ビアンカの額に手を当てた。ゆっくりと呪文を唱える。

「――、キアリー」

光の粒子が舞い、ビアンカに吸い込まれていく。

すう……、とビアンカの息づかいが穏やかになった。顔色も元の瑞々しい肌色に戻っていく。だが、彼女が目を覚ます様子はない。

重ねてホイミをかけようとして、アランは自らの精神力が切れかかっていることに気付いた。

このまま先に進むのはダメだ――アランはビアンカを背に、いったんアルカパへと戻ることにした。

18. そのときに向けて

アルカパの街が見えてきた。アランはほっと息を吐こうとしたが、ここまでビアンカを背負ってきたせいかわい呼吸しか漏れなかった。「う……うん……」

「ビアンカ!? 気がついた?」

「アラン……? あれ、私」

アランの背中でビアンカが目をしばたたかせる。アランは手短に経緯を説明した。話を聞いた彼女は少しだけ顔を青ざめさせ、やがて神妙な声で「……自分で歩く。ありがと」と言った。

しばらく無言のまま、二人並んで歩く。アルカパの街に入り、相変わらず大胆な寝相の門番の脇を通り、宿の扉の前に辿り着くまでビアンカは口を閉ざしていた。

アランはビアンカを気遣った。

「だいじょうぶ? ビアンカ」

「……うん。ごめんねアラン。迷惑かけちゃった」

「いいよ」

「ごめん。痛いとか、お城に行くのが嫌になったとか、そういうのじゃないんだ。だけど、ちょっと……ダメだったなあ私、ってさ」
珍しく落ち込んだ様子の彼女にアランも困り顔をする。こういうときどのように声をかければいいのかわからなかった。

しかし、やはりビアンカはビアンカだった。

扉に向かい合い、大きく深呼吸。家主を起こさないようにゆっくりと扉を開ける。ちょうど席を空けていたのか、受付カウンターに人の姿はなかった。それを確認し、アランを振り返ったときにはもう、彼女の顔には笑顔が浮かんでいた。

「今日はここまでにしましょ! いろいろあって疲れちゃった」

「うん」

「ねえアラン、明日少し付き合ってもらえる？」

「どうしたの？」

「いや、レヌール城に行くために、もっといろいろ準備しておきたいなと思って。今日の冒険でお金もたまったことだし」

むん、と気合を入れるように拳を握りしめるビアンカ。

「やっぱり冒険は楽しいことばかりじゃないよね。あぶないこともあるんだ。だから私、がんばるよ。かならず猫さんをたすける。そのためにもっとがんばらなきゃいけないんだ！」

「ビアンカ……」

「協力してくれる、アラン？」

少しだけ不安そうにこちらを見てくるビアンカに、アランは笑顔で「もちろん」とうなずいた。

翌日。

アランとビアンカは連れだって街へ出かけ、昨夜獲得した資金を使って装備や道具類を整え始めた。一晚経ってすっかり元気を取り戻したビアンカは、念願の『いばらのムチ』を手に入れてご機嫌だった。

宿で早めに休み、夜には街を抜け出す。二人は街の周辺で念入りに戦い方を確認した。素人で、しかも子どものやることではあったが、アランには洞窟での冒険で一日の長がある。ふたりで協力して戦うためにも、戦闘の訓練は必要だった。

そうしてある程度の経験を積んで、早めに切り上げる。さらに夜が明けてから、手が届かなかった分の装備を購入する。同時にレヌール城についての噂をふたりで手分けして集めた。それによると、どうやら城にお化けが棲みついたのは最近のことらしく、夜な夜なすすり泣くような声が聞こえてくるとのことだった。

——こうして、瞬く間に時間は過ぎていく。

本来短期滞在のはずのアランたちがこうまで長くアルカパに滞在できたのは理由があった。

「ぶえっくしょっい！　うう……ブルブル」

アランが宿の部屋に戻ると、パパスが寝台に横になったまま盛大にくしゃみをしていた。ビアンカの父、ダンカンの風邪をうつされてしまい、寝込んでしまったのだ。

「お父さん。だいじょうぶ？」

「うう……情けない。アラン、うつすといけないからあまり近づいてはいけない」

「今お薬取ってくるね」

そう言って階下へ降りる。ダンカン夫妻に薬の件を伝えると、残った薬を快く分けてくれた。ダンカンの調子はかなり良くなっている、寝台から起き上がれるほどに快復していた。

薬を抱え、部屋を出る。そのときビアンカとすれ違った。

真剣な表情で、うなずきをかわす。

『じゃあ、また夜に。迎えに行くから』

『いよいよだね』

そう――

今夜、ついに二人はレヌール城へ乗り込むことに決めたのだ。

19・レヌール城最上階

この日の風は、いつもより少し冷たく感じた。

「……行ってきます」

振り返り、アランはつぶやく。視線の先には月と星々の光に照らされ、アルカパの街が静かに眠っている。

「アラン、もっと元気に行きましょう。私たち、猫ちゃんをたすけに行くんだから。だいじょぶ、私たちにはできるよ」

「うん。そうだね。行こう、ビアンカ」

背筋を伸ばし、アランとビアンカは肩を並べて歩き始めた。

草原を横切り。

森を抜け。

高い山々を横手に見ながらひたすら歩く。

そしてついに、高台に立つ古城が見えてきた。

——最初に異変に気付いたのはビアンカだった。

「ねえ……あのお城の空だけ、ものすごく暗くない……？」

アランは顔を上げた。木々の間からのぞくレヌール城、その上空には夜空よりもさらに暗い雲が厚く覆っていた。時折白い稲光いなびかりが雲の表面を走っている。

レヌール城の正門を前にしたときには、明かりだけでなく気温すらもさらに低下したような錯覚をアランたちは抱いた。勇気を振り絞り、ふたりは入り口の大扉の前に立つ。

さび付いてがさがさする鉄扉を、二人で力を合わせて押し開ける。

——が。

「……あかない」

「びくともしないわ。どうしましょう」

手についたさびを嫌そうに拭いながら、ビアンカが途方に暮れたように言う。アランは辺りを見回した。

「これだけ大きなお城なもの。きっとほかに入り口があるはずだよ」
「そうね。手分けして――」

言いかけ、ビアンカはふと後ろを振り返る。何もなかったことを確認して「ふう……」と息を吐き、恥ずかしそうに笑う。

「手分けしないで、いっしょに探しましょ？」

「うん」

正面玄関から離れた二人は、とりあえず外壁に沿って歩き始めた。城を取り囲む高い塀との間を慎重に進みながら、アランたちは城の裏手に回った。

「あ！ あれ見て。階段じゃないかしら」

ビアンカが指差す先に螺旋状の階段があった。どこに続いているのかと二人して階段の先を目でたどる。どんどん首が上を向き、やがてほとんど雲を見上げるほどになったとき、ようやく階段が終わっていることに気付く。

どうやら城の最上部まで続いているようだ。

ひととき強く風が吹く。木々が鳴った。ビアンカがぎゅっと袖を握ってきた。

「……高いね」

「あの子をたすけるためにはのぼらないとだね、ビアンカ。でも」
「でも？」

「……何だかこのお城、ヘンだよ」

瞬間、稲光が走った。空気を引き裂く音が耳を通り越してお腹の辺りまで響く。

ビアンカが震える声を出した。

「アラン、何てこと言うのよお。もうバカッ」

「ご、ごめん。だけど、いかなきゃ。ほら、ビアンカ」

ビアンカの手を引き、アランは階段を上り始めた。一本の太く大きな柱に石板を突き刺したような螺旋階段で、眼下の光景を足元から見る事ができた。上がれば上がるほど風は強まり、一段上ろうと上げた足が風に取りられそうになる。何かにしがみつこうにも、手

すりは今にも朽ち果てそうでとてもよりかかることなどできない。
空は絶え間なく鳴動している。ごおん、ごおん、と雲の中で
雷が鳴っていた。

時間をかけて、ようやく二人は最上部に辿り着く。

まるでアランたちを招くように、ぽっかりと入り口が開いていた。
その先は真っ暗だ。

二人は意を決し、武器を構えた。慎重に入り口から中に入る。

ふっ……と周囲が暗くなる。

足裏が固い石畳から、柔らかい何か――絨毯を踏んだ。

直後、背後で金属の擦れる大きな音が響いた。入り口の鉄格子が
ひとりでに降りたのだ。

ただでさえ暗い視界がさらに漆黒に染まった。

「……！」

アランは産毛が逆立つ気配を感じた。前から、後ろから、横から

――周囲すべてから、得体の知れない気配が迫ってくる。

繋いでいたビアンカの手が、すうつ、と遠のいた。

「きゃあああああぁあぁっ！」

「ビアンカッ!？」

耳をつんざく悲鳴。まぎれもなくビアンカの声は、しかしすぐに
立ち消えた。

部屋が急に明るくなる。壁にしつらえられた松明がひとりでに火
を放ったのだ。

アランは立ち尽くす。

棺がずらりと並んでいた。そのすべてのふたが開いている。

――ビアンカの姿はどこにもなかった。

20. 動かぬ石像

「ビアンカ、ビアンカ!？」

呼ぶ。だが返事はない。

部屋の隅に溜まった闇に声が吸い込まれていくようだ。アランは勇気を振り絞り、開いたままになっている棺をひとつひとつ見て回った。

松明の光に照らされ、空中に舞う埃が見える。棺の中は例外なく空っぽで、蜘蛛の巣がはっついていて、何より血のように真っ赤だった。部屋の奥——ひとつだけ、下に降りる階段がある。

松明の光が微妙に届かないそこは、まるで奈落の底に続いているかのようなのである。声はしない。代わりに、かすかに、ほんのかすかに風の通る音がする。

『銅の剣』を握りしめ、アランは階段の一段目に足を置いた。こつ……という音がはつきりと耳に届く。手すりを握りながら、ゆつくりと降りた。

——心なしか、呼吸をするのが、苦しい。

下の階も松明が燃えている。人影など皆無——やはりここも、ひとりでに明かりが灯ったのだ。幽霊が居着いているという噂は、どうやら本当なのだろう。

左右を見回しながら、アランはビアンカの姿を探した。本当に幽霊がいるのなら、そして、彼女がそいつらに連れ去られてしまったのなら——悪い想像を振り払い、アランはひたすら歩いた。

「……？」

ふと、振り返る。

埃が溜まった床の上に点々と自分の足あとが付いているだけで、背後には誰もいない。大きな石像が通路を挟むように立っているだ

けだ。明かりはあるのに、闇は濃い。

アランは再び歩き出した。

こつん……ごりりいっ……

「……っ!？」

再び振り返る。今度は身体ごと、剣を構えながら、だ。

石像が『こちらを向いていた』。

アランは思わず唾を飲み込み、一步、二歩と後退る。

石像は動かない。穴の開いた目で、じっとこちらを見ているだけだ。だけど、あの目はさっきまでは確かに別の方向を向いていた。

横目に扉の姿を捉える。

ゆっくりと、ゆっくりとそちらへ向かった。視線はまだ、石像と合わせたままだ。

石像は——動かない。

いま気付く。石像が握っている剣。あれは石ではない。本物の鉄だ。松明の光が、そこだけ妙に眩く反射している。

石像は動かない。だが——視線はずっと、アランを向いていた。

手が、扉の取っ手に触れる。握った。回す。がちゃん……と音がして、開く。

冷たい風が流れ込んできた。室内とはまた違った闇が扉の隙間からぞく。

アランは一気に扉を開けその奥に身体を滑り込ませると、そのまま叩き付けるように扉を閉めた。耳鳴りがした。あまりにも静かな緊張感に、額に汗をかいていた。

雷鳴がとどろく。

背筋が凍るほど驚きながら、アランはふと、どこからか漏れてくる小さな声を聞いた。

『……うん……うーん』

「……ビアンカ？」

聞き間違えではない。ビアンカの声だ。うなされているような、苦しげな声だ。

周囲を見回す。そこでまた、冷や汗をかいた。

そこは城の屋上に設けられた――墓場だった。

雷鳴に邪魔をされながら、アランは声のもとをたどる。するとひととき大きな二つの墓から声が漏れていることを突き止めた。

墓石に耳を当て、ビアンカの声を確認すると、アランは意を決して蓋をはずした。重い石板が、腹に響く低音を上げながらずれていく。

半分ほど開いたところで――

「……ビアンカ！」

「ぷはあっ！ ああ、アラン！」

ビアンカが勢いよく飛び出してきた。

「よかった、ぶじだったんだね」

「すー、はー、すー、はああ……。うん、ありがとう。たすけてくれて。とても息苦しくて、しぬかと思っちゃったわ。もうちょつと早く来てくれるとうれしかったのに」

ビアンカの言葉に目を瞠る。意外なほどあっけらかんとしているなと思ったアランだったが、よく見るとビアンカの肩が細かく震えていた。そのときの恐怖を表すように、ビアンカの表情が徐々に沈んでいく。

「あのとき、とつぜん真っ暗になったと思ったらふっと身体が軽くなって。誰かに抱えられているんだって思ったけど、全然姿が見えなくて……。気がついたらあの中にいたの。ねえ、アラン。やっぱりここ、お化けがいる……。んだよね？」

「……うん」

「……」

しばらくふたり、無言になった。

風が、冷たい。

自らの身体を抱くビアンカに、アランは手を差し伸べた。

「いこう、ふたりで。こんどは必ず、僕がビアンカを守るから」

「アラン……」

つぶやくピアンカに、アランは元気づけるように笑いかけて見せた。

21. レヌール城主の間

ビアンカを手をしっかりと握り、再び扉をくぐって城の中へ入る。

「……どうしたの？ アラン」

「……うん。何でもない」

両脇に鎮座する石像に目をやりながらアランは短く答えた。

——石像の顔の向きが戻っていた。

いくぶん早足に廊下を歩く。突き当たりにさらに階段があった。煙でも充満しているのかと思えるほど、その先は真っ暗であった。下りる。

床に足を置いたときには、すでに隣にいるビアンカの姿すら見えなくなっていた。

「……真っ暗だわ。アラン、気をつけてね」

「うん」

さらに強くお互いの手を握りしめ、アランたちは一步一步前に進んでいく。だが周囲を完全な闇に包まれていると、次第に自分がどちらの方向に歩いているのかすらわからなくなってきた。

闇はまるで粘土のようにアランたちに絡みつく。

ぎし……

きい……

意識しなくても、周囲の微かな音が耳に入ってくる。

何とか壁伝いに向かいの扉まで辿り着いたときには、ふたりともすっかり疲弊していた。

だがレヌール城の怪異はそれだけでは終わらない。

「あら」

扉を開け、光のある部屋に入ったとき、ビアンカが目をこすった。「いま、あそこに誰かがいたような」

指差す先にはさらに階段があった。どうやらこの城は各階を繋ぐ階段が至る所に設置されているらしい。だがアランが目を凝らしても、そこに人影は見えなかった。

意を決し、階段へ向かう。そこは他と違い、造りが豪華なものだった。螺旋状に上へと続いている。埃の舞う絨毯を踏みしめながら、アランたちは階段を上りきった。

長く、広い廊下が目の前に続く。

「……まるで王様のお部屋みたい。このお城の持ち主さんがいたのかな……？」

ビアンカのつぶやきを耳に、廊下を歩く。その途中、大きな扉のある部屋の前に来た。

物音が、する。

しかも床がきしむような類の音ではない——人の声だ。泣いている。

息を呑むビアンカの前で、アランは扉に手をかけた。

「ちょ、ちよっとアラン！」

制止を振り切り、部屋の中へと入る。

橙色の灯火がアランたちを包む。とても大きな室内だった。埃を被ってはいるが、調度品はどれもこれも立派な拵こしらえで、一目見ただけでもここが身分の高い人の居室だったことがわかる。

恐怖も忘れ感嘆の声を上げるビアンカを背に、アランは何気なく部屋の奥を見た。

「……っ！」

悲鳴を飲み込む。

ソファアの上に、女性がひとり静かに腰をかけていた。まっすぐにアランたちを見つめている。その顔には涙の跡があった。まるで息を吹けば散り散りに消えてしまいうるほど儚げで——

実際に、身体が透けていた。

ビアンカも気付き、アランの服の裾を握る。その手を握り、アランは女性のところへと歩み寄った。女性はこちらを見つめ続けてい

る。アランは恐怖よりも強く、「何とかしなきゃ」と思った。彼女の目があまりにも哀しそうで、つらそうだったから。

声をかけようとしたその瞬間――

ふい……と女性が顔を逸らした。

代わりに指で、どこかを指し示す。

そしてそのまま音もなく消えていった。

「あ……」

「お化けさん……だよね？　でも何だか、とってもかなしそうだったよ」

「うん。僕もそう思った。何でなんだろう。お化けて、もつと怖いものだと思っていたのに、あの人は、なにかちがう感じだった」

「それにさっき、どこかを指差していたよね」

アランとビアンカは顔を見合わせた。

そして二人同時に、同じ方向を見る。

壁の向こう――廊下の奥。女性の指は、この部屋のさらに先を示していた。

22. エリックの願い

部屋を出た二人は、さらに廊下の奥を目指した。あの女性の幽霊が指し示した先に、何かがあると思ったのだ。

「けほ、けほ」

ビアンカが咳き込む。「何だか空気が重いね」と彼女は言った。それはアランも感じていたことだった。足元と天井の両方から、淀んだ気配が漂ってくる。

突き当たりに扉があった。ゆっくりと開ける。

「……？」

最初、それが何なのかアランにはわからなかった。

目の前に広がる赤くて白くてふわふわしたものの。目を凝らしても形が曖昧で、煙のようにぼやけた何か。

やがてそれが豪華な服であると気付き、それを身に付けているのが恰幅の良い男だと気付き、さらには男が目の前に『浮遊』していることに気付いて悲鳴を上げた。

「うわあっ!？」

「きゃあっ!？」

ビアンカも同時に声を上げる。すると男は滑るように部屋の奥へと飛んでいった。

奥の扉を『すり抜ける』。

呆然と立ち尽くすアランたちは、やがて各々の武器を取った。唾を飲み込み、一歩踏み出す。あれがこの城の幽霊の親玉か——二人は無言でうなずきあった。

さつきよりもずっと慎重に扉の前に立つ。そっと押し出すように扉を開いた。途端、強い風がアランとビアンカの脇を走る。

そこはベランダになっていた。城の外壁に沿うようにゆるやかなスロープを描いて上へと続いている。

突き当たりに、さきほどの男が浮かんで待っていた。

恐る恐る、二人は男の前に立つ。武器を構え、その切っ先を向けると、男はどういうわけか感心したような声を出した。

『おお。勇気のある子どもたちじゃ。まさかここまで付いてくるとは』

「え？」

予想外の言葉にアランの手が止まる。すると男は満足そうに何度もうなずいた。

『わしはこのレヌール城の主、エリック。……といっても、ご覧の通りの有様。もう死んでからずいぶんと経つ』

「あるじ？」

「じゃあレヌール城のお化けの正体は、おじさま？」

『いや』

ビアンカの問いかけに、レヌール城主は小さく、しかしはっきりと否定した。

『少し前からこの城に親分ゴーストとやらが棲みつきはじめてな。

わしや后おき、それにこの城に眠る多くの使用人たちは奴らに縛られ、安らかに眠ることができなくなった。今もなお、下の階ではゴーストたちが好き勝手にしている。みな、ほとほと困っておったのだ』

「じゃあ、噂で聞いた『人が泣く声』って」

『我が后を含め、囚われた霊たちには女性も多い。彼女らの悲痛の叫びが君たちの住む場所まで届いたのだろう。それは申し訳ないと思っている。だが、わしらとしてはどうしようもないのだ』

沈鬱なエリックの表情にアランとビアンカは口を閉ざす。

すると突然、エリックが目前に近づいてきた。

『そこでだ君たち。噂があるにもかかわらずこの城までやってきて、なおかつこんなに奥までたどり着けた君たちの勇気と力を見込んで、ひとつ頼まれてくれないか！』

「わわっ!？」

『親分ゴースト！ こいつさえ倒すことができれば、他の子分たち

も諦めて出て行くだろう。そうすればわしらは安心して眠りに入ることができる!』

「え、えっと?」

『だいじょうぶだ! 君たちはまだ小さいが、その勇氣は本物である。わしは信じる。きつと親分ゴーストを退けることも可能だろう! 頼まれてくれないか! な!』

「あ、あの。エリックさん、ちょっと近すぎ……」
『な!』

うう……と困惑の声をあげるアランとビアンカ。しかしエリックは一向に引く気配がない。このままではエリックに身体を乗っ取られるか、さもなければ呪われてしまいそうな勢いだった。

やがて腹を決めたのか、ビアンカが拳を握った。

「おちついて、エリックおじさま。わたしたち、この城のお化けを退治しにきたの。おじさまの言うように悪いお化けがいるのなら、わたしたちがやつつけるから」

「うん」

アランもうなずく。するとエリックは大げさなほどに喜んだ。

『そうか、そうかそうか! いやありがとう! 親分ゴーストはこの城の最上階にいる。ただその部屋に行くためには一度一階まで下りなければならぬのだ。さあ、こちらへ来たまえ』

ふわふわ、とアランたちの頭上を越えてエリックが扉の前に降り立つ。

『この城の厨房にたいまつがある。ただのたいまつではないぞ。わしらの生きていた頃、儀式用に使っていた聖なるたいまつだ。それを使えば、途中の階にある不自然な闇も祓うことができるだろう』
厨房は地下にある、とエリックは付け加えた。ところが一向に動こうとしない彼に、アランは念のため尋ねる。

「あの、せめてたいまつのあるかまで一緒に来てもらうことは……?」

『わしでは闇を越えられない。なにせ縛られてしまっているから』

自信満々に言われてしまった。

肩をすくめたアランとビアンカは、気を取り直して来た道を引き返し始める。

目指すは地下の厨房、たいまつが保管されている場所だ。

23 聖なるたいまつ

自然と小走りになりながら廊下を進む。どのような形であれ、目指すべき場所がわかった分、二人の足取りは軽くなっていた。

だが、それもすぐに止まる。

「……うわぁ」

思わず漏れた声。複雑な装飾の扉を抜けた直後であった。

そこは巨大な吹き抜けの空間となっていた。二、三階分がひとつのフロアで繋がっている。アランたちがいるのは、そのうちの二階部分の渡り廊下だった。

感嘆の声、ではない。むしろ怖れ、悲痛さを滲ませた苦悶の声だった。

フロアにいたのは何十人もの人々――すべてが、半透明な身体をした幽霊だった。

おそらくエリックが言っていたこの城の使用人たちだろう。

身なりこそ綺麗な服で着飾っている。だがその表情は皆、苦しげでつらそうだった。空中では何組もの男女が踊っている。

『誰か……止めてくれ……』

『身体が、身体が勝手に。もうイヤ……』

アランたちのすぐそばを通っていた一組の男女。彼らは空中で見事なステップを踏みながら、今にも泣き出しそうな顔で呻いていた。誰も彼もが、彼らと似たような境遇にあった。

フロアの中央には大きな四角い穴が開いていて、その周囲にモンスターがたむろしていた。

「ひゃひゃひゃっ。そら、踊れ踊れっ」

「おおい、メシはまだか。いい加減腹が減ってきたぜ！」

「この城は最高だ！ 親分ばんざい！」

こちらは実に愉快そうに、聞いているだけで背筋が泡立ちそうな

金切り声を上げていた。

「アラン」

ビアンカがささやく。

「これってもしかして、親分ゴーストたちのしわざなのかな」

「うん……きつとそうだよ。あのひとたち、むりやりこんなことさせられているんだ。ゆっくり眠ることもできずに……」

「ひどい」

口元を押さえ、ビアンカがぼつりと漏らす。アランはその手を握った。急ごう、と率先して走り出す。渡り廊下を駆け抜け、扉をくぐり、階段を下りる。喧噪は遠ざかり、かわりに粘つくような薄暗闇と湿気、そして鼻をつく強烈な臭いがアランたちを襲った。

涙目になりながら我慢して通路を進む。モンスターの気配があった。かちゃかちゃ……と、食器を運ぶ音がする。アランとビアンカはうなずきあった。

——きつとここが厨房だ。

ふたりは棚の陰に隠れるように慎重に進んでいった。調理台と思しき大きな机に身を隠したとき、どん、と大きな音がした。二人の息が詰まる。

すぐそばでモンスターが談笑していた。

「お、それが今日のメインディッシュか？」

「いや。親分がとびっきりのごちそうを用意してくれるんだとき。これはそれまでの繋ぎ」

「そりゃ楽しみだぜ。へっへっへ」

どきん、どきんと心臓を高鳴らせながら、同時に漂ってくる猛烈な臭気に呻き声を必死に抑える。これは巨大な肉が完全に腐った臭いだ、ぜったい。モンスターはこんなものを食べるのかとアランは辟易した。

やがて腐った肉を置いたままモンスターはテーブルを離れていく。様子を窺うと、二つの炎がゆらゆらと揺らめいているのが見えた。巨大なろうそく型のモンスター『おばけキャンドル』だ。

彼らの目がよそへ行っているうちに、アランとビアンカは物陰を飛び出した。身を屈め、厨房の奥を目指す。そこは壁一面が物置棚になっていた。アランたちは極力物音を立てないようにたいまつを採し始めた。ときどき後ろを振り返り、モンスターたちがこちらに気付いていないことを確認する。

壺をのぞいていたビアンカに袖を引かれた。

「アラン、これ」

中から取り出したのは表面に複雑な文様が刻まれた木の棒だった。先端に青く染められた布が巻き付けられ、さらにそれを保護するように銀細工の装飾が施されていた。

「まちがない。きつとそれだよ」

「ええ。……でも聖なりたいまつをこんなところに置いておくなんて、エリックさんってやっぱり変わっているのね。まちがえて薪に使われたらどうするつもりなのかしら」

呆れた声を出すビアンカ。アランは苦笑し、それからすぐに表情を引き締めた。

来たとき以上に慎重に、アランたちは厨房を横切る。幸い、会話に夢中なモンスターたちに気付かれることなく部屋を後にすることができた。

24. 親分ゴースト現る

「じゃあいくよ、アラン」

「うん」

アランがうなずくと、ビアンカは短く呪文を唱えた。指先に小さな火の玉が出現し、たいまつ先端に移る。すぐに燃え広がり、たいまつは煌々と光を放ち始めた。見るだけで心が落ち着くような、深い青の輝きだ。

厨房を抜けたアランたちは、再びあの漆黒の階へと足を踏み入れていた。エリックのアドバイスどおり、たいまつを暗闇に掲げる。

まるで布に水が染み渡るように、内部の様子がはっきりと見えるようになった。濃く濁っていた闇がどこか苦しそうに隅へ隅へと追いやられていく。

「すごい。エリックさんの言ってたことはほんとうだったんだ」

「ほんとうね。でも……だったら最初からこれを使っていたってほしかったわ」

ベランダでのやり取りが尾を引いているのか、ビアンカはどこことなく不満そうに頬を膨らませる。二人は寄り添うようにゆっくりと歩き始めた。

遠くモンスターたちの嬌声が聞こえる。

これから彼らを討伐するのだと考えると、自然と身体が固くなった。

だが引き返そうとは思わない。大広間でモンスターに縛られた人々を見たこと、そしてアルカパで待つあの猫のことがアランたちに「ぜったいに退くものか」という勇気を与えていた。

最初にこの階に入ったときにはわからなかった階段を見つける。

勢い込んで登り始めたアランたちの足は、しかし次第に重くなった。

……何か、違う。空気が他よりも重い。

「ビアンカ、気をつけて」

「うん」

間違いない。この先に強い敵がいる。

階段を上りきると、絨毯敷きの広い廊下に出た。たいまつが壁面に施された精緻な文様を浮かび上がらせる。調度品も他の階より一段階、豪華に見えた。

行く先に大きな大きな扉が見えた。右手と左手、向かい合うようにひとつずつ。

左手の大扉は開いている。そこから、たいまつに照らされてもお淀む闇がゆらゆらと漂い出ていた。

アランとビアンカは武器を構えた。まっすぐにその扉へと向かう。大扉の先は謁見の広間だった。扉の入り口から中央奥の椅子まで赤毛氈あかもうせんが続いている。

アランがたいまつをゆっくりとかかげると――椅子に腰掛けた『そいつ』が見えた。

「ほほう。これはこれは。珍しい客だな」

粘つく声。麻布を擦る音を立てながら『そいつ』が椅子から立ち上がる。全身を包むローブはどこどころ穴が開いていて、そこから白い骨が見えた。『そいつ』は笑う。からからから……と骨同士が擦れ合う乾いた音が響いた。

「おまえが」……『親分ゴースト』！

アランとビアンカが唱和する。「そうとも」と『親分ゴースト』は首肯した。余裕たっぷりにこちらへと二歩、三歩歩いてくる。アランの頬に汗が伝った。初めて味わう緊張感だった。

「こんなガキどもが俺たちの根城に乗り込んでくるとはなあ。結構、結構。なかなか旨そうじゃないか。けけけ」

「なんですって」

ビアンカが気色ばむ。すると『親分ゴースト』がにやりと笑った。「ちようど俺も子分たちも退屈していたところだ。せいぜい――」もったいつけたような間。直後、アランは異変に気付き、声を上

げようとした。だが。

「――愉しませてもらおうかつ！」

『親分ゴースト』が言い放った刹那。

アランとビアンカの足元が突如として『消えた』。

「……えっ」

「き、きゃあああああっ！」

床に開いた大きな穴にアランとビアンカは為す術もなく吸い込まれる。後にはただ、『親分ゴースト』の嘲笑だけが響いていた。

25. 背中合わせの攻撃呪文

落ちる。

落ちる。

落ちる——！

長い悲鳴の尾を引きながら、アランとビアンカはひたすら落ち続ける。

視界の端を、もの凄い勢いで白い何かが過ぎ去っていった。松明——いや、違う。あのホールで目にした、この城の使用人たちだ。彼らの目の前を、アランたちは落下していったのだ。

やがて床に開けられた大きな穴へと入り込み、さらに下へ。衝撃は突然だった。べっしやあつ、という湿っぽい音とともに落下が止まる。ひどく柔らかく、それでいて水っぽい何かに埋もれる。途端、強烈な臭いがアランたちを襲った。

「けけけ。来たぜ来たぜ、今日のメインディッシュが！」
くらくらする頭でその台詞を聞く。顔を上げると、あの『おぼけキャンドル』たちが頭の炎を愉快げに揺らしながら哄笑を上げていた。

じゃあ、ここは台所……？ でもメインディッシュって……。

「上の連中がお待ちだ。そーれ、上げろ上げろ！」

「きやあっ!？」

今度は台座ごと急激に持ち上げられた。隣でビアンカが声を上げる。

アランたちが落下したのは料理が盛られた大皿の上だった。元 materials 判別のつかない不定形の何かにアランたちは半身が埋まっている状態である。臭いも感触も最悪だったが、おかげで意識を失うこともなく大きな怪我もない。

だが安堵している暇は彼らにはなかった。

薄暗い厨房から煌々と明かりの灯るホールへ。アランたちは再び可哀想な幽霊たちが踊る場所へと引き上げられた。そして。

「ひゃっほうっ！ メシだメシだ！」

「おいおい、待ちくたびれたぜ！ 早く食わせろお」

「旨そうなガキどもだ。こりゃあたまらんぜ！」

アランたちを待っていたのは、何体もの『おばけキャンドル』の群れ——完全に囲まれていた。ロウでできた白いナイフを振りかざし、モンスターがじりじりと距離を詰めてくる。臭いで顔を青くしていたビアンカが、短く息を呑んだ。

アランは彼女の手を一度、強く握りしめた。

「だいじょうぶ」

「あ……」

「ぼくらはやらなきゃいけないことがあるんだ。だから、戦うんだ。ビアンカ」

力強いアランの言葉にビアンカは我に返る。「ええ」と彼女はうなずいた。

ふたりは大皿の上にすくと立った。「おおっ!?」とおばけキャンドルたちがざわめく。アランは銅の剣を、ビアンカはいばらのムチを手にとった。

「ぼくたちは負けない。かくごしろ、モンスター！」

「うるさいガキだ。やっちなえ！」

いっせいに襲いかかってきた。アランは一番手前のおばけキャンドルに斬りかかる。

少年の細腕ながらこれまで何度もモンスターを倒してきたアランの力は、おばけキャンドルの身体を真っ二つに切り裂いた。

「ぎゃあああっ」

「はああああっ」

返す刀で次のモンスターを屠る。アランの脳裏には今、はっきりと父パパスの後ろ姿が映っていた。

パパスならどうする？ どう動く？

26. レヌール城決戦の舞台

「おお……」

風が止み、炎が消え去ったホールで、静かなどよめきが走った。

「何ということだ」

「あんな小さな子どもたちが……」

「信じられん。これは夢だろうか」

口々に囁きあうのは、親分ゴーストの呪いによってこのホールに縛り付けられている使用人たちだった。彼らの身体はまだ自由になっていないが、それでも幾分束縛が緩んだのかアランたちを遠巻きに眺めている。

驚き半分、不安半分の彼らに、アランは静かに語りかけた。

「もうだいじょうぶ。後は僕たちがなんとかするから。ぜったい、

『親分ゴースト』をたおしてみせるから」

「そうよ。そしたらみんな自由になれる！ 私たちにまかせて！」

ビアンカも言葉を重ねる。使用人たちはお互いに顔を見合わせていた。

歓声は上がらない。静かなどよめきが広がるばかりである。アランとビアンカは少しだけ不安そうに互いの顔を見た。

「どうしたんだろう。みんなあんまりうれしくなさそう」

「きっと、親分ゴーストが何かをするんじゃないかって、不安なんだと思うわ。でも」

ビアンカは頭上を見上げる。

「このままじゃいけないよね。エリックさんたちのためにも、ここの人たちのためにも……そして、あの猫ちゃんのためにも」

「うん」

アランはうなずく。武器を構えたまま、二人は再び上の階に向かって歩き出した。

すると――

「……え」「……あ」

呆然とつぶやくアランたちの前で、使用人たちがくるくると回り始めた。部屋の端で腰掛けていた者たちも近づいてきて、アランたちの頭上をさまよう。彼らは階上へ向かうホールの出入り口に列を作った。まるでアランたちを見送るように。

彼らの無言の励ましを背中に受け、アランとビアンカは力強く一歩を踏み出す。ぜったいに負けるものかと決意を新たにして――

レヌール城の闇はもう、怖くはない。

『親分ゴースト』が居座る最上階まで一気に駆け上がった二人は、巨大な廊下を横切るモンスターの陰をとらえた。

「さて、『親分ゴースト』！」

アランが叫ぶ。『親分ゴースト』はちらりとアランたちを見ると、そのまま扉の向こう側に消えた。アランたちも走る。その扉は、アランたちが階下へと落とされた謁見の間から廊下を挟んでちょうど反対側にあった。

汗ばむ手をふたりでしっかりと握り合ってから、アランとビアンカは勢いよく扉を開けた。

途端に吹き付ける冷たい風。巨大なベランダに出た。

どこまでも広がる夜空の闇と星光を背に、『親分ゴースト』が仁王立ちしていた。ぼろぼろのマントが風にあおられはためく。

「ぎぎぎ……まさかこんなガキどもがここまでやるとは」

「さあ、あとはあなただけよ。覚悟しなさい！」

ビアンカが鞭を振りかざし啖呵を切る。『親分ゴースト』は背中をそらせて笑った。

「かかっ！ 威勢のいいこったなあ。だが、手下どもを何匹倒したところでこの俺には敵うまい！」

「そんなのやってみなくちゃわからない！」

アランが剣を構えた。

「みんなのために、ここでおまえをたおす！」

「かあつかかっ！ やってみやがれクソガキがあっ！」

ついに『親分ゴースト』がアランたちに牙を向き、襲い掛かってきた。

27. 親分ゴースト戦 前編

『親分ゴースト』の手が伸びる。骨だけとなった指先が異常に伸び、鋭く尖った先端がアランを襲う。受け止めた剣から重い衝撃が伝わり、アランは体勢を崩した。

「かーっ！」

尻餅をついたところへ『親分ゴースト』が覆い被さってくる。剣を振り上げようとするアランだが、焦るあまり先端が石床を削るだけだった。

「アランッ！」

脇から伸びるムチ。『親分ゴースト』の手首に巻き付いて動きを止める。

「さあ、今のうちだよ！」

「じゃらくさいわ、小娘が！」

ビアンカに向き直った『親分ゴースト』は空いた手でムチを掴んだ。そのまま強引に振り回す。ビアンカの軽い身体は簡単に宙に浮き、そのままアランに激突した。ふたりして空咳を繰り返す。

むきになって立ち上がるビアンカに、アランは手を向けた。防御力上昇魔法『スカラ』をかける。魔法の防御膜がビアンカの身体を柔らかに包み込んだ。

「むりにつつこんじゃだめだ。ビアンカはそんなに打たれ強くないんだから」

「ふっ、くやしいなっ」

「帰れなくなったら意味がないよ。ふたりで帰るんだから」

そう言い、アランも自身にスカラをかける。そうして一歩踏み込んだとき。

「――、ルカニ！」

「えっ？」

どっ、と重くなる身体。反対に着ている服がひどく頼りなく感じられる。

防御力低下呪文『ルカニ』――

アラン、という悲鳴と同時に『親分ゴースト』の拳が炸裂した。『おおきづち』から痛恨の一撃を受けたときとは比べものにならないほどの衝撃。

気がつくのと、アランの身体はテラスの端の方まで吹き飛ばされていた。ビアンカが駆け寄り、抱き起こす。目が回って上手く立ち上がることができない。

か、回復を……しなきゃ。

そう思うが脳震盪を起こした身体では呪文の詠唱もままならない。

『親分ゴースト』はゆっくりと近づいてくる。

「かか、かかかかっ」

耳障りな笑い声が二人のところに届く。

アランは動けない。ビアンカもまたアランを抱えたまま動かない。

『親分ゴースト』の嘲笑が止んだ。とどめを刺す気だ。

そのとき、ビアンカが決然と顔を上げた。まっすぐにその掌を敵に向ける。一瞬『親分ゴースト』がひるみ、身構える。

ビアンカは短く詠唱を終わらせた。

「マヌーサ！」

『おぼけキャンドル』たちを惑わせた、幻惑の霧。絶対の勝利に油断していた『親分ゴースト』はその罠に完全にかかった。

「おおっ!? これは……くそう、小娘え！」

暴れる。その隙にビアンカはアランを抱きかかえて移動した。

『親分ゴースト』に位置がばれないよう、小声で語りかける。

「アラン、葉草だよ。今のうちにほら、飲んで。きずぐちにも塗っておくね」

「あ、ありが……と」

ようやく視界が戻ってくる。アランの目の前にあったビアンカの顔は汗ばみ、これまで見たことがないほど真剣な表情だった。

強いね、と小さなつぶやきが聞こえる。

アランはうなずいた。だが、諦めない。ビアンカの声にも恐れの色はない。

ここで諦めたら何のためにエリックは、使用人の霊たちは、そしてあの哀しそうな女の人、自分たちに願いを託してくれたのかわからなくなる。

絶対に負けないと決意したのか、わからなくなる。

「――、スカラ」

残り少ない精神力をかき集め、アランは再び自らの防御力を引き上げた。これで『親分ゴースト』のルカニの効果がかき消される。

今だ目標を求めて暴れ回る『親分ゴースト』の背に、アランとビアンカは決然と立ち向かった。

だが――

「そこかあっ！」

音を聞きつけ、『親分ゴースト』が振った腕。そこから炎が巻き起こった。

まずい、とアランは思った。これは呪文――複数の目標をその火に巻き込む『ギラ』。

目の前に壁のように広がっていく炎。

そのとき、視界の端で金色のお下げが揺れた。

ビアンカがギラの炎の前に敢然と立ち塞がった。

28. 親分ゴースト戦 後編

ビアンカが大きく息を吸い込む。まるで自分を鼓舞するかのよう
に、力強く一步を踏み出した。

腕を、振る。

「いっけええっ、ギラッ！」

巻き上がる炎。

ふたつの火の手が正面からぶつかり合った。

空気がきしむような音が響く。

額だけでなく、腕からも汗を浮かべながらビアンカは『親分ゴースト』の呪文を真正面から押し返そうとしていた。

「かーっ！」

相手もその意図に気づいたのだろう。馬鹿にするなど言わんばかりに咆吼を上げる。

マヌーサの霧が、逆巻く炎に煽られて消えていく。ビアンカの表情が徐々に苦しげなものになっていく。

そして――

「きゃあああああっ!？」

どんっ、と爆発音が響き、黒煙が上がった。

衝撃でベランダはびりびりと揺れ、小柄なビアンカはそのまま地面に叩き付けられた。だが『親分ゴースト』も無事ではない。爆風に視界を奪われたのか、骨だけの目元を押さえて苦悶の声を上げている。

「く、そっ。くそおっ。小娘！ よくも！」

鋭い爪を伸ばしてビアンカににじりよる。その体全体から醜く濁った煙が滲み出ている。それは夜の闇の中でもなお暗く、視界を奪うほどだ。

ふと、『親分ゴースト』の歩みが止まる。

何かに気づいて、左右を見る。

「……へへっ」

膝を突きながら、ビアンカが不敵に笑った。

どこからか空気を切るような音が——近付いてくる。

「さんねんでした。わたしは、ひとりじゃないんだから」

その言葉の意味を理解できず、完全に立ち止まる『親分ゴースト』

。

空気を切る音はどんどん近付いてきて。

どこから——そう、上から。

がばっ、と顔を上げた『親分ゴースト』のすぐ目の前に、アランが振り下ろした剣の切っ先があった。

「——これで」

驚愕する敵にアランは叫ぶ。

「おわりだあっ！」

「う……うおおおおおっ!？」

全体重と落下の勢い、そして渾身の力を込めた一撃が『親分ゴースト』を脳天から貫いた。硬い骨を砕く感触にもかまわず、アランは自らの剣に力と思いの全てを込める。

やがてその切っ先は骨よりもお硬いものにぶちあたった。キンッ、と甲高い音を立て、同時に落下が止まる。

上から、下まで——『親分ゴースト』の体を切り裂いたのだ。

ぶわあっ。『親分ゴースト』から濁った煙が吹き飛ぶ。

衝撃によるめきながら、アランは急いで離れる。ビアンカとふたり寄り添うように、固唾を吞んで『親分ゴースト』の様子を窺う。

しばらく敵は止まったままだった。

「ぎ……」

「!？」

アランの顔にさっと緊張の色が走る。ぎこちないながらも、『親分ゴースト』がこちらを振り向いたのだ。

今にも崩れ落ちそうな様子で、心なしか体の下半分も透けている

ように見える。だが、『親分ゴースト』はまだそこにいた。

いちはやく、ビアンカが武器を構え直した。「なんどでも……！」とつぶやく彼女の瞳には強い意志が宿っている。

対するアランは『親分ゴースト』の様子を見て取ると、武器を構えることなく数歩、近付いた。目前で、改めて剣を構える。

そのときだ。

「……ま、まいった……」

どこか情けない声で『親分ゴースト』はつぶやいた。満足に動けないのだろう。不自然な体勢のまま懇願してくる。

「これ以上やられたら、本当に消えちまう……。もうこの城にはちよっかい出さねえ、子分たちもみんな出て行かせる……だ、だから許してくれ。この通りだ」

「アラン！ ダメよ、そんなやつといいなりになっちゃ！」

ビアンカが憤慨した声を上げる。

アランはじつと『親分ゴースト』を見る。アランを見返すモンスターは、心なしかさきほどよりも小さく見えた。

長いこと見つめ続け、そして『親分ゴースト』がかたときも目ははなさいことを見て取ったアランは、ゆっくりと剣を下ろした。

「いいよ。逃がしてあげる」

「あ、アラン!？」

「でも、もしかたみんなに迷惑をかけたら、そのときはゆるさないからね。ぜったい」

驚きの声を上げるビアンカを背に、アランはゆっくりと諭すように『親分ゴースト』へ告げた。するとモンスターは脱力したように長い息を吐いた。

それから——どういうわけか少し親しげに——アランに言った。

「へへっ……ありがとよ。あんた、いい大人になるぜ……」

その言葉とともに、『親分ゴースト』の姿がすうっと薄れていった。アランはその様子を見届けた。

同時に城全体から禍々しい気配も消えていく。

——いつの間にか、夜明けが近付いていた。

29. 溢れる笑顔と金色の宝石

ふと、夜明けの光とは別の輝きがアランたちに近づいてきた。

「……エリックさん？」

驚きの声を上げるアランに向かって、エリックは手を差し伸べた。彼の隣には、あの大きな部屋で見た女性の幽霊が浮かんでいる。彼女はエリック同様、ビアンカに向けて手を伸ばす。

アランたちは彼らの手を握る。朝霧を掴んだような感触とともに、二人の体はふわりと浮かび上がった。そのまま空中を走り、屋上へと運ばれる。

そこは、以前ビアンカが閉じ込められていた墓の前であった。

エリックが穏やかに微笑みかける。

『ありがとう。君たちのおかげでモンスターたちは去った。これでこの城も平穏を取り戻すだろう』

「そんな……」

アランははにかんだ。一方のビアンカは「あれだけ苦労したのだから、みんなで喜んでくれてもいいのに」となぜか不満気だ。その様子を見て、エリックの隣にいた女性がくすりと笑った。初めて見る笑顔だった。

『……ようやく、この城に朝が戻ってきます。小さな勇者さんたち、本当にありがとう。この城にいる人たちを代表して、私たちがお礼を言います』

「もう、だいじょうぶなんですか？」

『ええ。あのときはごめんなさい。ろくにお話もできなくて……。モンスターの束縛が強すぎて、姿を現すのが精一杯だったのです。でも、これでやっと自由になれる……』

「そうだったんだ……。あれ？ でもエリックさんって、ずいぶん自由に動き回っていたような」

ビアンカが首を傾げると、女性は笑った。今度は困ったような笑顔だった。

『このひとは、昔から奔放なところがあって……モンスターたちも、このひとの強引さにはいささか手を焼いていたみたい』

『こら。何を言うか。それでは私がモンスターより厄介な存在に聞こえるではないか』

ぶすつと不満を垂れるエリック。アランとビアンカは顔を見合わせた後、声に出して笑った。

取り戻せたのだ——そう、心から思えた。

朝日が空に差し込む。レヌール城の屋上から見えるそれは、思わず言葉を失うほど綺麗だった。

『さて……そろそろ行くか。おまえ』

『はい。あなた』

「え、もう行っちゃうの？」

ビアンカが問う。エリックたちは首を縦に振った。

『私たちは、もう死んで魂だけの存在になっている。モンスターたちに縛られたせいで長くこの地に留まらざるを得なかったが、本来は神のもとへと召されなければならない』

『ここでお別れね』

女性が再び手を差し伸べてくる。アランとビアンカは、その手をしっかりと握りしめた。手応えはないのに、なぜか手の平がじんわりと温かくなる気がした。

やがてエリックと女性は、陽光が夜の闇を拭う様に合わせるように、ゆっくりと空へと昇っていった。——音もなく輪郭が消えるまで、アランたちはじっとその行き先を眺めていた。

「……行っちゃったね」

「うん」

「いろいろあって、いたい思いもしちゃったけど……来て、よかったね」

「うん」

ビアンカがうーん……と背伸びをした。

「さて、と。早く戻らなきゃ。あんまり遅くなっちゃうとお母さんに怒られちゃうわ。あのネコちゃんのことでも心配だし。……あら？」

ふと、ビアンカが墓標の根元を見た。アランも視線の先を追う。

そこには、朝日の反射で輝く宝石があった。金色のそれは、見つめるだけで吸い込まれてしまいそうな不思議な力を感じた。

ビアンカが宝石を手取る。

「綺麗な石……きつとエリックさんたちのお礼だわ。もらっていきましょ、アラン」

はい、と手にした宝石をアランに渡す。アランは首を傾げた。

「宝石だね？ それはビアンカがもっていたほうがよくないかな」

「いいの。これはエリックさんのお礼だけど、私のお礼でもあるもん」

「ビアンカの？ どうして？」

「もう、あんがいにくいね、アランは。そんなことじゃ、大きくなってもおよめさんが来ないわよ？」

呆れたように言うビアンカを前にしても、アランには何のことかわからない。そうこうしている内に、ビアンカは半ば無理矢理アランの手に宝石を握らせてしまった。

「とにかく！ これはアランが持ってた。私たちが今夜、すごい冒険をしたんだって証に。私たちが力を合わせれば、こんなすごいことができるんだぞっていうこと、アランにはずっと覚えていてほしいから」

「……うん。わかった」

「よろしい」

にぱっ、とビアンカは笑った。アランもつられて笑った。

それから二人は歩き出す。

「じゃあ、かえろう」

「ええ。かえりましょう。アルカパに！」

30. ビアンカとの別れ

翌日――

小さな子どもたちがレヌール城のモンスターを退治した、という噂は瞬く間に町中に広がり、アランとビアンカはちょっとした有名人間になった。もちろん、黙って深夜に抜け出したことについてはビアンカの母親や、何とか風邪から回復したパパスからこっぴどく叱られた。それでも、アランとビアンカはまったく後悔していなかった。

そして――

「さあ、約束だわよ。あの猫ちゃんを自由にしてあげて」

町の広場で、例の二人組を前にしながらビアンカは胸を張った。堂々とした彼女の態度に、男の子たちは顔を見合わせる。

「まさか本当にたいじしてくるなんて」

「そうだよなあ。……うん、わかった。この猫はあんたたちにあげるよ。約束だもんな」

そう言って男の子のひとりが杭につないでいた紐を解き放つ。子猫は男の子に噛みつくでもなく、とことこ大人しくアランたちのところへやってきた。

ビアンカが子猫の頭を撫でる。

「よかったね。もういじめられなくてすむよ」

「なあーご」

「あはは。返事したよ、この子。かわいいなあ」

「うん」

アランは生返事をしながら、じっと子猫を見つめていた。目が合うと、優しく微笑みかける。もうだいじょうぶ、そんな思いを込め

た。

子猫がアランのもとにやってくる。アランもまた、子猫の頭をゆっくりと撫でた。今度は鳴き声も上げず、子猫は大人しくされるがままになっていた。手を止め、アランが踵を返して歩き出すと、子猫は当然のようにその後ろについてくる。

「あ！」

突然、ビアンカが声を上げた。

「そうだわ、アラン。この子に名前をつけてあげなくちゃ」

「名前、かあ」

「そうね……ゲレゲレっていうのはどう？」

アランは子猫を見る。きょとんと首を傾げられた。

「あんまり気に入ってないみたい」

「そう？　じゃあ、ねえ。アンドレは？　これならカッコいいでしょ」

「でも、この子は」

「なあに、これでもダメ？　うーん、それじゃあかわいいやつで

……チロル！」

「チロル」

アランは子猫を見る。大人しく座ってこちらを見ていた子猫は「なあご」と鳴いた。アランはビアンカに向き直る。

「うん。いいんじゃないかな」

「よし、決定！　ネコちゃん、これからあなたの名前はチロルよ。よろしくね！」

「ごろごろ……」

チロルがビアンカの手をなめる。「あはは、くすぐったいってば」と笑うビアンカをアランは微笑ましげに見つめていた。

空を見る。太陽は頭上高く上がっていた。そろそろパパスと約束していた時間だ。

「行こう、ビアンカ。チロル。そろそろ戻らなきゃ。お父さんがまってる」

「あ、そうね」

笑顔で応じたビアンカは、しかしすぐにしゅんとうつむいた。

「でも、もうお別れなんだね。少し、寂しいな」

「だいじょうぶ。となりまちなんだから、すぐに会えるよ」

「うん。そうだね」

「もしよかったら、チロルはビアンカがあずかって――」

と、そこまでアランが口にしたとき、チロルがビアンカの脇をすりりと抜け出した。アランの足元で座り込み、なあご、と鳴く。まるで抗議しているようだった。

ビアンカが腰に手を当て苦笑いする。

「ダメよ。チロルちゃんはアランと一緒に居たいって言ってるんだから」

「そっか。ごめんね、チロル」

「なあご……ぐるぐる」

「ふふ。でも私もチロルちゃんには忘れてほしくないから……これをあげるね」

ビアンカは自らのお下げを結っていた二本のリボンを外すと、一本をチロルの首に優しく結びつけた。

もう一本をアランへと手渡す。

「これ、私のお気に入りなの。大切に持っていて。チロルちゃんとアラン、それから私。みんなずっと、ともだちなんだって証だよ」

「うん。わかった。大切にするよ、ビアンカ」

アランはビアンカのリボンを両手で握りしめた。なくさないように、懐にしまう。

「さ、行きましょう。お母さんたちにこれ以上怒られちゃったままならないもの」

率先して歩き出すビアンカ。すれ違いざま、涙の欠片が宙を舞ったことをアランは見逃さなかった。

その後、ダンカンや町の人たちとの挨拶をすませたパパス、アラン、チロルは、その日のうちにアルカパを後にした。宿が見えなく

なるまでずっとビアンカは手を振り続け、アランもそれに応えていた。

このときのアランは知る由もなかった。

気の強い、しかし誰よりも優しいこの幼なじみと再会するまでに、長い長い時間が必要になることなど――

31. パパスが見た素質

「しかし、今回のことは父も驚いたぞ」

パパスからそんな言葉が漏れたのは、サンタローズへの帰路をし
ばらく歩いた頃だった。

「まさか私が床に伏せている間に、たったふたりでモンスターたち
を退治してしまうとは。しかも、話ではそのボスはかなりの強敵
だったという」

「でもお父さん、『親分ゴースト』は僕ひとりじゃ勝てなかったよ。
ビアンカや、城のひとたちのおうえんがあったから、勝てたんだ」
アランはまっすぐにパパスの目を見ながら言う。それは紛れもな
い本心で、同時に隠すべきことではないとアランは直感的に理解し
ていた。

パパスは一瞬、驚いたように目を丸くした。ふっ、と優しく微笑
む。

「そうか」

「うん」

パパスのすぐ後ろを小走りについてくるアラン。その姿は、アル
カパに到着したときよりも少しだけ大きくなっていた。

「……ところでアラン。その子猫のことだが」

と、パパスが言いかけたそのとき。

草むらをかき分けて、突如として巨大なイタチのモンスターが現
れた。三匹。威嚇するように荒い鼻息を吐いていた。今にも襲いか
かってきそうな気配だ。

唸るような金属音を立て、パパスは長剣を抜き放った。前へ一歩
踏み出し、背中の息子へ声を掛ける。

「アラン、下がっている」

「ううん、お父さん。僕も戦う」

言うなり、アランは銅の剣を構えた。自分から打って出る真似はしない。父の目の届くところで迎え撃つ姿勢を取る。「ふむ」とパスは感心したように漏らした。

モンスターが一斉に襲いかかってくる。

数は多くとも、パスの敵ではない。あっという間に一匹、斬り伏せてしまう。仲間の亡骸を踏み越えアランへと突進してきた一匹も、アラン自身の剣で退けられた。

モンスターは懲りずに波状攻撃をしかけてきた。先の二匹をさらに踏み越え、最後の一体がアランへと牙を剥く。

少しでも反応が遅れた。躲せない。迎撃もできない。アランは咄嗟に防御の姿勢を取った。

そのとき。

「ぐるるるうっ！」

「キーン！」

唸り声と悲鳴が重なった。

何と、それまでアランの足元に寄り添っていたチロルが自ら前に出て、モンスターに攻撃を加えたのだ。予想外の反撃に油断したのか、首筋に爪の傷を受けたモンスターはあえなく後退する。

その隙を見逃すパスではない。一息で間合いを詰めると、悲鳴を上げる暇も与えず一刀両断にしてしまった。

「ふう……大丈夫か、アラン」

「うん。僕はへいき。でもチロル、すごいじゃないか」

再び足元に寄ってきたチロルを抱き上げ、アランは驚きの声を上げる。チロルは目を細めながら「なおん」と鳴いた。まるで胸を張って自慢するように。

思案げに顎に手を当てていたパスは、アランにたずねる。

「気になっていたのだが、その猫はアルカパの子どもが拾ってきたのだったな」

「そうだよ。でもいじめられていたから、何とかしなきゃって思ったんだ」

「だがアラン、その子猫はもしかしたら――」

言いかけ、パパスは口をつぐんだ。

「なに？ お父さん。チロルがどうかしたの？」

「いや。子猫にしては勇気と力があるなど感心していたのだ。ただ、まあ……チロルという名前がいかに何と言うか……ずいぶんと可愛らしい名前をつけたものだ、思ってたな」

「え？ でもお父さん、チロルは女の子だよ」

「……………なぬ？」

ねーチロル、とアランが語りかける横で、パパスは啞然としていた。彼はまじまじとチロルを見るが、可愛い子猫という以外、雄なのか雌なのかさっぱり区別がつかなかった。

「アランよ。お前はいつのまに子猫の性別を見分けられるようになったのだ」

「うーん……？ なんとなく、かなあ。ほら、目のくりつとしたところとか、ふんいきとか。女の子なのは間違いないよ、お父さん」

「なんと……まあ……」

しばし呆然としていたパパスだったが、ふいに遠い目をした。

「これもまた妻から受け継がれし素質、なのかも知れぬ」

「お父さん？」

何でもない、とパパスは言った。

「さあ、先を急ぐぞ。不測の事態で皆には心配をかけているからな。早く戻らねば」

「そうだね。サンチョにチロルのこともしょうかいしなきゃ」

アランは笑いながら言った。そうだそうだと言わんばかりに、胸に抱かれたチロルも「なあるう」と鳴いた。

32. 不思議な落とし物

サンタローズに到着するや、入り口の番をしていた男が駆け寄ってきた。

「おお、パパスさん！ お帰りなさい。なかなか戻れないので心配しましたよ。風邪を引かれたとか。大変でしたね」

「いや、すまない。体だけは頑丈だと思っていたのだが、私も歳なのかな」

「何をおっしゃいますか。疲れが溜まっていたのですよ。ゆっくり休めという神様の思し召しでしょう」

「本当に情けない。皆には心配をかけた」

そう言ってパパスは頭を下げる。いやいや、と男は手を振った。

「坊主もおかえり」という言葉に「うん」とアランは答えた。

「そういえば、先程から気になっていたのだが……その手の物は？」

パパスが首を傾げる。男の手には侵入者撃退用の槍の他に、なぜか小さな鍋が握られていた。男は鍋をかかげ、苦笑する。

「ああ、これですか？ ついさっき、そこで拾ったものでして。どうやらすぐその老夫婦のものらしく、これから届けようと思っていたのですよ」

「はて。持ち歩く小物ならまだしも、鍋が落ちていたと？」

「最近多いんですよ。ちょうどパパスさんたちがサンタローズを出られた頃からかな？ あちこちの家で鍋やらやかんやら食器やら、およそ落とし物にはなりそうにないものが次々となくなっています。そのどれもが、いつの間にか外に転がっているのですよ。そうですね、ちょうど」

男は宿屋の方向を指さした。

「宿屋のグレイスさんの周辺にぼろぼろと。最初は子どもの遊びだと思っていたのですが、村の子どもたちは皆本当に知らないようで

もちろん、グレイスさんには何の心当たりもないそうです。むしろ、彼自身が一番被害に遭われていることがわかっています」

「ふうむ……」

「まあ、村の誰かに危害が加わったり、本当に生活に困ったりする事態にはなっていないので、皆困惑しているところですよ」

「わかった。少し調べてみよう。大事なとは思いますが、万が一ということもあり得る。それから念のため、洞窟の見張りを強化するよう頼んでみてくれ。もしかしたら、いたずらなモンスターが洞窟から出てきているのかもしれないからね」

「わかりました。お願いします」

うむ、とうなずく。パパス。彼等の会話の間、アランは後ろで大人しくしていた。チロルの毛並みをゆっくりと撫でながらつぶやく。

「ふしぎなことが起きているんだね。でも、いくら危なくなっても、みんな困ってるよね」

「なああ〜？」

チロルが首を傾げる。アランは微笑んで、それから表情を引き締めた。

もし誰かのいたずらなら、大人よりも僕の方が見つけやすいかもしれない。お父さんひとりで探すより、いたずらした人がはやく見付かるかも。そうしたら、そんなことしちゃダメだよって教えてあげないと。

ぐっ、と拳を握る。その使命感は、ひとえにレヌール城攻略で身につけた自信があればこそだった。

自宅の前では例によってサンチヨが待っていた。またもや泣き顔である。パパスは彼を宥め、事情を話すとそのまま村の教会へ歩いて行った。村に帰った報告とあわせ、情報収集をするらしい。

「ねえサンチヨ。僕もお父さんの手伝いをしに行っている？」

アランが言うと、サンチヨは少し驚いたように目を丸くした。

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。ここは旦那様に任せておきましょう」

「でも、村の人は困っているんでしょ？ 僕だって何かしたい」

「坊ちゃん……」

ふう、とサンチョがため息をつく。呆れた、というよりも肩の力を抜いた、温かな表情を浮かべる。

「そこまでおっしゃるのなら、このサンチョのお願いを聞いてはくれませんか？」

「サンチョのお願い？ サンチョも困ってるの？」

「ええ。旦那様や坊ちゃんがお帰りになられると聞いて、温かい食事でもと思って支度をしていたのですが、つい先程まで使っていた『さじ』がなくなっているのです。たくさんシチューを作っていたのですが」

「え？ シチュー？」

アランの食いつきにサンチョは笑った。

「予備はありますが、あのさじは長い間使っていた愛着あるものであれば探して欲しいのです」

「わかった。さじ、だね？」

「はい。見付かり次第、ご飯にしましょう。ですからあまり遅くならないように」

「うん。すぐにもどるよ。いこ、チロル！」

「なおん！」

くんくん、と匂いを嗅いでいたチロルに声をかけ、アランは勢い良く走り出した。

33. 妖精族のベラ

抜けるような青空。空気は澄み切っていて、どこまでも高く昇っていく。けれどその分、地上に吹き下ろす風はとても冷たかった。遊び盛りのアランであっても、ずっと外にいては体の芯から冷えて切ってしまう。サンチョの捜し物を求めて村の中を歩き回ったアランだが、なかなか芳しい成果が得られず、チロルを胸に抱いて途方に暮れていた。

「はあ……」

自然、ため息が出る。そんなアランをチロルは心配そうに見つめていた。

ふと、顔を上げる。アランが休憩していたのは村の入り口にある宿屋の前だった。寒さが応えていたせいもあって、アランの足は自然と建物の中に向かった。

「いらっしやい。……おや、坊やじゃないか。どうしたんだい」

宿屋の主人が笑顔を向けてくる。だが、その顔には疲れが見えていた。アランは申し訳ない気持ちになりながら言う。

「うん。サンチョが使っていた『さじ』がなくなっちゃって、僕、探していたんだ。でもずっと外に出てたら寒くなっちゃって」

「そりゃいけない。待ってな、すぐに温かい飲み物用意してやるから」

主人がカウンターの奥に消える。チロルを床に放したアランは、どことなくほっとした気持ちで椅子に座った。

「そうだよね。あんなに優しいおじさんが、みんなのものをぬすんだり隠したりしないよね」

でも、だったら一体誰が、こんなことを――

足元でじゃれてくるチロルの背を撫でながら待つことしばし、宿屋の主人は頭をかきながら戻ってきた。その手には湯気の立つカツ

プが握られている。

「すまないな、坊や。本当はその猫にも飲み物を持ってこようと思ったんだが、今度は平皿がなくなってたんだ」

「ううん。いいの。ありがとう、おじさん。……ほら、チロル。半分こしよう」

温かなミルクを一口二口飲んでから、カップを差し出してチロルに分け与えた。その間、宿屋の主人は「おっかしいな……」としきりに呟きながら辺りを探していた。

「坊や。私は少し地下に降りてくるから、そこでゆっくりしてなさい」

「僕も行く」

アランが言うと主人は怪訝そうな顔をしたが、特に止めることはなかった。

主人の後をついてアランとチロルは店の地下に降りる。途端、お酒の匂いが漂ってきてアランは少し眉をしかめた。チロルが「ぷしゅん」とくしゃみをする。

「ここは夜、酒場として開いているんだ。酒の匂いがきつければ、上がっていいんだぞ」

主人の言葉にアランは首を振る。そして彼に続いて辺りを探そうとしたとき――

視界の隅に、人影を見た。

大人にしてはやや小柄で、カウンターの上でこちらに背を向けてしゃがみ込み、何やらごそごそとしている。あからさまに怪しいその姿に、アランは軽く身構えた。チロルも小さなひげをぴんと立て、人影の方向を向いていた。

「ねえ、おじさん。あそこに誰かいるよ」

「なに？」

振り返る宿屋の主人。彼はカウンターに視線をやってから、ふい、と目を逸らした。

「何もないじゃないか、坊や。こんなときにからかつてはいけな

よ」

「え！？　でも、たしかにあそこに」

「あー、ダメだ。やっぱり見付からない。坊や、ここにはやっぱりないよ。冷えるから、早く上に上がるんだ」

そう言って、宿屋の主人はさっさと一階に戻ってしまっていた。

アランは呆然とその様子を見送り、そしてもう一度、今度は目を凝らしてカウンターを見つめた。人影は相変わらずこちらに背を向けている。間違いなく、そこにいる。だけどよくよく見れば、その体の向こう側は少しだけ透けていた。

まさか、モンスター……？

一瞬、アランは考える。だがその人影からは『親分ゴースト』のような邪悪な気配は伝わってこなかった。チロルを見る。モンスターには敏感なこの相棒も、カウンターの人影をじっと見つめるだけで、警戒している様子には見えなかった。

アランは意を決し、ゆっくりと人影に近づく。

人影は、カウンターの奥にあるいくつもの酒瓶を前に何かを考え込んでいるようだった。

「ねえ」

「きゃっ！？」

ぴょん、と飛び上がる人影。勢い良く振り向いたその顔に、アランは「あ……」と声を漏らした。

お、女の子……？

「……」

「……」

お互い、無言のまま見つめ合う。今日の空のように深い青をした髪が印象的な少女だった。年齢はアランやビアンカよりももう一回り上に見えた。

少女は辺りをきょろきょろと見回すと、自分自身を指さす。

『もしかしてあなた……私のことが見えてる？』

「う、うん」

うなづくアラン。しばらく呆然と固まっていた少女は、やおら両手を握りしめて喜びを爆発させた。

『ああ、よかった！　ようやく私の姿が見える人間に出会えたわ！』
「え、ええっと？」

「なあご」

頭に疑問符を浮かべるアランの足元で、チロルが暢気に毛繕いを始める。この少女は敵ではないと認識したらしかった。満面の笑みで身を乗り出す少女が何か伝えようとしたとき。

「おーい、坊や。いつまで下にいるんだい？　ここは寒い。本当に風邪を引いてしまうよ」

宿屋の主人が心配して降りてきた。アランの前まで来ると腰に手を当て注意する。彼の視線はアランにだけ注がれていた。アランがちらと視線を少女に移しても、「こら、大人が注意しているのによそ見しちゃダメだぞ」とさらにお叱りの言葉が飛んだ。

アランは素直に頭を下げた。

「ごめんなさい。その……こういうところってめずらしくて、いろいろな見ちゃって」

「そうかそうか。気持ちちは分かるよ。私も最初は物珍しさから始めたようなものだから」

ころっと笑顔になる主人。アランは再び頭を下げ、「すぐにもどるから、心配しないで」とお願いして主人には一階に戻ってもらった。

少女に向き直ると、彼女は難しい表情を浮かべていた。

『やっぱり他の人間には私の姿が見えないみたいね』

「そうみたい」

『うーん。ここじゃ落ち着いて話もできないし……そうだわ』

ぼん、と手を叩く。

『確かこの村に、同じような地下室がある家があるわよね？　そこで改めて落ち合いましょう』

「地下室……もしかして僕の家かな」

『そうなの？ それならば好都合だわ！　じゃ、私は先に行って待つてゐるからね』

「あ、ちよっと！」

すうっ、と姿を消しかけた少女をアランは慌てて呼び止める。

「あの、君はいつたい……？」

『ああ、ごめんなさい。自己紹介が遅れたわね』

少女はアランに向き直ると、にっこりと花のように笑った。

『私はベラ。妖精族のベラよ。よろしくね』

34. ベラのお願ひ

家に戻ると、サンチヨが笑顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい、坊ちゃん。外は寒かったでしょう」

「へいき。それよりサンチヨ。その」

「さじのことなら大丈夫ですよ。私は坊ちゃんのお心遣いを受けただけで、十分満足ですから。さ、これはお礼です。温かいミルクをどうぞ」

ゆったりと湯気の立つコップを受け取り、アランはちびちびとそれを飲んだ。ミルクはぬるめで飲みやすく、体の芯から温かくなっていた。アランはコップをテーブルに置き、床で嬉しそうにミルクを舐めているチロルを見つめながら言った。

「サンチヨ。お願いがあるんだけど」

「なんでしょう？」

「地下室におりたいんだけど……」

「はて。地下室、ですか？」

サンチヨは首を傾げた。やや怪訝そうに言う。

「それは構いませんが、必要なものがあるのなら私に仰ってくださいね。取りに行きますよ？」

「ううん。ちがうんだ。僕、地下室におりてみたいんだ。ええと……」

視線を彷徨わせた挙句、アランは苦しい言い訳を試みる。

「もしかしたら、地下室にあるかもしれないから。さじ」

「はあ」

生返事をするサンチヨ。もっと何か上手い理由はないだろうか？ アランは頭を巡らせる。その様子を察したのか、長年パパスに仕えてきた彼はふっとため息をついた。

「わかりました。地下室の扉を開けて参りますので、少し待っていて」

てください」

「いいの？」

「特に危険はないでしょうし、坊ちゃんがそこまで仰るのなら。ただ、下はとても冷えますので、できるだけ早く上がってきてくださいね」

「ありがとう、サンチョ！」

サンチョの微笑みにアランは笑顔を返した。しばらくして重い扉が開いた地下室に、アランはチロルと共に降りていく。

慎ましやかな一軒家の地下室である。その広さは一部屋分で、壁際には壺が荷物が積み上がっていた。サンチョの言う通り、室内はかなり寒い。

松明を壁に立てかける。チロルが部屋の中央に向かって「なあ」と鳴いた。

地下室の中央にベラが立っていた。

『ありがとう。来てくれたのね。えっと、アラン……でよかったかしら』

「うん。でも、どうやってここまで？ 扉はしまっていたと思うけど」

『私の体は、人間界ではあってないようなものだから』

ベラの言葉にアランは首を傾げる。「子どもには少し難しかったかしら」とベラは笑ったが、すぐに真顔に戻った。

『つと。こんな話をしている場合じゃないわね。実はねアラン、あなたにお願いがあるの』

「お願い？」

『そう。私と一緒に来てほしいの！』

拳を握りしめるベラにアランは困惑した。いきなり来て欲しいと言われても、どこに、何をしに行くのかさっぱりわからない。けれど、ベラの真剣な様子だけは感じ取ることができた。

『最初に会った時、私は妖精族だって言ったわよね？ いま、私たちの故郷の村が大変なの。そのせいで、人間界にも影響が出ている。

でも私たちだけじゃどうにもならなくて。人間界の人に協力をお願いしようと思って私が来たんだけど、ここじゃ、妖精族の姿を見ることが出来る人間って限られているらしくて……。途方に暮れていたときに、偶然、あなたに出会うことができたの』

「でも、どうして僕に」

『私たちの姿が見えるのは、特別な力を持っている証だって聞いた事がある。あなたが私を見つけてくれて本当に嬉しかった。あなたなら、私たちの村を救えるかも知れない』

ベラの言葉にアランは黙って耳を傾けていた。そんなアランに、チロルがすりすり顔顔をこすりつける。

「……困っているひとが、いるんだね？」

『ええ。私たちだけじゃなくて、人間界の人々も困っているはず。いま外、すごく寒いでしょ？ 本当なら私たちが春を呼ぶはずなんだけど、それができなくなってる』

「春を……」

『だからお願い！ 私と一緒に来て！ そして、私たちの長に会って！ ポワン様も、きつとあなたを待ってるはずだわ』

言い終えて、ベラはじつとアランを見た。アランはしばらく考えた後、足元のチロルを胸に抱いた。「なあ」と短くチロルが言う。

「……わかった。いくよ、僕たち」

『ああ！ ありがとうっ』

「そのかわり、みんなから持っていたものはきちんと返してあげてね」

あれ、ベラがやったんでしょ、とアランが言うと、ベラは気まずそうに頬をかいた。

『ごめんなさい。私に気付いてもらうにはああするしか思いつかなくて……。でも、その必要もなくなったから、もう大丈夫。約束するわ。きちんと返すって』

「よかった」

アランが笑うと、ベラも優しげな表情を浮かべた。

『アラン、あなたは優しいのね。本当に良かったわ。お願いできたのがあなたで』

その花のような笑顔を見ていると、何だか気恥ずかしくなる。

ふと、ベラが指先を天井に向かってかざした。途端、松明の明かりしかなかった地下室に眩い光が満ちる。天井の輪郭がぼやけ、遙かなたまで続く光の階段が現れた。

ベラがアランの手を引く。

『さあ、行きましょう。この先が私たちの故郷——妖精の村よ』

35. 春風のフルート

光が、広がる。

足元を優しく包む不思議な階段を上りきった先で、ふと、体の重さが消えた。

さあっ……と冷たい風がアランの頬を駆け抜ける。

次の瞬間、足の裏が固い地面を踏みしめた。

「もう、目を開けていいわよ」

階段を上る間、ずっと手を引いてくれていたベラが言った。まぶしさに目を細めながらアランはゆっくりと瞼を開ける。

「……うわぁ……」

詠嘆した。

雲一つない快晴の下に見えたのは、薄く雪化粧をした巨大な木だった。幹が半分ほどで切り取られ、それまでに繁茂した枝葉がまるで上品なドレスのように木全体を覆い彩っている。ところどころに窓らしき四角いくりぬきが見え、そこから人影が見えた。

思わず、アランはベラにたずねる。

「あれ、もしかしてお家なの!？」

「ええ。そうよ。この妖精の村の長、ポワン様がいらっしゃる建物」

「すごい! おっきい! きれいだ!」

興奮したアランの声にベラは「ふふっ」と笑った。

「こういうところはアランは子どもなんだね」

「でも本当にすごいんだもの」

「ありがとうございます。ポワン様も喜ぶわ。さ、行きましょう。私たちが到着するのを待っているはずよ」

手を引かれ、歩き出す。その後ろをとことことチロルも付いていく。物珍しさは同じなのか、チロルもまた「なごなご」と鳴きながら辺りを見回していた。

地面から雄々しく張り出した根っこ、その表面に作られた階段を上る。途中振り返ると、妖精の村の全容を見ることができた。雪の積もった平野に切り株の形をした家が建っている。ベラと同じ、耳の長い妖精族が優雅に歩いていた。

妖精、というぐらいだから、羽が生えて空を飛ぶのかなとアランは思っていたが、こうして見る限りは人間とそう変わらないようだ。誰もがみな優しくそうで、あとは何故か女の人が多くて――

そこでアランは首を傾げた。どことなく、表情が沈んでいるように思えたからだ。穏やかな村の空気も、よく感じれば体の芯に響きそうな冷たさははらんでいる。アランは思わず二の腕をさすった。階段を上りきると、正面に大きな扉があった。こんな扉が開くのかと思っていたら、ベラがその細い腕で少し押すだけで扉は滑らかに奥へと動いた。

幹の中は、これもまたため息が出るほどの美しさだった。氷のように滑らかで透明度のある壁がぐるりと幹の内側を覆い、いくつもの本棚が部屋の中に鎮座していた。広い。ビアンカの家の数地より広いかもしれないとアランは思った。

円状の壁面に沿い、氷か水晶か、透明な結晶が螺旋階段となって伸びていた。チロルを胸に抱き、アランはしきりに辺りを見回しながらベラの後に続く。途中、何人か妖精族の女性とすれ違い、その度に柔らかな会釈をされてアランは恐縮した。

二階、三階と上がっていき、最上階に昇るとそこは吹き抜けとなっていた。大空と逞しく生い茂る緑に抱かれているような錯覚をアランは抱いた。

ベラがすつと腰を折る。

「ポワン様。人間界の協力者をお連れしました」

「まあ。可愛らしいこと」

アランはそつとベラの背中から部屋の奥を見た。何人かの妖精族に守られるようにして、木でできた大きな椅子にひとりの女性がしとやかに座っている。ゆったりとしたローブに全身をつつみ、大き

な髪飾りと豊かな髪、そして何より、すべてを包み込んでしまうような柔らかな笑みが印象的だった。

あの方がポワン様よ、とベラが小声で教えてくれる。

アランが何か言うより先に、ベラがポワンに向けて言った。何故か慌てた様子だった。

「確かに彼はまだ子どもですが、他の人間にはない特別な力を持っています。現に、私が向こうで耳にした噂では、手強いモンスター相手にこれを退けたとか――」

「良いのです、ベラ。私は見ていました」

やんわりとポワンが言う。その声の響き自体が楽器のように聞こえて、アランは感心するばかりだった。

「アラン、と言いましたね」

ポワンが呼ぶ。はい、と返事をしてアランは彼女の前に進み出た。ポワンはしばらくの間、アランをじっと見つめていたが、

「なるほど。あなたからは不思議な力を感じます。特にその瞳……特別な力を持っているというのも、うなずける話ですね」

「……？」

「ごめんなさい。本当なら、このようなことを頼むのは心苦しいのですが……私たちの願い、聞いてはもらえませんか」

アランは黙って話の続きを待った。ポワンはひとつうなずいてから、言う。

「実は、この村で大切にしていた宝物を、とある者に奪われてしまったのです。宝物の名は『春風のフルート』……これがなければ、妖精の村はもとより、人間界に春を呼ぶことができません」

「春が、よべない？　じゃあ、サンタローズがこのところずっとさむいままだったのは」

「ええ。『春風のフルート』が使えないためです」

アランは目を見開いた。まさか、春の訪れに妖精の力があつたなんて思いもなかったのだ。大変なことだとアランは思った。

ポワンの表情に真剣さが宿る。

「お願いします。盗まれた『春風のフルート』を取り戻して欲しいのです。この村と、そして人間界に春を呼ぶために」

36. 地獄の殺し屋と言われても

話を聞き終えたアランはポワンの前を後にした。隣には、引き続きアランと共に行くようポワンから指示されたベラが歩いている。

「ポワン様は、今回の事件にとっても心を痛められているの」

最上階から下りる階段を歩きながら、ベラが言う。アランが目線で理由を尋ねると、彼女は小さくため息をついた。

「私たちの村は、まだいいわ。このくらいならみんな耐えられるから。けれど、人間界はそうはいかない。農作物は育たないし、そうになると動物たちも飢えてしまう。単純に、寒さだけで命を落としてしまうこともあるかもしれない」

「あ……」

「それはとても大変なこと。だけどね、それと合わせてポワン様が悩んでいることがあるの」

階段を下りきる。鏡のように磨かれた床をしばらく無言で歩き、

そのまま、表へ出た。太陽の光が瞳に眩しい。

「実を言うとね、『春風のフルート』を盗んだのが誰なのか、おおよそ見当はついてるの」

「えっ!? そうなの?」

「この村の西、山脈の裾野にある洞窟。そこに『ザイル』って名前の子がいる。おそらく、フルートを盗んだのはその子……村の中に、何人か姿を見た人がいるし」

「じゃあ、その子に会って『春風のフルート』を返してもらおう! 勢い込んで言うと、ベラは少し悲しげに微笑んだ。アランは眉をハの字にした。

「……ダメなの?」

「いいえ。どんな理由があろうと、盗んではいけないものを盗んでしまった。だから取り返さなきゃ。それは絶対にしなきゃいけない

ことなんだけど」

そこまで言いかけたとき、ふいにベラを呼ぶ声がした。村の妖精の一人が、ベラに駆け寄る。

「ごめん、ベラ。ザイルの奴、見失っちゃって……。北に向かったのまでは確かめたんだけど」

「いいよ、無理しないで。助かったわ。あの辺り、最近モンスターがよく出没するようになって危険だったでしょう？ ケガはなかった？」

「うん。大丈夫」

「そう、良かった。それにしても北、か。おそらく氷の城に向かったんでしょけど……。困ったな。あそこは確か――」

友人らしい妖精と何やら相談を始めるベラ。「少しだけ待って」と彼女に言われ、アランは切り株状の一軒家に足を向けた。ちょうどそこで、老人が一人たき火に当たっていたのだ。そばには何とスライムまでいる。だがアランは恐れなかった。そのスライムからは、以前サンタローズの洞窟で出会ったスライムと同じ、敵意のない、穏やかな気配を感じたからだ。

「ここ、いいですか？」

「ああ、いいとも」

老人が言う。胸に抱いていたチロルを下ろし、アランはたき火に手をかざした。雪化粧の割には寒さは感じないとは言え、何となく火に当たるとほっとした。チロルも大きくあくびをする。

そんな二人（一人と一匹）を微笑ましげに眺めていた老人だが、ふと、その表情が怪訝に染まった。

「んん？ 坊や、君と一緒に連れているのは……」

「あ、はい。チロルっていいいます。僕の大切なともだち」

「なああうっ！」

「友達……ほおっ、これは。これは驚いた！」

アランは首を傾げる。老人の顔には驚きと微かな畏怖が見て取れた。

「坊や。この子がどういう種族か知っているかい？」

「？ ううん。ネコじゃないの？」

「その子はキラーパンサー——別名『地獄の殺し屋』と言われる種族じゃよ。間違いない」

アランは絶句する。チロルがちらとアランの顔を見上げた。目が合うと、アランは驚きの表情をゆっくりと溶かして、チロルの毛並みを撫でた。

老人が咳払いをする。

「あー、ごほん。すまんかった。その子の目を見れば、人に危害を加えるようなものではないことぐらい、儼にもわかる。だがあの獰猛な種族が、まだほんの子どもとはいえ人になつくなど信じられんわい」

「チロルはチロルです」

「なあごっ」

「すまんすまん」

老人は笑顔を見せ、それからじつとアランの顔を見つめた。

「……坊やは、どうやら不思議な力を持っているようじゃ」

「ときどき、言われるよ。けど僕は僕だから」

「そうか。偉いの。おそらくその力は天から授けられたものじゃろう。大切にしなされよ。いつまでも、な」

そう言うと老人は目を閉じた。

37. 柔らかな銀世界

「アラン！ お待たせ」

しばらくして、ベラが戻ってくる。アランはぽんぽんとチロルの頭を撫で、半分眠りかけていた相棒を起こす。

「あ」

「？ どうしたの」

アランはベラが持っていた武器に声を漏らす。かつてサンタロースの洞窟でスライムからもらったものと同じ、『かしの杖』だ。アランの視線に気付いたベラが、若干緊張した表情でうなずく。

「私、金属武器は苦手なの。でもこれなら使い慣れているし。大丈夫。戦いはあまり得意じゃないけど、あなたに負担はかけないわ。そうはいっても私の方がお姉さんなんだし、頼ってくれていいのよ」

「……ふふっ」

どこかで聞いたような台詞にアランは笑った。ベラが首を傾げる。チロルはチロルで、アランを守るのは自分の役目だと言わんばかりになごなこと鳴いていた。

アラン、チロル、ベラの三人（二人と一匹）で妖精の村を出発した。

一面の銀世界となった平原を歩く。人間世界に降る雪とはまた違うのか、踏みしめると砂のように柔らかな感触が返ってきた。素足のチロルも冷たさは感じないらしく、軽い足取りでついてくる。

「本来、この雪はポワン様が春を呼ぶと同時に消えてなくなるものなの。今は『春風のフルート』が奪われたせいで、まだ消えずに残っているのだけれど……このまま状況が変わらなければ、いずれは人間世界のように寒さを感じるようになるかもしれないわ。雪が腐っていくの」

初めて聞く表現ながら、アランは容易にその姿を想像することが

できた。重く、湿った塊になっていく雪……それはこの美しい光景を一変させてしまうだろう。

先頭を歩くベラが、ふと足を止めた。

「それに、春が呼べない影響は景色だけじゃないから」

強ばった声で、彼女は『かしの杖』を構える。

目の前にモンスターが現れたのだ。その姿を見たアランは思わず
呟く。

「り、りんごのばけもの……？」

姿形はまさに果物のりんごそのもの。だが表面にははつきりと目
口が見え、特に口は巨大で鋭い歯がびっしりと並んでいた。

「ガップリンよ。彼らだけじゃないけど、もともとこの辺りのモン
スターはとてもおとなしい。なのにここ最近、よく私たちを襲うよ
うになった。アラン、下がって」

口をしきりに動かし、硬質な音を立てて威嚇するモンスターに、
ベラは『かしの杖』を握りしめて集中する。彼女の周辺が熱を持ち
始めた。

「――、さあ食らいなさい！ ギラッ！」

火炎魔法。振り払った杖の先から炎が帯となってモンスターに襲
いかかる。甲高い悲鳴を上げ、ガップリンはひっくり返ったまま動
かなくなった。

額の汗をぬぐうベラ。直後、足元でチロルが鋭い声を上げた。

「ぐるるっ！」

「えっ!？」

ベラの側面。茂みになった場所から突如、別のモンスターが襲い
かかってきたのだ。黄土色の体に鋭い爪、なにより口から垂れ下が
った長い長い舌が目には焼き付く。

『つちわらし』だ――

不意を突かれたベラはとっさに頭を守った。だが、いつまで経っ
ても衝撃は訪れない。恐る恐るベラが目を開くと、そこには悲鳴を
上げる間もなく一刀両断されたモンスターの姿があった。

光となって消えていく『つちわらし』を背に、アランは控えめな笑みを見せる。

「だいじょうぶ？ ベラ」

「え、ええ……。あのモンスターはアラン、あなたが？」

「うん。チロルが注意してくれなかったらあぶなかったよ。お父さんもよく言ってた。『楽に勝ったときほど気を引き締めるのだ』って」

「そ、そうなの……」

「僕は一回失敗しているから、同じ失敗はくりかえしたくなかったんだ」

そう口にしながら、アランは初めてスライムと戦ったことを思い出していた。

ベラがゆっくりと表情を崩す。何故か、大きなため息までついていた。

「ありがとう。助かったわ。それにしてもすごいわね。噂では聞いていたけど、これほどだなんて」

「そんなことないよ」

「ううん。とっても心強い。お姉さんぶって前に出た私は何だか恥ずかしいわ」

こつん、と自らの頭を小突くベラ。ついでに舌まで出してしまうその茶目っ気ある仕草に、ベラはもともとこういう性格なのかなとアランは思った。人間界での活動がどこか子どもイタズラじみていたのもうなずける話だった。

気を取り直したのか、ベラが晴れやかに言う。

「さあ。まずは西の洞窟に向かいましょう。ザイルのいる宮殿に入る方法が、そこにあるはずよ」

38. 西の洞窟と昔の不思議

歩くことしばらく――

三人の目の前に、洞窟の入り口が現れた。巨大な岩をくりぬいたような、きれいな半円形の入り口である。森の直中にあり、辺りは水を打ったように静かだ。

チロルがしきりに地面の匂いをかいでいる。その様子を眺めていたアランに、ベラが声をかけた。

「下の地面、草が踏み固められているのがわかる？」

「そういえば」

「この洞窟に人が出入りしている証拠よ。アランもこれからいろんなところを冒険するなら、覚えておいたほうがいいわ」

素直にうなずくと、ベラは笑った。

「さあ、入るわよ。人が入れる場所だと言っても、中はモンスターも棲みついている。気をつけましょう」

階段状にきれいに磨かれた石の上を歩く。洞窟特有の、ひんやりとした空気がアランの肌を撫でた。

足を踏み入れてすぐ、アランは驚く。

「これは……」

辺りを見回した。比較的広い道。半円状になった天井は大の大人が通っても十分な高さがある。サンタローズの洞窟には道の脇のあちこちに抱えるほどの岩が転がっていたが、それも見当たらない。

アランが驚いたのはその小綺麗さ――だけではない。

見えるのだ。そういった洞窟内部の様子が、はっきりと。

――松明もないのに、明るい。まるで岩肌自体が柔らかな光を放っているかのように。

「そうか。アランは初めてなのね」

「明るい。どうして？ 僕が入った洞窟は、たいまつがあったから

明るかったのに」

「私も名前や原理は知らないのだけど、大昔に高名な冒険者が訪れた洞窟にこのような『光る仕掛け』を施したらしいわ。私たち妖精族は人間と比べて比較的長命だけど、そんな私たちでも記憶の彼方になってしまうほど遠い昔のこと。時折、こうしてその仕掛けが残っている場所が見付かるの。この西の洞窟もそのひとつ。もつとも、後で手は加えられたらしいけれど」

人間界にも残っているかも知れないわね、とベラは言った。アランはただただ驚くばかりだった。チロルはどこか落ち着かないのか、しきりになごなごと唸っていた。

視界が良好なせいか、歩を進める足も心なしか軽い。

道中にあった立て看板の文字が読めず、ベラに代わりに読んでもらう。内容は大したものではなかったが、まだ十分に文字の読めないアランに、ベラは優しく教えてくれた。

明るい道に、新しい発見。思わず心が弾んで鼻歌を歌いかけ、ベラに注意されてしまった。首をすくめるも、何だか気恥ずかしい気持ちになる。

アランには、きょうだいがいない。ビアンカは年齢的には上だが、アランの気持ちとしては年の近い幼なじみだ。こんなふうに『お姉さん』な誰かと一緒に旅をするなんて、今までは考えもしなかった。僕にお姉さんがいたら、こんな感じなのかな……とアランは思った。

アランの気持ちを察したのかどうか、足元でチロルが服の裾を引っ張った。「あたしがいるじゃない」と言っているように見えた。

「そういえば、アランはお父様と冒険しているってことよね」

ふと、ベラがたずねた。

「こんなに小さな時から二人で世界を回るなんてすごいことだわ。危険なことも多いはずだけど……どうしてあなたのお父様は旅に出ようと思ったのかしら」

細い指先を顎にあて、小首を傾げるベラ。

アランはかつてビアンカにも話した内容を告げた。父は母を探しているようだ、と。

話を聞いたベラはビアンカと同じく、気まずそうに目を伏せた。だが、すぐに顔を上げる。

「事情はよくわかるわ。でも、私から言わせたらアランはまだまだ遊びたい盛りじゃない。友達も回りにいない中で世界中を歩き回るなんて、ちよつと可哀想だわ」

「でも、僕は大丈夫だよ。さびしくなんかないよ」

「アランはいい子ね、本当に。でも、たまにはちゃんとお父さんに甘えないとダメだよ」

そういうものだろうかとアランは思う。確かに同世代の子どもたちと一緒に遊んだりという記憶はアランには乏しいが、父はずっと一緒にいたのだ。守ってくれたのだ。父の背中を見て、それを追いかけることは、アランにとってひとつの喜びでもある。

「……まあ、あなたのお父様はきっととてもない人なんでしょうけど」

「え？」

「ううん、何でもなし。ひとりごとよ」

ベラは首を振った。それから、少しいたずらっぽく微笑む。

「じゃあ、この旅が終わるまでの間はお姉さんに甘えていいからね。こう見えて、生きてる年数で言えばあなたよりずっと上なんだから」

「うーん」

「あ、なあにその反応。失礼しちゃうわ」

ベラがむくれる。その愛嬌のある仕草に、やっぱりベラもお姉さんって感じじゃないのかなとアランは思った。それはそれで、心地良い気持ちだった。

足元でチロルが「あたしを忘れるなー」と再度抗議の声を上げていた。

39. ドワーフ族の長老

「そういえば、この洞窟にはなにがあるの？」

アランはたずねる。『春風のフルート』を盗んだザイルという者は、西ではなく北の宮殿に向かったはずだ。

ベラの表情が少しだけ険しくなる。

「その昔、高名なドワーフの職人がこの洞窟の奥深くに、ある秘術を封印したの。それを習得すれば誰でも錠を解くことができるという『カギの技法』と呼ばれるものよ」

「カギの技法？」

「ザイルの向かった宮殿の入り口は固く閉ざされている。だけど『カギの技法』があれば、宮殿の入り口を開け中に入ることができるようになる。ただ、今までカギをこじ開ける技術なんて必要としていなかったから、私たちの誰もその技術を身につけていなくて」

だからまずは『カギの技法』を手にいれる必要がある、とベラは語る。

何だか泥棒さんみたいだなとアランは思ったが、それ以上にベラの表情が気になっていた。

「そのカギの技法を身につけることって、ベラにとってはいけないことなの？」

「そんなことはないけど……まあ、ドワーフが編み出した技術ってところはあんまり気に入らないって言えば気に入らないけどね。ただそれ以上に、この洞窟は……」

そこで口をつむぐ。アランは首を傾げた。

「なに？」

「……そうね、この先の話は、実際に会ってから話をした方がいいかもしれないわね。アラン、少しだけ寄り道するわよ」

「え？　どういうこと？」

「あなたに会わせたい人がいるのよ。その人に会うことも、この洞窟に来たもうひとつの理由だから」

それっきりベラは黙り込む。表情は険しいというより、どこか悲しそうに見えた。アランもそれ以上は詮索せず、黙って彼女の後に続く。

しばらくすると、洞窟の明るさはまた別の、松明の光が見えた。岩壁に開けられた大きな穴から漏れてきている。

アラン達は穴の奥に足を踏み入れる。そこは四角い空間となっていて、綺麗に整えられた調度品が据えられている。寝台もあり、絨毯もあった。誰かの居室となっているようだ。

中央の丸テーブルに、ふたつの影がある。

「あつ、ようせいだ。ようせいがきた！」

テーブルの上で丸い体を弾ませたのはスライムだった。敵意は感じない。妖精の国のスライムはみない子なのだろうかとアランは思う。よくよく目を凝らすと、かなりやんちゃな顔つきにアランには見えた。

その隣、木製の椅子にゆったりと腰掛けたひとりの老人が、同じくアランたちに気づいて声をかけてきた。

「これはこれは。妖精族の方が、わしに何か用かな？」

「お久しぶりです、長老」

「おお、その声はベラか。こんな穴蔵で生活していると、外のこと疎くなっていけない。しかし今日はどうしたことかね。どうやら脇にいるその子……妖精ではないな、人間の子かい？」

「ええ、その。ザイルのことで」

少々固い声でベラが告げる。妖精族とドワーフ族は仲が良くないという話をかつて絵本で見たことがあったが、本当なのかも知れないとアランは思った。

ベラの袖を引く。

「ねえベラ。この人は」

「この人はこの辺りに住むドワーフ族の長だった人よ。昔、妖精の

村と一緒に住んでいたの」

「え！？ そうなの？ でもドワーフさんとは仲が悪——」

言いかけ、アランは慌てて口を閉ざした。ドワーフの長老は苦笑いする。

「ベラ。おまえさん、この子に肝心なことを伝えてなかったようじやな」

「……。実際に会って、話をした方がいいと思って」

「そうさな。……坊や、名前は何と言う？」

尋ねられ、アランは名乗った。正面から彼の表情を見ると、とてもベラが嫌がるような気性の持ち主には見えない。

長老は目を細めた。

「よい瞳をしている。不思議な瞳だ。わしはドワーフのゴース。昔、ポワン様のもとでザイルの面倒を見ておった者じゃ」

アランは驚きに目を見開いた。

40. ザイルの過去

「坊やは、わしらドワーフ族と妖精族とは仲が悪いと思っているようにじゃが、半分は間違いだ。少なくとも、わしらは妖精族と共存できていた。ポワン様という立派なお方の元で」

「ええ。それは、間違いないと思うわ」

ゴースの言葉にベラもうなずく。

「ただ、何と言うのか、妖精族とドワーフ族って、結構考え方が正反対だったりするのよ。だから個人的にそりが合わないっていうのはあったと思う」

「そうじゃな。だがポワン様はそんなわしらでも温かく迎えてくださった。感謝こそすれ、恨むようなことは決してない。本来はな」

「あの……二人とも、いったい何の話をしているの？」

アランは不安を表情に滲ませてたずねた。するとベラがアランの肩に手を置く。

「ゴースさんの言う通り、ポワン様は村のすべての人に平等に接してください。種族関係なしに。だけどもある日、ささいな行き違いからひとりの男の子の心を傷つけてしまったの。それが、ザイル」

「どうということ……？」

ベラはうつむいた。アランの髪の手を撫でながら、彼女は語る。

「ザイルはまだ赤ん坊の時、人間の親に捨てられたの。そこを、たまたま人間界に来ていたゴースさんに拾われたのよ。ゴースさんと仲間のドワーフたちは彼にとっても良くしていたわ。ただ……私たちが妖精族の方が捨てられた人間に子に対してどのように接したらいいのかわからなかった。そういう時期があったの」

——かつての妖精族の村は、種族間の対立が少なからず表に出ていたらしい。

親に捨てられ、妖精族に邪険にされ。ザイルは自然と育ての親で

あるドワーフの考え方に傾倒していった。

ただそれも、ポワンが村を正式に治めるようになってからは種族間で表だって対立することはなくなり、ザイルも少しずつ——本当に少しずつ——他の種族にも心を開くようになっていった。

そんな矢先のこと。

「あるドワーフが大切に使っていた武器が何者かに奪われたの。それだけじゃなく、現場に居合わせた妖精族がひどいケガを負った。ドワーフが自分たちの作った武器を盗むなど考えられない。一方で、妖精族が同族を襲うことも考えられない。……怒った一部の妖精族が言ったわ。『これは人間、ザイルの仕業に違いない』って」

「そんな！」

「もちろん、それに反対する妖精族も多かった。ポワン様もきっと同じ考えだったはずよ。だけど……この事件をきっかけにして、今までポワン様が抑えていた不満が今にも噴き出しそうになったのよ。これ以上平和なこの村を疑心暗鬼で覆いたくない。ポワン様とドワーフは話し合い、ほとぼりが冷めるまで別々の場所に住むことに決めた。もちろんザイルも。そうすることで、妖精族の怒りの矛先がザイルに向かうのを防ごうとしたの」

「だが、それは返ってザイルの心に闇をかぶせるだけになってしまった」

ゴースが言葉を引き継ぐ。

「村を離れて、いくらもしない内だった。わしの元を出たザイルはポワン様から『春風のフルート』を奪い、いずこかへと姿を消した。おそろく、北の宮殿へ」

「知ってるの？」

「なに、他ならぬ息子のことじゃからな」

驚きの声を上げるベラに、ゴースは小さく笑ってみせる。だが、そのささやかな笑顔もすぐに翳った。

「だがわしには、今回のことがあの子だけの考えとはどうしても思えない」

「え？」

「わしのところを去る直前まで、確かにあの子はポワン様を恨んでおった。ポワン様のせいでじいちゃんが追放された、とな。だがそれでも、あの子は優しい心根を取り戻しつつあったのじゃ。それがなぜ、急にあのようなことに……」

しわがれた手で、顔をゆっくりと二度、なでつける。指と指の間から重いため息が聞こえてきた。

「あの子に、ザイルに何かよからぬことを吹き込んだ奴がいるのではないかな」

「……それは、考えもしなかった」

ザイルの事は私たちにも責任があると思っていたから、とベラはつぶやく。アランはベラを見上げた。ここまでの道のりで、時折暗い表情を浮かべるのはそういう理由だったのかと気付く。

アランは、言った。

「会いに行こうよ」

「アラン？」

「会いに行こうよ、ザイルに。心がやさしい子なら、会って話をすればきつとわかってくれるよ」

まっすぐにベラを、そしてゴースを見つめる。

まん丸に目を見開いていたゴースは、やがて静かに目を細めた。

「そうだな。私はもうこの年だ。いかに頑丈なドワーフといえど、足手まといになってしまう。だが坊やなら……その不思議な瞳の力なら、ザイルの心を開くことができるかもしれないな」

「うん。頑張る」

「ほっほっ。本当に素直ないい子だ」

「そうでしょ？ 私の自慢の弟分なんだから」

ベラが胸を張る。間に挟まれたアランは心持ち顔を赤らめ、照れたように頬をかいた。

41. 中央突破!

「ゴースさんの話だと、『カギの技法』はこの洞窟の一番下、宝箱の中に保管されているそうよ」

「宝箱……もしかして、カギの開け方が書かれた本がはいっているのかな? どうしよう、僕は字が読めないよ」

「そこは心配要らないわ。私がいるし。それに、『カギの技法』はもともといろんな人が自由に使えるように編み出された技だと聞いているわ。だったら、アランでも身に付けられるような仕掛けがしてあるかもしれない」

「この洞窟みたいにな?」

「そういうこと。さ、行くわよ。宝箱に辿り着くまでが大変なんだから」

「うん。チロル、君もいいかい?」

「にゃう!」

とうぜん、と言わんばかりにチロルが自信満々に返事をする。

ゴースの部屋を出て、アランたちは洞窟の地下を目指した。良く響く足音を聞きながら、アランはかつてサンタローズの洞窟を冒険したときのことを思い出していた。あのときも不安と期待と興奮に胸を躍らせて歩いたものだ。今の自分は、あのときより少しは成長できたのだろうか。アランは自問してみる。

途端に、『おおきづち』から味わった苦い経験が脳裏に蘇った。

「アラン? どうしたの」

「ううん。何でもない。この先は僕にとってぜんぜん知らないところだから、気をひきしめなきゃって思ったんだ。それだけだから、心配しないで」

「頼もしいわね。本当にアランって、たくさんの冒険をしてきたのね」

ベラが褒める。その口調には慈しみの響きが籠もっていた。アラ

ンは少しだけ笑ってから、すぐに表情を引き締めた。階下に降りる階段に差し掛かったときには、腰に提げていた剣を引き抜き、両手に構えたまま慎重に歩を進めた。

チロルが首元をアランの足首にこすりつける。早く行こうよ、と急かしているようだった。

「わかってる。チロル、敵の気配がわかったら教えて」
「にゃ」

階段を下りきった。ドワーフの洞窟の特徴なのか、壁面は滑らかに整えられている。道は左右に一つずつ。奥に向かって緩やかに湾曲している。

うー、とチロルが唸り始めた。直後、アランたちのものとは別の足音が耳に届く。いや、足音だけではない。ばさばさ、と羽音らしき物音まで聞こえてきた。アランが剣を構え直す。

「待って。静かに」

ベラがアランの肩に手を置いた。

「この音……モンスターは一匹だけではないわ。それに羽根の音もする。いけない、『メラリザード』が混じっているかも」

「メラリザード？」

「呪文を使うモンスターよ。その名の通り、メラの呪文が使えるの。連発はできないみたいだけど」

アランはぶる、と肩を震わせた。レヌール城でビアンカが見せた呪文はアランの記憶にも新しい。あれが自分の身に降りかかると考えると、ぞっとした。

「やりすごしましょう。さいわい、モンスターたちは道の片方に固まっているみたい。反対側の道を進むわ。喋らないで、静かにね」
うなづく。気配を探るためか、ベラが先頭に立って歩き始めた。

彼女は隠密行動が得意なのか、見事に足音ひとつしない。アランはチロルの柔らかな毛並みを胸に抱いた。彼女はすでに臨戦態勢に入っていて、歩くたびに爪が地面をこすって音を出していたからだ。

うー、と再びチロルが唸る。頭を撫でながら「しずかに」とア

ランは言うが、珍しく彼女は黙り込む様子を見せなかった。モンスターが近くにいるから気が立っているのかと思い、そしてふと、顔を上げたときである。

——目の前に逆さまになった『つちわらし』の顔があった。

「うわああっ!?!」

チロルを思わず取り落とし、悲鳴を上げる。同時に主人を守ろうとチロルが『つちわらし』に襲いかかった。

「にゃああっ!」

「ギヒィィ」

「ちょ、アラン!?!」

いきなり勃発した戦闘にベラが大いに慌てた。彼女の背中に自らの背中を預け、アランは激しく鼓動する自分の胸を必死になって鎮めた。ベラが嘆息する。

「もう、あれだけ静かにしてって言ったのに」

「ごめんなさい……。あんなに敵が近づいていたのに気づかなくて、ベラが前にいてくれたから安心しちゃったみたい」

「……………」

「……。もしかしてベラもまったく気づかなかった?」

「ごほん」

咳払いをひとつ。彼女は年長者の威厳を持って言った。

「とにかく、こうなっては戦闘は不可避だわ。アラン、囲まれる前に勝負を決めるわよ」

「うん。でももう囲まれているみたい」

気まずそうにアランが言う。その言葉通り、細い通路の前後にモンスターは回り込んでいて、完全に挟撃の状態となっていた。威厳をかなぐり捨て、ベラはヤケになったように叫ぶ。

「中央突破!」

「うん、わかった」

チロルを従え、アランは地面を蹴った。

アランの剣技、チロルの素早い攻撃、そして何より複数の敵を一度に薙ぎ払うベラの呪文によって、アランたちは何とか包囲網を脱した。油断なく背後を警戒するアランの側で、ベラが大きく息をついている。

「だいじょうぶ？　ベラ」

「え、ええ。何とか。実を言うとな、本格的な乱戦って初めてだったから。情けない話だけど……ふう。うん、もう大丈夫よ」

「ベラでも初めてのことがあるんだね」

「それはそうよ。妖精の村は、まあ、今はこんな状態だけれど平和なところだし、あなたのような人間の子と一緒に冒険するようなこともないし。だからこそ頑張らないとね」

むん、とベラが拳を握り、アランは微笑んだ。

洞窟は、さらに奥に続いている。

42. 逃げた先に

「アラン」

ドワーフの洞窟を奥へ奥へと進んでいたとき、ふと、ベラが声を掛けてきた。

「この先は、できるだけ戦闘は避けるようにしましょう。もしモンスターと出くわしても、可能な限り逃げましょ」

「どうして？」

「今はまだ元気だからいいけど、帰りのことを考えないといけないでしょ？ ましてや、奥のモンスターはかなり強力よ」

落ち着いた口調だが、よく見るとベラの額にはうっすらと汗が浮かんでいる。

確かに、ここに来てモンスターの強さが格段に上がった。かつてパパスとともに対峙したイタチ型のモンスターと出逢ったが、段違いの強さだった。同じ種でも、棲息地が違うとこんなにも強さに差が出るものなのだ。アランは初めて知った。それに『ラーバキング』の群れと戦ったときなど、『親分ゴースト』戦もかくやと思われるほど全力の戦闘を強いられている。

最奥部に辿り着き、そこでカギの技法を手に入れて終わり——というわけではないのだ。同じ道を辿って帰らなければならない。それはすなわち、帰りの道中でも同じようにモンスターと出くわすというわけだ。

「このモンスターから逃げるのはかなり骨が折れるけど、だからといって全力で戦いっぱなしだと、すぐに体力が尽きてしまうわ」

「そうだね」

「ま、世の中には洞窟の奥深くから一瞬で地上に戻れる呪文があるらしいけど……やっぱり使える者は限られてくるでしょうね。私は無理」

アランは感心しながら聞いていた。そんな便利な呪文があるのかと驚くと同時に、やっぱりベラは物知りだと純粹に尊敬したのだ。羨望の眼差しに気づいたのか、ベラがふふんと胸を張っている。得意げに顔を上向かせた彼女は、足元をろくに見ないまま歩を進め、そのまま白い何かを踏んづけた。

「ぱきん、と軽い音を立てて壊れる。」

無造作に打ち棄てられた人骨だった。

「~~~~~ッ！」

言葉になっていない絶叫にチロルがぴょんと跳ねる。何かと周囲を見回す彼女を余所に、ベラは完全に混乱した様子で叫び続けた。

「ベラ、ベラ！ 落ち着いて。だいじょうぶだよ！」

「~~~~~！？」~~~~~ッ！！」

「なあー！ なあああつ！」

あろうことかチロルまで鳴き始めた。アランの服の裾を噛み、しきりに引っ張る。尻尾をぴんと立て、背中を逆立てていた。

振り返ったアランは「う……」と呻いた。

メラリザード、スカンカー、そしてラーバキング……この階で出会ったモンスターが勢揃いして迫ってきたのだ。反射的にアランは剣を構えるが、ベラがこの状態で果たして戦えるのかどうか、とても不安だった。

こういう場こそ逃げるべきなんだろう、そう思ったアランは、ベラの意見を聞こうと振り返る。が、

「……………あれ？」

そこには誰もいなかった。

耳を澄ませれば通路の奥から足音が聞こえてくる。その意味をようやく理解したアランは、慌ててチロルに言った。

「に、逃げるよチロル！」

「な……」

背中を向けて一目散に退散する。何となく不満そうながらも、チ

ロルもしつかりついてきた。逃走の道すがら、アランはぼんやりと
思った。

そうか、逃げるときはああやって逃げるんだね……。

何と言うか、やっぱりすごいすべら。

「はあっ、はあっ、はあっ」

ようやくベラに追いつき、アランは肩で息をした。すでに階段を
完全に下りきって、下の階にまで辿り着いてしまっている。通路の
端で頭を抱えているベラが獣みたいなうなり声を上げていた。

「ううう……よ、妖精族のベラともあろう者が、こんな小さな子の
前で……うう」

どうやら先ほどの醜態をひどく後悔しているらしい。それでも息
切れしていないあたり、実は彼女はアラン以上に体力があるのかも
しれなかった。

苦笑していると、またチロルが裾を引いてきた。注意を惹くよう
に、控えめな力でアランを引っ張ろうとする。

「どうしたの、チロル」

怪訝の声を出すと、ベラも顔を上げた。二人でチロルの視線の先
を見る。緩やかに曲がった道の先に、小さな小部屋らしき空間が見
えた。入り口には壁と天井をぐるりと縁取るように文字が刻まれて
いた。

近づいて目を細めるも、筆跡の違う文字が入り乱れていて判読で
きない。ほとんど文字が読めないアランはなおさらだった。すると、
後ろに立って同じように文字を覗き込んでいたベラが驚きの声を上
げた。

「これ、古い妖精族の文字だわ」

「え？ そうなの？」

「ええ。しかもこれは、ドワーフたちが使っていた文字と一緒に刻
んである。どういうことなのかしら……？」

アランは首を傾げた。妖精族とドワーフ族が一緒に文字を書くの

がそんなに不思議なことなのだろうか。

なあお、とチロルが鳴いた。部屋の奥に歩いて行く彼女をアランは抱き上げた。その姿勢のまま、固まる。

「ねえベラ。これって」

「そうね。きっと間違いないわ」

ベラがうなづく。

彼らの前には、無骨で大きな宝箱がひとつ、台座の形に均ならされた地面の上に置かれていた。土色に白地の縁取りがされていて、一目で頑丈であることがわかる。だがよく目を凝らすと、蓋のつまみ部分に小さなカギがつけてあった。その表面には精緻な文様が刻まれている。

カギはつまみに引っかかっているだけで、施錠はされていないようだ。

「私が開けましようか？」

「ううん、僕がやるよ」

「わかった。何かあったらすぐに対応するから」

ベラが一步下がる。アランは宝箱の前に立ち、深呼吸をひとつ、した。これまでも何度か宝箱を開けた経験はあるが、今回は緊張感が違った。

手を掛ける。少しだけ持ち上げた。重厚な見た目に反し、蓋はとても軽かった。留め金がかかるまで、一気に蓋を開け放つ。がこん、という音が響き、宝箱は完全にその中身をさらした。

「……」

ふたり、しばらく無言で立ち尽くす。彼らの顔に、宝箱から漏れ出た微かな光が反射した。

中に入っていたのはカギの技法を記した書物——ではなかった。

「きれい……」

思わずつぶやく。

宝箱の中身——それはなみなみと注がれた薄青に輝く『水』であった。

43. カギの技法

「もしかしてこれが、『カギの技法』？」

困惑したアランはつぶやく。漣ひとつ立てず、水面はまるで鏡のようだ。だが水中では不思議な光が煌めいていて、ゆったりと循環している。

隣に立ち、宝箱を覗き込んでいたベラがやがて目を大きく見開いた。

「呪文の力を感じる。ただの水じゃないわ。それにこの感覚は……」

「ベラ？」

「間違いない。この水には妖精族の力がかけられている。多分、記憶の呪文よ」

アランが首を傾げると、ベラは大きく肩をすくめて見せた。その顔には苦笑が浮かんでいる。

「どうやら私たちのご先祖様は、ドワーフ族ときちんと共存できていたみたいね」

「どうということ？」

「ほら、見て。この宝箱、作りがとてもしっかりしているでしょう？ 掛け金のところの細工なんかとても精緻だし。こういうのはドワーフにしかできないわ。そして中身は妖精族がその力を使って作り出したものに間違いない。つまり、これは妖精族とドワーフの合作というわけ」

ちやぷん、と水に手を浸ける。

「これが『カギの技法』というなら、ある意味納得だわ。万人に技術を伝える術として、これ以上相応しいものはない。……まあ、そんなものが洞窟の奥深くに眠っているというところは、ちょっと考え物だけどね。さあ、アラン。この水を飲んで」

「だいじょうぶ、なの？」

「ええ。これを飲めば、水の中に記憶された『カギの技法』を身に付けることができるわ。ほら、飲んでごらん」

ベラが両手で水をすくい取り、アランの口元に向けた。恐る恐る、彼女の細い指の上に揺れる水を飲む。口の中に光の一欠片が転がり込み、そのまま飲み込んだ。

しばらくもごもごと口を動かす。水の冷たさも味もしない、不思議な感触だった。

「ん……？」

お腹の辺りに清涼感を覚えた。すーっ、と抜けるような爽快さがやがて全身に広がっていく。頭の天辺から足の先まで駆け抜けた後、一瞬だけ全身の力が抜けた。まるで寝台の中で眠りにつく直前のように、頭もぼおっとなる。

「どう？」

折を見て、ベラが尋ねてきた。頭を振りながら、アランは何とも言えない表情を浮かべた。

「何だか変な感じ」

「な～お～、な～」

チロルが足元で心配そうに鳴いていた。だいじょうぶ、とアランは笑って彼女の毛並みを撫でた。

その後ベラも『カギの技法』をひとすくいして、口に運んだ。彼女にとっては何ら違和感がないものなのか、すぐに納得顔で宝箱を離れた。

慎重に蓋を閉め、二人は部屋を出る。

「さて、これで問題なく『カギの技法』を身に付けられたけど」

「うーん……」

「ま、アランはちょっとピンと来ないみたいだから、どこかで一度試して見ましようか。おそらく簡単なカギなら開けられるはずよ」

「まさか、人の家に勝手に入るの？」

「やろうと思えばできるけど……する？」

アランはぶんぶん首を振った。ベラは苦笑した。

「まあ、アランはそういう子よね。それに大丈夫よ。この技法はもともと簡易な呪文で作られたものだから、万能じゃないの。すべてのカギを開けられるわけじゃないわ。あとは遣い手しだいね」

神妙な顔で黙り込んだアランの頭をベラは撫でる。

「私は、アランなら本当に使うべき時をきちんと選べる子だと思うっているわ」

「ありがとう」

アランは答えた。本当は「自分が悪い子になったみたいだ」と思ったのだが、敢えて口にしなかった。ベラが苦勞をしてまで一緒に探してくれた技法で、しかもこの技術は、妖精族と人間の世界を元通りにするために必要なものなのだ。卑屈になってはいけないと思った。

アランの懊悩を知ってか知らずか、ベラはぽんぽんとアランの頭を撫でる。

「なー」

そのとき、チロルが鳴いた。何かを見つけたようだ。

『カギの技法』が保管されていた部屋とは反対側、その通路の奥に、重々しい扉が一枚据えられていた。ベラが近づき、簡単に検分する。「ふうーん。なるほどね」

何故か彼女は感心したようなつぶやきをもらす。

「ごくごく小さなものだけれど、この扉のカギにも呪文の力がかけられているわね」

「それじゃあ」

「きっとここで試して見ろってことなのよ。『カギの技法』を。さ、アラン。こっちにいらっしやい」

呼ばれて扉の前に立つ。通路を丸々塞いでいる扉は重厚で、見た目だけではとても子どもの手でどうにかなる代物には見えない。

錠前に触れる。カギ自体はどこにでもあるような簡単な作りのものに見えた。洞窟内に漂う細かな粉塵でざらざらした表面をこすり、このカギを開けるにはどうしたらいいだろうと考える。

瞬間、脳裏にぱっと煌めくものがあつた。指先が勝手に動き出す。気がつくと、錠前は綺麗に外され、アランの手の中にあつた。

「すごい」

思わずつぶやく。アランの手の中で、錠前は砂のように碎けて消えていった。

「どうだった？」

「体が勝手に動いたよ……これが『カギの技法』の力なんだね」

「直接体に染みこませたようなものだからね。この先、何かとあなたを助けてくれるはずよ。それに、触れたカギなら何でもかんでも勝手に開いてしまうわけじゃないわ。さっき試して見て、よくわかったでしょ？」

アランはうなずく。どうやらこのカギが開くだろうと考えたときに初めて体が動いた。『カギの技法』はアランが念じて初めて発動するものなのだろう。

「さて、それじゃ戻りましょう。前に言った通り、帰りも帰りで気をつけなきゃいけないから、モンスターとの戦闘は慎重にね」

「わかった」

アランはうなずき、ベラとともに元来た道を引き返した。周囲に気を配り、モンスターとの遭遇をできるだけ避け、また戦うことも極力回避した。

……が。

その慎重さがかえって迷走を呼び、気がつくとモンスターの大军の直中に佇むという羽目になっていた。

「べ、ベラ！？ 僕たち何がいなかったんだろう！？」

「……もしかしたら、逃げ回ったせいでモンスターの網にかかったやつたのかも……」

「ええっ！？」

「あーもう、ここまで来たらもうヤケよ！ アラン、地上まで突っ切るわよ！」

「う、うん！」

結局。

帰りも帰りで全力戦闘を強いられたアランたちは、洞窟を出たときにはすっかり疲弊しつくしてしまったのだった。

44. 剣の稽古、そのひととき

重たい足を引きずりながらようやく辿りついた妖精の村。

「つ、疲れた……」

滅多なことではめげないアランも、さすがにこのときばかりは道ばたにへたりこんだ。隣でベラも額に手をやって重いため息をつく。

「ごめんなさい、アラン。私のせいで」

「そんな」

「さすがにこの状態で北の宮殿へ行くわけにはいかないわね……。

今日はもう休みましょ。妖精の村にも宿屋があるの。さ、立てる？」

ベラの手を借り、村の奥へ歩く。その先には、かつて話をしたスライム連れの老人がいた。相変わらず切り株に腰掛け、ゆっくりと会釈をしてくる。アランはおじぎを返した。

ベラに連れられ向かった先は、巨大な切り株の形をした家だった。胸に染み渡るような濃い樹の匂いの室内には、カウンターで控える宿主の他に先客がいた。

アランは思わずつぶやく。

「骨の……人？」

「おや、ベラちゃんたちじゃないか。北へ出かけたんじゃないのかい？」

からころ、と顎が音を立てながら、大人の男性の声を漏らす。見た目は骸骨そのものだが、口調と仕草が妙に親しげだった。何故か、なみなみと湯が張られた桶に使っている。

あのひと、ずっと前からここで湯治をしているらしいの——そうベラは教えてくれた。骨だから直接染みていいのかなとアランは思った。

宿を取るベラの姿を後ろで眺めながら、アランは寝台のひとつに腰掛けた。汚れた外衣を脱ぎ、肌着姿になってごろんと仰向けにな

る。柔らかな羽毛が重たい体を優しく受け止めてくれた。すぐ隣にチロルも上がってきて、くると丸くなる。

そういえば、お父さんから離れて眠るのは初めてだったな――アランは思った。

胸の奥が、なぜだかふっと切なくなった。

瞼が降りてくる。意識が薄らいでくる。体が眠りに入る間際、アランは懐かしい光景を見た気がした。

「これでよし。アラン、明日に備えて今日はもう……あら？」

ベラが寝台にやってきたときには、アランとチロルはすうすうと寝息を立てていた。骨人と顔を見合わせ、ベラは苦笑する。寝台の傍らに立ち、アランの髪をゆっくりと梳いた。そして隣の寝台で同じく横になろうとしたとき、背中にアランの寝言が届く。

「……………お父さん……………お母さん……………」

振り返ると、身を丸めたアランの頬には一筋の涙が流れていた。

ベラは優しく微笑む。

「そっか。いくら勇敢で強くても、まだ小さな子どもだものね」

再びアランの傍らに立ち、彼が起きないようにそっと涙を拭った。そのまましばし考え、やがて「うん」とうなずく。

そっと囁いた。

「おやすみ、アラン」

瞼を開ける。窓から入ってくる陽光に目を細めた。

掛け布団をのけて、アランはぼーっと辺りを見回す。見慣れた本棚や窓枠を順に眺め、寝起きの頭のまま首を傾げた。

「……あれ？　僕は……」

「おお、アラン。目が覚めたか」

「え、お父さん!？」

「どうした、何をそんなに驚いている」

椅子に腰掛け、読書をしていたパパスが怪訝そうな顔を浮かべた。改めて辺りを見回す。そこはどう見ても、故郷サンタローズの自室であった。

にやふ、という気の抜けた声に振り返ると、ちょうどチロルが体を起こすところだった。猫らしい（本当は違うようだが）仕草で上半身を伸ばしている。どうしたの、と不思議そうな目で見つめられてしまい、アランは大いに戸惑った。

『どうやら、あなたのお父さんにも私の姿は見えないようね』

「！　べー」

声に振り返ったアランに、寝台のすぐ脇に立っていたベラが口元に指を立てる。アランは声をひそめた。

「ねえベラ。これはいったい……？　僕は妖精の村にいたんじゃ」

『宿屋の人に協力してもらって、夜のうちにこっちに運んで来たのよ。私がそばにいれば妖精の村にはいつでも帰れるから、心配しなくていいわ』

「う、うん。でも、どうして？」

『昨日まで戦い尽くしだったからね。今日はちよつと休憩。それにあなたはまだ子どもだもの。たまには家族に甘えることも必要よ』
ベラが片目を閉じる。ようやくアランにも、これが彼女の気遣いなのだとわかり、表情を緩めた。

「アラン？　何かあったのか？　そんなに嬉しそうな顔をして」

「あ、ううん。何でもない。それよりお父さん。今日は外にいいの？」

「うむ。少し整理がついたのな。しばらくは家にいるつもりだ」
「そうなんだ」

『ほらアラン。遊んでって言いなさい』

ベラが脇腹をつつく。アランは恥ずかしそうにもじもじと体を揺すった。もちろん本心では一緒に遊んで欲しい。けれどよく考えると、アランは自分から父にねだったことはあまりなかった。たとえ

強い父が一緒だったとしても、旅には常に危険が伴っていたからだ。改めて面と向かって『遊んで』とせがむのは、何だか気恥ずかしかった。

そんな息子の様子を不思議そうに見ていたパパスは、やおら大きくうなずいた。

「アランよ。下でサンチョが朝食を用意してくれている。食事を済ませて、支度ができたら父さんに声をかけなさい」

「え、ということ？」

「そろそろお前もたくましくなってきた。今日は父さんと剣の稽古をしよう。以前のようにナイフや木刀ではなく、お前がその手に持っている剣を使って」

「ほんとに！？ いいの、お父さん！？」

「うむ。実を言うとな、私も気になっていたのだ。最近、アランがことのほか逞しくなっている様子がな。今日は父さんにその姿を存分に見せてくれ」

「やったー！」

諸手を挙げて喜ぶアラン。主の歓喜に触発されて、チロルもまた寝台の上でぴょんぴょん跳ねていた。

一歩離れた場所でその様子を眺めていたベラは、ふふっと笑みを漏らした。

『そっか。この親子にとっては、これも歴^{れつき}としたふれ合いなんだね。ふふ、よかったね。アラン』

45. パパスの見つめる先

夜。

体を清め、寝支度を調えたパパスは居間の椅子にどっかと腰掛けた。

「ふうー……」

「旦那様、今日はお疲れですね」

「うむ。ずっとアランの剣を見ていたからな」

「旦那様と坊ちゃんが丸一日剣の稽古をする日が来ようとは、時が経つのは早いものです。坊ちゃんもお父上の血を受け継がれているのですな」

「うむ」

疲れた表情ながら、どことなく嬉しげに見える主の姿に、サンチヨは微笑んで台所に向かった。すぐに、パパスの好きな果実酒を満たしてやってくる。

「今日は少し奮発いたします」

「すまん」

器を手にとると、パパスは味を確かめるようにちびちびと口にする。それからぐっと大きくあおった。酒に強いパパスだが、普段は滅多に飲まない。こうして躊躇いもなく飲み干すのは何か良いことがあった証拠だと、サンチヨは長年の経験から知っていた。

嬉しくなる。本当に久しぶりの主の姿だった。

こと、サンタローズに帰還してからパパスが何をしていたかを知っているサンチヨにとって、どのような形であれ、彼の気が晴れるのは喜ばしいことだった。

「強くなった、アランは。本当に強くなった」

ふと、パパスがつぶやいた。片付けを手早く終え、サンチヨは対面に座る。パパスは袖をめくってみせた。そこには薄く切り傷があ

る。すでに回復呪文によってほとんど塞がっているその傷を、パパスはゆっくりと撫でた。

「これはアランの一撃によるものだ。一度だけ本気で打ち込んでみたら、この切り返しが来た。そのときのアランの顔が今でも脳裏に鮮明に残っている」

「さようでございますか……」

「そう。戦士の顔だ。ふっ……いつの間にか戦う男になっていたのだな」

パパスは天を仰ぐ。椅子がかすかに軋みを上げた。次第にその表情から喜色が薄れていく様を見て、サンチヨは不安になった。

「旦那様？」

「……サンチヨよ」

「はい」

「アランは、何歳になるか？」

「そろそろ七歳におなりになるかと。それが、いかがしました？」

「もう五年以上、か」

慨嘆を含んだ主の声。その目はどこか遠くを見つめ、引き締められた口元からは哀愁すら滲み出ていた。

「サンタローズは良い。本当に良いところだ。できることなら、この平和がずっと続けば良いと思っている」

パパスは言った。

「だが……私には使命がある。必ず達成しなければならない、重大な使命が」

「旦那様……」

「五年以上だ。それだけの時間をかけても、まだ達成まで程遠い。かすかにその一端をつかみ取った程度だ。だが、こうしている間にも事態は進行しているはずだ。……アランの成長を目の当たりにして、嬉しい反面、自らが徒に積み上げてきた時間の長さというものを痛感してな。これでは父親失格だ」

「そんなことはありません！」

サンチヨは声を荒げた。穏やかで控えめな従者の意外な反応にパスは目を丸くする。椅子から腰を上げ、その恰幅の良い体を揺らしながら、サンチヨは言った。

「旦那様は十分に努力されてきました。その成果だって出ているじゃないですか。それに、旦那様は父親失格なんかじゃありません。坊ちゃんが健康に、逞しく成長なさっているのが何よりの証拠です」

「サンチヨ……」

「いずれ坊ちゃま、いえ、アラン様が旦那様をお隣で支える日が来ます。志は受け継がれていくものだ、このサンチヨ、確信しております」

小さくつぶらな瞳で、サンチヨはパパスを見つめる。

「ですからどうか、どうかご自分を責めるのはおやめになってください」

「……。わかった。すまなかったな、サンチヨ。私は少し感傷的になっていたようだ」

「滅相もない！ 私こそ、出過ぎたことを申しました」

サンチヨが椅子に腰を落ち着ける。表情を和らげたパパスは小さく息を吐いた。

階上を見上げる。アランが寢床についている様を思い起こし、パパスは感慨深く言った。

「いつか、アランには真実を話さなければならぬ。そういう時期に来ているかも知れない。近いうち、『あれ』を見せる日が来るだろう」

「旦那様、あの……」

「お前の言いたいことはわかる、サンチヨ。……だが、アランには無理だろう。あれは、私にも扱えなかった代物だ」

「ですが……いえ、その」

「あれは神が創りたもうたもの。天空神の祝福を受けた血筋にのみ扱うことが許されるのなら、私は元より、アランも手にすることは叶わないだろう。だからこそ、重要な意味がある」

俯いたサンチヨに、パパスは言った。

「仮に……アランが持ち主として認められたとしたら、心安らかにいられる自信は私にはない」

「そう……でございますね」

「我が使命は何としても果たす。だが、息子にその苦しみを、いや、それ以上の苦難を味わわせることには躊躇いを感じてしまう。難儀なものだな」

「それが、親というものでございますよ」

「……そうだな。お前の言う通りだ、サンチヨ」

パパスは立ち上がった。「そろそろ床につくでしょう」と言い残し、階上へと上がっていった。サンチヨは主の姿が見えなくなるまでその背中を見つめ、そして大きく頭を下げた。

「お休みなさいませ、旦那様」

46. 凍てつく氷の宮殿

深夜、パパスもサンチヨも寝静まったところ。

アランは目を擦りながらベラと共に家の地下にいた。ベラの作り出す光の階段から再び妖精の村へと行くためだ。

「お父さんたち、一体何を話していたんだろう」

階段を上りながら、アランは眉をひそめる。下の階のことだったから、断片的にしか聞こえなかったのだ。ただ、ひどく真剣な様子で話し込んでいることはわかった。

「ねえ、ベラは何を話していたかわかる？」

「……」

「ベラ？」

「えー？ な、何か言ったアラン？」

「もう、どうしたの。ぼうっとして。……ベラはお父さんたちが何を話していたか、聞こえた？」

「まあ……ところどころ、ね」

「ほんと？ どんなこと話してた？」

「……」

ベラは一度口をつぐんでから、努めて明るい表情を浮かべた。

「アランには、まだまだ早い話だったわ」

「えー？ どういうことなの」

「もっと大人になったら、お父上に直接聞いてご覧なさい」

「……ぶー」

頬を膨らませるアラン。だがこれ以上ベラに何を言ってもはぐらかされるだけだと思い、そのまま光の階段を駆け上がる。

「……もしかして、アランのお父様は……」

妖精の村に辿り着く間際、アランはふと、ベラのつぶやきを聞いた気がした。

光を抜け、今やすっかり見慣れた雪景色の中に降り立つ。妖精の村の出入り口まで来たとき、ベラがアランの肩に手を置いた。

「さあ。今日こそ北の宮殿を目指すわ。準備はいい？」

「うん」「なお！」

アランとチロルが揃ってうなずく。ベラもうなずいた。

「よし。それじゃあ、出発しましょう！」

山岳地帯を迂回し、深い森を抜ける。時折はらはらと降り注ぐ雪が妖精の国らしい神秘的な景色を作り出す。何度か休憩を挟みながらひたすら歩き続け、息が次第に上がってきたとき、茂みの向こうに北の宮殿は現れた。

周囲を澄んだ湖に囲まれた、白亜の建物である。地表の雪、そして鏡のような湖面から反射する光で、宮殿の外壁は目もくらむほどの輝きを放っていた。思わずアランは息を呑む。

あそこにザイルが、春風のフルートがある――

自然に表情が引き締まり、アランたちはゆっくりと歩を進めた。

宮殿の入り口に向かって架けられた長い橋を渡る。橋も半ばのところまで、アランは異変に気づく。

「……寒い」

二の腕をこする。ある程度耐えられるような装備をしてきたが、この寒さは単なる外気温の低下だけではないような気がした。体の芯に問答無用で染みてくる、悪意ある冷気を感じる。

宮殿の外門をくぐると、それはさらに顕著になった。同時に、外観も一変する。まるでレヌール城の時のように、急に薄暗さが増したのだ。しかも、それだけで終わらない。

「何てことかしら……建物全体が凍っているわ」

ベラが呆然とつぶやく。

その言葉通り、外壁の内側は全てが凍てつく氷に包まれていた。漂う冷気は本物で、アランたちの吐く息が白く染まる。「ぷしゅん」

とくしゃみをしたチロルの声が、宮殿内に小さく飴した。まるで全体が洞窟の中にあるように、奇妙な圧迫感を抱いた。

青白く輝く石畳を歩く。道の両側を見ると真っ白に染まっていた。地面もまた、完全に凍りついていいるのだとわかった。

正面扉の前に来る。ふたつの巨大な氷をはめ込んだ形になっている。合わせ目のところに小さく、カギ代わりの鎖がかけてあった。

ベラにうなずきかけ、アランはカギに触れる。体と頭の中を不思議な感覚がさっと巡り、少し手を動かすだけで鎖は簡単に地面に落ちた。

巨大な氷の扉がひとりでに横滑りする。大きさと比べ驚くほど静かな動きだった。露わになった宮殿の内部から、さらに強い寒波が打ち寄せてくる。

「……行きましょう」

ベラが言い、アランはうなずく。

先頭に立ったアランは意を決して宮殿内に入った。白く固まった氷の床へと足を踏み出す。

「うわっ!？」

踏ん張った瞬間、ものの見事に滑った。それだけではなく、転んだ勢いでそのまま前へ前へ滑っていく。慌てて床を掴もうとしたがまったくの無駄だった。

と、止まらない――!？」

「にゃふっ!」

滑り続けるアランの襟元をくわえたチロルが懸命にふんばる。しかし、突き立てた彼女の爪は氷に覆われた床に弾かれ、アランを引き留めるどころか自分も一緒になって滑る羽目になってしまう。

ベラが警告の声を出した。前を向くと、ちょうど正面にぽっかりと穴が空いていた。まるで罠にかかった獲物を捕らえるように。

「うわわわっ!？」

「アラン!」

ベラの叫びも虚しく、アランとチロルはそのまま穴の中へと落下

してしまう。

穴の底は思ったよりも浅かった。すぐ目の前に広がる地面に、アランは咄嗟に体を返した。すんでの所で頭から落ちることを回避する。痺れる尻に涙目になりつつ、ここまで懸命に支えようとしてくれたチロルの背を撫でる。助けにならなかったのが悔しいのか、チロルはどことなくしょんぼりしていた。

周囲を見る。そこは地下にある小部屋のようなだった。おそらく物置だったのだろう。がらんとした空間である。床から壁面から、ここも例外なく凍りついていた。

「ベラ！ 僕は大丈夫だから。気をつけて！」

天井の穴に向かって叫ぶ。しかし返事がない。首を傾げた途端、「きゃーっ！」と悲鳴が聞こえた。天井に人影が現れる。

「べ、ベラ！？」

「アランごめーんっ！」

空中で手を合わせながらベラが降って来る。アランは慌てて立ち上がりうとして、またこけた。その上にベラが激突する。

「あう……」

「いったた。ご、ごめんアラン。大丈夫？」

「あ、うん……へ、平気」

衝撃でくらくらする頭を抑えながらようやくそう答える。ベラはすまなそうにホイミをかけてくれた。その脇で、チロルが「早くどいてあげてー」とベラの裾を噛んでいた。

47. ドジっ子とお子様

ようやく落ち着きを取り戻したアランたちは、慎重に辺りの様子を窺った。剣先で床を叩くアラン。

「すごく硬い。チロルの爪もだめだったし、何かを支えにしながら進むのはむずかしいかも」

「ええ。ただの氷ではないみたいね、これ。かといって、炎の呪文で溶かしながらすすんでいたら、ザイルの元まで辿り着くまでに精神力が尽きてしまうわ。となると」

何を思ったか、ベラが一步を踏み出す。途端に前へと滑り出した彼女は、そのまま滑るに任せていた。彼女の進行方向には一本の柱がある。両手をばたばたさせて、何とかその柱にすがりつこうとして、

「きゃう！」

こけた。

突っ伏したその姿勢のまま、彼女は柱にごつんとぶつかって止まった。

「そ、そうか。止まらないことを使って進むんだね！」

気まずい空気に敢えて触れないようにしてアランは言った。ベラが無言のままうなずく。耳まで真っ赤になっている様子がアランのところからでもわかった。

ベラが立ち上がったことを確認してから、ゆっくりと一步を踏み出した。どうやら足を置いただけでは滑らないようだが、一度体重をかけて踏み出すと簡単に体は前へと進んでいく。上半身で姿勢を保ちながら、アランは何とか転ばずにベラの待つ柱までたどりついた。

大きく息をつく。するとその後ろからとことことチロルが歩いてついてきた。

「チロル、君はだいじょうぶなの？ この氷」
首を傾げられた。「体が軽いと違うのかしら」とベラはつぶやいた。

それからアランたちは、柱から柱へ、壁から壁へと氷の上を滑りながら移動した。最初は難儀したこの移動法も、慣れてくればかなりの速さで移動できるようになる。次第に楽しくなってきたアランは、鼻歌を歌いながら移動していた。

「こら。ここは相手の本拠地なのよ。遊び場じゃないんだから」
ベラが叱った。こちらはなかなか慣れることができないらしく（どうやらベラは運動が苦手のようだ）、アランが通ってきた柱のひとつに掴まって足を震わせていた。

「ごめんなさい。ベラ、だいじょうぶ？」

「へ、平気よこれくらい。よっ、と……わ！ わわわっ！」

すてーん、と勢い良く転び、突っ伏したままアランのところまで滑ってきた。苦笑しながら手を貸す。いい加減腹に据えかねたのか、ベラの表情はどんよりとしていた。

「ううー、もう。まったく恐ろしい罠だわ！」

「そ、そうだね」

「でも」

ふと、彼女の表情が陰しくなる。

「この状況でモンスターの群れに出会ったら、とても厄介だわ。西の洞窟以上かも」

アランとベラは周囲を見回す。いくつもの柱が床と天井を貫いているため、建物の内部は見通しがよくない。鏡面のように反射する氷たちは、明るさは申し分ないものの、壁や柱の合間にある通路をわかりづらくさせている。

主たちの緊張を悟ったのか、チロルがしきりに匂いをかぎ始めた。だがすぐに「なあ……」と言って髭を垂らす。

「チロルも、よくわからないみたいだね」

「アラン、ちょっといい？」

言うなり、ベラがアランに抱きついてきた。アランはきよんとして尋ねる。

「ベラ？　どうしたの？」

「こうしてくっついて行けば、いざというとき離ればなれになることがないでしょう？」

「そっか。……あれ？」

ふと思いついた懸念をアランは素直に口にした。

「でも、そうするとベラが転ぶと僕も転んじゃうー」

「努力するわ！」

力説され、アランは口をつぐんだ。暗に「置いていくな」と言われたような気がしたのだ。

大人しく抱きつかれたままにいる。すると何故か、ベラが小さくため息をついた。

「人間のことは私もよく知らないけど、こうしているとやっぱりアランはまだ子どもなんだと思うわ」

「え？　なに？　どういうこと？」

「何でもない。気にしないで。さ、行きましょ。慎重にね」

ベラがより強く抱きついてくる。アランはうなずいて、一步を踏み出した。

48. 聞こえる音、見えぬ敵

柱の陰から通路の奥を見る。深々と冷えた空気が頬を撫でていった。物音はせず、怪しい影もない。

「モンスター、いないのかな」

「そんなはずはないと思うけれど……やはり彼らにとってもこの環境は厳しいのかしら」

襲撃を予想してより慎重に行動していたアランたちだが、進めど進めど一向にモンスタアの姿を見ることがなかった。しかし油断はできない。

「そうかもしれない。でも、こわい気配はする。ずっと」

アランはつぶやいた。漂う冷氣の中に、冷感とは明らかに違う何かを感じていた。宮殿に足を踏み入れてから、その気配は薄まるどころかどんどん濃くなっている。現に、チロルは毛を逆立てて落ちて着きなく足元をうろつくようになっていた。

敵はいる。けれど姿が見えない。それは非常に心と体を圧迫するものだった。

無意識のうちに、アランは額を拭う仕草をしていた。ベラは言う。「とにかく、襲撃がないのならそれに越したことはないわ。急いでザイルを探しましょう。春風のフルートを取り戻すことが一番の目的なんだから」

「うん」

床の上を滑る。柱に取り付き、気配と音を探る。それを繰り返した。

最初に落ちた小部屋を出てから、もうずいぶんと奥へと進んだときである。廊下の突き当たり差し掛かる前に、アランは近くの柱に取り付いて無理矢理前進を止めた。辺りを見回す。

「どうしたの？」

「さつき音が」

口をつぐむ。

耳を澄ます。

しばらく無音だった。だが、直後。

「……！」

絹で地面を撫でるようなかすかな音がアランたちの耳に届く。ひとつではない、ふたつ。いやもっと。

チロルが声もなく戦闘態勢に入った。アランは剣の柄に手をやり、ベラもまた『かしの杖』を握る。

すると今度は天井を伝い、コウモリが飛ぶ音がした。鳴き声はない。あくまで羽音だけだ。音の様子からすると、複数のコウモリ——あるいはモンスター——が近づいてくる。

滑る床で立ち回りはできない。固まって迎え撃つしかない。アランとベラは無言で示し合った。

音が次第に大きくなってきた。アランが『銅の剣』を抜き放つ。

途端。

音の一切が、ぱたりと止んだ。

「……………」

辺りを見回す。モンスターの影はない。こちらに襲いかかってくるような気配も殺気もない。圧迫感だけが残った。

「どういう、つもりなのかしら」

ベラが耳元で囁く。

「まさかこのまま、私たちを威圧して終わりということ？」

「わからない」

「不気味ね……でも、これは好機だわ。今のうちに先に進みましょう」

「いいの？ 音はしなくなったけど、たぶん、近くにいますよ？」

「無駄な戦闘をすることはないわよ。さつきも言ったけど、私たちは春風のフルートを取り返しに来たの。血を流しに来たわけではないわ」

その言葉にアランはうなずいた。もう一度慎重に周囲の様子を窺ってから、ベラとともにその場を離脱する。

謎の気配は、追ってこなかった。

一目散に宮殿の奥を目指す。突き当たりの壁に体を押し付けるようにして辿り着くと、すぐ脇に上へと続く階段が現れた。薄暗い影が降り注ぎ、遙か先にぼんやりと空の青が見えた。

「どうやら屋上に続いているみたいね。アラン、準備はいい？」

「うん」

「じゃ、行きましょう。この気配から言って、春風のフルートは近いわ」

ベラ、チロルと連れ立ち、アランは階段を駆け上がった。

登り切ったその先には、不思議で幻想的な光景が広がっていた。

――床が、真昼のように明るい。

上空は青空が広がっているはずなのに、暗幕をかけられたようにどんよりと暗い。その代わり、地表の氷が太陽の明るさをすべて吸い込んで、眩い光を放っていた。まるで天と地が逆転したかのような光景である。

チロルが恐る恐るといった様子で、前脚を床に付けたり離したりしている。アランも直接手で触ってみたが、違うのは輝きだけで、階下の床と作り自体は同じのように思えた。

屋上にも関わらず、周辺には壊れた柱の残骸が散乱している。もしかしたら、この宮殿はもっと上の階まであったのかもしれない。た。おかげで滑ってもすがりつくものには事欠かない。

辺りを見回すと、広い屋上の中心部に屋根付きの祭壇がぽつんと建っていた。目を凝らす。建物の向こう側に、人影があった。

「いた……！」

声を押し殺し、ベラが言う。

「ザイルよ」

アランは目を細める。ここからでは少し距離があって、しかも建物の陰になっていてよくわからない。祭壇まで近づこうにも、残骸

が邪魔になっているため大きく迂回する必要があった。

「幸い、まだ気づいていないみたい。逃げられたら厄介だから、そうっと近づきましょう」

アランはうなずいた。音を立てずに近づくことを考えると、まさに滑る床の存在は渡りに舟である。アランたちは祭壇の背後から回り込むべく、そっと一步を踏み出した。

49. ザイルの叫び

慎重に柱から柱へ取り付く。これまでの探索で氷の上を移動することに慣れたためか、思った程時間をかけることなく祭壇のところまで辿り着くことに成功する。

間近で見ると、祭壇は予想以上に大きな建物だった。大きな土台が設置されている、ベラの身長よりも高い位置に祭壇の床はあった。何が奉つてあるのかここからでは見えないが、おそらく――

「ザイルのいる場所……春風のフルートを守る番人にでもなったつもりなのかしら、あの子」

ベラがささやいた。今は建物の陰になって見えないザイルの姿を、アランは思い起こした。遠目に見てもザイルは小柄な体つきをしていた。近づくにつれ、もしかしたら自分とそう大きく変わらないのではないかと思えるほどに。

物音はしない。ザイルはじっと、祭壇の前に立ち続けているようだった。

アランは思った。彼は、何をしているんだろう。こんな暗くて寒くて、まぶしいところで、何をしようとしているのだろう。何を思っ、ずっと空を見上げているのだろう。

――そうだ、そもそも。

彼はどうして、春風のフルートを奪ったのだろう……。

「アラン、気づいている？ これは好機よ」

言葉の意味がわからず、アランは首を傾げた。ベラは床を指差す。自分たちの建っている場所は、氷ではなく青白い板敷に変わっていた。

「祭壇の周囲は氷が張っていないのよ。これなら滑らない。もし戦闘になったとしても、外と同じように戦えるわ」

「……」

「アラン？」

「ううん。何でも、ないよ」

怪訝そうにしていたベラは、すぐに何かに気づいて口元を緩めた。
「……ザイルのことを心配しているのね？ やっぱアランは優しい。けど、言うべき事はきちんと言わないと」

「うん」

「よし。準備はいい？ 絶対にあの子を逃がしちゃ駄目、一気に飛び出すわよ」

ベラの合図とともに、アランは駆け出した。祭壇の外周を回り、ザイルの立つ正面へと躍り出る。

祭壇の階段に腰掛けてぼおっと空を見上げていたザイルは、突然の闖入者に心底驚いているようだった。覚束ない足取りで、慌てて立ち上がっている。アランの思った通り、彼は非常に小柄だった。まだ子どもと言っても差し支えない。頭部全体を濃い紫の布で覆い、不釣り合いなほど大きな革製の手袋と長靴を履いていた。

あれ、とアランは思う。じっとザイルの瞳を見つめた。そこには出会ったときのチロルのような輝きを感じたのだ。自然と、アランの体から緊張が抜ける。

アランの思いをよそに、ザイルは大きな声で誰何した。

「お、お前は！」

「久しぶりね、ザイル」

ベラが言う。その視線は、アランに向けるものよりいくぶん、厳しい。

ザイルは動揺をすぐに収めた。ふん、と鼻で笑い、腰に手を当てる。

「ポワンのところの妖精か。春風のフルートを取り戻しに来たんだろ？」

「わかっているなら話は早いわ。あれは私たちだけじゃなく、人間界にとっても大切なもののなの。返しなさい、ザイル」

「はっ！ お断りだね」

「ザイル！」

「爺ちゃんをあんな目に遭わせた妖精族の言うことなんか、誰が聞くか！」

ザイルが叫び返すと、ベラは言葉に詰まった。アランの脳裏に、ゴースの穏やかな顔が浮かぶ。

「お前たちの、ポワンのせいでどれだけ俺や爺ちゃんが辛い思いをしたかわかるか？ わかんないだろ。だからお前たちにも苦勞させてやるんだ。もっと困ってしまえばいいさ」

身を乗り出して声を荒げる。

子どもな上に、頑固なんだから——アランはふと、ベラのそんなつぶやきを聞いた。彼女は眉間に皺を寄せながら、それでも何とか説得を試みる。

「ザイル。それは誤解よ。ポワン様はあなたたちを苦勞させようと思っていたわけじゃない。むしろ逆。それに、仕方のないことだったの。確かに、結果的に辛い思いをさせてしまったことは事実だわ。でも、だからといって『春風のフルート』を盗んでいいことにはならないでしょう？」

「何が誤解なもんか！ 俺は知ってるんだぞ、ドワーフが目障りだったからポワンは俺たちを追放したんだ。そこにどんな誤解があるっていうんだよ！」

「ポワン様に悪意はないわ。あなたたちのことも思ってくださいっている。信じて」

「嘘だ！ 結局お前たちは余所者が邪魔なだけなんだ！ その証拠に、ずっと、ずうっと余所者を寄せ付けなかったじゃないか！ 今更仲良くしようたって、信じられるか！」

「ザイル、今はそんなことを言い争っている場合じゃないの。春風のフルートがないと——」

「はっ。結局それかよ。やっぱり俺たちのことなんかどうでもいいってことなんだな。聞いた通りだったよ！」

「ザイル……！」

「これはお前らをこらしめるために必要だっ
て教えてもらったんだ。春が来なければず
っとこの世界に引きこもってばかりじゃ
いられない。妖精の村も、『妖精の城』も、
いっぺん人間界にでも出てみればいい。
そしてたくさん苦勞するがいいさ!」

ベラが言葉を切る。眉根を寄せ、彼女はいく
ぶん声を落とした。

「どこで聞いたの? その話」

50. 友達になろう

「俺に全部教えてくれた人がいるんだ。それ以上は言うもんか」
ザイルはそっぽを向く。

隣に立つベラを見る。険しい表情ながら、そこには困惑の色も混ざっているようだった。

「おい、そのやつ」

ふと、声をかけられる。

「お前、妖精族じゃないな？ 人間だろ？」

「あ、うん……。そうだけど」

「気をつけろよ。妖精族ってな、人間なんてどうでもいいと思ってるんだ。利用するだけ利用して、それでおしまいさ。わかったらさっさと帰った方がいいぜ？」

「心配してくれるの？」

アランの何気ない一言に、ザイルは言葉を詰まらせた。

「ば、ばっか言ってるじゃねえ！ 誰がお前なんか。妖精族に味方する奴はみんな敵だ！」

「でもゴースさんは大切なんでしょ？」

「あったり前だ！ 話聞いてなかったのかよ、お前！」

「そうじゃないよ。ゴースさん、とつてもやさしそうだったから、気持ちわかるなって」

う……。とさらにザイルは言い淀む。アランは苦笑を浮かべながら、こう言った。

「ゴースさんを大切にすると同じように、妖精族も、他の人たちも大切にできればいいなって思ったんだ。ポワンさんにも会ったけど、悪い人じゃないよ。ゴースさんと同じくらいやさしそうだった」

「じ、爺さんとポワンを一緒にするんじゃないよ」

「でも、二人がまた仲良くなったら、とつてもいいことだと思わな

い？」

「……」

「それにさ。ここは寒いよ。暗いよ。早く帰って、ゴースさんとお話ししよう」

「嫌だ」

「寂しそうだったよ。ゴースさん。それにザイルも」

「お前に何がわかるんだよ」

「んー。何となく。ザイルは悪い子じゃなさそうだなんて。ゴースさんの言った通りだ」

「う、うるさいな」

「ねえ」

アランは一步前に出て、手を差し出した。

「僕たち、友達になれないかな？」

「はあっ!？」

「だめ？」

「いや、その、あー……うー……」

しどろもどろになるザイル。アランはじっと、彼を見つめ続けた。アランの瞳を見たザイルから、最初の血気盛んさが消えていく。その姿に、ベラは大いに驚いた表情を浮かべた。

「アラン、やっぱりあなたは……」

そう、ベラがつぶやいたときである。ザイルが痙攣を起こして叫んだ。

「あーっ、もう! うるさいうるさい、うるさーいっ!」

背後に手をやる。隠していた小振りの手斧をひつつかみ、振りかぶった。ベラが警告の声を上げるより先に、ザイルは勢い良く手斧を放り投げる。

鋭く回転する手斧は放物線を描きながら、まっすぐアランに向かってきた。

「アラン!」

「だいじょうぶ」

落ち着き払ったその声にベラの足が止まる。

ひゅん、ひゅん――恐ろしい音が急速に近づき、やがて激しい音を立てた。

アランのすぐ横の地面に手斧が突き刺さっている。アランは涼しい顔を崩さない。悔しそうに唸るザイル。主の態度を察してか暢気に欠伸をするチロル。

そんな仲間たちの様子にベラは戦々恐々としていた。

「ア、アラン！ 危ないじゃないの！ 当たったらどうするつもりだったの！？」

「うーん。でも、本当にだいじょうぶだと思ったんだ」

「どうして！？」

「え？ うーん……どうしてだろう。何か、怖くなかったんだ。だからだいじょうぶって」

「あ、呆れた子ね。あなたは……」

アランの肩に手を置き、深いため息をつくベラ。姉代わりの彼女がどうしてそこまで疲れた表情を浮かべるのかわからず、アランは小首を傾げていた。

51. 冷たい言葉の真実

脱力したのは、ベラだけではなかった。

「まったく、何なんだよ。お前」

ザイルもまた、どことなく疲れた表情で大きく息を吐く。投げた手斧を回収するそぶりも見せず、その場にどっかと腰を落とす。

「初めてだよ、お前みたいなやつ」

「えへへ。そう？」

「嬉しそうにするな、まったく」

「だってさ、友達ができるのは嬉しいじゃない」

「……お前、名前は」

「アランだよ」

「そっか。アランってのか」

ザイルはぼりぼりと鼻の頭をかいた。どうしようか、思案している顔だった。アランは言う。

「ねえザイル。春風のフルートのことよりもまず、ゴースさんとお話をして見たらどうか」

「爺さんと……？」

「とっても心配しているみたいだったよ。それに、ゴースさんはポワンさんのことをよく知っているみたいだった。僕たちの言葉が信じられなくても、ゴースさんのことは信じられるでしょ？ 話を聞いてみなよ。春風のフルートは、それからでもいいからさ」

アランの言葉をベラは黙って聞いていた。彼女としては今すぐにも目的の物を奪還したいだろうが、ここはアランに任せることにしようだ。

するとザイルは困った表情を浮かべた。

「でもよお、アラン。俺が聞いた話だと、妖精族はすごい悪いことをしてるってことだったぞ？ 妖精の村にしろ、妖精族の城にし

ろ、いっぺん引きずり出して、痛い目に遭わせなきゃ絶対に変わらないって。そのために春風のフルートを奪うんだって」

「それよ、ザイル」

ベラが口を挟む。途端にザイルが顔をしかめるが、彼女は構わなかった。

「妖精の村はともかく、何故あなたが妖精族の城のことまで知っているの？　これは妖精族だけの秘密になっているはずだけど」

「そういえば、さっきからザイル、誰かから聞いた話だって言っているね。誰から聞いたの？」

アランも首を傾げる。口の中でもごもご言いながらザイルはそっぽを向いていた。彼が口を開くのをじっと待つ。やがてザイルは、
「気まずそうにつぶやいた。」

「『雪の女王』様だよ」

「ゆきのじょおう？」

「その人が俺に教えてくれたんだ。妖精族がひどいことをしている、
こらしめるためには春風のフルートを奪うのが一番いい方法なんだ
って」

「何ですって」

ベラが気色ばむ。アランは口の中で「雪の女王……」とつぶやいた。

「じゃあその雪の女王とやらと話をさせなさい。文句を言ってやる
わ」

「無茶言うなよ。あの人は、ほとんど人前に姿を現さないんだから」
「でもザイル、僕たちはやっぱり、その人ともお話しなきゃいけない
と思うんだ。春風のフルートのことがあるし……もし、その人が
納得してくれたら、ザイルも春風のフルート、返してくれるよね？」

「む、むーん……」

アランの言葉に腕を組むザイル。

そのときである。

『なりませんよ。ザイル』

冷やかな風とともに、声が響く。アランの背筋がぞわり、と震えた。

次の瞬間、いくつもの雪つぶてがどこからともなく現れ、ザイルの背後に集まっていく。それらはやがて白い光を放ちながら、人の形を作っていた。

「妖精族や、それに与^{くみ}する人間の言葉など聞いてはなりません」

そう言って一歩踏み出したのは、全身を白い薄衣で覆った長身の女性だった。服だけでなく、肌まで色が抜けている。前髪で顔はほとんど隠れていて、小さく口元が見えるだけである。まるでナイフで木の表面に切れ込みを入れたような、鋭く冷たい印象を受けた。

「そやつらはお前に危害を加えようとした者たちと同類。殺してしまいなさい。あなたの積年の恨みを見せつけるのです」

「雪の女王様……」

ザイルがつぶやく。躊躇いを見せる彼を、雪の女王は静かに見下ろした。

「私はあなたに真実を話した。妖精族は危険だと。それがわからなかったのですか」

「そ、それはもちろん。ただ、その」

「何です？」

「こいつらは、そんなに悪い奴に見えないというか」

口ごもる。すると雪の女王は慨嘆した。

「情けない。この程度でせっかくの恨みをふいにしおって」

「待ちなさい。さっきから聞いていれば、好き勝手なことを言っているわね」

ベラが一歩前に出た。その目には、今まで見たことがないほど強い苛立ちが浮かんでいる。

「妖精族が危険だなんて、言いがかりもいいところだわ。そんな理由で春風のフルートを奪うなんて許せない。あれは私たちだけでなく、人間たちみんなにも関わることなのよ」

「だから何だと言うのです」

絶句するベラに、雪の女王はいかにもつまらなそうに言った。

「人間などという矮小でくだらない存在など、妖精族以上に考慮するに値しない。私にとって春風のフルートは害悪でしかない。だから奪った、それだけです」

「……あなた、一体何者なの？」

「ベラ、気をつけて。この人普通じゃない」

アランが剣を構える。すでに全身は戦闘態勢に入っていた。ザイルを前にしたときとは明らかに違う。明確な悪意を、アランは皮膚で感じていた。チロルもまた、毛を逆立てて威嚇を始めている。

初めて雪の女王が、忌々しそうに表情を歪めた。

「嫌な目をした子……お前がザイルをたぶらかしたのですね」

「ゆ、雪の女王様！」

ザイルがアランたちの前に出る。その声には必死さが滲んでいた。

「教えてくれ！ 春風のフルートを奪ったのは妖精族を懲らしめるためだって……でも、さっき女王様は」

「邪魔です。下がちなさい。あなたにもう用はありません」

面倒で仕方がない、そんな感情が滲み出ている声だった。ザイルが愕然とする。

「じゃあ、じゃあ、今までのことは全部……」

「これだから人間は鬱陶しい。さっさと騙されたことを認め、消えるのです」

否定のしようがない言葉だった。立ち尽くすザイルを無視し、雪の女王はアランたちを見下ろした。

「妖精。そして人間の子よ。春風のフルートを奪いにきたお前たちを生きて帰すわけにはいきません。——ザイルともども、凍りつくがいい」

周囲の冷気が、一気に強まった。

52. 雪の女王戦 前編

光り輝く空間に、突如として吹雪が現れる。

雪の女王の手元に凝縮した冷気は、まるで青白い炎のように渦巻いていた。

前屈みになった女王の無機質な口元が、あり得ないくらいぱっくりと横に広がる。耳をつんざく金切り声が屋上全体に響き渡った。

「そ、そんな」

冷気に当てられ、ザイルがふらふらとアランたちの元まで後退してくる。顔全体を覆った紫の布のためにどんな表情を浮かべているかわからない。けれど、見開かれた目がザイルの心を如実に表していた。

「……なるほど。そういうことなら、合点がいったわ」

頬に冷や汗を一筋流しながらベラがつぶやく。

「春風のフルートの強奪、ザイルの逃走、氷の宮殿、そしてこの邪悪な気……すべて雪の女王、いえ、モンスターが関わっていたのね」「ザイル、だいじょうぶ？」

アランが言う。言葉にできないのか、ザイルは曖昧にうなずくだけだった。

剣を構え直す。

「そこで見てて。僕たちがあの人をやっつける。そうすれば、ザイルはゴースさんのところに帰れる」

「アラン、お前」

「だいじょうぶ」

足場を確かめるように踏み込む。アランは声を張り上げた。

「妖精族のみんなやゴースさん、そしてザイルに酷い目にあわせた。だから……僕は許さない！」

「ひゅるる——やれるものなら」

雪の女王の体が一回り大きくなる。彼女は両手を大きく振りかぶった。

「やってごらんさい！」

身に纏う冷気の炎をもって、雪の女王は突撃してきた。

だがアランは慌てない。ベラと同時に横っ飛びにかわす。少し遅れて、雪の女王の拳が床を打つ。途端に凍てつき、小さな氷柱が現れる。両手の光には獲物を氷付けにする力があるようだった。

その様子を見たベラがわずかにひるむ。だがアランは「だいじょうぶ！」と再度叫んだ。

確かに攻撃は怖いけど、そんなに速くない。十分、躲せる――

「チロル、行くよ！」

「なあおっ！」

アランは床を蹴った。体を起こした雪の女王に向かって剣を叩き付ける。左肩から脇腹までを鋭く抉った。同時にチロルの爪が連撃となって足元を襲う。

「ぬ、お」

だが雪の女王はわずかに呻いただけで、すぐさま薙ぎ払うように右手を振るった。後ろに飛びずさったアランは、雪の女王に思った程痛手を与えられなかったことを知る。女王のまとう白い衣服は、表面が薄く切れただけだった。

チロルが唸り声を響かせ、雪の女王の二の腕に噛み付く。細く長くておやかな見た目に関わらず、まるで岩を嚙っているように白い燐光が弾ける。

女王の手がチロルの顔に向かう。その直前――

「――、ルカナン！」

ベラの呪文で、女王の体に淡い光がまわり付く。動きがさらに鈍くなった女王の腕に、直後、チロルの鋭い牙が勢い良くめり込んだ。防御力が低下した体は、一際強く燐光を撒き散らす。

痛みのためか、遮二無二振り払おうとする女王。その手が触れる前に、チロルは自分から勢い良く飛び退いた。空を切る女王の細長

い手。

しかし。

「おおおおお……、ヒヤド！」

「ぎゃんっ!？」

空中にあったチロルの体に、複数の氷塊が殺到する。前脚や脇腹に痛打を受けたチロルは吹き飛ばされ、そのまま床にうずくまった。

「チロル！」

「――、ヒヤド！」

再度の呪文。アランは銅の剣で何とか捌くが、頬と二の腕に浅い切り傷を負った。かじかむような痛みが体の芯に響く。だがアランはそれを無視し、一目散にチロルのもとに駆けた。

彼女を抱きかかえると、「ふにゅう……」という声が返ってくる。アランは急いでホイミを唱え、チロルの傷が癒えきるのを待たずにスカラをかけた。

「だいじょうぶかい？」

「にゃああお……なあ……ふううー」

悔しそうに鳴いている。どうやらまだ闘志は萎えていないようだ。ほっと息を吐き、眦を決して雪の女王に向き直る。

手足が異常に細く長く伸びた、まさにモンスターそのものの姿に変貌した雪の女王は、傷跡のようなその口から白い息を吐き出す。

「やるではないですか、人の子。ますます憎らしい。その幼き獣も、何と言う恥知らずか。誇り高い種族でありながら、人間に仕えるなど」

「チロルを馬鹿にするな。僕の大切な友達なんだ」

「友達？ はっは、はっははあっ、友達!？ これは驚きですね!」
哄笑が響く。

「ならばその友情もろとも氷漬けにしてくれましょう。人の世がどんなに脆弱か、あなたの体に刻み込むのです!」

53. 雪の女王戦 中編

戦いの様子をザイルは呆然と眺めていた。

雪の女王がモンスターであつたことも大きな驚きだったが、それと同じくらい、敢然と立ち向かっていくアランの姿に衝撃を受けた。あの少年は何と言ったか。ザイルを酷い目に遭わせた、それが許せない、と。

自分と同じ、人間の子が。ただ甘言に操られて全てを拒絶した自分、それにも関わらず友達になろうと言ってくれた、あの少年が。

「……くっ」

ザイルは立ち上がる。こうして見ているとわかる。アランの实力はザイルより上だ。仮にアランたちと戦っていたとしたら、敗れていたのはこちらだろうと思う。

いや、今はそんなことを考えている場合ではない。

そう、今は――

「ザイル！」

ベラの声に振り向く。必死の形相の妖精族が、ザイルに向かって怒鳴ってきた。

「これでわかったでしょう！？ あなたは操られていたの！ あなたが私たちからだけでなく、ゴースさんの元からも離れたきっかけを作ったのは、あいつ！」

「……ああ。よっくわかってるさ！ でも、だから俺にどうしろって言うんだよ！」

「逃げなさい！」

意外な言葉にザイルは目を大きく見開いた。ベラは重ねて叫ぶ。「逃げなさい、ゴースさんのところへ！ そして全部話すの。時間はかかるかもしれないけれど、きっとみんなともわかりあえる。ポワン様も許してくださるわ！」

「お前……なんで」

「決まってるでしょそんなこと！」

アランの補助をするためしきりに呪文を繰り出しながら、ベラが言った。

「あなたはアランの友達！ 友達を助けるのは姉の役目よ！」

「あ、ね？」

「さあ早く！ 何とか保たせるから、今のうちに逃げるのよ！」

その声とともにかしの杖を大きく振りかぶる。流れるような詠唱の後に、ベラは仲間たちに合図した。

「アラン、チロル！ 離れて！ 行くわよ！」

ギラ——火炎呪文が迸る。

床を焼く音とともに蛇のごとく炎が走り、雪の女王に絡みついた。見た目通り、炎の魔法は苦手らしく顔面を押さえてのたうち回る。ベラの顔に会心の笑みが浮かんだ。

だがザイルは見逃さなかった。何とか顔面の炎だけ取り去った雪の女王が、その口を大きく開けていたことに。白い燐光を纏った空気が女王の口から体内へ取り込まれていく。

「やばい！」

気がついたときには走り出していた。

床に突き刺さったままの斧を手に取り、振りかぶる。

「アラン、ベラ！ 防御しろ！」

「え！？」

「『アレ』が来る！」

アランたちが構えを取る姿を確認する前に、ザイルは斧を放り投げた。鋭く回転する刃が雪の女王の顔面に激突する。

——その直後に、来た。

真円に開かれた雪の女王の口から、凍てつく氷の息が放たれたのだ。

ザイルの攻撃によってのけぞった雪の女王は、アランたちに直接氷の息をぶつけることができなかった。しかし、撒き散らされた冷

気の風はアランたち全員に容赦なく襲いかかった。

「うわああっ！」

「きゃああっ！」

アランとベラの悲鳴が重なる。チロルとザイルは顔を守り蹲っていたが、それでも凍てついた体は鋭い痛みを訴えてくる。

やがて氷の息が止む。

「……ぐ……ひゅ。ザイ、ル」

長い髪の間から雪の女王が鋭い視線を向けてきた。

「ザアイルウウウ……よおくもおお……」

「へん！ 先に裏切ったのはそっちだろ！」

痛みを堪え、強がりと言う。この宮殿を氷漬けにした力を見てきたからこそ心構えができたが、だからと言って無事に耐えられるかどうかは別問題だ。

まずいかもしれない、という思いがちらと脳裏をよぎる。

そのとき、ザイルの体が温かな光に包まれた。驚いて振り返ると、いち早く仲間の治療を行っていたアランが、ザイルに向かってホイミを唱えていた。

「ザイル、君もケガしてる。治すよ」

「アラン……」

「君のおかげで僕たち助かったんだ。ありがとう」

その言葉を聞き、そしてアランの真っ直ぐな瞳を見たザイルは、不覚にも涙ぐみそうになった。

アランと二人、肩を並べる。ザイルは言った。

「相手は強えーぞ、覚悟はいいか」

「もちろん。僕らはみんな帰るんだ。だから負けないよ」

ザイルは予備の短剣、アランは銅の剣を構え、いまだ呪詛の声を漏らす雪の女王に対峙した。

54. 雪の女王戦 後編

「愚か……愚か、愚か、愚かつ！」

雪の女王が髪を振り乱した。

「何と言う、愚かさ！ 何と言う、不快さ！ 虫酸が走ります、お前たち！」

「別にあんたに好かれようなんて思っていないさ。今はもう、な！」
ザイルが啖呵を切る。彼の意気に合わせ、アランもまた剣を構え直した。その横にはチロルが控え、さらに彼らの背後にはベラがかしの杖を胸に抱き、雪の女王を睨みつけている。

雪の女王は嘲った。

「私の言葉を聞いたとき、泣きそうな瞳で縋^{すが}ってきたのはどこの誰でしょう？ まったく、忌々しい」

挑発に一步前へ出ようとしたザイルをアランが制する。無言で首だけを横に振った。居たたまれなさのせいか、歯を食いしばり顔を赤くするザイル。だが、飛び出すことだけは自重したようだ。

悪い、アラン——そんなつぶやきが聞こえ、アランは小さく微笑んだ。

すぐに表情を引き締める。

雪の女王が三度、飛びかかってきたのだ。

女王は空中で氷呪文ヒヤドを唱える。鋭い氷柱が後列にいるベラ目掛けて飛んできた。

「ベラ！」

「大丈夫！」

避けるどころか、彼女はかしの杖を大きく振りかぶる。裂帛の気合を込めるように、大声で呪文を詠唱した。杖の先から炎が溢れ、火炎呪文ギラが氷柱を迎え撃つ。

溶けた氷が蒸気となり、周囲はマヌーサをかけたように視界不良

となった。

霧をかきわけ、雪の女王が氷の拳を握り込む。息を呑むベラに向かって、女王は真っ直ぐに拳を突き出してきた。

「……………かふっ……………」

ベラの喉から息が絞り出される。

眉間の正面に、雪の女王の拳があつた。よろめくベラから血が一筋、宙に舞う。彼女はそのまま膝から崩れ落ちた。

雪の女王は作り物めいたその口元を真一文字に結んだ。

真円の目が白く白濁し、雪中から漏れ出したような呻き声とともに睨みつけてくる。

「おのれ」

雪の女王は言った。

「こしゃくな、小僧だこと」

単語で区切るように漏らした言葉。その声をアランは静かに聞いていた。

——雪の女王の傍ら、その横腹に銅の剣を突き立てた状態で。

「こうなれば、お前たち全員——」

大きく息を吸う雪の女王。再び冷気が結晶となって吸い込まれていく。

アランは叫んだ。

「チロル！」

「にゃああああっ！」

渾身の力を込め、雪の女王の肩口から下腹の辺りまで、チロルは両の爪で二度にわたって切り裂いた。硬直する女王。冷気はどんどん濃く、大きくなっていく。アランは自分の意思とは関係なく体が震え出すのに気づいた。

雪の女王の手がアランの頭を鷲づかみにする直前、反対側からザイルが短刀を女王の脇腹に突き立てた。万感の想いを込めるように、力強く握り、ひねる。

雪の女王の顔が天井を向いた。氷の息を吐くために冷気を集めて

いる彼女は言葉を発することができない。だが女王にとって、まぎれもなく、必殺の一撃だった。

——一撃と、なるはずだった。

「……私を、忘れないでほしいわね」

額から薄く血を流しながら、ベラが片膝を立てる。かしの杖を支えにして、彼女は高速で言葉を紡ぎ始める。

杖の突端、その先には雪の女王の顔面がある。

不自然に鋭い顎先に向かって、ベラは力強く呪文をとなえた。

「——。これで、終わり、だあああっ！」

溢れる熱気、迸る炎。

残っているありったけの精神力をこめた、ベラのギラ。それは雪の女王の胸元を直撃し、再びその熱の虜にした。

同時にアラン、ザイルが声を振り絞る。

一歩前へ踏み出す。

歯を食いしばり、己の武器をさらに深くねじ込む。

呪文の熱で顔面が焼けそうになるにも関わらず、彼らは叫び続けた。

やがて、そのときがくる。

雪の女王の口元で凝縮されていた冷気が一気に爆発した。天を向いた女王の口から、とめどなく冷気が溢れ出て白い光の柱を作る。

まるで噴水が勢い良く、そして高く伸び上がるように。

雪の女王の魂すら飲み込んで、白い光は輝きを強めた。それは天へと昇り、薄暗さの原因とも言えるであろう黒い膜へとぶつかってはらはらと落ちてくる。同時に、北の宮殿を覆っていた膜の黒さが、また別の色となっていく。

降り積もる光。

それはまるで、雪のように。そして雪が水となって、やがて消えていくように。

雪の女王の姿は、細かな燐光となって流れていったのである。

55. 溶けた氷に陽は注ぐ

みな、同じ姿勢のまま固まっていた。

アランとザイルは自分の武器を突きだしたまま、ベラは両の手を天空に向けたまま、そしてチロルは、そんな主たちの顔を見上げたまま。

ただ荒い息だけが彼らの間で呟る。

「や……」

アランの両腕からゆっくりと力が抜けていく。

「やった……？」

「あーっ、ちくしょうっ。終わったあ！」

ザイルが半ば自棄になったように叫びを上げ、仰向けに倒れる。

ベラもまた、へなへなと膝から崩れ落ちた。

「……ふう。疲れたあ……あ痛、いたた……」

「ベラ、だいじょうぶ？」

アランが駆け寄りホイミをかける。額の傷口はゆっくりとふさがり、アランは彼女の血を拭った。ありがと、とベラが微笑む。

「やったのね、アラン」

「うん。雪の女王はもういないんだ」

「ええ。……ザイルも、お疲れさま。それと、ありがとう」

「な、何だよいきなり」

ベラから声をかけられ、ザイルがうろたえる。彼女は苦笑した。

「あなたがいなければ、私たちはきつと雪の女王に勝てなかったわ。力を貸してくれたことに感謝しているの。それにこれまでのこと、やっぱり謝らないといけないし、ね」

ふん、とザイルは寝返りを打ち、ベラに背を向けた。むっ、とするベラの肩に手を置き、アランが微笑む。照れているのがアランにはわかったからだ。

「おい、見てみるよ」

誤魔化すようにザイルは言う。

「空が、元に戻ってきたぜ」

アランたちは上空を見上げる。黒い膜は取り払われ、眩い日の光が降り注ぐ。反対に床はかつての輝きを失い、陽光を柔らかく受け止めるようになっていた。

地面を覆っていた氷が、ゆっくりと溶け始めていた。

「やっぱり、宮殿の氷は雪の女王の仕業だったんだね」

「そうね。さあ、アラン。まだ大事な仕事が残っているわ。春風のフルートを」

アランはうなずく。するとザイルが立ち上がり、「こっちだぜ」と祭壇の中を案内してくれた。

祭壇は、アランの家の地下室ほどの広さがあった。祭壇の奥に大きな箱が置かれている。ドワーフ製のものらしい重厚な箱から、薄く黒煙が上がっていた。

「ちよっと、これは一体……！」

「ああ、大丈夫だ。雪の女王が箱にかけていた封印が解けているんだよ」

ザイルが説明する。春風のフルートを受け取った雪の女王はすぐさまこの箱の中に入れ、封印を施した。どこかに運び込むつもりだったらしい。「危ないところだったわね」とベラが言った。

黒煙が完全に消え去ったのを見届けてから、ベラが箱に近づく。ゆっくりと蓋を開けた。

途端に柔らかな光が溢れ出てくる。まるで太陽を閉じ込めたように、光は部屋全体を包んでいく。心地良い温かさが体に染み込んだ。

仲間たちを振り返ったベラは満面の笑みを浮かべた。そして箱の中に慎重に手を入れる。

彼女の手に握られて出てきたのは、桜の枝のような形をした、一本の楽器だった。その美麗さにアランたちの口から自然とため息が漏れる。

「間違いない。これこそ春風のフルートだわ」

「すごい。やったね、ベラ」

「ええ！ これもみんなのおかげよ。ようやく世界に春を呼ぶことができるわ！」

胸元に春風のフルートをそっと抱く。ベラの目元には涙が浮かんでいた。

アランの隣で頬を搔いていたザイルが、ふと背を向ける。

「ザイル？」

「俺ができるのはここまでだ。後はお前たちで上手くやってくれよ」手を振る。ベラが慌てた。

「ちょ、待ちなさいよ。せめて妖精の村までは一緒に行きましょう」

「やだよ。お前らは違うかもしれないけど、俺はまだ、妖精を完全に信用したわけじゃないんだ」

「まだそんなこと言って……」

「嫌ったら嫌だ。それに……急いで帰らないと、よ」

急に落ち着きをなくすザイルにアランは首を傾げる。

「帰らないと、なに？」

「……爺ちゃんに、怒られる。きつと、すっげー怒られる」

「うわあやばい、とザイルは両手で体を抱いた。『爺ちゃん』ということだから、きつとゴースのことをだろうが、あの人はそんなに怖い人だろうかとアランは思った。

「ああっ、こうしちゃいられない！ 早く帰って謝らなきゃ！」

「ザイルってば！」

「じゃあなお前ら！ ちょっとの間だったけど、お前らに会えて良かったぜ！」

ぶんぶんと手を振り、瞬く間に駆け去っていく。その後ろ姿に向かってベラが「ちゃんとポワン様のところにも行くのよー！」と声をかけると、彼は手だけを振って応えた。

ベラが苦笑する。

「ちゃんとわかってんのかしらね、あの子」

「きっと照れてるんだよ」

「そうね。ザイルはもう大丈夫、かな」
微笑む。

ベラが手を差し出してきた。

「さ、帰りましょう。村では英雄をお待ちかねよ」

「そんな。僕は」

「いいからいいから。さ、出発！」

上機嫌な姉代わりの妖精に引っ張られるように、アランは歩き出した。例によってチロルが抗議するように唸る。

彼らの頭上で、空は抜けるように深く爽やかに広がっていた。

56. 春を呼ぶ妖精の村

北の宮殿を抜ける途中。

アランたちは不思議な一団に出逢う。

「あれは」

「モ、モンスター!？」

そう。そこに勢揃いしていたのは、さまざまな種類のモンスターたちだった。骨の体をした『カパーラナーガ』、黄色が目にも鮮やかな『ドラキーマ』、巨大な角を持った兎『アルミラージ』――多種多様な姿が一堂に会し、アランたちを見つめている。

ベラが全身を緊張させる。だがアランは剣の柄に手をやることもなく、静かに微笑んだ。

「だいじょうぶ。あの子たちは敵じゃないよ」

「どうしてわかるの？」

「目がそう言ってるから。むしろあれは」

アランが手を振ると、モンスターたちは体を弾ませて応えた。

「喜んでるみたい」

「どうして……？ 彼らはモンスターでしょう？」

「きっと、あの子たちはいじめられていたんだよ。あの雪の女王に」
そばを横切っても、彼らは手出しをしない。アランたちが北の宮殿を出て、その姿がすっかり見えなくなるまで、モンスターたちは各々の鳴き声をもって見送ってくれた。

ベラが感心したようにつぶやく。

「なるほど。だからあるとき、音はしたのに何も襲ってこなかったのね。雪の女王の影に怯えて、私たちの様子を見ていたんだ。……にしても、やっぱりアランはただ者じゃないわね」

「どうして？」

「だってそうでしょ？ 初めて見るモンスターたちの心を一瞬で見

抜いてしまうんだもの。改めて考えると、あなたが大きくなったときが楽しみというか、空恐ろしいくらいだわ」

「何か、ほめられているように聞こえない」

「だいじょうぶ。あなたは凄いい子だって私は言っているんだから。胸を張りなさいな」

ばん、と背中を叩かれる。にゃお！？と抗議の声を上げるチロルにも笑いかけ、ベラは先頭を歩き出す。その手には春風のフルートが大事に抱えられていた。

背中 of 痛みに涙目になりながら、後ろ姿からでも喜びが伝わってくるベラの様子に、アランはゆっくりと肩の力を抜いた。

――村に帰っての反応は、おおそアルカパと似たようなものだった。

いや、人間の、それも小さな子どもが成し遂げた偉業と言うことで、その注目度はさらに上だった。違うのは、周囲に集まるのがみな見目麗しい妖精族ばかりという点で、アランは大いに戸惑った。

群がる彼女たちを押しつける役割をベラが買って出る。

「はいはい。どいてどいて。急いでポワン様のところへ行かなきゃいけないんだから！」

「あーん、ベラ。もうちょっと見せてよ。小っちゃい勇者さん」

「だぁーめ！」

あからさまに邪険にするベラ。

しかしアランはしっかり見ていた。そうやって村の人からアランを守っているとき、口では迷惑そうにしていながらも表情はしっかりと笑顔だったことを。同時に笑顔の中にも、一抹の寂しさのようなものがよぎっていることを。

このような騒動に揉まれた後だったから、村の中央の巨木に辿り着き、ポワンを前にしたときは正直、ほっとしていた。

打って変わって恭しく春風のフルートを差し出すベラ。ゆったり

とした仕草でそれを受け取ったポワンは、まさしく春を呼ぶ者に相応しい可憐な笑みを浮かべた。

「よくやってくれました、アラン。心から礼を言います。ありがとうございます」

「よかったです。みんなも喜んでくれて」

「ええ。北の宮殿でのことはベラから聞きました。ザイルとも友誼を結んだと。やはりあなたにお願いをして正解だったようですね」

「ポワンさん、ザイルは悪くないんです。ただ、その」

「わかっています。いずれ、私からあの子のもとを訪ねましょう。双方の誤解、話し合えばきっとわかってもらえると私は信じています」

「ありがとうございます！ よかった」

「ふふ……。本当に素直ない子。村の皆がこれほど浮かれるのも、分かる気がしますね」

口元に手を当ててポワンが笑う。その隣に控えたベラが明後日の方向を向きながら頬をかいていた。

「そう、あなたはそれだけ大きなことを成し遂げてくれました。私の無茶な願い、聞き届けてくれて感謝します。――さて」

ポワンの表情が引き締まる。凜とした気品を身に纏い、ポワンは春風のフルートを構えた。それだけで、場の空気が神聖なものに変わる。

「これでようやく、人間界にも春を呼ぶことができます。そこでアラン、ひとつ、あなたに約束をしましょう」

「約束？」

ポワンは目を柔らかく細めた。

「この先、あなたが困ったとき、私を訪ねてください。必ず力になります。約束ですよ」

しばらく呆気にとられていたアランは、やがて満面の笑みでうなずいた。ポワンもまた、うなずきを返す。

ふとベラを見ると、彼女はこちらに向かって何度もうなずきかけ

ながら目尻一杯に涙を溜めていた。それを見た瞬間、アランはここでの役割が終わったことを強く意識した。

ありがとう、ベラー——そう、口の動きだけで伝える。

また会おうね、アラン——ベラは、そう返してくれた。

無言のやり取りを見届けたポワンは、そっと、春風のフルートに唇を当てた——

アランはそのときの光景を目に焼き付けた。

世界に温かな春の風と、光と、そして色彩が広がっていく、神秘的で、涙が出るほど壮大なひとときを、生涯忘れないと心に誓う。

それはまた、妖精の村で苦楽を共にした、姉のような人との別れのときだったから。

そして。

アランとチロルは、桜色に染まった妖精の村を、その日のうちに後にした——

57. 不思議な旅人と残された言葉

ひんやりとした地下室の空気が、どこか懐かしい。

人間界に戻ったアランは、改めて妖精の村のことを思い出した。

「夢みたいだったな」とつぶやいたとき、目の前にはらはらと舞い降りる小さな欠片があった。

手を差し出すと、欠片は吸い込まれるようにアランの掌に収まる。

「あ……」

それは一枚の桜の花びらであった。地下室の天井から降ってくるなどまずあり得ない、小さな小さな春の便り。

微笑み、花びらをぎゅっと握りしめる。間違いなく夢じゃない、そう心に刻み込み、アランは晴れやかな気持ちで歩き出した。

ところが地下室を出た途端、血相を変えたサンチヨに掴まってしまった。

「ああ、坊ちゃん！　こんなところにいらっしゃったのですか！　お姿が見えないからてつきり先に行かれたかと」

「ど、どうしたのサンチヨ」

「ええ。先ほどラインハットの城から使者の方がいらっしゃって。なんでも、国王様が直々に旦那様をお招きしたいとおっしゃられている、と。旦那様も私もずいぶん坊ちゃんを探したのですが……たった今、旦那様は村を出られました！」

「ええっ!？」

「急げばまだ間に合うかも知れません！」

その言葉を聞き、アランは取るものも取らず慌てて家を飛び出した。せっかく父が自分も連れて行くつもりになってくれていたというのに、置いて行かれておしまいではあんまりだ。

急ぐ気のままに一歩外へ足を踏み出す。その途端、アランは「あつ……」と声を漏らして立ち止まってしまった。

温かな風と共に目に飛び込んできたのは、枯れ木のようなだった桜

にぽつぽつと花がついている姿だった。ポワンと春風のフルートの力は、本当にこの世界に春を呼ぶものだったんだと実感する。

「……っと、いけない。お父さんを探さなきゃ!」

頬を叩き、再び走り出そうとする。すると広場でたき火をしていた男性がアランに気づいて声をかけてきた。

「お、アラン。パパスさんを探しているのかい?」

「うん。急いで追いかけないと、置いて行かれちゃう!」

「はて。パパスさんなら教会の方へ行かれたぞ。何でも旅に出る前にお祈りをしていくんだとか」

「……え? そうなの?」

男性の指差す方向を見つめ、アランは肩を落とした。それならば急ぐ必要はない。心配してちょっと損したなと思いつつ、男性に礼を言っ、今度はゆったりと歩き出した。

教会の前に着くと、若いシスターが何やらきよろきよろしていた。何をしているのか気になったが、まずは父に会うのが先だと思い、声をかける。

「こんにちは。お父さんは、まだ中にいますか?」

「……、……」

「あの? シスターさん?」

「はい! ? ……あ、何だ。パパスさんのところのアラン君じゃない?」

あからさまに落胆した様子がさすがに引っかけり、アランは尋ねた。

「どうかしたの?」

「ううん。別に何でも、ないんだけど。うーん……」
言うなり、またきよろきよろと辺りを見回す。

「何かさがし物? まだ何かなくなっているの?」

ベラはもう妖精の村に帰ったはずなのに、とアランは首を傾げる。するとシスターは「そうじゃなくて」と首を振った。なぜか顔が真っ赤だ。彼女は意を決したように言う。

「ねえアラン君。ちょっと前に教会の前にいた男の人、知らない？」

「男の人？」

「そう。背が高く、遅しくて、おまけに凄く格好いい素敵なひとよ。ああ……、どこに行かれたのかしら……」

「うーん」

記憶を探る。するとひとつだけ思い当たることがあった。

あれはベラに出会う直前、サンチヨの『さじ』を探して村中を歩き回っていたときだ。

ちょうど今、シスターが立っている場所に、ひとりの男性が佇んでいた。身なりこそ冒険者然とした薄汚れたものだったが、身に纏う雰囲気は明らかにただの旅人ではなかった。どこかパパスに通じるところがあると感じたアランは、思わず彼に話しかけた。

そのときのことを伝えると、シスターは飛び上がって喜んだ。

「そう！ その人よ！ いつの間にかいなくなっちゃって。どこに行ったか、知らない？ ああ、そうじゃないわね、どこに行くつもりだとか、そんなことは話さなかった？」

「僕はちよっとお話ししたぐらいだけど、そういうことは言っていなかったよ。あとは……」

「あとは？ 何かあるの！？」

「……うーん、別にないや」

アランが苦笑すると、シスターはなあーんだ、と慨嘆した。よほど期待していたらしい。申し訳ないと思いながら、アランは再び、あの風変わりな男性のことを思い出していた。

確かにあの人は、シスターが望むような話はしていなかった。他愛のない世間話で済ませられるものであったし、そんなに長い時間立ち話をしていたわけでもなかった。

あとは、強いて言えばアラン自身がちょっとだけ気になったことがあったぐらいで――

「あ、いけない！ お買い物頼まれているんだった！ あーもう、やっぱり行かなきゃいけないよね！？ さっさと済ませちゃわない

と！」

落ち込んだ顔から一転、色々と文句を言いながらシスターは慌てて駆け出していった。

その後ろ姿を見ながら、アランはふと、懐に手をやった。道具袋に大切に収められている金色の宝石を手取る。レヌール城でビアンカから友情の証としてもらい受けた、あの綺麗な宝石だ。

男性は、おそらくまたまたま袋の中身が見えたのだろうが、この宝石に興味を持った。見せてと言われたときには少々警戒したものの、何度か眺めただけですぐに返してくれたので特に何も言わなかった。その後彼は礼を言って立ち去り、それっきりどこに行ったのかもわからない。

去り際、彼が言った台詞が脳裏に蘇る。

『いいかい、坊や。どんなにつらいことがあっても、負けちゃ駄目だよ』

「今まで忘れてたけど……ふしぎな旅の人もいるんだな」

アランはつぶやく。気持ちを切り替え、父に会うために教会の扉を押した。

58. 憧れから、目標へ

パパスは長い祈りを終えたところだった。今まで姿を見せなかったことで怒られるかと思っていたが、意外に何も言われなかった。その代わり、どこか物思いに耽る父の姿をアランは見た。

「……さて、あまり時間をかけても陛下に申し訳ない。そろそろ出発しよう」

剣を提げ直し、パパスは言った。父の指示で、アランは改めて旅装に着替えを済ませている。

父の後ろにつき村を歩く。近場に行くのとはまた違った姿に、早速村の人から声をかけられた。

「おや、パパスさん。またどこかへ？」

「何だよ。旅に出ちまうのか。ようやくと春の陽気が戻ってきたのに、気忙しいなあ」

「今度はすぐに戻って来られますか？」

道行く人々のこうした質問に、パパスは律儀に答えていく。もつとも、行き先がラインハット城で、国王直々のお声かけと聞けば、村人は皆納得したようにうなずいた。「さすがパパスさんだ」「勇名はラインハットにまで轟いていると見える」と、口々に彼を褒め称えた。

その様子を後ろから見ていると、アランは不思議な気分になった。以前なら誇らしげに胸を張るところだが、今は少し違う。人々の称賛を浴びることは、それだけの努力と冒険を繰り返してきた証拠だということだが、今のアランにはわかる。自分の父がそうした道を歩んできたことに誇りを持つと同時に、自分もいつかあなりたい、そのためにはもっと努力をしなければならなし、強くならなければならなしと思うようになったのだ。

単なる憧れから、明確な目標として父の背中を見るようになって

いた。

「どうした、アラン？ さっきから黙って」

村の入り口が近づいたところで、ふとパパスが振り返った。アランは首を振って、「何でもない」と答える。

首をかしげる父の隣に並び、アランは静かな声で言った。

「ねえ、お父さん」

「ん？」

「僕、いつかお父さんの隣で戦えるぐらいに強くなるから」

真っ直ぐ前を見つめながら、そう言い切る。自分でも驚くほど、力みなく言葉にできた。

パパスがまじまじとこちらを見つめてくる。すると途端に照れくさくなって、アランは父の顔を見上げ、苦笑した。

パパスが破顔する。

「うむ。期待していよう。お前は私の息子だ。きっと強くなる」

「うん」

親子並んで、歩く。二人の邪魔をしないように、チロルがことごといていく。彼女はアランとパパスの特別な繋がりを感覚で理解しているようだった。

最後に駆け寄ってきたのは、村の門番だった。

「お疲れさまです、パパスさん。お話はすでに聞いていますよ」

「うむ。行き先はラインハットだが、期間がどれほどになるかまでは陛下からお話を伺ってみたいことには何とも言えぬ。私が戻るまで、村をよろしく頼むぞ」

「ええ。承知しております。もっとも、こんな平和で何もない村を襲う連中がいるなんて、ちょっと考えられないですが」

門番がにっこりと笑う。パパスは苦笑した。

「では、行ってくる。アラン、行くぞ」

「うん。じゃあ、行ってきます！ お土産話、ちゃんと持ってくるから！」

「おう、期待しているよ坊や」

手を振りながらアランは歩き出した。

門番はずっと手を振り続けてくれていたが、やおら駆け出して大声で呼びかけた。

「行ってらっしゃい、パパスさん！」

その声にパパスは一度振り返り、大きく頷いた。

門番の姿が見えなくなる。アランは言った。

「いい人だね、やっぱり」

「うむ。住む人々の人柄こそが、サンタローズの良さだからな。こちらでも早くお役目が終わられるよう、頑張らねばなるまい」

「そうだね、頑張るよ僕」

「よし。ラインハットは大きな街だ。お前もいい勉強になるだろう。少し遠出になるが、構わんな？」

「うん！」

アランは満面の笑みでうなずいた。

59. ラインハットの関所にて

サンタローズの村を出て、一路東へ。

やがてアランたちは大陸を縦断する大きな河に行き着いた。この河を境にして対岸がラインハット国領である。時折見事な帆船が下流へと下っていくのが見えた。

船が通るほどだから水深もかなりのものだろう。だが、近くに河を渡るための船や船着き場の類は見当たらない。一体どうやって渡るのだろうと思っていると、パパスはある建物に向かって歩き始めた。

河沿いに建設された、強固な門構えの一軒家である。父の話だと、関所として兵士の詰所となっているとのことだった。

驚いたのは、建物の外だけでなく中にも重厚な門が設置してあることだった。石畳の上を歩くと、すぐ門番に声をかけられた。

「止まれ。ここはラインハットに続く関所である。まずは名乗られよ」

硬い口調にアランが姿勢を正す。その肩に手を置き、パパスは堂々と告げた。

「失礼。私はサンタローズのパパスと申す。こちらは我が息子のアラン。陛下直々のお呼びを頂戴し、これからラインハット城へ向かうところである」

「おお、貴方がパパス殿。失礼いたしました。お話は何っております。さあ、どうぞお通りください」

表情を和らげ、門番は快く門戸を開いた。口調と態度の変わりようにアランは困惑した。門番の横を通りすぎるとき、小さく手を振られたことにさらに驚く。

パパスは「真面目だが、どうやら中身は気の良い男らしいな」と言った。そういうものなのかとアランは思った。

関所内の扉を過ぎると、地下に降りる巨大な階段が現れた。丁寧に磨かれた石が規則正しく積み重なっていて、それを見たアランはレヌール城の内部を思い出した。地下通路の中心は旅人の足跡で幾重にも汚れが染みついている。よく見ると馬車らしき轍まであった。「この通路は河の下を掘って作られている。ラインハットの技術と知恵の賜物だ」

「馬車まで通るの？」

「うむ。ラインハットへ渡る陸路の要だからな。商隊も多くここを利用する。馬車が通るときは先ほどの階段に専用の板をかぶせるのだ」

「へえ……」

「いつもは旅人などで賑わっているのだが、今日は珍しく閑散としているな」

パパスの言葉通り、広い通路を歩くのは今のところパパスとアラン（とチロル）だけである。足音に混じり、かすかに水音が聞こえる。時折感じる振動は、船が真上を通っているからだろうか。

出口が見えてきた。ラインハット側の出入り口は警備が薄く、地上へ上がる階段の前に小さな小屋があるのみだ。

警備をしていた兵士に会釈をし、階段を上る。途端に眩しい陽光が目に入ってきた。

階段を上りきってすぐ、人影に気づく。パパスが見上げると、一人の老人が出入り口の縁に腰掛けて背中を向けていた。どうやら河を眺めているようだ。微動だにせず、背中からは哀愁すら漂っている。

パパスが声をかけた。

「もし、ご老人。どうかなされたか」

「ほっといてください。じっと考えておるのじゃから。この河の流れを見据えながら、国の行く末を、な」

にべもない答えが返ってきた。こちらを振り向きもしない老人に、パパスは「ふむ……」と小さく漏らす。

「この陽気とは言え、あまり河の風に当たりすぎていてはお身体に障りますぞ。どうかご自愛くだされ。では、私はこれにて失礼つまつる」

親切で忠告したのだろうし、老人の邪魔をしては悪いとも思っただろう。

パパスはそのまま、『元来た道を引き返していった』。

堂々とした態度で階段を『降りていく』父の姿に、アランは置いてけぼりをくらって立ち尽くす。思わず言った。

「……お父さん？ どこ行くの？」

「！」

自分のしていることに気づいたパパスは急いで駆け戻ってくる。

呆然とするアランの前でひとつ咳払いをして、何事もなかったかのように歩き出した。

「お父さん……」

「さて、これで関所は越えた。ラインハットまでもう一踏ん張りだな」

「お父さん、もしかしてさっきのは、わざとじゃなかったの？」

「……………むう」

頭を掻くパパス。

しばらく意味も無い咳を繰り返しながら先へと進む父の姿に、アランは思わず吹き出してしまった。父の思わぬ一面を見た気がした。やっぱり、お父さんとの旅は楽しい――

笑みを浮かべ、アランは心からそう思った。

ラインハット城とその城下町が見えてきたのは、それから数日後のことである。

60. 思わぬ再会

遠目からでもその大きさがわかる街など、初めてだった。

密集する民家がまるで壁のように街の外縁を作り、煙突から漏れる煙で空は薄っすらと陰り、細い路地を子どもたちが走り回っている。

そしてひとたび目を正面に移すと、そこはラインハット城に続く目抜き通りで、まるで人々が川の流れのように連なり、歩いていた。買い物袋を持った住人がいる、大きな背嚢を背負った旅人もいる、馬もいるし、荷車も多く行き交っていた。

興味津々——というよりは、あまりの巨大さに圧倒されて、アランは何かの呪いにでもかけられたかのように周囲を忙しく見回していた。口は半開きで、言葉はない。

「アラン」

パパスに声を掛けられてもしばらく気づかないほどだった。

「迷子になってはいけない。さあ、乗るのだ」

「え？」

最初、何を言われたのか理解できなかったが、しゃがんだ父の背中を見て、肩車をしてくれるんだとようやく理解する。頬がだだ緩みになるのを、アランは必死に堪えた。

恐る恐る、乗る。するとチロルが軽い身のこなしでパパスの背を駆け上がり、アランの胸元、ちょうどパパスの頭の天辺に陣取った。ふんっ、とパパスが立ち上がる。

途端、世界が大きく広がった。

「うわぁ……」

今までは人々の腰しか見えなかった景色が、今はどこまでも広い。

「ここがラインハットの城下町。どうだ、大きいだろう」

「うん……すごいよ」

「ラインハットは大国だが、閉鎖的ではない。こうして人々に門戸を開いている。だからこそ、これだけの人が集まる」

人の自由な往来は平和の証なのだとパパスは言った。戦や、モンスターから防衛を余儀なくされるところでは、こうした街作りは不可能なのだ、と。

すごいね、チロルすごいね——しきりに相棒に向かって語りかけるアランの様子に、パパスは微笑んだ。ふと、空を見上げる。

「ふむ……。お伝えしていたよりもずいぶん早く到着してしまったな。日はまだ高いが……アランよ」

「なあに、お父さん」

「今日のところは一度宿を取り、明日、改めてお伺いを立てようかと思っている。構わぬか？」

「おうかがい？」

「これほど大きなところだ。陛下もお忙しいことだろう。いきなり訪ねるのではなく、一度来訪の旨を伝え、それから登城するのだ」

「難しいんだね」

「儀礼というものだ。それに、久しぶりの長旅だっただろう。アランは体を休める必要がある。せっかくだ、この街を見学するのもよからう」

「え？ いいの！？」

「うむ。城への伝達が終われば、私も体が空くからな。一緒に街を見て回ろう」

「やったーっ」

諸手を挙げて喜ぶアランにつられ、チロルも「にゃー」と尻尾を立てた。

それからアランたちは、宿を取る前に城へ連絡するため、街中にある詰所を訪れた。ここに控えている兵を通して言伝を頼む仕組みである。

パパスが担当の兵士と話し込んでいる間、アランは詰所の入り口に腰掛けてチロルと遊んでいた。そこへ、一台の馬車がやってきた。

箱形の荷台も車輪も頑丈な拵えで、華美というより実用を重視した造りである。

扉が開き、小太りの男が現れる。何とはなしに横目で様子を見ていたアランは、首を傾げた。どこかで見た記憶があったのだ。それは相手も同様だったようだ。

「んん？ 坊や、君はどこかで……」

「アランよ、待たせたな。手続きが終わったので宿に――む？」

そこへ、兵士との話を終えたパパスが出てきた。詰所の入り口で小太りの男と鉢合わせる。男はアランとパパスを交互に見て、やおらに何かを思い出したようだ。

「お、おお！ 思い出しましたぞ。あなたはほら、ビスタ港でこの子と一緒に船を降りられた……」

「……………おお！ あなたはもしか、ルドマンさんですか？」

「覚えていていただけましたか！ いや、これは奇遇ですなあ！

その節は、我が娘が粗相をいたしました」

「いえ。……しかし、ご一行は船で別の大陸に渡られたのでは？」

「はは。実は色々ありましたな。娘たちをこちらにある教会に送り届ける最中なのです」

「教会？」

「ええ。見習いの修道女として、まあ何と言いますか、花嫁修行をさせているのですが、今回高名な教師様がここラインハットにいられてお話をされると聞きましたな。ちょうど商談で足を運ぶ用がありましたので、勉強がてら、預け先の修道院に無理を言って連れてきたのです」

盛り上がる大人たち。その背後で、小さな影が馬車の中に見えた。アランがそっと覗き込むと、かつてビスタの港で出会った可憐な少女二人が、驚いた表情でこちらを見つめていた。

61. フローラとデボラ

「まさかこのような形でお会いするなんて、思ってもみませんでした」

空のように青い髪が爽やかな少女――フローラが微笑む。歳の割にしっかりとした喋り方なのは相変わらずだった。膝上にチロルを乗せ、柔らかな仕草で撫でている。実に気持ちよさそうにチロルは目を細めていた。

「ほんと。ま、おかげでこうしてパパの目から逃げられたワケだけどね」

漆黒の髪を揺らし、くくつ、と楽しそうに笑うもう一人の少女――デボラ。こちらは相変わらずというより、予想通りの態度といった感じだ。ちなみにチロルは彼女に決して懐こうとしなかった。理由はアランにもわからない。

聞いた話では、フローラはアランと同年の七歳。デボラはその三つ上の十歳なのだそうだ。だが喋り方と態度だけみれば、どちらが年上なのかわからない。

三人は宿の敷地内にある噴水でお喋りをしていた。フローラたちはともかく、アランが泊まるには少々豪華すぎる宿である。

それというのも、パパスが宿を探しているという話を聞くなり、「では私が滞在している宿をご紹介しますので」と言い出したルドマンによって、半ば強引に連れてこられてしまったからだ。もちろんあの父のことだから何度も丁重にお断りしたが、ルドマンは聞かなかった。「お父様は気に入った相手に対してとても気前が良いところがありますから……」

「そうそ。頑固なくらいにね。向こうがうなずくまで、とことんだもん」

ルドマンの様子を姉妹二人はこう評する。

もつともフローラ曰く、「お父様は人を見る目がありますので、パパス様のお姿に何か感じるものがあつたのではないでしょうか。船の中でも、しばらくパパス様の話題を出していたくらいですし」このことで、あらかじめ目はつけられていたようだった。

パパスもルドマンも、今日は一日ゆっくりする予定。子どもたち同士遊んできなさいと送り出されて、今に至る。

アランにしてみれば、下船のときに感じたときどきの続きを味わっているようで、妙に落ち着かない。それほど、目の前の少女二人は変わりなく可憐だった。

「これからどうしましょうか。ここのお宿は広いし庭も綺麗だから、みんなで散歩でも……」

「ちっちゃ。甘いよフローラ」

片目を閉じたデボラが熟知り顔で指を振る。その様子を見たフローラの表情が曇る。

「姉さん、まさか」

「うっふっふ。そのまさか！　せっかく口やかましいパパの監視がなくなったんだもん。抜け出さない手はないわ！」

言うなり、デボラは駆け出した。速い。「ちよつとそこらを探検してくるわー」という台詞を残し、あつと言う間に建物の中に消えてしまった。

アランがぼかんとしていると、フローラが「もうっ！」と唸った。らしくない仕草で拳を握りしめる。

「姉さんってばそればかり！　アラン様、追いかけましょう！」

「え？　え！？」

「放って置いたらぜったいに外に出てしまいます！」

駆け出すフローラ。彼女の意外な積極性を見た気がして、アランは大いに戸惑った。

しかしデボラに比べ運動には自信が無いのか、それとも彼女の性格のゆえか、その走りは楚々としてゆったりだ。アランは彼女を追

い越さないよう、加減をして走った。チロルもその後を追う。

回廊を抜け、通路を走る。姉妹ならではの『勘』でも働いているのか、フローラはいくつかの角をさっと曲がっていく。思わずアランはたずねた。

「どうしてフローラは、デボラの行く先がわかるの？」

「前に一度、この宿には泊まったことがあるんです。そのときにたどった道ですから……でも、やっぱり私では追い付けないかも……」
行けども行けども後ろ姿が見えない状況に、さすがに不安になってきたのか、フローラは立ち止まるなり小さくつぶやく。

「デボラ姉さんはとても自由な人。でも、もう少し私やお父様たちの気持ちを考えてくれてもいいのに……いつも心配で」

しゅん、とうつぶくフローラ。奔放な姉に手を焼きながら、それでも大切に想っていることがよくわかった。アランはうなずく。

「フローラ、行こう」

「アラン様？」

「きっとデボラだって、そこまで無茶はしないよ。だってフローラがこんなに心配してるんだもの。それに僕、いろんな所を見て回りたいって気持ち、わかるから」

「……はい。ありがとうございます」

「それから」

アランは笑みを浮かべ、指を立てた。さっきからずっと気になっていたことがあったのだ。

「僕の話はアランでいいよ。言葉づかいも、普通でだいじょうぶだから。僕たち同じ年じゃないか。そうしてくれた方が、僕は嬉しいな」

「アラン様……」

「ほら、また」

「あつ、ご……ごめんなさい。えっと……アラン？」

「うん！ 僕たち、これから友達だよ。もちろんデボラも！」

「……はい！」

はにかんで俯いていたフローラの表情に、笑顔の花が咲いた。二人は連れだって先を急いだ。

62. 隻腕のスライムナイト

デボラの姿は、意外に早く見つかった。宿の廊下の奥、裏庭に面した窓枠に腰掛けていたからだ。しれっと「遅かったじゃない」と言う彼女は、まるでフローラがここに来ることを待っていたように見えた。

息を切らせるフローラのすぐ隣に立っているアランを見て、デボラは「ふうん」とつぶやいた。

「あんた、確かアランだっけ。あんまり気にしてなかったけど、よく見ると小魚みたいに変な顔ね」

「ござ……？」

「もう姉さん！ アランに失礼でしょう？」

「おやー、フローラと仲良くなってるんだ。あんたなかなかやるねえ」デボラの言っていることがよく理解できず、隣で顔を赤くするフローラの態度もいまいちピンと来ないアランは、思ったことを素直に口にした。

「でも僕はデボラとも友達になりたいと思ってるよ？」

「は？」

口をあんぐりと開けて固まるデボラ。直後、彼女は腹を抱えて大笑いし始めた。

「ぷははははっ！ 何だいそれ！ あんた本気で言ってるの？ こりゃ驚いた。ははははっ！」

「姉さん！」

「いやいや、あたしはあんたを気に入ったよ。変な顔の上に変な奴だなんて、すごく面白い！ 特別にあんたを下僕にしてやるから、感謝しなさいよ」

指を突きつけられた。何となく、あんまり褒められていないことは理解できたアランは眉間に皺を寄せ、首を傾げた。

するとフローラがぼつりとつぶやく。

「姉さん。それじゃあ言っていることがヘンリー様と同じですよ」
「あ!？」 あたしをあのクソガキと一緒にすんじゃないよ、フローラ!」

途端に激昂するデボラ。アランがフローラを見ると、彼女は曖昧に笑った。フローラにとってもあまりよい思い出ではないらしい。

「とにかく! フローラ、アラン。ついておいで」
「どこに行くの?」

「決まってるじゃない。面白いところ、よ!」

言うなり、彼女は身を翻した。窓から外へひらりと出る。そこから手招きをするので、アランとフローラは顔を見合わせ、仕方なく後についていった。

デボラの言葉は正しかった。

初めての巨大な街を、同世代の友人と駆け回るのは、アルカパでビアンカと歩いたとき以来だった。デボラはこういう遊びにかけては天性の才能を持っているのか、彼女が行くところではアランもフローラも、そしてチロルまでも大いに楽しめた。もともと、それ以上にはらはらしたりむかむかしたりすることが多かったが。

出店を冷やかし、変わった形をした民家を間近で見ようと庭へ侵入し、路頭で行われていた迫力ある興行に目を輝かせて――そうこうしているうちに、気がつくとアランたちは見知らぬ裏路地へと迷い込んでいた。

「あたしが道を覚えているから、だいじょうぶよ」

とデボラが胸を張るが、何となくフローラは心配そうだった。それに運動が苦手な彼女のこと、だいぶ疲れがたまってきたようで、若干顔色も悪かった。

そろそろ戻ろうよ、とアランが提案したときである。

すぐ近くの家から、物が崩れ落ちる音が聞こえてきた。硝子の類も含まれていたのか、けたたましい破碎音まで混ざっていた。

直後、くだんの家からひとつの影が飛び出してくる。凄まじい速度でこちらに向かってきて――アランたちの数歩手前で、ぴたりと止まった。

がしゃん、と鎧が擦れる音が聞こえた。アランたちは目を見開く。異様な姿だった。

全身を甲冑で覆っている。使い古しているせいか刀身の輝きがくすんでしまった長剣を右手に握り、そこにあるはずの左腕は肩からごっそり無くなっていて、代わりに大きな盾を体側たいそくに密着させるように装着していた。

そして、何より。

『彼』がまたがっているのは馬ではなく、巨大なスライムだったのだ。

「ス……」

フローラが青い顔をする。

「スライムナイト……！ 魔物の騎士が、どうしてこんなところに……！」

「へえ。こいつがねえ」

怯える妹に比べ、姉は挑戦的な笑みを浮かべている。まさか素手で相手をするつもりなのだろうか、拳を作って掌に叩き付けている。うっすらと毛を逆立て、静かに警戒心を露わにするチロルの横で、アランは銅の剣に手をやった。だが、抜くことはしない。彼の視線は、馬代わりのスライムが加えている小さな麻袋に向けられていた。険しい表情を浮かべながらも、そのスライムがアランたちと対峙するのを嫌がっているように見えたからだ。それはスライム上の騎士も同様だった。

隻腕のスライムナイトは剣の切っ先をアランたちに向けると、良く通る声で言った。

『人の子よ。怪我をしたくなければ、そこをどきなさい』

口調は丁寧だが、それは紛れもない『警告』であった。

63. 攻防の中で

「はっ、言ってくれるじゃないのさ。偉そうに」

デボラが鼻で笑う。度胸が据わった態度にアランは驚くが、すぐに彼女の頬に伝う汗に気づく。

「デボラ、モンスターと戦ったこと、あるの？」

「は？ あるわけないでしょ、そんなの」

囁きあう。それでよくここまで好戦的になれるものだ、アランは半ば感心した。彼女は道ばたに転がっていた木桶を引っ掴み、思い切り振りかぶった。

「でもね。例えばモンスターだろうが何だろうが、戦ったことがあるうがなかろうが、あたしはああいいう風に命令する奴が大ッ嫌いなんだよ！」

デボラの気魄に、スライムナイトが身構えた。

「それでも、食らえっ！」

ぶん投げる。放物線を描いた木桶はあやまたずスライムナイトの頭部へと向かう。だが直撃する前に、スライムナイトの一閃が木桶を空中で切り裂いた。

撒き散らされた破片の中から、スライムナイトが突進してくる。

虚を突かれたデボラは息を呑んだ。フローラが悲鳴を上げる。

「姉さんっ、危ないっ！」

「……ちっ！」

デボラが舌打ちした瞬間、彼女の前に躍り出る影があった。アランである。

抜剣の勢いを利用して、スライムナイトの斬撃を正面から受け止めた。重い衝撃が両肩にかかる。

「アラン！ あんた」

「下がってデボラ……。チロル、ふたりを守るんだ！」

主とともに飛びかかろうとしていたチロルは、不満の声を上げながら爪を収めた。デボラの服を噛み、フローラの元まで引っ張ろうとする。

「ふっ！」

呼気に合わせて剣を振るう。スライムナイトの剣を弾き飛ばし、彼を大きく後退させた。再び剣を正眼に構えるスライムナイト。その姿は実に堂に入ったものだった。

アランは胸の内に微かな違和感を覚えた。だが体は勝手に動く。空いた手に呪文の力を集中させた。

「――、バギ！」

風の呪文。途端に空中に現れたつむじ風が、鋭い刃となってスライムナイトに襲いかかる。

これで相手の足が止まれば、みんなを連れて逃げられる――そうアランは考えていた。

先ほどの一撃を受けてみてわかった。スライムナイトは、まだ実力の全てを出しているわけではない。デボラへの攻撃も、おそらく単なる威嚇、本気ではなかったのだろう。

機を窺うアランの前で、スライムナイトがバギの直撃を受ける。その直前、くわえていた麻袋をスライムは口の中に入れた。大事な物を守るようにうずくまる。騎士の方もそんな相棒を庇うように盾を前面に向け、姿勢を低くした。

頭部を全て覆った兜の覗き穴、そこから感じた強い意思から、アランはスライムナイトの真意をおぼろげながら悟った。ぐっと拳を握りしめ、バギの呪文を霧散させる。

防御態勢を解いたスライムナイトはほぼ無傷だった。だがアランは肩の力を抜き、そして銅の剣を鞘に収める。「アラン!?」「ちよっと、何してんだいあんた!」と、フローラとデボラが騒ぐが、アランは取り合わなかった。すると相手の方も剣の切っ先を地面に向けた。そして人間の騎士が行うのと同じように、上半身を傾けて礼を取ったのだ。

『感謝します。人の子よ』

相棒のスライムが再び口から麻袋を取り出し、くわえた。そして再び、スライムを駆って走り出した。

道を空けたアランの横を通りすぎるとき、彼はアランに言った。

『見事な腕前です。あなたは将来、良き遣い手になるでしょう』

アランが何か答える前に、隻腕のスライムナイトは風のように去っていった。

64. 少女たちの見つめる先

裏路地の奥に消えていったスライムナイトを確認して、アランは大きく息をついた。

まだ心臓がドクドク鳴っている。

本当に強い者と対峙するとかこういう気持ちになるんだとアランは思った。――が、感慨に耽る間もなく、デボラによって胸ぐらを掴まれる。

「ちよつとアラン！ あんた、あたしの下僕でしょ。何でご主人様に立てついたモンスターを逃がすのよ！」

「いや、だけど」

「口答えしない！」

ぴしゃりと言われ、アランは目を丸くした。するとすかさず、フローラが間に入る。

「姉さん、そんな言い方はないわ。アランは私たちを助けてくれたのよ。きちんとお礼を言わなきゃ」

アランに向き直る。穏やかな微笑みを浮かべながら、彼女もまた興奮冷めやらないのか、血色が良くなっている。

「ありがとう、アラン。あなたのおかげで助かりました。でも驚いたわ。アランがこんなにも強かったなんて。私、目の前で攻撃呪文を見たのは初めてです」

「ああ、あたしもそれ思った」

デボラもうなずく。

「今度あたしに教えなさいよ。下僕だけが覚えているなんてとても癪だわ」

「駄目よ、姉さん。呪文はたゆまぬ研鑽と勉学の果てに身に付けられるものですからね」

「相変わらずフローラは小難しい言葉を使うねえ。心配しなくても、

この私が身に付けられないはずないじゃない。そんなたいそうなことをしなくても、なるようになるわよ。ねえアラン？」

思わずうなずきそうになってアランは苦笑した。自分の経験から言えば、どちらかというどデボラの言葉の方が正しい。ただ、外の世界に出ずモンスターとも戦った経験がない人が呪文を覚えようとしたら、それはやはり、努力や勉強が必要なのだろうと思う。

「それにしてもあのスライムナイト、少し変わったお方でしたね」「どういうこと？」

「いえ、書物で読んだ限りですが……片腕しかないスライムナイトは希少種なんだそうです。それに私たちに対しても丁寧な言葉遣いで話されましたし。何より、こんな人里に単騎で、しかも民家を荒すような真似をするなんて」

「きつと事情があるんだよ。とても大切ななにかが」

「はは、まっさか」

「あるよ。あの人はそういう目をしていた」

スライムナイトが去っていった方を見て、アランは言う。フローラとデボラが口を閉じて、互いに顔を見合わせた。

「アランって、不思議な人ですよね……」

「変な顔で変な奴で、おまけに言うことまでおかしいとなると、さすがのあたしもお手上げだわね」

デボラが両手を挙げる。呆れたような口調ながら、その表情には笑みが浮かんでいた。再会した当初のような、見下す態度が薄れている。フローラの顔にも柔らかな微笑みがあつた。純粹に尊敬の眼差しで、アランを見つめている。

何となく居たたまれなくなって、アランは言った。

「そろそろ戻ろうよ。お父さんたちが心配してる」

「そうですね。遅くなってしまうましたし、お父様たちに謝らなければ」

「なに言ってるのよフローラ。あのパパのことだもん、黙ってりゃ気づかれないって」

相変わらずのデボラを先頭に、アランたちは宿へと戻って行った。

翌日。

パパスのもとに早速、城から許可が下りた。ルドマンたちはしばらくラインハットに滞在するため、ここで別れることになった。

フローラとデボラを両脇に従えた彼の見送りを宿の入り口で受ける。昨日のことはやはりルドマンは気づいていたようで、彼女らふたりは叱責を受けた。殊勝に反省するフローラの手前か、小言だけで済んだ様子をアランは見ていたが、今このときのデボラのふて腐れた様子を見ると、どうやら彼女だけ後々盛大な雷が落ちたようだ。ちなみにパパスはもう、アランにどうこう言うことはなくなっていた。フローラやデボラと親しく話している様子を見ただけで納得したようである。

パパスが頭を下げた。

「ではルドマン殿。此度は大変世話になり申した」

「いやいや。私の方もあなたと非常に有意義な会話ができました。

元は十分過ぎるほど取れたと思っていますよ」

「恐縮ですな」

「儲けの話に関して、商人は嘘はつきませんぞ。はっはっは」

豪快に笑うルドマン。パパスを気に入ったというフローラの話は本当だったんだなとアランは思った。

そのフローラ。しばらく父の隣で大人しく控えていたが、いざ出発というとき、やおら駆け出した。アランの前に立ち、その両手を握る。

「また逢いましょうね、アラン。それまでどうかお元気で」

「うん。フローラもね」

「はい」

「ほんと下僕としてあたしの身代わりをさせたかったけど、仕方ないわね」

デボラも側にやってきて、アランの背をどんと叩く。彼女は、うつむいて今にも泣きそうな妹に声をかけた。

「ほらフローラ。そんなめそめそするんじゃないよ。別にこれっきりってわけじゃないんだから。同じラインハットにいるんだし、またばったり会えるわよ。つーかアラン、速攻で用事を終わらせてこっちに来なさい。これは命令よ」

「姉さんたら……」

「はは」

彼女らなりに別れを惜しんでくれているとわかった。この見た目も性格も異なる可憐な少女たちに、情けない顔は不要だとアランは思った。

「それじゃあ、またね」

爽やかに言う。フローラとデボラは揃って頷いてくれた。

6.5. ラインハット城と世界地図

「交流できたか？」

ラインハット城への道すがら、ふとパパスが尋ねてきた。かたわらで父の大きな手を握りながらアランはうなづく。

「とっても楽しかったよ。フローラは物知りでおだやかな子だったし、デボラは面白いことたくさん知ってた。まあ、それで困ったこともあったけど……」

「そうか。さすがはルドマン殿のご息女だな」

サラボナという街で別荘付きの大きな住居を構えるルドマンは、同時に世界を股にかける豪商だとパパスは話した。彼の知見や四方山話は、パパスにとっても大いに益になることだったらしい。

「アラン。お前にはこれまで友人を作る機会をなかなか与えてやれなかった。今度の出逢いは何かしらの縁があつてのことだろう。ここの仕事がどれほどのものになるかはわからんが、折を見てまた彼らのもとを尋ねてみるとしよう。しばらく滞在されるそうだからな」

「うん。そうだね」

チロルが「ふぐるうう……」と複雑そうに鳴いた。フローラに逢うのは嬉しいが、デボラに逢うのは勘弁したいらしい。アランは彼女の頭を撫でた。

今日も相変わらずの人通りの中、目抜き通りを歩く。

やがて大きく深い水堀に囲まれたラインハット城が眼前に広がり、これもまた巨大な架け棧橋が見えてきた。上質な樹を何本も使ったのだろう。時が経っても、またどれほど重いものをその上に通そうとも、棧橋は少しも歪むことなく整然とした姿を見せていた。由緒ある城はその入り口にまで雰囲気染みこんでいるのだなと思う。

棧橋の上を歩くと、板の隙間から堀の水が見えた。結構深い。小

型の船なら十分通りそうなほどだった。

第一の表城門は開け放たれている。「ふわー」と感嘆の声を上げてその偉容を見つめつつ、先に進む。第一と第二城門の間には回廊があり、城に出入りする商人たちはここから決められた場所へと物品を運んでいた。

パパスとアランは回廊へ向かわず、まっすぐ正面の第二城門に向かう。門扉は固く閉ざされ、両脇に兵士が控えている。

パパスの姿に気づいた兵士が近づき、手にした槍で進路を塞いだ。「待て。ここは一般の者は立ち入り禁止である。何用だ」

「我が名はパパスと申す。国王陛下の御招請を賜り、参上つかまつった。すでに城下にてご連絡を差し上げているところ、確認してもられないだろうか」

「パパス……おお、あなたが。これは大変失礼いたしました。確かに、お話伺っております。私のご案内いたしますので、どうぞこちらへ。……おい」

応対した兵士が声をかけると、残ったひとりが城門を開けた。「さあどうぞ」と先頭に立って歩き始める兵士に、パパスは少し遠慮がちに声をかけた。

「いや、場所さえ教えていただければ、こちらから参るのだが」

「何をおっしゃいます。陛下直々にお声を賜った方に対し、そのような失礼はできません」

ぴしゃりと言われ、パパスは「むう」とうなった。大人しくついていく。アランも慌てて後を追った。

城内に入ってまず驚いたのは、足元だ。

「うわっ？」

素っ頓狂な声を上げ、アランはうろたえる。

城内の廊下に敷かれた絨毯は、毛がとても深く、まるで雲の上を歩いているような錯覚を抱いたからだ。レヌール城で似たような絨毯の上を歩いたことがあるが、あれよりもさらに上質だ。

歩きにくそうにするチロルを胸に抱える。今度は辺りを見回して

みた。

壁と天井の継ぎ目や、柱の縁に金色の装飾が施されている。外から取り入れた陽光に反射して、廊下は荘厳な雰囲気包まれている。ふと、あるものが目に留まった。壁に掛けられた世界地図である。無意識に地図の前まで吸い寄せられた。

口を半開きにしたまま世界地図に目を奪われていると、後ろからパパスの指が地図を指してきた。

「ここがラインハットだ」

地図の北東、大きな大陸の中心部分を示す。それからパパスの指は南西へと滑っていく。

「ここが我らが渡ってきた関所……ここがサンタローズ……アルカパ……南にあるのがビスタ港だな。そして」

すいっ、と一気に大海を越えて別大陸の西の外れを指す。

「ここがサラボナだ。ルドマン殿やフローラ嬢、デボラ嬢が住んでいる街だ」

「遠いんだね」

「うむ。私もまだ足を運んだことがない。これだけの旅程となると、ルドマン殿のご息女らには大変な苦労があっただろうな」

そうなんだ、とアランはしみじみうなずいた。自らがこれまで辿ってきた旅路を思い出す。

親子の様子を微笑ましそうに見つめていた兵士が、「そろそろよろしいですか？」と声をかけてきた。アランは最後に一度だけ地図を振り返り、パパスたちの背中を追った。

66. 謁見、ラインハット王

「右です」

「正面の扉です」

「階段を上がります」

「……すごいねチロル」

アランはつぶやいた。チロルは興味なさそうに目を細めている。

案内役の兵士は、こういった順路で移動するかを逐一告げていた。どう考えても迷いようがないところまで丁寧に教えてくれるから、もしかしたらこれも決まり事なのかなと思い、パパスを見る。父は苦笑を浮かべたまま、黙って兵士の後をついていた。

やがて一際豪華で重厚な造りの、巨大な階段が見えてくる。外壁に沿って曲線を描くその階段は東西にひとつずつ、まるで抱きかかえる腕のように階上へ延びていた。

兵士が振り返る。

「陛下はこの上におられます」

「ありがとうございます」

「あれ？ おじさんは」

アランが首を傾げると、兵士は微笑んだ。

「おじさんはここまでだ。一介の兵士はこれより上に無闇に上がってはいけないんだ、坊や。陛下がいらっしゃる大切な場所だからな」
「ふうん……」

「いずれわかるさ。ああ、パパス殿。謁見の場にはご子息をお連れしてもかまわないそうです。むしろ、ぜひこの目であなたの子を見てみたいと陛下は仰せでした」

「ふむ。なかなか懐の深い王であらせられるのだな。ではアラン。御言葉に甘えてともに参ろう。だが、これからお目にかかるのはラインハットでもっとも位の高い方。いかに子どもとは言え、失礼なきようにな」

「はい。わかりました」

神妙にうなづく。チロルを顔の前に掲げ、彼女の顔を見つめながら「チロルも、いいね?」と念を押す。「うにゃ」と彼女は鳴いた。パパスについて階段を上る。巨大さゆえに一段一段も高く、アランは少々苦勞して後をついていった。階上の景色が見えてくるにともない、緊張で鼓動が高鳴ってきた。

階段を上りきると、今度は別の兵士がやってきて案内してくれた。大きな部屋の中央にさらに何段もの段差が作られ、その頂上にラインハット王が座る玉座があった。

王の前にひざまずき、パパスは良く通る声で口上を述べた。

「サンタローズのパパス、御招請を賜り参上いたしました。陛下」

「うむ。待っておったぞ。そなたがああ勇猛で知られたパパスか」

「はっ。恐縮であります」

「そう畏まるな。招いたのは私だ。そなたはいわば、私の客人。樂にするがよい」

父の見よう見まねで跪いていたアランは、そろそろと視線を上げた。するとこちらを見ていたラインハット国王とばかり目が合ってしまう。

「ほっほ。この子がパパスの。なかなかどうして、利発そうな子ではないか。良き瞳をしておる」

国王は人柄も体格も、一言で言えばおおらかな人だった。蓄えた口ひげは豊かで、着物は豪華。特に背に羽織った深紅のマントと小振りの金色杖は一際目を惹き、サンチヨから聞いていた『王』の姿そのままを体現していた。

一瞬見とれてしまったアランは、我に返って慌てて頭を下げた。しかし父のような口上など喋れるわけがない。どうしようと冷や汗を流したとき、ふと、アランの脳裏にひとりの少女の姿が浮かんできた。礼儀正しいフローラなら、どんな風にするだろう――

彼女の所作を思い出し、自分の知っている言葉で、アランはフローラを真似てみた。

「アランと言います。会えて嬉しいです。王様」

「ほお……」

感じ入ったような国王の声に、何とか失敗せずにすんだとアランは内心で胸をなで下ろした。

「パパスよ。そなたは良き子に恵まれたな。いや、私にも子がいるが、正直言ってみ習わせたいくらいだよ。それにこの子……アランと言ったか、帯剣する姿が父同様、様になっておる。やはり男子はこうでなくてはいかん」

「は。過分な御言葉、痛み入りまする」

「アランを見てますます確信が持てた。そなたなら安心して任せられる。実はな、此度そなたを呼んだのも子が関係することなのだ」

国王はごほんと咳き込んだ。

「身内のことゆえ、声を大にするのは憚られるが……パパス。近う寄れ。皆は下がって良いぞ」

周囲にいた警備兵が敬礼する。着こんだ鎧ががしゃんと音を立て、彼らは王の見えない場所まで下がった。

ラインハット王の足元まで近づいたパパスは、振り返ってアランに声をかけた。

「私は陛下とお話がある。そのまま控えているのも退屈だろう。せっかくだ、城内を見せてもらってきなさい。……陛下？」

「構わぬよ。何なら案内に兵をつけようか？」

王の言葉にアランはぶんぶんと首を振った。

「だ、だいじょうぶです！」

「遠慮せずともよいのに。まあよい。そなたが一通り見て回る頃には、そなたの父との話も終わっているだろう。城内は広い。迷ったら遠慮無く周囲の人間に尋ねるとよい」

「は、はい。ありがとうございます。じゃあチロル。行こ」

大きく一礼して、アランは転がるように謁見の間を後にした。

67. デールと王妃

「あー、緊張した……」

階段を一気に降りて、アランは大きく息をついた。足元で毛繕い始めるチロルと、相変わらずの広さを誇る広間とを順に見て、どうしたものかと思案する。

「とりあえず、いろいろ回ってみようかな」

これまで辿ってきた道を思い出しながら、アランは歩き出した。するとすぐに、数人の男女が見えてきた。みなアランとそう変わらない年頃の子どもたちである。身なりは様々だ。何だろうなと思つて近づいてみると、こちらに気づいた女の子が走り寄ってきた。むんず、と腕を掴まれる。

「ほら、あなたもなんでしょう。急いで入るのよ!」

「え!?! なに? え!?!」

訳がわからぬまま集団の中に引きずり込まれる。女の子を始め、皆アランには見向きもしない。ただ一点、目の前の扉を見つめるのみである。

「いいかい、君たち」

扉を守っていた兵士が告げた。どうやらかなり身分の高い人の居室のようだった。先ほどの女の子がうなずく。彼女は呼びかけた。

「いい? みんな。ヘンリー様はいたずらばかりで嫌だったけど、終わってしまったばどうってことはないわ。でも、これからお会いするデール様は違うわよ」

「おう。王妃様が見てるからな……」

「よし。じゃ、行くわよ」

扉が開かれる。いまだに何のことかつかめず、しかし彼女らの雰囲気になだならぬものを感じ取ったアランは、何も言えずに少年少女の雪崩に巻き込まれた。

部屋に入るとすぐにいい匂いが鼻に届く。目にも眩しい内装の数

々は、国王の玉座回りよりも手が込んでいるのではないかと思えた。室内には二人の人物がいた。

「おや。子どもたちが遊びに来てくれたようね」

「ごきげんよう、王妃様」

アランをしょっ引いた女の子が優雅に一礼する。そのやり取りを聞いて、アランはますます目を丸くした。

随所に宝石をあしらった純白のドレスを身に纏った女性が部屋の中央に立っている。元々細身なのだろうが、着ているものがあまりに豪華で量感があるため、ずっしりとした威厳が漂っている。編み物のように結われた髪が光沢を放ち、手に持った扇子で口元を隠している。

「ほら、デールや。この子たちと遊んできなさい」

王妃が声を掛ける。口調は優しいが、アランはどうしても、彼女の視線の強さが気になっていた。

寝台の上にもうひとりの人物がいる。こちらはアランと同年か、少し下くらいの男の子だ。肌触りの良さそうな、空の蒼のように綺麗に染められた服を着ている。アランが身に付けているぼろぼろの青いマントとは雲泥の差だ。

「今日も方々から身分違いの子を呼んでいます。いずれ王になるあなたにとっても、彼らとの交流は有意義のはず。さ、行きなさい」

「……ごめんなさい」

少年は虫の鳴くような細い声でつぶやいた。決して王妃やアランたちと目を合わそうとしない。

すると王妃は鋭くこちらを睨みつけた。何か悪いことをしたのかとアランは戦々恐々とする。周囲の子たちは視線の意味を理解しているのか、即座にデールの元に駆け寄った。

「ほらデール様。外は良いお天気ですよ。お散歩をしましょう」

「街でいろんな面白いことがあったんですよ！」

「……」

居たたまれなさそうに縮こまるデールに、子どもたちは執拗に勧

誘を仕掛けた。しかし王妃の一言でぴたりと止まる。

「もうよい。下がちなさい」

「い、いえ。ですが」

「下がれと言っている」

ぱしん、と扇子が音を立てた。あの強引な女の子でさえ顔を真っ青にして、しかし何も口には出来ず、彼らはすすごと退散していった。

何が起こったか理解できないアランは、部屋に取り残されてしまった。

「え、えっと……」

王妃の訝しげな視線が突き刺さった。

デールは悲しそうに子どもたちが出て行った扉を見つめていた。その表情に感じるものがあつたアランは、これだけは話しておこうとデールに近づく。

「あの……こんにちは。僕はアランっていうんだ。この子はチロル」
「……？」

「あのね。さっきの子たち、僕はよく知らないんだけど……とても必死だったよ？ みんなと遊ぶの、あんまり嬉しくないの？」

デールは強く首を横に振った。

「そんなこと、ない」

「そっか。うん、良かった。安心したよ」

少しだけ不思議そうに、デールは首を傾げる。アランは笑った。

「みんなと遊びたい、仲良くなりたいって気持ちがあれば、きっとだいじょうぶだよ。仲良くなれるよ、ぜったい」

「でも、ぼくは王子なんだ。ぼくが王子だから、次のおうさまになるから、みんなは……でも、ぼく……」

「デールや。弱気になつてはいけません」

王妃が口を挟む。

「あなたは必ず王になる。この私がついているのですから。だからあなたは何の心配もせず、この母の言葉に耳を傾け、任せればよい

のです」

「はい……お母様」

悄然と俯くデールに、アランはこれ以上かけるべき言葉が見付からなかった。王妃の視線もあり、アランは後ろ髪を引かれる思いで踵を返す。

扉に手をかけたとき、彼は振り返り努めて満面の笑みを浮かべた。「僕で良かったら、友達になろうよ。ゆっくりでいいからさ、気が向いたら、声をかけてね」

「……あ」

「待ってるからね。きっと、みんなもさ」

これ以上、言葉が思いつかない。

少しでも悔しさを内心に抱えて、アランは部屋を後にした。

68. 詰所の噂

内心のもやもやを払拭するためにも、アランは足を動かすことにした。

さすがラインハットの城だけあって、外観通り中も広い。しかも入り組んでいる。

辺りをきよろきよろと見回しながら歩いていると、一際騒がしい場所に行き着いた。どうやら城内に詰める兵士たちの休憩所のようなだった。警備の合間のひとときを、飲み物や軽食片手に談笑して過ごしている。

「お。坊主、見かけない顔だな。新入りか？」

物珍しさで中を歩いていると、屈強な男に話しかけられた。少しだけ酒の匂いがして、アランはわずかに顔をしかめる。

「新入りって？」

「なんだ、違うのか？ ヘンリー様とデール様の遊び相手を務める子どものことだよ。最近は特に入れ替わりが激しいって言うじゃないか。坊主もその一人なのかと思ってよ」

「そう、聞いてくれよ！」

突然、近くのテーブルにいた男が声を張り上げた。手には酒の入った器を持ち、顔はすっかりできあがっている。向かいの席に座る男がたしなめた。

「おい、いくら非番だからって飲み過ぎだぞ。俺たちは栄えあるラインハット兵なんだ。少しは自重しろよ」

「いや、だから聞けって。ヘンリー様ってばひどいんだぜ？ 俺が蛙大嫌いな知ってて襟から蛙を入れるんだ。それも何匹も。あれは生きた心地がしなかった！」

「お前、その程度で……」

「その程度って何だよその程度って！ 実際にあの方のイタズラを

受けてみる！ ひっくり返って夜も眠れなくなるぞ！」

「そりゃ貴様が要領悪くて鈍くさいせいだ」

アランに話しかけた男が酔っ払いをこづく。「わかってるよお、俺だってよお」とぶつぶつこぼしはじめた同僚を無視し、男はアランに向き直る。

「ま、この馬鹿は置いておくとして、実際、ヘンリー様のいたずらは俺たち城詰めの方兵も手を焼いていてな。単に俺らが驚くだけならまだしも、来賓の方にまでちょっかい出すのは少々いただけねえ。お前ももしヘンリー様の遊び相手になるなら、ちよつと覚悟しておいた方がいいぜ？」

「はい、兵士さんたち。お待ちかねの食事だよ。酔っ払いはさつさと水呑んで酔い覚ましてきな！」

入り口からよく通る声が上がリ、台車を引いた大柄な女性が入ってきた。あちこちから歓声上がる中、女性はアランたちに顔を向けた。どうやら話が聞こえていたようだ。

「まったく、小さな子に何絡んでいるんだい」

「ああ、すまんなおぼちゃん。つい愚痴ってしまった」

「あんたも酔ってんだろ？ 少し涼んで、落ち着くんだよ。じゃないと任務にさしさわりがあるからね」

「りょーかい」

男は素直に立ち去った。アランがぼかんとしていると、女性は腰に手を当てたまま、独り言のようにつぶやいた。

「……ま、あいつらはヘンリー様のいたずらがひどいって嘆いてるけど、あたしゃそうは思わないがね」

「どうして？」

アランが聞くと、女性は苦笑した。哀れんでいるようにも見えた。「ヘンリー様は早くにお母様を亡くされているからね。陛下は次の王妃様を迎えられたけど、やっぱり本当の母親じゃないし、しかもその王妃様がごひいきにされるのは弟のデール様ばかりとなれば、そりゃひねくれたくなるさね」

「ふうーん……」

「ところであんた、さっきデール様のお部屋にいなかったかい？」
ずばりと言いついてられ、アランはうろたえた。ぼん、と肩を叩かれる。

「うちの厨房にもあんたと同じくらいの女の子がいるんだけどね、その子が帰って来るなり、『もしかしたら関係ない子まで巻き込んだじゃったかも』とか言い出すもんだから、ちょっと心配してたんだよ」

合点がいった。あの強引な少女の関係者だったのだ。アランは言う。

「気にしないでって、伝えておいて」

「はは。あんたいい子だね。わかった。そう言っておくよ。あの子も安心するだろ。……そうだ。もしヘンリー様に会うことがあったら、よくお話を聞いて差し上げてくれ。あの方に必要なのは、やっぱり側にいてくれる誰かだと思うんだよ。あんたなら大丈夫そうだよ」
「う、うん。やってみる」

「頼んだよ」

そう言うとき女性は残った食事を配りに歩き去った。

休憩所には歓声と笑い声に混じって、こんな声が聞こえてきた。

「ヘンリー様とデール様、次の王になられるのはどちらだろうなあ」

69. ヘンリーの提案

休憩所を出て、さらに歩く。

道行く人の多くから、ヘンリー王子の腕白ぶりを嘆く声が聞こえてきた。この広い城でそれだけ名が知られるのは、ある意味凄いとなんじゃないかとアランは思う。

ひとしきり城内を見学し満足したアランは、そろそろ戻ろうかと踵を返す。謁見の間に続く広間までたどりついたとき、ふと、まだ足を踏み入っていない区画があったことに気がついた。

ちょうどデール王子と王妃の部屋とは反対側に位置する通路である。

そちらへ足を向けかけて、思い直した。もうずいぶんと時間が経っている。一度戻った方がいいのではないか——そう考えたのだ。

ところが謁見の間まで戻ってきてても、玉座の前にパパスの姿はなかった。困惑して辺りを見回していると、当の国王が教えてくれた。

「入れ違いだったな。そなたの父には、我が子ヘンリーの守り役を頼んだのだ。あの武勇に加え清廉潔白でもある男が師となれば、ヘンリーの行状も少しは改善されるかと思ってな」

「そうだったんですか」

「アランといったか。わしからの頼みだ。そなたもヘンリーの友となってくれないか。あやつには不憫な思いをさせてしまっているからもう……」

ため息をつく国王。温厚で懐の深いこの人に、ここまで心労をかけるヘンリー王子とはどんな人だろうと思った。

国王の話では、ヘンリー王子の居室は謁見の間からほど近い場所にあるらしい。さきほどアランが足を踏み入れようとして諦めた場所だ。礼を言い、王子の部屋へと向かう。

扉を抜け、一本道の廊下へと出る。城の外縁部分にあたるのか、

窓から外の光が入っていた。北側に面しているせいで、日中にも関わらず心なしか薄暗い。

使用人や兵士の姿が見えないがらんとした廊下に、パパスがひとり佇んでいた。珍しく思い悩んだ様子である。

「どうしたの、お父さん」

「おお。アランか」

息子の姿を認め、パパスはほっと息をついた。ますます珍しい。

「実はな」と父は切り出した。

「ヘンリー王子の守り役を陛下から仰せつかったはいいが……どうやら当のヘンリー様にひどく嫌われてしまったようだな」

「え！？ お父さんが！？」

「おかげで王子の居室にも入れず、こうして廊下に立ち尽くしている有様だ。アラン、すまぬが代わりにヘンリー王子の様子を見てきてくれぬか。話ができるようになれば、なお良いのだが」

「……わかった。ちょうど僕も、王子と話がしたいと思っていたし」
「頼む。王子の部屋はこの先だ。一本道だからすぐにわかるだろう。私はここで見張りを続ける。何かあったら呼ぶのだ」

「うん」

チロルを引き連れ、廊下を進んだ。右に折れた通路の先に、木製の扉がひっそりとあった。足元には絨毯が敷かれ、入り口の両隣に煌々と松明が灯されていたが、アランは妙な寂しさをその扉から感じた。

人の気配がする。扉を叩いてみたが、中の人物が返事をする様子はない。何度か叩いて、ようやく「なんだよ」という声が聞こえた。とりあえず扉を開ける。

部屋の内装は、王妃たちの部屋とほとんど同じだった。しかしあちこち傷があり、衣服や食べ物で室内は散らかっている。

くだんの王子は、部屋の中央にある揺り椅子の上であぐらをかいていた。年はアランと同じくらい。深い緑の髪は綺麗に切りそろえられ、身に付けているのはデール同様、空色の服だ。着心地は良さ

そうなのに、持ち主の扱いが悪いのか裾が汚れてよれよれになっていた。

身なり以上に気になるのは、彼の表情だ。眉根を寄せ、口元をひん曲げていて、まさに『ふて腐れた』という表現がぴたりと当てはまる。

「誰だ、お前」

「え、えっと」

アランはうろたえた。すると何を思ったか、ヘンリーは次々とまくしたて始めた。

「あ、わかったぞ。お前、パパスの息子とか言う奴だな！」

「あ、うん」

「はっ。お前も父上に言われてはいよいよやってきた口だな。まったく、父上がどんなことを吹き込んだか知らないが、どいつもこいつも俺のことを馬鹿にしてる！」

「いや、そんなつもりは」

「いやー！　してる！　馬鹿にしてる！　そんなのちょっと顔を見ればわかるさ。こいつら嫌々俺に会いにきてるんだなって。どうせお前も同じこと考えてるんだろ」

「そ、そんなことないよ！」

「どーだか。ま、その代わり俺だっていろいろやらせてもらってるけどな。俺が何かすると皆あたふたするんだ。いい気味だ」

「お城の中で聞いたけど……やっぱり良くないよ、そんなの」

アランが言うと、ヘンリーの視線が険しくなった。彼は椅子を降り、アランの前までやってくる。向かい合うとほとんど背が変わらなかった。

「パパスも同じこと言ってた。お前も追い出してやろうか」

「追い出して……って、君がお父さんを？」

「そうだよ。偉そうなことを言うからだ。俺はあんな奴嫌いだね」
アランは黙った。彼の変化に気づかないヘンリーは、なおもパパスの気に入らないところを列挙していく。

「――だから俺はあいつを、って、どうした、お前？」

「……るな」

「え？」

「お父さんを、馬鹿にするな！」

怒鳴った。歯を食いしばって怒りの表情を浮かべる。今度はヘンリーがうろたえた。

真正面からアランが睨みつけると、ヘンリーは罰が悪そうに視線を逸らした。大きく深呼吸をして、気持ちを落ち着けながら静かにアランは言う。

「僕は君と話がしたいと思ったからここに来た。友達になりたいと思っただ」

「……へ？」

「たしかに君のことを悪く言う人は多かったけど、食堂のおばさんや王様は君のことを心配してくれていたよ。だから、きつとぜんぶ悪い人じゃないんだって思ってる」

「そんなこと」

「あるよ。僕もそう信じてる。だからこそ、もう悪口は言わないでほしい」

ヘンリーは口を閉ざした。ちらちらと横目でアランの顔を見る。アランは目を逸らさなかった。

「……王子ってやつは」

ぽつりと、ヘンリーは言った。

「王子ってやつはな、王様の次に偉いんだ。お前みたいな弱そうな奴と……と、友達になんてなれるか」

「またそんな」

「だから！ その代わりにお前を俺の子分にしてやる！ それなら文句ないだろう？」

王子の言葉に、アランは怒りも忘れてぽかんとしてしまった。

70. 子分の印と秘密の仕掛け

「どうだ？ ラインハット王子の子分になれるんだぞ？ 嬉しくないのか？」

「え？ いや、嬉しいとか、そういうのじゃなくて」

「子分になれば、お前も一緒にいさせてやる。これなら友達とそんな変わらないだろ？」

どんな理屈だろうとアランは思ったが、どことなく必死なヘンリーの顔を見て怪訝に思った。

「ヘンリー王子？」

「ヘンリーでいい」

彼は言った。

「子分ってのは、親分の言うことはきちんと言聞くんのだ」

「はあ。まあ、そうだね」

「だろ？ で、だ。親分は子分に『できる』ところを見せなきゃいけない。これから俺のとおきを見せてやるよ」

腕白小僧の顔に戻ったヘンリーは、部屋の奥を指差した。続きの間となっていて、何やらたくさんの物が転がっていた。

「奥に子分の印が置いてある。それを取ってこいよ。そうしたら俺のとおきを見せてやるし、俺の子分にもしてやるぞ」

「……」

アランはじーっ、とヘンリーを見つめた。

「なんだよ」

「ヘンリーって、もしかしてずっと誰かと遊びたかった？」

「う、うっさいわ！ いいから黙って取ってこいよ！」

赤面しながらヘンリーが怒鳴る。肩の力を抜いたアランは、チロルを促して大人しく部屋の奥に向かった。一方のチロルは、主を冒涇されたと感じているのか、ずっとヘンリーに対して威嚇の唸り声を上げていた。

続きの間は案の定、物置と大差ない散らかりようだった。その中で、部屋の中央にどんと大きな宝箱が鎮座している。

「この中に入っているのかな」

宝箱に触れる。カギがかかっている様子ではないから、技法を使うまでもないだろう。蓋に手をかけると、意外な軽さに驚いた。子どもでも楽に開けられるように細工してあるのかもしれない。

一気に開く。が、肝心の中身が何もなかった。目を凝らしてみても、手探りで探してみても、宝箱の中は空っぽだった。チロルに匂いを嗅がせてみたが、彼女もまた首を傾げていた。

納得行かないまま、アランはヘンリーの待つ部屋まで戻る。

「ねえヘンリー、子分の印なんてどこに……あれ？」
いない。

部屋はもぬけの空で、ヘンリーの姿はどこにもなかった。辺りを見回しても、物陰に隠れている様子がない。

もしかして外に？———と思ったが、いつのまにか扉は部屋側から錠がかけられていた。外に出たのなら部屋の中から施錠なんてできない。怪訝に感じながら、他に思い当たる場所もなく、アランはカギの技法を駆使して錠を開け、廊下に出た。しかしそこにも、ヘンリーの姿はない。

ここは一本道だから必ずパパスの前を通るはず、尋ねてみようかとアランが考えたそのとき、後ろから肩を叩かれた。驚いて振り返ると、そこにはしてやったりという表情を浮かべたヘンリーがいた。

「へ、ヘンリー!？」

「はっはっは。どうだ、驚いただろ？」

「う、うん。でもどうして? 子分の印はなかったし、戻ったら君はいないし」

「そりゃそうだ。あの宝箱はもとかからカラッポなんだからよ」

「ええっ!？」

そこでアランはからかわれたことに気づく。

「ヘンリー!」

「ははっ、そう怒るなって。ちゃんと仕掛けは教えてやるからよ。なんたってお前は俺の子分だからな」

「子分子分って、僕にはアランっていう名前があるよ！」

「そっか。じゃあアラン、これから話すことは俺とお前だけの秘密だぞ？」

そう言うと、ヘンリーはアランを部屋へと引き込んだ。扉を閉め、ついでに「静かに」と指まで立ててきた。

彼が指差したのは、部屋の隅にある机と椅子である。

「これがどうかしたの？」

「よく見てろ」

ヘンリーが椅子をどかす。

そして床をぽんぽんと叩くと、音もなく上に持ち上がった。覗き込むと、まるで隠し階段のように梯子が下へと延びている。ヘンリーに促され、アランは梯子を下りた。

梯子は途中で切れていて、床まで飛び降りる必要があった。アランに続き、ヘンリーは慣れた仕草で着地する。ヘンリーの部屋と同じくらいの大きさの空間で、どうやら倉庫のようだった。灯りも乏しく、薄暗い。

「どうだ。これが俺のとおきだよ」

「そっか……ここに隠れていたんだね」

「部屋を抜け出すときによく使っているんだ。何かあったときに逃げるためのものなんだろうが、これがまた便利でな。ここは人気も無いし、つかまる心配はないときた。だから誰にも言うなよ？」

「もう……」

アランは苦笑した。ヘンリーが自ら秘密を明かしてくれたことは、少しは自分のことを友達と認めてくれたんだろうなとアランは思った。

しかし、とヘンリーはぼやく。

「お前の連れてる猫、俺が隠れていることに気づいてやがったみたいだから、はらはらしたぞ」

「あ、どうりで部屋から出てこなかったと思ったら……。ん？ チ
ロル？」

首を傾げる。彼女はアランの傍らで毛を逆立て、はっきりと警戒
の姿勢をとっていた。

「ううう……。がるう……」

「お、おい。俺こいつには何にもしてないぞ!？」

「……いや。チロルはヘンリーに怒っているんじゃないよ。もっと
別の何か……」

異変に気づいたアランが気を引き締めた、そのとき。

突如、倉庫の扉が何者かによって蹴り破られた。

71. 攫われた王子

もうもうと埃が立ち上る。外と直接繋がっているのか、陽光が差しこんできた。

埃をかきわけ、見慣れぬ男たちが押し入ってきた。彼らは顔の下半分を白い布で隠している。

「馬鹿野郎。大きな音を立てやがって」

「だってよ兄貴、ここのカギぼろぼろだったんだぜ？ 蹴破った方が早かったって」

「お前ら黙って仕事しろ」

ぼそぼそと小声で会話をする男たち。アランの目に映るだけで五人いる。いずれも筋骨隆々とした、薄汚れた男たちだ。

知り合いかとヘンリーを見遣るが、彼は全身を緊張させたままだった。が、恐怖を浮かべている様子はない。城の者が少々荒っぽい手段で連れ戻しにきたとでも考えているのかもしれない。

アランは静かに警戒感を強めた。嫌な感じがする。隣でチロルが威嚇を始めたことが、疑いを確信に変えた。

男たちはなおも相談を重ねる。

「……どっちだ？」

「右。お出かけの最中ってどこか、こりゃちようどいい」

「情報はまあ、正しかったわけだ。この分だと報酬も望めるな。おい、やるぞ」

「ヘンリー、逃げて！」

アランは叫ぶ。男たちから殺気を感じたのだ。

ヘンリーは動かない。何があだかわからないという顔をしていた。侵入者たちが動き出す。その動きは機敏だった。アランの前に二人の男が立ち、残り全員がヘンリーに殺到する。大柄な男の陰に隠れるヘンリー。一瞬、彼の腹に拳が突き立てられる様を見た。

アランは迷いなく銅の剣を抜き放った。傍らの相棒にも声を掛ける。

「ヘンリーを助ける、行くよ。チロル！」

「何だこの餓鬼、いっちょまえに武器を持ってやがる」

男のひとりが嘲笑した。しかしもう片方は一切笑わなかった。横目で仲間たちがヘンリーを担ぎ出す様子を確認し、懷に手をやる。

「ずらかるぞ。目的は果たした」

「え？ 兄貴？」

「こいつの相手はするな。餓鬼の喧嘩じゃ済まなくなる」

言うと同時に、持っていた白い玉を地面に投げつける。途端に灰色の煙が部屋に充満した。視界が極端に悪くなる。男たちの姿を見失った直後、扉が閉まる音を聞いた。

特殊な材料で調合されたものなのか、煙は重く体に絡みつく。一息でも吸い込むと、肺の中全体が溶けた鉛を流し込まれたかのように痛んだ。

けっ、けっ……と痛々しい空咳を繰り返すチロルをたぐり寄せ、胸元に抱く。自らも外套の切れ端で口元を覆い、涙を浮かべながらじっと耐えた。

やがて煙が地面へと落ちてくる。空気より重いのか、汚い絨毯のように床に広がった。若干朦朧としながらも、アランは倉庫の扉を開けた。新鮮な空気を肺一杯に吸い込み、混濁する意識をはっきりさせる。

倉庫を出て目の前には城の堀が続いていた。ちょうど荷下ろしのための簡易栈橋がある。船の姿はないが、流れが緩やかな堀の中にあって、不自然な波紋が広がっていた。

堀に沿って走る。いた。黄土色の幕をかぶせ、船頭がひとりで操っている中型の荷船が、ちょうどラインハット城の架け栈橋の真下を通るところだった。

アランは決断した。

「チロル。あの人たちの後を追って。どっちに行ったか、それだけ

わかればいいから。僕はお父さんを呼んでくる」

「にやぐる！」

「いいかい？ 無茶はしないで、必ず戻ってくるんだよ？」

両手で顔を撫で、チロルを送り出した。地を這うように疾駆する彼女の姿を確認して、アランは踵を返す。倉庫に戻り、隠し梯子に取り付いて、ヘンリーの部屋まで転がり込んだ。その勢いのまま扉を開けると、ちょうど部屋の前まで来ていたパパスと鉢合わせた。

肩で息をする息子の姿を見るなり、パパスはこう言った。

「ヘンリー王子に何かあったのか？」

「え……？」

「さきほど階下から振動と、わずかな殺気を感じた」

すでに戦士に顔付きになっていたパパスに、アランは全てを話した。ヘンリーの子分になって隠し梯子を教えてもらったこと、見知らぬ男たちが侵入してきてヘンリーを攫っていったこと、自分が彼を救えなかったこと――

「……何てことだ！」

彼はヘンリーの部屋に入ると、隠し梯子を使って外に出た。晴天の下、静かに風を読んでいたパパスは、追いついたアランに対しこう告げた。

「よいかアラン。このことはまだ誰にも話してはならぬ」

「どうして？ みんなに助けてもらったほうがいいよ、ぜったい！」

「私もそう思う。だが、おそらくそれは難しい」

眉をしかめるアラン。パパスは首を振った。

「お前にはまだ理解しがたいだろうが、ヘンリー王子について、皆の心が必ずしも一枚岩ではないということだ」

「……？」

「説明している暇はない。我らで王子を助けるぞ。いけるか、アラン？」

「うん」

力強くうなづくアラン。いつもなら笑みを浮かべて「良し」と言

ってくれるはずの父だったが、このときはアランと視線を合わせ、
厳しい表情で念を押してきた。

「お前は戦士として力をつけてきた。その上で言う。よいか、此度の件、父は王子救出を最優先にする。もしお前がはぐれたとしても、父の助力はないものと思え」

「お父さん……」

「無理だと思ったらすぐに引き返すのだ。その判断は、お前に任せよう」

子どもながら、父が重大な決意を持って語りかけているのだということがアランにはわかった。大きく深呼吸をして、臍を決し、うなずく。

「わかりました」

「戻ったらまた剣の稽古をつけよう。今度はもっと実戦的にな」
ぐしゃ、とパパスに頭を撫でられた。

二人は走り出す。

「征くぞ、アラン！ ついて来い！」

「はい！」

72. 父を追って

ラインハット城の堀の水は城下を流れる小川に繋がり、やがては大陸を縦断する巨大な河へと出る。ヘンリーを誘拐した者たちは、おそらく一度船で河まで漕ぎ出て、そこから自分たちのアジトを目指すのだろう――

そう分析するパパスの後ろを、アランは必死になって走っていた。言葉通り、パパスは全速力で小川沿いを疾駆していた。つくづくのがやつとの上、ひとたび城下町に入ると細く曲がりくねった路地を縫うように移動しなければならず、角を曲がる度にアランは肝を冷やした。

何度パパスの名を呼びそうになったか。だがアランは堪えた。

父は「ついて来い」と言った。ならば自分は、持てる力を使って父の背中を追うだけだ。多少の無理、無茶であっても、頑張っついでいかねばならない。

――そう、自分を追い込んだのがいけなかった。

前ばかり見て足元がおろそかになっていたアランは、道に転がっていた小さな木桶に足を取られて転倒した。目の前にちかちかと星が舞う。

「……っつ、あ！」

声を上げたときにはもう遅かった。パパスの姿は路地の奥に消えていた。堀から続いていた川は城下の家々の間を通っていき、アランたちが走ってきた川沿いの道は目の前で途切れていた。

回復呪文で簡易の治療を行った後、アランは路地の奥を覗き込んだ。同じような道がいくつも分岐し、どの道がどこに通じているのかわからない。

無理だと思ったらすぐに引き返すのだ。その判断は、お前に任せよう――

パパスの言葉が脳裏をよぎり、アランは悩んだ。

「……まだ、だいじょうぶ」

自らを鼓舞するようにつぶやくと、川からもっとも近い路地に向かって歩き出す。

とにかく街の外に出るんだ。大河まで出れば、視界が開けて何かの手がかりも得やすいはず。それに、ヘンリーを連れ去った連中を追いかけたチロルと合流できれば、行き先もわかる……。

「お父さんに、僕はまだやれることを見せなきゃ……僕はもう、お父さんに助けられっぱなしの子どもじゃない」

歩く。ひたすら歩く。時折すれ違う街人に外への道を尋ねながら、ようやくアランは堀の水が大河に注ぐ場所まで辿り着くことができた。

川辺に見慣れた後ろ姿がちょこんと座っている。

「チロル！」

「にゃあ！」

遅かったよ、と抗議するようにチロルは勢い良くアランの胸に飛び込んできた。やや硬い毛皮を撫でていると、気持ちがいぶ軽くなった。

アランは表情を引き締める。

「チロル、ヘンリーやお父さんがどっちに行ったか、わかる？」

すると彼女は髭を揺らし、アランの胸から降りた。尻尾をぴんと立て、先導するように歩き出す。ここからだ東の方向だ。アランは胸をなで下ろした。

「よかった。チロルにはちゃんとわかっているんだね。お願い、みんなのところへ連れて行って」

「にゃふ……ぐるる……」

返ってきたのは煮え切らない鳴き声だった。案内したいけど自信はない、そういう表情に見えた。

まだ日が高い内にと、アランたちは再び行動を開始した。

峻厳な山々、その裾野に広がる広大な平地のただなかにラインハ

ット城とその城下町はある。まさか山越えをするわけにはいかなから、アランたちは山地を迂回する道を取った。幸い、整備された街道があるため歩く分にはさほどの苦労はなかったが、チロルの案内で東へ東へと進んでいくと、次第に街道は石畳から草地になり、やがては完全に途切れてしまう。

その先はまったく目印のない草原だ。雑草がアランの膝上ほどにまで達する場所があり、そこではチロルの姿が完全に埋まってしまう。仕方なく、アランは彼女を胸に抱えて歩くことにした。

途中、空腹を紛らわせるために携帯食をチロルと半分に分けてかじる。

アランの手は、無意識の内に道具袋に伸びていた。

実はラインハットへの道中、パパスから「もしもの時のために」と『キメラの翼』を渡されていたのだ。これがあれば、一瞬でラインハットに――安全な場所に帰ることができる。

いつの間にか、日は傾き始めていた。このまま夜になってしまえば、さらに進むのは困難になるだろう。身を守るものがない土地での野宿の仕方を、アランはまだよく知らない。

携帯食を食べる手が止まった。主の様子にチロルは不安そうに一声鳴き、アランの手を舐めた。

「……」

アランは無言のまま、ゆっくりと咀嚼を始める。

そのときだ。

アランとチロルは同時に身構えた。特にアランは額に冷や汗が浮かぶほどの緊張で顔を強張らせている。

聞こえたのだ。ぎゃあ、という人の悲鳴を、確かに。感じたのだ。はつきりとしたモンスターの気配を。

様子を見に行くか。

それとも危険を避けるか。

アランは銅の剣を抜き放った姿勢で、その場に留まっていた。

「ぐるる……」

チロルが唸り出す。同時に、前方の草地がさがさと鳴る。アランほどの背丈がある雑草の壁から、一体のモンスターがのそりと姿を現した。

日暮れの暗さに、剣の煌めきが光る。

「あ……」

アランは声を漏らした。相手もアランたちに気づいたようだ。こちらに近づいてくる。

馬ならぬスライムに騎乗した、隻腕の騎士――

『また逢いましたね。人の子よ』

変わらず丁寧な口調で、スライムナイトは語りかけてきた。

73. チェーンクロス

アランは剣を握るも、剣先は地面を向いたままという中途半端な構えを取った。チロルの唸り声が若干小さくなっている。彼女も戸惑っているらしい。

パパスを追わなければならないという焦り、夜の帳が降りていく大地に取り残されたような不安、それらが交ぜになったアランは、目の前のモンスターに対してどのような態度を取っているのか、迷っていた。

特に気を悪くした様子もなく、スライムナイトはアランをじっと見ている。

『覇気がありませんね』

「え？」

『私と初めて逢ったときは、あなたにはひたむきな光があった。だからこそ私は助かったのだと思っているのです』

彼の言っている意味がわからず、アランは首を傾げる。

『人の子よ。あなたはどこへ向かうつもりです』

「……お父さんのところへ。はぐれてしまったんだ。君は見なかった？ パパスっていうんだけど……背が高くて、とても遅しくて、剣を持っていた」

『いいえ』

要領を得ないアランの説明に、簡潔な答えが返ってくる。その後で、彼はこう付け加えた。

『お父さん。つまりあなたに血を与えた人間ならば、よほどの英傑でしょう。そのような者、ひとたび逢えば忘れようはずがない。私が出逢ったのは、私の『居場所』を荒らそうとした不屈な輩のみです』

彼は思い出したかのように剣を振った。びしゃ、と地面に湿っぱ

い音が鳴る。薄暗闇ではつきりとはわからなかったが、よく見ればスライムナイトの剣にはべったりと血糊がついていた。

アランは思わず、唾を飲み込んだ。スライムナイトは言う。

『安心なさい。私はあなたに大きな借りがあります。危害を加えるつもりはありません』

「ど、どういうこと？」

『ラインハット城下。私がどうしても手に入れなければならなかったものを、あなたは守ってくれたのです。覚えがありませんか』

「……あの袋」

『同胞の命を救う為に必要でした』

アランは息を呑む。目の前のモンスターは、仲間を救うために危険を冒して大勢の人が住む街に潜入したというのだ。

心底、驚く。だが不思議と「嘘だ」とは思えなかった。

「ねえ」

『はい』

「その仲間は、助かったの？」

『ええ。間一髪でしたが』

「そう。よかった。本当に」

アランは微笑んだ。こんな状況ながら、心から良かったと思えたのだ。

スライムナイトは剣を鞘にしまった。

『あなたはつくづく、不思議な人間です。私の言葉を心の底から信じている』

「でも、嘘じゃないんでしょう？」

『無論です。そのキラーパンサーの子よ。あなたは良き主に恵まれました』

「にやう！ ふぐるる……」

『ほう。なるほど』

チロルの鳴き声にうなづくスライムナイト。アランは尋ねた。

「チロルの言っていることがわかるの？」

『ええ。その子は自分があなたの力になれないことを悔しがっています。まこと、良き主には良き僕がつくのですね』

「チロルは『しもべ』じゃないよ。とても大切な友達なんだ。家族なんだよ」

『なるほど。理解しました』

そして彼は言った。

『人の子よ。あなたの父は存じませんが、その子が言う野盗どもの姿ならこの目で見ました』

「え、ほんと!？」

『ここよりさらに東へまっすぐ。人の手で作られ、今はもう打ち棄てられた地下神殿があります。野盗どもはそこに入っていました』

「そこだよ! お父さんもきつとそこに向かったんだ!」

アランの顔に喜色が浮かんだ。剣を収め、急いで駆け出そうとする。

直後、『待ちなさい』と呼び止められた。

『これから敵地へ赴こうとする戦士が、粗雑な長剣一本だけでどうするのです』

「でも、僕にはこれしか」

『待っていないさい』

スライムナイトは踵を返し、草むらの中に姿を消す。すぐに、戻ってきた。その手には何やら鎖が握られている。

「これは……?」

『さきほど成敗した男が持っていた物です。『チェーンクロス』と呼んでいましたか、なかなか見事な出来。これをあなたに差し上げましょう』

「え、でも」

『持つて行きなさい。あなたには必要なはず』

差し出されたチェーンクロスを恐る恐る受け取る。薄暗闇の中でも金属の光沢がわかるほど丁寧に磨かれた鉄の輪がいくつも連なっていて、なかなか重い。先端には鋭い槍の穂先が、反対側には剣

の柄のような握りが取り付けられていた。

まさに、鉄の鞭である。

「あ……ありがとう」

『いえ』

アランの礼に短く応えると、スライムナイトはさっと踵を返した。彼の後ろ姿を見つめていたとき、アランは重要なことを伝え忘れていることに気がついた。

「あの！ 僕はアラン！ 君の名前は？」

だが、スライムナイトは答えない。姿を消す直前、一度だけ振り返った彼はこう言い残した。

『いつかあなたが多くを成し遂げ、その名が風に流れて来る日を、私は楽しみにしています』

74. 毒沼の地下神殿

スライムナイトの言葉に従い、アランはひたすら東を目指す。

日がほぼ暮れかけたとき、ついにぼんやりとした灯りを見つけた。
「でも、これは……」

アランは顔をしかめる。そこはラインハットの関所のような地下へと続く建物があり、そこから松明の光が漏れ出ているのだが、周辺は異臭を放つ毒の沼となっていて、普通では渡れないようになっていた。

よく目を凝らすと、建物の脇に梯子のようなものが立てかけられている。建物の中にいる人間と協力して梯子を落とし、毒の沼を渡る手段としているのだろう。確かに、野盗の拠点としては大きな地の利がある。

この暗闇で、地面と毒の沼の境が判別できない。下手にうろつけば気づかずに足を突っ込んでしまうだろう。とはいえ、暢気に抜け道を探している暇もない。

見張りは、どうやら誰もいないようだ。

アランはチロルを呼んで胸に抱き、次いで大きく息を吸い込んだ。
四の五の言っていられない。強行突破あるのみだ。

覚悟を決め、アランは一気に駆け出した。草地の地面が、突如としてどろりとした感触に変わる。直後、全身を針で刺されたような鋭い痛みが走った。

「っっっ！」

「なーお、なおん……」

主を心配して鳴くチロルに無理矢理微笑みかけ、勢いを殺すことなく駆け抜ける。建物の中へ文字通り転がり込んだ。

急いで自分の両足を見る。奇妙な臭いを放つ煙が薄く立ち上っていたが、どうやら靴を溶かすほどのものではないようだった。念の

ため素足を出し、そこが薄く赤に染まっているだけで特に外傷がないことを確認した。

ホイミをかけ、痛みが引いた頃合いを見計らい、アランは建物の中へと進んでいった。

まず出迎えたのは、巨大な地下への階段である。長さはさほどでもないが、ラインハットの関所と比べると倍以上の幅があった。天井も高い。本当に地下にいるのかと錯覚してしまうほどだ。

地面は研磨された角石で隙間なく埋め尽くされ、広い通路の両脇には精緻な文様が刻まれた飾り柱が立っている。合わせて設えられた松明は等間隔に並び、その広さと静寂から寒々とした威厳を放っていた。

まさに地下神殿。アランは両腕をさすった。

——気配がする。

——とても、嫌な気配がする。

武器を構えようとして悩む。手は自然と使い慣れた銅の剣に向かっていたが、これまで幾度となく敵を屠ってきた剣にはすでに刃こぼれが現れ始めていた。一方、スライムナイトから託されたチェーシクロスはまだ新品同様で、その威力は見た目からも十分想像できた。難点は、先ほど手に入れたばかりでまだ馴染んでいないことと、そもそもアランにとって鞭の類の扱いは初めてであったことだ。

悩んだ末、アランは判断を保留した。初めて足を踏み入れる場所での不安を払拭するためには、やはり常日頃の慣れと自信が重要だ。銅の剣ならば、自分の力が十分に出せるという自負がある。もしそれで駄目な事態になったら、チェーシクロスの出番だ。これだけ広い空間だと、たとえ扱いに不慣れであってもただ振り回すだけで十分脅威になるだろう。いざ、そのときになってから、どちらを使うか選べば良い。

——だが、アランはいきなり決断を迫られた。

目抜き通りのような石畳を進み、巨大な壁にぼっかりと開けられた半円形の通路を抜けたときである。突然、モンスターの群れが襲

いかかってきたのだ。

土器の人形『どうぐうせんし』――

道具袋に目口が生えた『わらいぶくろ』――

空飛ぶスライムにたくさん足の生えた『ホイミスライム』――

そして見るも無惨な腐臭体をした恐ろしい戦士『がいこつへい』

――
初めて見るモンスターたちの敵意を一身に浴び、アランは全身から冷や汗を出した。同時に怪訝に思う。彼ら、必要以上に殺気立ってないだろうか――？

「にゃあああおっ！　ぐるるるっ！」

やれるものならやってみなさい、とばかり強気に吼えるチロルの声で我に返る。銅の剣を構えかけ、思い直した。数が多すぎる。

「自信がないから、って言ってられないよね」

意を決し、アランはその手にチェーンクロスを持った。じゃららっ、と連結した鎖が音を出す。

鎖の一部を手で支えながら、アランは幼なじみの少女を脳裏に思い浮かべた。レヌール城攻略の時、いばらのムチを操っていた彼女の姿に自らを重ね合わせる。

「チロル」

相棒に声をかけた。

「ここは今までで一番あぶない場所だ。いっしょに、乗り越えていこう」

「なお！」

「よし。じゃあ、行くよっ！」

チェーンクロスを振りかざす。同時にモンスターたちも動き出した。

先端の槍が弧を描き、突撃してくるモンスターたちを横薙ぎに打ち据える。

「いっけえええっ！」

激しい戦闘が始まった。

7.5. 攫われた理由、助け出す決意

ばしん、とチェーンクロスを手元に収める。わずかに遅れて、モンスターたちの姿がそろって消滅した。アランは大きく息をつく。

「すごいな……この武器」

しげしげと先端の槍部分を見つめる。鞭と言えば相手を打ち据えるものだと思っていたが、チェーンクロスはそれだけに留まらず、相手を『切り裂く』こともできた。蛇のようにうねる軌道は敵に回避されにくいし、一度に多くの対象を巻き込むこともできる。

何より、初めて握ったにも関わらず、まるで以前から使い込んでいたような扱いやすさがこの武器にはあった。

アランはそれを武器の性能だと考えた。己の才能ゆえだとは露ほども考えないのが、この小さな戦士の気性であった。

ずいぶん奥までやってきた。

モンスターが棲みつく前は、さぞかし立派な神殿だったのだろう。見上げるほど高い天井と上下に複雑に入り組んだ通路構造、そして行く先々で目にする精緻な彫り物がその印象をさらに強くする。

チロルがしきりに匂いをかき始めた。喉の奥で低く威嚇の唸り声を上げている。

しばらく先に、詰所に似た真四角の建物があった。木製の扉があり、窓がくりぬかれている。窓の位置はそんなに高くない。アランは壁にはりついて、中の様子をうかがった。

下卑た笑い声が聞こえてくる。

「まあ、ちよろいもんだぜ！　ここにガキを連れてくればでかい金で買ってくれる。楽な商売だ」

「こいつを持っていれば、ここのモンスターにも襲われないときた。しかし、何者なんだろうなあ、俺たちの雇い主は」

「考えても仕方ないさ。俺たちは働いて稼ぐ。ガキをさらって売り

さばく。それだけよ」

「今回はすげーよなあ。王妃サマのご依頼ときたもんだ。えらい人の考えるこたあわからんわい。ああ、おっかないおっかない。…よおおお、いくらだった？ あの手持ちならねえサイテー女が出した金は？」

「ふひ、ふひひ…」

「だめだ。こいつ金を数えることにどっぷり浸かっちゃってる。こりゃしばらく戻ってこないぜ」

「まあ、これだけあればしばらくは安泰だな。あの女からは王子を殺せとは言われていないし、攫った後どうしようとかっこの勝手。これから王子を奴らに売りさばけば、さらに金が手に入る。まったく笑いが止まらない」

「違うない。おい、また乾杯しようぜ。酒だ酒！」

アランはそつと窓を離れた。

今し方耳にした話を頭の中で反芻する。はんすう

「ヘンリーは、きっとこのどこかにいるんだ。でも……」

——今回はすげーよなあ。王妃サマのご依頼ときたもんだ。

「王妃様……？ 家族の人が、ヘンリーをさらえて言ったの？ どうして……」

——ヘンリー王子について、皆の心が必ずしも一枚岩ではないということだ。

「お父さん。僕、やっぱりわからないよ。そんなの」

アランは唇を噛みしめた。

だが、ひとつだけはっきりしていることがある。

それはアランの全力をもって、何が何でも、ヘンリーを救い出さなければいけないということ。

きっとパパスも同じことを考えているに違いない。

アランは眦を決し、より厳しい表情で通路のさらに奥へと進んでいく。

やがて彼らは、大きな地下水路に行き当たった。どこまでも透明

な水がさらさらと流れている。水路の幅は広い。サンタローズを流れる川の三倍はありそうだった。とても歩いて渡れるものではない。

水路は神殿の外縁を巡るように作られているようだ。水の行き先に目を凝らすと、岩盤をくり抜いた穴の先に続いていた。水路岸には舗装された細い通路がある。あいにく、その道は水路の対岸にあるため、アランの立つ場所からは向かうことができない。目の前にある道は水路に背を向け、再び神殿内部へと続いていた。

後ろ髪を引かれる思いで歩き出す。

すると、チロルの耳がぴくんと立った。それを見たアランも立ち止まって、意識を集中する。

——遠く、剣戟の音が聞こえてきた。

「チロル、急ごう」

相棒とともに一気に駆け出す。通路沿いに走っていると、剣戟の音はどんどん大きくなってきた。

突き当たり、大きな部屋の入り口に差し掛かったとき、ついにアランは父の後ろ姿を見た。

「お父さん！」

「む、アランか！」

ちらと顔だけで振り返るパパス。彼は剣を構えていた。眼前にはおびただしい数のモンスターがひしめいている。パパスは、たったひとりでこの群れに立ち向かっていたのだ。

多少の数の不利は問題にしないパパスでも、さすがに分が悪い。

特に頭上にいるモンスターには手が回らない状態だった。

「チロル、お父さんの力になってあげて。僕は他のモンスターを倒す！」

「がるるっ！」

相棒がパパスの側に駆け寄る姿を見届けると、呪文を唱えた。

風の呪文、バギ。

上にいた『ダークアイ』たちが風の刃を受けて攻撃の手を緩める。その隙にアランはチェーンクロスを振りかぶった。気合一閃、ダー

クアイの群れをまとめてなぎ倒す。

さらにパパスの背後から近づこうとした『がいこつへい』には、銅の剣の一突きで吹き飛ばした。

二人分の戦力を得たパパスはここぞとばかり攻勢をかけ、ついにモンスター群れを退けることに成功したのである。

76. 希望への一喝

周囲を見回し、敵モンスターが全滅したことを確認する。ようやくアランは肩の力を抜いた。

パパスに呼ばれ、振り返る。戦士の顔付きながら、目元をわずかに緩ませた父の姿があった。

「よくぞ追いついてきた。偉いぞ、アラン」

「ごめん、遅くなっちゃって……」

「構わぬ。お前が覚悟を決め、自分の足で歩いてくるまでに要した時間だ。その上無事にここまで来られたのだ、誰にも文句は言わせぬよ。胸を張れ、アラン」

パパスはアランに回復魔法をかけると、まだ呪文の温もりが残る手でアランの頭を何度も撫でた。

「強くなったな。本当に強くなった。今日このときほど、私は親として誇りに思ったことはない。そして……お前を敢えて危険な環境に残した、この父を許して欲しい」

「お父さん……」

思わず目頭が熱くなって、アランはうつむいた。ごしごしごし、と腕で目元を拭い、さらにもう一度、ぐいっ、と拳で涙を払った。

「まだ、胸ははれないよ。ヘンリーがつかまっているんだ。助けないと。ぜったいに!」

「うむ。その言葉、お前の口から聞けて私は嬉しいぞ」

パパスは後ろを振り返る。モンスターの群れがいたのは石造りの祭壇と言えるような場所で、その先には奥へと続く通路がある。さきほどパパスが見つけた祭壇の仕掛けにより現れたものだ。

「おそらくこの先に、ヘンリー王子が囚われている。アラン、お前が先に行くのだ」

「え?」

「私はお前の背を守ろう。後ろは父に任せ、お前はただ前を見据えて進むのだ。もうお前は私の力がなくともこのモンスターと十分に渡り合えるだけの力を持っている」

父の言葉に、アランは唇を引き締めて頷いた。

パパスという力強い同行者を加えたアランは、これまで以上に早足で神殿のさらなる奥を目指す。

現れた通路を先に進むと、再びあの水路が見えてきた。水際に申し訳程度の船着き場が造られていて、そこに一床の筏いかだが係留しようされていた。

パパスもまた、この水路の先が怪しいと睨んでいたようだ。「よし」と満足気にうなずいていた。筏があれば、水路の先まで辿り着くことができる。

慣れた手つきで係留を解き、備え付けられていた櫂かいで水上を進む。流れが非常に緩やかな分、粗末な筏でも十分渡ることができた。

水上から、あの大きく開いた穴の先を目指す。

穴をくぐると辺りは一気に暗く、湿っぽくなった。岸壁に松明が設えられていたが、神殿内部のような荘厳な空気はない。ただただ寒々しい。

「む……！」

パパスが何かを見つける。目を凝らすと、薄暗闇の中にいくつもの牢が並んでいるのがわかった。急ぎ、筏をつける。

目的の人物は、そこにいた。

「ヘンリー王子！」

「ヘンリー！」

親子の声を聞き、牢の奥で縮こまっていたヘンリーが顔を上げる。泣いていたのか、目が赤くなっていることが乏しい灯りの中でもわかった。

アランは牢に取り付く。とたん、水気を含んだサビがべったりと両手についた。牢の扉は施錠されている上に複雑で、アランのカギの技法を用いてもまったく歯が立たなかった。

「アラン、私に任せるのだ」

パパスは言うなり、鉄格子を掴む。直後、彼の体が一回りほど大きくなったように見えた。全身にあらん限りの力を込め、カギのかかった鉄格子をこじ開けようとする。

「ぬ、おおおおおっ！」

雄叫びと同時に鉄格子がひしゃげた。役に立たなくなったそれを放り投げ、パパスはヘンリーの元へと駆け寄る。アランも後から付いて牢の中に入る。

「王子！」

「……！」

ヘンリーは一瞬、嬉しそうに顔をほころばせたが、しかしすぐに顔を背けた。全身を恐怖と寒さで振るわせながら、虫の鳴くような声で彼は言った。

「ふん。ずいぶん助けに来るのが遅かったじゃないか。しかもお前たち二人だけで」

「申し訳ありませぬ。国家の一大事ゆえ、堅攻よりも拙速を重視しました」

「国家？ 一大事？ 笑わせるなよ」

ヘンリーは笑みを浮かべた。その表情の痛々しさにアランは眉をしかめた。

「俺だって、自分がやってきたことぐらいわかっているさ。いろんな奴が俺を嫌っているってこともな。だからこうして攫われたんだ」

「王子……」

「戻ったって一緒さ。何にも変わりはない。ずっとここで考えてよくわかったよ。自分の立場ってヤツが。……王位は弟のデールが継ぐ。その方が国にとっても、みんなにとってもいい。俺はいないほうがいいんだ」

誰とも目を合わさないヘンリー。我慢しきれなくなってアランが口を開こうとした、そのとき――

パパスの張り手が、鋭くヘンリーの頬をはたいた。

「なっ……！ パパス、きさま！」

「いい加減にしないか、王子！ あなたは、お父上のお気持ちを考えたことがあるのか！？」

一喝。ヘンリーは押し黙った。唇を噛んでいる。瞳が再び充血し、目尻に涙が溢れてきた。ヘンリーの顔をこちらに向けさせ、パパスは一語一語、噛んで含めるように言った。

「あなたは、決していらない子ではない。あなたの父上は、あなたをととても大事に思っている。アランも、そして私もそうだ。だからこそ今、ここにいる」

「……………」

「今はまだわからぬやもしれぬ。だが生きよ。あなたはまだ、いくらでも、何度でも希望を持ってよいのだ。決して、いなくなつてよい命ではない！」

静寂が降りた。すん、すん……とすすり泣き始めたヘンリーの前からパパスは下がる。

「アラン。王子を頼む」

「……はい」

ヘンリーの手を取り、パパスとともに牢を出る。

その直後、通路の奥からモンスターが現れた。一体、二体……さらに増えていく。「気づかれたか」とパパスはつぶやき、剣を抜き放った。

「行け、アラン！ 王子を連れて逃げるのだ！ ここは私が食い止める！」

「お父さん！」

「パパス！」

「私は大丈夫だ。さあ、早く行け！」

震えだしたヘンリーの肩を強く抱き、アランはぎゅっと目をつぶった。大きく深呼吸をして、覚悟を決める。

覚束ない足取りのヘンリーを半ば抱えるようにして、アランは筏に飛び乗った。次第に小さくなる父の姿を横目で捉えながら、アラ

ンは必死に櫓を操り、その場を脱出した。

77. 待ち受けていたモノ

チロルに索敵を任せ、アランは懸命に櫓を漕ぐ。水路があるということは、どこかで外に繋がっているかもしれない。とにかく行けるところまで行くつもりだった。

筏の中央で、ヘンリーが膝を抱えている。城での振る舞いからは想像もできないような、落ち込んだ様子だった。

「なあ、アラン」

ぼそりと彼がつぶやく。

「パパスは……お前の父上は、大丈夫だろうか」

アランは無言のまま体を動かす。ヘンリーが振り向いた。

「あれだけの数のモンスターをひとりで相手しているんだ。いくらパパスが強くても」

「僕はお父さんを信じる」

荒い息の中でそれだけを伝えると、ヘンリーは口をつぐんだ。なぜか彼は、皮肉げな笑みを浮かべた。

「……いいよな、お前たちって。本当の親子って感じでさ。俺なんか、父上が心配してくれていたのに、いつもつっぱって、迷惑ばかりかけて。本当はわかっていたんだ。デールが王になりたくないって思っていること。それですごく苦しんでいること。だけど、俺はそれが気に入らなくて、『俺がこんなに嫌われているのに、それで王になれるのに、何でそんなに苦しんでいるんだ』って……は、駄目だ。自分でも意味がわかんね」

「お父さん、言ってたじゃない」

「え？」

「君はまだ、いくらでも、何度でも希望を持ってよいのだ、って。お城に帰って、またやり直せばいいよ。そのために今は逃げなきゃ。僕が君を城まで届ける。だから、そのあと頑張ろう」

「アラン……」

再びヘンリーの瞳に涙が浮かび始める。彼は埃で汚れた裾で涙を拭うと立ち上がった。アランの傍らに立ち、櫂に手を添える。

「俺も手伝う。父上に連れられて舟に乗ったことがあるんだ。櫂の扱い方も、そのとき習った。自慢じゃないが、なかなかの腕だって褒められたことがあるんだぜ？」

いつもの調子を取り戻してヘンリーが笑う。「うん」とアランもうなずいて一緒に櫂を漕ぐ。二人分の力で、筏はさらに速度を上げた。

モンスターの襲撃もなく順調に進んでいたアランたちだが、ふと、その手が止まる。

「……行き止まりかよ」

ヘンリーが呻く。

目の前には岸壁が立ちはだかり、水路はそこで途切れていた。よく見ると水中に大きな穴が開いていて、水はそこから流れ込んでいるようだった。

「どうする？ まさか潜って進むなんて言わないよな？ 俺、泳ぐ

のは苦手なんだが……」

「ヘンリー、あっち」

アランが指差す先に小さな栈橋があった。その先には、おそらく神殿内部へ続いているのだろう、半円形の通路が壁に開けられていた。

ヘンリーと協力し、何とか筏の方向を変え栈橋に横付けする。

「……！」

「おい、どうした？ アラン？」

地面に降り立った瞬間、全身を硬直させたアランにヘンリーは怪訝そうな表情を浮かべる。アランは無意識の内に武器を構えていた。右手はチェンクロス、左手は銅の剣の柄へと。

見れば、チロルも足元で声なく全身の毛を逆立てている。立てられた爪が石畳の地面を削った。

ただならぬ雰囲気、にヘンリーが息を呑む。アランは言った。

「ヘンリー、気をつけて。とても嫌な気配がする」

「……モンスターか？」

「たぶん。でも、今までと全然違う。もの凄く大きくて、冷たくて、嫌な気配……」

まだ相手の姿も見えていないというのに、体から勝手に冷や汗が吹き出す。

するとヘンリーが肩を叩いてきた。

「そんなにやばい相手なら、さっさと逃げてしまおうぜ。だいじょうぶ、俺は逃げ足には自信があるんだ」

「ヘンリー……」

「いざとなったら、俺がおとりになる。お前はその間に逃げればいい」

真剣な表情になったヘンリーにアランは首を振る。「もしものときだって」とヘンリーは言った。

二人で息を整える。

ゆっくりと辺りを窺いながら半円形の通路をくぐった。予想通り、この先は神殿内部に繋がっている。アランはこの場所に見覚えがあった。幸運なことに、出入り口のすぐ近くである。

このまま真っ直ぐ走れば、外に出られるはず——アランとヘンリーはうなずき合い、一気に駆け出した。精緻な文様が刻まれた飾り柱が等間隔に立つ、あの広大な通路広間に出る。出口はもうすぐのはずだった。

だが。

通路に出て十歩も進まないうちに、二人の足はぴたりと止まってしまった。

アランもヘンリーも、そしてチロルまでも、通路の先を見据えたまま硬直する。

視線の先には——

「ほっほっほ……ここから逃げ出そうなんて、いけない子たちです

ね」

全身をくすんだ血赤のローブで覆う長身のモンスターが、巨大な鎌を持って、アランたちを待ち受けていた。

78. 邪悪の魔導師ゲマ

魔導師風の身なりに、トカゲを連想させる肌、枝のように細い指で、パパスの背丈以上もある大鎌を器用に回転させている。

アランは直感した。あの凄まじい邪気は、このモンスターから放たれている……！

「私の名はゲマ」

粘つくような声で、そのモンスターは名乗った。そしてあろうことか、慇懃に礼までしてみせた。

「これからあなたたちを管理する者です。よろしく」

「……」

「ふむ、黙りですか。愛想のない子はあまり好きではないですね。特に、その反抗的な目には虫酸が走ります」

アランがヘンリーを後ろに隠す。ゲマは笑った。

「まあいいでしょう。曲がりなりにも子どもだけでここまで辿り着いたことに敬意を表して、『軽いおしおき』だけで済ませてあげましょう」

片手で大鎌を構え、空いた手でアランたちを手招きしてきた。

「さあ、来なさい」

「……チロル！」

「にゃお！」

眦を決したアランが相棒とともに走り出す。先行したチロルがゲマに爪を立てる直前、アランはチェーンクロスを振るい援護攻撃を仕掛けた。

ぱしん、と穂先の槍は片手の一振りで叩き落とされる。次いでゲマの眼前に飛びついたチロルも、返す手の平で軽く叩かれた。

途端、小さな体が大砲で打ち上げたように吹っ飛んだ。

飾り柱を越え、地面に叩き付けられ、さらに数回跳ねた後に通路

広間の壁に激突した。

それっきり、彼女は動かなくなった。

「チロルッ！」とアランは絶叫する。その間も間合いを詰め、銅の剣を抜き放った。疾駆の勢いそのままに叩き付ける。

火花を散らして、ゲマの鎌と銅の剣がぶつかった。

ゲマの笑みが深くなる。

「ほっほっほ！　そおれ」

「……っ！」

ゲマが鎌を振るうと、アランの体は空中で大きく放物線を描いた。凄まじい力だ。何とか体勢を立て直し、着地する。

ゲマは、指先を天井に向けていた。

「軽いおしおき、です。この程度で死んでもらうと困るので、しっかり耐えるのですよ？」

笑い声混じりにそう言うのと、ゲマは素早く呪文を唱えた。

大火球呪文、メラミー――

直後に出現した巨大な火球にアランのみならずヘンリーも息を呑んだ。彼らはゲマから見て、ちょうど一直線上に並んでいる。アランは立ち回りの失敗を悟った。

何の躊躇いもなく、ゲマは火球を放った。誰もみ回転をしながら直進するメラミを前に、アランはヘンリーの元へと駆けた。武器を放り投げ、ヘンリーに抱きついて庇う。

――直撃。

熱は一瞬で全身を駆け巡り、熱さよりも痛みで頭が悲鳴を上げた。だが苦悶の呻き声を上げる間もなく、アランは意識を失ったのである。

パパスがその場に駆けつけたのは、気を失ったアランとヘンリーがゲマの手に抱えられた時だった。

「こ、これは……ッ！　アラン、ヘンリー王子！」

「ほっほっほ。来ましたか。ですが少々遅かったようですね。あなたの可愛い子らは、ほら、このとおり」

「貴様……」

「大丈夫、死んではいませんよ。これからこの子らには我らのためにしっかりと働いてもらわねばならないのでね。まあ、多少のしつ前はさせてもらいましたが」

そうゲマが言い終えた直後、疾風のようにパパスが突撃を仕掛けてきた。小さく舌打ちしたゲマは、さらに高速で呪文を唱える。

「――、メラミ！」

「甘いわッ！」

気合一閃。

パパスの剣は呪文の炎を一刀両断していた。さらにその勢いのまま、ゲマの首へと剣が伸びる――

だが、彼の一撃がゲマまで届くことはなかった。

突如現れた二体のモンスターが、パパスの行く手を阻んだからである。

右には巨大な剣を握り、毒々しい色の鎧を着こんだ猪顔のモンスター。

左には真っ白で筋骨隆々な体をした、直立歩行する馬型のモンスター。

「ゲマ様、お怪我は？」

「ほっほ。ゴンズ、ジャミ。この生意気な男の相手をしてあげなさい」

「はっ」

低頭した二体は、すぐさまパパスへと襲いかかった。剣を正眼に構え、パパスは油断なく左右に目を配った。

猪顔のモンスター、ゴンズが振り下ろした大剣を横飛びで躲し、その反動を利用して胴を薙ぐ。次いで背後から体当たりしてきた馬型のモンスター、ジャミに対し、これもまた躲し様に反撃を加えた。防ぐと同時に攻め、攻めると同時に防ぐ。

パパスは二体の連係攻撃を完璧にしのいでいた。

だが、彼の表情に余裕はない。一方のジャミとゴンズは、自分たちの攻撃が躲され反撃を受けても、どこか楽しんでいるような笑みを見せていた。

「おおおおおっ！」

再び気合を込め、パパスは渾身の一撃を放つ。それは二体を同時に巻き込み、吹き飛ばした。すぐさま起き上がって攻撃に移ろうとしたジャミ、ゴンズを、ゲマは制止する。

「みごと。なかなかあっぱれな戦いぶりです。しかし」

ゲマは抱えていたアランたちを無造作に地面に落とした。

「こうするとどうでしょう？」

横向きになったままぴくりとも動かないアランの喉元に、ゲマは自らの大鎌の先端を当てた。パパスが気色ばむ。

「貴様っ、アランに何をする！」

「ほっほっほ。この子の命が惜しくなければ、存分に戦いなさい。その代わり、この子の魂は永遠に地獄を彷徨うことになるでしょう」
苦悶の声を上げるパパスに、ゲマは深い深い笑みを浮かべた。

「さあ……おやりなさい！」

79. ラインハットの悲劇

水の中から浮かび上がるような感覚。

朦朧とする意識が、瞼の外から差しこむ光を感じる。

「おや。目が覚めましたか」

聞き覚えがある声に、アランは一気に覚醒した。ゲマを睨み、そして立ち上がるうとして激痛に呻く。体が言うことを聞かなかった。

「ほっほ。大人しくしていなさい。今いいところなのですから」

眉をしかめる。同時に、自らの首元に巨大な鎌の刃が伸びていることに気づいた。

「ぐおっ……！」

「！」

耳に届いたパパスの声に、アランは振り向いた。

そして目にする。

二体のモンスターによって^{なぶ}蹴りものにされ、裂傷と打撃による血傷で全身を真っ赤に染めたパパスが、今まさに膝をつき前のめりに倒れる瞬間を――

あの父が。

どんなモンスターでも一瞬の内に屠ってきた父が。

強く、逞しく、優しく、ゆえにアランの目標であった、あの父が。

「お……お父さん……、お父さん！ お父さんッ！」

叫ぶ。その度に激痛が全身に走り、アランは顔を歪めた。

ジャミ達がゲマの前で恭しく礼を取る。

「ゲマ様。終わりました」

「ご苦労でした。なかなか手こずったようですが、まあ、終わってしまえば他愛ないですね」

「……許せない……よくも、お父さんを……ッ！」

痛みを完全に無視し、アランは徒手空拳のままゲマに立ち向かう。が、片手で頭を鷲づかみにされると、再び地面に叩き付けられる。

目の前で閃光が散った。怒りと悔しさが体を焦がし、気を失うことだけは防ぐ。

「よいことを教えてあげましょう」

ゲマが耳元で囁いた。

「あの男は一切反撃せぬまま死にました。なぜだと思えます？　これですよ、これ」

視界に大鎌の刃が映る。

「あなたの命が惜しくないなら、戦え……この言葉をあの男は忠実に守りました。わかりますか？　あなたのせいで、あの男は死んだのです」

「……………！！」

アランは全身の動きを止めた。

雪の女王に氷漬けにされたように、まったく、指一本、まばたきひとつ、することができない。

何も口にできないアランの姿を、ゲマは満足そうに見つめた。

「とてもよい顔です。ご褒美に、これで仕置きを終えてあげましょう。ゴンズ、ジャミ、そろそろ我々も退散を――」

「ま……て……」

パパスの声。アランの瞳に生気が蘇った。

父は剣を杖の代わりとして立ち上がっていた。左手足が奇妙な方向に折れ曲がっている。頭から流れた血が彼の両目を塞いでいる。

だがそれでも、パパスは立っていた。

「はあ……はあ……我が子は……やらせん……」

「ふう。まったく呆れた生命力ですね、あなたは。美しき親子愛とやらですか」

ゲマはパパスに向き直る。左手を頭上高く掲げた。

「ですが……あいにく私にとっては、あなたの姿は単なる木偶、見苦しく汚らしい人形も同然。目障りです。これで跡形もなく消えな

さい」

瞬間。

ゲマの掌から巨大な火炎球が出現する。先ほどのメラミの比ではない。この辺り一帯をすべて飲み込み蒸発させてしまうほどの、炎の暴力。焼けただれた空気が気流となってアランたちの髪をなびかせる。

「ごうごうと空気が悲鳴を上げる中、パパスは叫んだ。

「アランよ！ 我が息子よ！ お前はひとりではない！ お前の母は、今もどこかで生きている！ たとえ我が体が朽ち果てようとも、希望を捨てるな！ 私にかわって、妻を、お前の母を——」

「ほーほほほほっ、死ねえええっ！」

——叫び返す暇さえ、なかった。

巨大な火炎球は無慈悲に放たれ、アランの眼前で、過たず父を飲み込んだ。

「—————！」

断末魔の声がぶつつりと途切れる。

喉が、体が、瞬時に焼き尽くされたのだとわかった。だがアランの耳には、なおもパパスの声が幾重にも冪した。幻聴か、それとも父の最期の力なのか——

ぬおおおおおおおつ、アラン、迷わず、進むのだあああああ
っ——

その声を、言葉を、アランは確かに胸に刻み込んだ。

通路の半分が黒ずんだ姿で、広間は静寂を取り戻す。

人の姿はなくなっていた。文字通り、パパスの体は消し炭と化していた――

唯一残るのは、彼が最期まで手に握っていた長剣。名のある職人の手によるものなのか、主を失った今でも地面に突き刺さったままだった。

まるで墓標のように。

「……この子は気絶しましたか」

ゲマが言う。彼の視線の先では地面に突っ伏したアランの姿があった。少年はぴくりとも動かない。

「ほほ。なかなか面白い見物でしたよ。だが安心なさい。あなたは我らが教祖様の奴隷として一生幸せに暮らすことになるのです。父上も、さぞ愉快的な顔をしてあなたを眺めることでしょう……ほほ、ほっほっほっ」

高笑いをする。そのときふと、ゲマはあるものを見つけた。アランの道具袋の中、わずかにのぞく金色の宝玉。ゲマはその細長い指でそれを拾い上げた。金色の宝玉は無機質に輝いている。

「これはまさか……いえ、考えすぎですか」

アランの道具袋に返すことなく、ゲマは宝玉を握りしめる。

「いずれにせよ、こうしておくとしましょう」

牙を剥き出しにしてゲマが念じると、宝玉は甲高い音を立て木っ端微塵に砕け散った。

ゲマは配下に告げる。

「ゴンズ、ジャミ！ この子らを連れて帰還しますよ」

「ゲマ様、あのキラーパンサーの子はいかがでしょうか？」

ジャミが示す先に、いまだぐったりとしているチロルの姿があっ

た。動けないようだが、生きてはいるようだ。

ゲマは言った。

「捨て置きなさい。しばらくすれば、また魔物の本性を取り戻すでしょう」

「はっ」

ジャミとゴンズが頭を垂れる。ゲマはうなずくと、呪文を唱え始めた。アランとヘンリーを含め、周囲に巨大な魔方陣が現れる。

「さあ、いきましようか」

次の瞬間、尾を引く光を残してゲマたちの姿は消えた。古^{いにしえ}から伝わる転移呪文を発動させたのだ。

誰もいなくなった空間に、ゲマの笑い声がいつまでも残響していた。

静寂を取り戻した神殿内――

よろよろと歩くキラーパンサーの子の姿があった。

黒ずんだ石畳にそびえる長剣の匂いを嗅ぐ。そこから振り返ると、廊下の中央にかつて彼女の主が所持していた道具袋の一部が捨て置かれていた。

懸命に、その中を探る。

彼女は二つの優しい匂いを探していた。ひとつは彼女にとって唯一無二の主である少年のもの。そしてもうひとつは、自らの首に巻かれたリボンと同じ匂いのもの。彼女の持つリボンと同じものを主も持っていたことを、彼女は知っているのだ。

だが、それは見つからなかった。どんなに探しても見つからなかった。

彼女は鳴く。誰もいない広間の中で、何度も何度も、その姿を求めて鳴き続けた。

「なあお……なあお……なあお……」

パパスは死んだ。

ゲマによって連れ去られる道すがら、アランは朦朧とする意識の中で、父が最期に残した言葉を何度も思い返していた。

『お前はひとりではない！ お前の母は、今もどこかで生きている！』

だから希望は、捨てない——奥歯を噛みしめ、アランは強く、強く決意した。

しかし。

彼を待ち受けていたのは希望ではなく、辛く苦しい奴隷としての日々だった——

そして、十年の月日が流れた。

80. 17歳の奴隸人

雑多な音が、乱れ飛んでいる。

ツルハシが岩を削る音。

土砂を運ぶ手回し運搬機が駆動する音。

列を組んで荷を運ぶ奴隸たちの足音、かけ声。

鋭く鳴る鞭、迸る悲鳴。

それらの合間を縫うように時折響く、松明の弾ける音――

この十年、アランが嫌と言うほど聞き、そして繰り返された音の集まりだ。

今日も、それは変わらない。

アランは十七歳になっていた。

今もなお、奴隸として働き続けている。

「おらおらっ、さっさと運べ貴様ら！」

奴隸監視人の男が鞭を振るう。その手さばきは慣れたもので、しなりの効いた鞭の先端がアランの二の腕を襲う。逞しく筋肉の付いた腕がうつすらと赤くなっていたが、アランは悲鳴を上げること、表情を変えることもなかった。

代わりに、前を歩いていた奴隸男がか細い悲鳴を上げる。彼もまた、別の奴隸監視人から鞭の洗礼を浴びていた。

一抱えほどもある岩を背に運びながら、アランはその男の背を支えた。

「大丈夫か？」

「へ、へえ。すみませんアニキ」

髭男――長い奴隸生活で自らの名前も忘れてしまったらしい――

は恐縮した体で謝った。ここでの生活がアランよりは短いせいか、彼はアランのことを『アニキ』と呼ぶ。

ちら、と奴隷監視人を見、彼が余所の方を向いていることを確認したアランは、素早く髭男にホイミをかけた。

「これを運び終わったら、水をもらってくるんだ。少し休んだ方がいい」

「だけど、まだ全部は」

「残りは僕がやる」

言うなり、アランは力強い足取りで歩を進めた。まるで荷物など苦にしていけないような姿に、髭男は感嘆を通り越して尊敬の眼差しを送ってきた。

「やっぱアニキはすげえ……。もう十年もこの地獄にいるってのに、全然、ちゃんとしているんだもの……。強いっすよ……」

「そんなことない」

アランは頭を振る。わずかに顔を歪ませて。

「そんなことないさ。僕は弱い」

「アニキ……」

「さ。早いところ終わらせてしまおう。僕は上に上がってくるから、さっき言ったこと、忘れるんじゃないよ」

「へい！」

いくぶん生気を蘇らせた顔で髭男がうなずく。アランも笑みを浮かべてうなずき返し、地上へと続く階段へ向かった。

登り始めたとき、声をかけられる。水くみの少女だった。

「あ、その素敵なお兄さん。疲れた体にお水はいかが？」

「もううよ。ところで、いい加減僕の名前も覚えて欲しいんだけど」「ここで働いていたらすぐに忘れちゃうから」

にっこり笑って少女は答える。ここでは珍しくよく笑う娘だが、その笑みがどこかもの悲しいのは、彼女なりの身を守る手段なのか、なとアランは思うようにしている。

「それにしてもお兄さん、ホントに素敵。ここで働いているのかも

つたいないくらい」

「はは。ありがとう」

「あたしもこんなところに来なければ、お兄さんみたいなヒトほっとかないのにな」

ちら、と意味ありげな視線を受け、アランは苦笑した。最近、こうした体験を良くする。

自分では意識したことがない。身だしなみなど疲れを取ることに比べれば本当に些末なことだし、特に気取った態度を取っているつもりもアランにはなかった。だが、均整の取れた青年としての逞しさ、父親譲りの精悍で凛々しい顔付き、それらと絶妙に調和した優しく意思の強い瞳が、見るものを強く惹きつけていたのだ。

再び笑みを取り戻した少女は、アランから空になった器を受け取ると手を振った。

「じゃねお兄さん！ 今日もお仕事頑張って。あとヘンリーさんにもよろしくって言っといてね！」

「ああ」

うなずき、その場を後にした。

——アランたちが働いているのは、地上と地下の両方に及ぶ巨大な建物の建設現場である。奴隷監視人たちは、ここを『大神殿』と呼んでいた。

将来、世界は暗い闇に閉ざされる。そのとき、『光の教団』がこの大神殿を拠点として闇に包まれた世界に光をもたらすのだ。お前達は非常に名誉で幸せな仕事についているのだから、誇りに思うがいい——そう言われ続けていた。

だが、アランはまったく信じていない。

脳裏にはあのときの光景が焼き付いている。十年経とうが、百年経とうが、おそらく一生涯、忘れ得ぬあの瞬間——

父をまるでゴミのように屠った連中が絡んでいる組織、建物など、到底、まともであるはずがない。

邪悪な気と冷徹な意思を持ったあのモンスターの姿が浮かんでく

る。

闇の魔導師ゲマー——生まれて初めて心の底から憎いと思った『仇敵』の存在だが、ここに奴隷としてやってきてから、不思議とその名を一度も耳にしない。おそらく、ゲマを始めとしたモンスターが関係していることを、ここを建設している者たちは秘匿しているのだ。

いつか、父の仇を——そう思うことは何度も、何度もあった。

だが憎しみだけならば、アランはここまで生きて来られなかっただろう。パパスが遺した言葉、意思が、この辛く苦しい奴隷生活を支えてくれたのだとアランは思っている。

そう。

この世界のどこかできつと生きている母を探す。

それが父の意思であり、自らの希望だ。

だからそれまで、自分は生き続けなければならない。生きてここから脱出し、そして母に再び逢うまでは、どれだけ月日が経とうとも、前を向いて進み続けなければならない。

進み続けて行きたい。

不幸中の幸いか、アランはこの奴隷生活の中でいくつか得るものがあった。子どもであった彼を哀れみ、疲れている中でも文字の読み書きを教えてくれた老人、過酷な労働が鍛え上げた屈強な体、自分を慕ってくれる幾人かの人々。

そして、同じ時を支え合って過ごしてきた、無二の親友——

今日も適当にサボっているであろう『彼』が待つ地上へ、アランは足を向けた。

81. 天空の監獄

階段を上りきると、強い日差しが目を刺した。同時に吹き抜ける風が頬を強くかすめていく。

周囲は白く美しい柱が何本も建ち並び、作りかけの外壁が至るところで奇妙な彫像のような姿を見せている。ここは大神殿の中でもっとも広い拝殿部分になるということだった。

行き交う奴隷の数もやはり多い。

アランは髭男の分まで岩を運ぶ作業をいつもより手早く終わらせると、水飲み休憩のふりをしながら辺りを探した。建設途中の外壁を飛び越え、外縁の回廊部分に出る。

そこに、彼はいた。

壁に背を預け、ぼんやりと小石を眺めているヘンリーの姿があった。

アランと共にここへ連れてこられた彼も、相応に逞しい青年へと成長していた。アランより線が細いが、それでも引き締まった体をしている。子ども時代は鮮やかな明緑だった髪は、日に焼かれ埃にまみれて少しくすんでいた。周囲を威嚇するばかりだったあの瞳は、今は諧謔味のある大人びた輝きを持つようになっていた。

とはいえ、彼の明るさが根本から消えてしまったわけではない。

「ヘンリー」

声を掛けると、彼は一瞬体を緊張させ、次いで大きく息を吐いた。

「なんだ、アランかよ。あのデブかと思ってびっくりしたぜ」

「ごめん。でも気配でわかるかと思った」

「俺あ、お前ほど気配に鋭くないの」

そう言ってヘンリーは口を尖らせる。だがアランから見れば、ヘンリーの能力は幾度も実戦を重ねてきた戦士と同等まで鍛えられていると思っている。

それはひとえに、この特殊な環境がなせる技だった。

「で、どうした？ 真面目なお前が鍛錬兼ねたお仕事をさぼるなんて、らしくないぜ？ それともあれか。……また、脱走の話かい？」
最後は声を潜めてつぶやくヘンリー。アランは苦笑して首を横に振った。

事実、この二人はこれまで幾度も脱走を試みている。最初こそ明らかに体格の違う追っ手に簡単に捕まり、きつい鞭の刑に処せられてきた。だがそれでも諦めず手を変え品を変え、時にはたった二人で追っ手と戦闘まで行っただ。温室育ちのヘンリーがここまで逞しくなったのは、その積み重ねの賜物だった。

本来ならこのような反抗的な態度を幾度も取れば、独房に一生閉じ込められるか、さもなくば殺されるかされるところだが、働けば人並み以上の力を見せる二人を切り捨てることはできないようで、半ば放し飼いのようになっている。

無論、神殿の外へ向かう道の監視は厳しくなる一方ではあったが。――十年。脱走と捕縛を繰り返してきてわかったことがひとつ。ここからの脱出は、『ほぼ不可能』と言えるほど容易ならざるものだということだ。

脱走する際の準備物の問題もあるし、監視が非常に厳しいということもある。だが何より最大の問題は、地理だった。

ヘンリーの隣に腰掛け、アランも外の景色を眺める。

広大な空と海が広がっていた。どこまでも、どこまでも。

風は強く、冷たい。空気は乾燥し、降り注ぐ陽光は文字通り肌を焼く。

――この大神殿は、凄まじく標高の高い山の頂上に造られているのだ。しかも下山する道はほばないに等しい。

この場所自体が、巨大な監獄になっていたのだ。こうして広く澄み渡った世界を見ると、心がざわめいてくるのを止められない。

「お前の父上には、本当に申し訳なかったと思っている」
ふと、ヘンリーが言った。振り返ると、真剣な眼差しで彼がこち

らを見ていた。

「本当はお前、パパス殿の言葉を信じて母親を探す旅に出たいんじゃないか？　俺があんな目に遭わなければ、今頃お前はあの広い世界のどこかを歩いていたはずさ」

「やめろよ、ヘンリー」

「……ああ、悪い。この景色見ると、つい感傷的になっちまって……あーあ、しかしお前はいいよなあ。生きる希望があって。俺なんかここを脱走したからって行く当てがないものな。ラインハットじゃ今頃デールの奴が王様になっているだろうし……」

「そのときは僕と一緒に来なよ。ヘンリーと一緒になら心強い」

「そうか？　んじゃ、そんなときは世話になるわ」

笑い合う。この十年でヘンリーの人柄はかなり丸くなっていた。今の彼なら、王として名乗りを上げても何ら遜色ないのにな、とアランは思う。

「こらっ！　お前ら、またさぼっているな！　働け！」

「おっとやべ。見つかった。じゃなアラン！　お互いのんびりやろうぜ」

「うん」

親友の背中を見送る。そこへ奴隷監視人が声をかけてきた。

「まったくお前たちは、いつもいつも我らを困らせる」

「すみません」

アランは素直に謝った。その奴隷監視人が見知った男だったからだ。意味もなく尊大で乱暴な奴隷監視人の中にあって、彼は人並みの度量と誠実さを持っていた。

「休憩をするなどと言わないが、あまり目立つな。他の奴隷たちまで反抗的になれば、こちらとしても対応を変えねばならんからな。

……ふう」

「どうかしたんですか？」

「……いや。なあお前、生きていくのがつらいか？」

らしからぬ質問にアランは眉をひそめる。だが監視人の男は首を

振った。辺りを見回し、声を潜める。

「奴隷の命は短い。体力の限界以上に、心の限界が来るからだ。それがやはり心配でな」

「心配？ 誰の？」

「……私の妹がな、この度ここでの仕事をするようになった。奴隷としてだ」

深い深いため息が漏れる。

「マリアという。お前たちと同年代だ。もし姿を見かけることがあれば、気にかけてやってくれ。……お前たちと一緒になら、あいつも長生きするかもしれん」

アランが何か答えるより早く、彼は「頼んだぞ」と言い残してその場を後にした。まるで許されない罪を犯してしまったかのように。

82. 新入りの女性

「よし、今日はここまで。各自さつさと部屋に戻れ！」

一日の労働終了が告げられるのは、日も暮れかけた頃である。

疲れ切った奴隷たちは競うように——といっても疲労の余りその足取りは覚束ないものだが——自分たちに割り当てられた部屋へと戻る。

アランもまた、ヘンリーとともに自分の寢床へ向かった。地下へ降り、作業現場を横目にして奥にある入り口から、舗装もされていない粗末な洞窟へと入る。蜘蛛の巣のように入り組んだ道の先に、その部屋はあった。

単に岩盤をくり抜いて作った空間——そう評した方がいいかもしれない。

空気穴は確保されているものの、十数人が雑魚寝する地面には藁が乱雑に敷いてあるだけだし、便所代わりの壺も寢床のすぐ脇に無造作に置かれている。基本的に男女同室で、病人や特に若い娘などは奥に作られている別室で休むこととなっていた。別室といっても、遮るのは薄汚い布一枚でしかない。

もっとも、穴蔵のような場所で日々を生き残るのに精一杯な自分たちに、男女で間違いを起こすだけの余裕も空間もない。アランにその気がないのならなおさらだ。

ヘンリーなどは年相応に『そちらのこと』にも興味があるようで、時々年長者から『体験談』を聞いていたようだ。アランも何度か同席したことがあるが、ひどく厳粛な気持ちになる以外にこれといって感慨を抱くことはなかった。

「お前、若々しいのは体だけってのは悲しいぜ？」とはヘンリーの弁である。もっとも彼は、この奴隷生活の中でことに及ぼうという気はないらしい。ここじゃ自分も相手も不幸になる、というのが彼

が信念だそうだ。アランもそれには同意できた。

とにかく自分にできるのは、少しでも体を鍛え、自分の力の続く限り周囲を支え、体力を蓄え、やがては脱出する機会を窺うのみである――と、アランは考えていた。

鍵付の扉をくぐり部屋の中に入る。ひとときの休息だ。自分の寝床に腰を下ろし、アランは就寝前の柔軟を始める。こうすると疲れが残りにくくなるということを、ここに来て教わった。

「ヘンリーも体を解^{ほぐ}しておかないと、また明日がつらいよ。……ヘンリー？」

顔を上げる。いつもなら真っ先に寝床に倒れ込んで寝息を立てる彼が、今日に限ってはそわそわしていた。自分の寝床に戻らず、奥に続く間仕切りの布の前で様子を見ている。

アランは彼の側に立った。

「どうしたのさ」

「いや。別に、何でも？」

誤魔化しているなどすぐにアランは気づく。伊達に十年も親友として付き合っていない。

間仕切りの先は病人と若い女性がいる区画だ。アランは横目でヘンリーを見た。

「ここにいる間は自重するのが信念じゃなかった？」

「ばかやろ、当たり前だろが！ これはその、新入りにひとつ挨拶でもしてやろうかなあ、何てよ。俺たちこの部屋じゃかなり年季の入った人間じゃなか。だから」

「新入り？」

「気づいてなかったのか？ 昨日からここで寝泊まりを始めた女の子だよ」

アランは首を傾げる。確か昨日は特別忙しくて、朝晩なしに अच्छي کوچيكيで働いていたため、帰るとすぐに寝入ったことまでしか覚えていない。

と、日中に監視人から聞いた話が脳裏に蘇る。

「もしかして、マリアって名前？」

「何で知ってんだ!？」

「ちよっとね。今日、そういう話を人づてに聞いたんだ」

苦笑すると、ヘンリーは何やらもじもじし始めた。

「でもよお、話ができる時間なんて限られているし、かといって堂々とこの布の向こうに行くのみなあ。何だかがついているみたいで気が引けるんだよ」

「じゃあ一緒に行こうよ。挨拶するんでしょ？ 別に何も悪いことないじゃないか。……すみません、アランです。今、入ってもいいですか？」

アランは布越しに声を掛けた。返事がきたことを確認して、布をめくる。

「ほら、ヘンリー。行くよ」

「……ときどきお前がもの凄い奴に見えて仕方ないぜ」

首を傾げる。「何でもない」とつぶやいたヘンリーは、大人しくついてきた。

仕切り布の奥は細く短い通路があって、その先に小振りな部屋がひとつある。数人が横になっていたが、アランたちが入ると笑みを浮かべて迎えてくれた。

部屋を見渡す。すると、壁際に見知らぬ女性がひとり、編み物をしているのが見えた。脇にはこの部屋の取り仕切り役をしている年配の女性がついている。

編み物をしていた女性が、気配に気づいて顔を上げた。

美しい瞳と相対する。

「あなたは……」

「彼はアラン。その脇にいるのがヘンリーだよ。まだ若いが、ここじゃ一番の古株だね」

年配の女性が答える。「そうでしたか」と女性――マリアは微笑んだ。

着ているものはみすばらしい奴隷服だ。埃をかぶっている。だが、

そうであつてもなお美しく輝く黄金色の髪に、華奢で日焼け知らずの滑らかな手足が深窓の令嬢を思わせる。眉目も整っていて、まるで教会の女神像のような神々しさを秘めていた。

アランは目を丸くして、思わず声を失う。脇腹をヘンリーに小突かれた。彼はどことなくぎこちない口調で言う。

「あー、俺がヘンリーだ。お互い大変だろうけど、頑張ろうぜ。何か困った事があったら遠慮なく言ってくれよ。さっきも話に出たけど、こう見えて奴隷生活は長くやってるから、ここのことにはずいぶん詳しいんだ。な？ アラン」

「あ、うん。そうだね。ヘンリーの言う通りだよ」

我に返ったアランは言う。これだけ美しい娘が、どうしてこんな場所にいるのだろう。そんな疑問を覚えながら、できるだけ穏やかに伝えた。

「大変だけど、希望はあるよ。だから諦めずに一緒に乗り越えよう」

「……はい。お二人とも、ありがとうございます」

マリアは華が咲いたように笑むと、深々と頭を下げた。彼女の姿を慈しみの目で見つめていた年配の女性は、気の毒そうにアランたちに言った。

「マリアちゃんはね、もともと光の教団の信者だったのにここに連れて来られちゃったのよ。何でも教祖様の大事なお皿を割ってしまったとかで……。その程度のことでこんないい子が奴隷にされるなんて、あたしゃ辛くて辛くて」

「いいんです、おかみさん。ありがとうございます」

マリアは年配の女性の手に自らの掌を重ねる。それからアランたちに向き直る。

「私がいけなかったんです。最近、教祖様のお考えについていけないところがあったから……。それに、今までこんなに大勢の方々が教団のために奴隷にされていたなんて、私、全然知りませんでした。それがとても恥ずかしい」

「何を言っているんだい。マリアちゃんは悪くないよ！　ねえ、あ

んたたち!」

「そうさ!　マリアさんは悪くない!」

ヘンリーが勢い込んで同意する。

親友の様子を微笑みながら見たアランは、ひとつだけマリアに確認を取った。

「ちよっと、いいかな?　マリアさんは、どうやってここに連れて来られたの?」

「……すみません。よく、覚えていないんです。奴隷として働くようにと言われた後は、気づいたらここに……」

「そうか。わかった。ごめんねマリアさん、変なこと聞いて」

「いえ。それに私のことはマリアで結構ですよ。アランさん。それから、ヘンリーさんも」

「え!?!　マジ!?!」

「はい。お二人とも、これからよろしくお願いしますね」

微笑むマリアの前で、ヘンリーは大げさに喜んでいた。

83. ヘンリーの決意

「いやあ。やっぱキレイだよなあマリアは」

「嬉しそうだね、ヘンリー」

寝床に横になりながらアランは苦笑した。親友は興奮冷めやらない様子で喋り続けている。

結局あの後しばらく、アランたちはマリアとの談笑に興じていた。そのとき抱いたマリアの印象は、とにかく淑やかで包容力のある女性だというものだった。

ヘンリーが熱を上げるのも、大いにうなずける。

「こう言っちゃあ失礼だけどよ、あの人は絶対こんなところにいるいい人じゃないぜ。王城にだって、あんなに綺麗で清楚は人はいなかったぞ」

「そっか。さすがにあの悪い癖はもう直っているみたいだね」

「悪い……？ あ、アランお前、あのいたずらのこと言っているのかよ！？」

「はは。前に言ってたじゃないか。ヘンリーは気に入った相手ほどイタズラしたくなるって」

「そりゃ、言っただけどよ。何年前の話だ、それ。もう俺はそこまでガキじゃねえぞ」

「そう？ 実を言うと、マリアにいたずらしないかってハラハラしてたんだ」

「あのな。……ま、真面目な話、マリアはここにいないべき人間じゃないよな」

部屋の奥、間仕切りの布をヘンリーは見つめる。彼は表情が引き締め、つぶやいた。

「せめて、彼女だけでも助けられないかな」

「……すぐには難しいかもしれない。彼女がどうやってここまで来

たかわかれれば、突破口はあると思ったんだけど」

「やっぱり彼女もモンスターに連れて来られた口かな」

「たぶん。今僕たちにできるのは、彼女が無事に生き延びられるよう守ることだと思う。今まで以上にきつくなるけど、ヘンリー、構わないよね？」

「誰にももの言ってる。当たり前だろうが。むしろ、マリアを救うためならどんな労働だってへっちゃらだぜ」

「頼もしいね」

アランは笑った。するとヘンリーは小声でアランに言った。

「……だからよ、できればその……彼女のことは俺に任せて欲しいんだ。俺の力で、彼女の手助けがしたい」

「それは構わないけど……なにかあるの？」

「まあほら、そこは男の意地っていうか、なんていうか。アランが絡むと皆お前ばっかり見るじゃんか」

「そんなことないよ」

「少しは自覚しろ。……さっきもマリア、お前の方によく目が行ってたみたいだし。今回は俺、お前に負けるわけにはいかないんだ」

「勝ち負けとかそんなの関係ないと思うけど……ヘンリー、君の心配していることはわかったよ」

肩に手を置く。励ますようにぐっと力を入れた。

「僕は君の良いところをたくさん知ってる。だからきっと大丈夫さ。必ず、君とマリアは上手く行くよ。だから君は君の力で、彼女を守るんだ」

「アラン……」

ヘンリーは声を詰まらせ、慌てて寢床に横になった。

「お前、十年前からちっとも変わってないのな。羨ましいぜ。俺も見習わなきゃな」

こういう言葉を素直に口にできるあたり、ヘンリーは十年前から大きく成長した。アランに言わせれば、それこそ羨ましいことだと思う。

しばらく他愛のない談笑に興じ、周囲が一人二人と寝入った頃になると、二人もまた束の間の眠りに入った。

それから数日後。

ヘンリーは自身の言葉通り、何かにつけてマリアを手助けするようになった。初めは遠慮がちだった彼女も、ヘンリーの陽気さ、押し強さに徐々に慣れていき、今では二人並んで笑顔で歩いている姿も見かけた。

奴隷に与えられた時間は短い。そのわずかな時間を惜しむように言葉を交わす二人に、アランは目を細めていた。

「アニキ、何か良いことでもあったんですか？」

——いつものように岩を運んでいる最中、ふと、隣の髭男から声をかけられた。

「なんか、笑っていられることが多くなったような」

「僕の友達が、自分の幸せを見つけたことが嬉しいんだよ」

「はあ……。あ、ヘンリーアニキとマリアさんですね？ 確かにあの二人、いつも一緒にいますね。楽しそうだ。マリアさん、奴隷服着ててもすごい美人だし、ヘンリーアニキも格好いいし、やっぱお似合いなんですよねぇ」

「君もそう思うかい？」

「ええ、まあ。でもアニキはいいんですかい、親友が女作っちゃって」

「どうして？ 良いことじゃないか」

「……心からそう言えてるところがアニキのすごいところです。知ってます？ アニキはヘンリーアニキ以上にモテモテなんですよ？ ここで働く若い女は、みーんなアニキを狙っているって噂があるぐらいで」

「それはさすがに言い過ぎだろう。あくまで噂じゃないか」

「そうですかねえ。アニキがその気になれば、そこらの女どもなん

てイチコロだと思うんですが。ほら、あそこの水くみの女の子だつて、アニキの方見てますよ」

「好意はとても嬉しいけど、たぶん、僕は誰かとそういう関係にはならないよ」

どうして？ と目で聞いてくる髭男に、アランはどこか遠い目をした。

「……僕には、やらなければならないことがあるからね」

聞こえるか聞こえないかの、小さなつぶやき。

髭男はアランの様子に気づいたのか、それ以上何も尋ねてはこなかった。

二人並んで岩を運び続ける。と、そのとき――

鞭の振われる音とともに、聞き慣れた声が遠くから聞こえてきた。

84. 反抗の拳

アランの全身が緊張する。あの声はマリア、そしてヘンリーのものだ。

「アニキ……」

「君はそこにいるんだ」

髭男が止める暇もあればこそ、アランは駆け出した。靴もない裸足の状態で、凹凸の激しい地面の上を、他の奴隷たちを躲しながら風のように走る。

その先に見えてきたのは、鞭を持った奴隷監視人二人とうずくまるマリア、そして肩を怒らせたヘンリーの後ろ姿だった。

彼は腹の底から絞り出したような怒声を上げた。

「てめえら、よくもマリアを！ 今度という今度はもう我慢ならない！」

「ヘンリーさん、やめて！」

マリアが悲痛な声で言う。すでに多くの奴隷たちが遠巻きにし彼らの様子を眺めている。皆、一樣に不安そうだった。

「また貴様かヘンリー！」

「何度俺たちに刃向かえば気が済むんだ。ええい、腹立たしい奴めっ！」

奴隷監視人が勢い良く鞭を振う。ヘンリーは体を捻って躲そうとするが、しなる鞭の先が容赦なく襲いかかり彼の体を薄く刮こそいだ。

「くう……！」

「ほれほれ、大口叩いた割には何だその様はっ。ほらっ！」

やはり武装した男二人が相手では分が悪すぎる。ヘンリーは闘争心に燃えた目を向けていたが、彼の体には次々と傷が付けられていった。周囲の奴隷たちから押し殺した悲鳴が漏れる。

「はははっ。この際だ、我らに刃向かった報いとして今日は徹底的

にいたぶってやる。これで身の程を知るが良いわ!」

「やめてええっ!」

マリアが奴隷監視人の足にすがりつく。だが邪険に蹴り飛ばされ、彼女は呻き声を上げた。その様子に再びヘンリーが激昂する。

「お前らあああっ!」

「甘い!」

つかみかかろうとしたヘンリーを一人の監視人が鞭で拘束する。その間に残った一人が懷から短剣を取り出し、ヘンリーの腕目がけて振り下ろしてきた。

ヘンリーの顔に初めて緊張が浮かぶ。

だが、次の瞬間――短剣を持った奴隷監視人は横から飛んできた拳の直撃を受け、無様に地面に叩き付けられた。

ヘンリーとマリアに喜色が浮かぶ。

「アラン!」

「アランさん!」

「二人とも、大丈夫か?」

奴隷監視人を殴り飛ばした手を握りしめ、アランは二人に声をかけた。驚いたもう一人の奴隷監視人が鞭を握る力を緩めた隙に、アランは鞭の拘束から親友を助け出す。すぐさま呪文を唱えた。

「――、ベホイミ」

奴隷としてここに連れて来られた老人から教授を受けた中位回復呪文。ヘンリーの体からみみず腫れが嘘のようにひいていく。彼は鼻先を指で拭った。

「へへ、きつと来てくれると信じてたぜ」

「ヘンリー、これは」

「ああ。あいつら、マリアに難癖付けて鞭で叩きやがった。しかも二人がかりで、いつもの倍近くだ。狙ってたと思えねえ」

ぎろり、とヘンリーは剣呑な視線を奴隷監視人に向ける。マリアが自分の足でこちらまでやってきた。アランは彼女にもベホイミの呪文をかける。

「あ、ありがとうございます。アランさん」

「マリア、下がってて。ヘンリー、君はマリアの側にいてあげて」

「俺も行くぜ。まだまだ腹の虫が治まらないからな」

「……！ 二人とも、もうやめてください。私なら大丈夫ですから」
「そうはいかない」

アランはきっぱりと言った。

「大事な親友と、その大切な人を傷つけられたんだ。僕は戦うよ」
拳を構える。型も何もない立姿だが、それは見る者に言いしれぬ威圧感を与える空気をまとっていた。彼の横で、ヘンリーもまた拳を握る。

——奴隷監視人の顔色は、赤を通り越して紫色になろうとしていた。あまりの怒り、屈辱に震えているのだ。

「アラン……貴様、もう許せん！ そこに跪けッ！」

監視人たちが一斉に襲いかかってきた。アランは表情を変えず、自ら前へ出る。

振われた鞭が描く複雑な軌道を読み切り、三步で相手の懐に飛び込む。慌てて振り払おうとする監視人の手首を掴み上げ、そのままから空きの鳩尾へ肘打を叩き込んだ。

「……う、げえ！」

「こんのっ、殺してやる！」

もう一人が短剣を振り上げる。

アランの表情は変わらない。

あのスライムナイトから感じた剣士の威圧感も。

闇の魔導師ゲマから感じた圧倒的な邪気も。

この男からは微塵も伝わってこない。恐怖など抱くはずもなかった。

アランの掌が奴隷監視人の胸に触れる。刃が振り下ろされるより前に、彼は高速で呪文を唱え終わった。

「――、行け！ バギ！」

風の刃が掌から迸る。武装の至る所を切りつけられ、奴隷監視人

は悲鳴の尾を引きながら数メートルも吹き飛ばされた。

――背後に殺気。

口元から涎を垂らした男――さきほどアランに肘鉄をまともに食らった監視人が、目を血走らせて短剣を突き出してきた。

速くはない。威勢が良いのは見た目だけで、大して剣に力は籠もっていない。アランは盾のように腕を掲げた。たとえそこに突き刺されても、大したダメージにはならないと確信したのだ。

と、再び男は横合いから拳の一撃を受けて昏倒した。会心の一撃を見せたヘンリーが親指を立てて笑っていた。

アランとヘンリー、背中合わせて構えを取る。

「すげえ……」とどこからか声が漏れ聞こえた。やがてそれは取り巻きの奴隷たちの間に広がっていき、どよめきが変わっていった。

負けるな、やってしまえ、アラン様頑張つて、ヘンリーそこだ――彼ら彼女らの声が、ひとつ残らずアランたちの背を押し始めた。

反対に奴隷監視人は戦闘意欲を削がれ、うろたえた表情で地面に尻餅をついている。

そのまま勝負が決まるかと思った、そのとき――

「やめんか、貴様ら！」

その場に広くとどろき渡る怒声が響いた。

見ると数人の奴隷監視人がこちらに歩いてくるところだった。アランたちが叩きのめした男と違い、城下の衛兵のように身なりを整えている。その手には背丈ほどの槍が握られていた。

お兄様……と後ろのマリアがぼつりとつぶやく。

その声が耳に届いたのかどうか、マリアの兄はアランたちを一瞥すると、すぐに奴隷監視人の所に向かった。厳粛な表情で問い質す。

「おい。これはどういうことだ？」

「へ、へえ……その奴隷女がへまをやらかしたんで灸を据えてやろうとしたら、突然奴らが刃向かってきたんです」

「……んだと、このっ！」

「ヘンリー」

アランは親友を制した。すでに構えは解いている。ヘンリーも澁々ながら口を閉ざした。

マリアの兄である奴隷監視人はしばらく黙って何かを考えていたが、やがてこう言った。

「お前たち、その娘の手当をしてやれ。女とはいえ、無用の怪我で動けなくなつては作業に差し障りがある」

「え！？ いや、あのしかし」

「聞こえなかったか？ 手当をしろと言つたのだ。それでお前たちが無様な姿を見せていたことには目を瞑ろう」

その言葉を聞き、奴隷監視人たちは一様に冷や汗をかいて青くなつた。そそくさと立ち上がり、マリアの元に行く。ヘンリーは慌てた。

「お、おい。マリア……！」

「それから」

遠ざかっていくマリアに追いつがろうとしたヘンリーとその隣に立つアランに向かって、奴隷監視人は厳しい声を出した。

「その二人は牢にぶち込んでおけ！」

85. ヨシユアの願い

暗く湿った洞穴の中を、アランたちは監視人に引き立てられた。どういふ道順を辿ったかわからないように目隠しまでされ、辿り着いた先の牢獄へ突き飛ばされる。

「そこで頭を冷やしている」

監視人がそう言い放つ。錠にかかる重々しい音が響いてすぐ、彼らは立ち去っていった。

幸い両手両足は拘束されなかったから、自分の手で目隠しを取った。目を凝らしてようやく物の輪郭が見えるほどに辺りは暗い。湿気もひどく、饅えた臭いが充満していた。

もつとも、アランもヘンリーもこういった環境にはすでに慣れっこである。いつもと変わらぬ調子でヘンリーが言う。

「まったく、相変わらず扱いがひどいぜ。まあ、壁に縛られて鞭で打たれないだけマシだけだよ」

「ヘンリー、大丈夫だったかい？」

「ああ。ありがとなアラン。おかげで助かったよ。マリアも、あの調子ならきつと大丈夫だろう」

ばりばり、とヘンリーが頭をかく気配がした。

「どーも、頭に血が上ってしまったよ。あのままやってたら、正直危なかったかもしれない。もちろん、後悔なんてこれっぽっちもしてないがな！」

「とにかく、みんな無事で良かった」

「おう。にしてもアラン、お前また強くなってるじゃないか？ それにいつのまにベホイミなんて覚えていたんだよ」

ヘンリーの問いかけにアランは苦笑いする。説明しようにも、呪文習得を感覚で行っておこないるアランにとっては言葉にするのが難しいのだ。それを知ってか知らずか、ヘンリーはそれ以上聞いてくるこ

とはなく、その場にごろんと横になった。

「とりあえず休もうぜ。ここを出たら出たで、いつもの通り倍くらいの量を押し付けられるんだから、今のうちに体力を溜めておかないと。大人しくしていれば、それだけ早く解放されるだろうからな」

「そうすればマリアとも早く逢えるものね」

「そういうこった」

はははっ、と二人して笑う。

しばらくアランたちは、思い思いの姿勢で横になった。この十年で、どんな環境でもそれなりに体を休められるコツを身に付けられたのは幸いである。

腰を下ろして壁に寄りかかり、腕を組んでじっと目を閉じていたアランは、ふと薄目を開けた。ヘンリーもまた上半身を起こしていた。

「おい」

「うん。思ったより早かったね」

聞こえて来たのは足音だった。複数である。だが解せないのは、ひとつだけ音の間隔が妙に短く、また湿った音がすることだ。まるで裸足で小走りになって急いでいるような。

牢の中に灯りが満ちる。外から松明で照らされたためだ。アランは眉をひそめ、それから驚きの声を上げた。

「あなたは……。それに、マリア。君まで」

「そこで少し待ってろ」

やってきたのはマリアと、彼女の兄である奴隷監視人だった。監視人が背後を気にしながら牢に取り付く。どうやら持っていた鍵で錠を外すつもりようだ。アランはますます意外に思った。

ヘンリーは立ち上がり、牢の前まで来た。マリアと相對する。彼女は目に涙を溜めていた。

「ああ……よかった。お二人とも無事で……」

「当たり前さ。俺とアランのコンビはそう簡単にくたばるものか。それよりマリア、君はどうしてここに？」

ヘンリーが嬉しさ半分、怪訝さ半分でたずねると、マリアは目元を拭い表情を引き締めた。隣に立つ兄を見る。

ちようど、牢の解錠が終わったところだった。「出ろ」と促されるまま、アランとヘンリーは牢をくぐる。

するといきなり、監視人は深く頭を下げた。

「マリアを助けてくれたこと、本当に感謝している。私は兄のヨシユアだ」

「え？ お兄さん？」

ヘンリーが素っ頓狂な声を上げた。どうやらあのときは頭に血が上ってマリアのつぶやきも聞こえなかったらしい。以前から聞き及んでいたアランは驚くことなく、返礼としてひとつ頭を下げてから、すぐに疑問を口にした。

「ヨシユアさん、教えてください。これは一体、どういうことなんですか？ あなたをしていることは、きっとあなたがたの規則に逆らうことなんじゃないかと思うのですが」

「……ああ。これは私の独断だ」

その言葉にアランたちの顔にさっと緊張が走った。命令違反、それがここではどれほど重い罪になるか、身を持って知っているからだ。

しばらく言葉に迷うヨシユア。そんな兄の横顔をマリアは心配そうに見つめている。ただ事ではないと悟ったのか、ヘンリーはマリアを前にしながらもじつとヨシユアが口を開くのを待っている。

やがて、ヨシユアは大きく息を吐いた。

「前々から思っていた。お前たちは他の奴隷とは違う。生きた目をしている。生命力と希望に溢れる、強い命の輝きを持っている。…そのお前たちを見込んで、頼みがあるのだ」

ヘンリーがちらりとこちらに視線を向けてくる。アランは大きくうなずいた。

「僕たちにできることなら」

「うむ……。現在建設中のこの大聖堂なのだが、無事完成すれば全

奴隷を解放するという話は、お前たちも知っているな」

「ええ、まあ。毎日聞いていることですから」

「実は、その話は真っ赤な嘘のようなのだ」

アランたちは息を呑む。ヨシユアは唇を噛んだ。

「完成の暁には口封じのため、ここにいる奴隷を皆殺しにするという話がある。そうなれば当然、妹のマリアにも危害が及ぶ。それだけは断じて許容できないのだ……！」

「ヨシユアさん……まさか、僕たちに頼みたいことって」

「そうだ」

彼はうなずいた。

「お願いだ。マリアを連れて、ここから逃げ出してくれ！ このヨシユア、一生の頼みだ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7449x/>

ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

2012年1月7日12時51分発行